
滑った男の行く先は

猫世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滑った男の行く先は

【Nコード】

N1187L

【作者名】

猫世界

【あらすじ】

篠本和樹は気がつけばどこまでも広がる白い空間にいた。そこで、会った意外な人物にいろんな真実を聞かされ打ちひしがれるも、気を取り直して、力を与えられて別世界へと旅立つ。

これは、ある青年がしぶとく生き残るお話。

プロローグ（前書き）

編集しました

プロローグ

———こんな死に方は嫌だ

昔、友人と討論したときの話題だ。例えば高いところから落ちる、例えばおぼれる、例えば病気をこじらせる、例えば車に引かれる、例えば・・・などなど、例を挙げればきりが無くなるわけだが、俺達はそれをさらにランキングへと移した。誰もが一度は通る道だと思ふ。

そうして決まった『こんな死に方嫌だ』ランキング堂々の一位に輝いた『あれ』には、俺も友人も納得したものだ。しばらく、それに警戒をしまくったくらいだ。そのくらい嫌だったのだ。

さて、なんで昔の取り留めのない記憶を今になって掘り返すのか。否、思い出すのか。それには理由がある。それは———

俺の名は篠本和樹。今年は二十歳になる学生だ。軽度の厨二病を患って、少しオタクが入っている以外はそこらへんにいる一般人だ。そんな俺だから、ネット内を蔓延る幾多の小説を読み漁ってたりするし、そこに自分を投影しては画面の前でニヤニヤしていることも少なくない。人見知りはあるが、初対面であっても相手が困っていたら声をかけて助けたりするくらいの良心はある。容姿は少しは整

っている」と自負しているといっておこう。後は想像で補ってくれ。

その日、珍しく寝坊してしまった。連日のサークル活動やバイトの疲れが溜まってしまったのかもしれない。今となっては原因は分からないし、どうでもいいが、とにかく寝坊してしまったのだ。俺の下宿先は大学に近いが、それでも走らなければ講義に間に合わない時間だ。着替えを三十秒で済ませ、顔をサッと洗い、朝飯を食わずにそのまま飛び出していった。俺は基本まじめな人間なのだ。にわかオタクだが。・・・関係ないか。

とにかく、大学へ向けてダッシュしていた俺は気がついたら、どこを見ても『白』が際限なく広がる空間にいた。

「な、なんじゃあこりゃあ!？」

悲鳴が某ドラマの某警官のごとくなってしまったのは勘弁して欲しい。それくらい唐突だったのだ。大学に向かっていたら、白い空間。何じやそりゃ。

「ようこそ、といったところかの」

パニックに陥っていたら、背後から声をかけられた。振り返るとそこには、俺の良く知っている人がいた。見るからにホームレスって主張している格好をしているお爺さん。

「す、スーさん!？なんでこんな所に!!」

スーさんは近くの公園に生息していたホームレスだ。いつも陽気な雰囲気を放ち、人生を楽しそうに謳歌しているこの人を、俺はひそかに尊敬している。ホームレスに尊敬しているなんて、人に恥ずか

しくて言えないけど。でも、この人の話は色々面白いのだ。暇を見てはちよくちよく聴きに行くくらいに。

そんなスーさんがここにいる理由がわからない。

「ふおっふおっふお。混乱しておるの、和樹よ。なに、簡単なことじゃよ」

突如輝き始めるスーさん。

「何を隠そうこのワシ、実は神様だったんじゃ!!」

「な、なんだってえ!!」

光が収まったとき、そこにいた彼は変貌していた。床に届きそうな見事な白髪。顎から垂れ下がる立派な髭。素人目にも分かる高級な布を全身が隠れるようにまき、トドメにいい匂いを放つ木の杖を手に持ったスーさん。まんま神様ルックですね。わかります。

だが、特筆すべきはそんなことではない。彼から放たれていた陽気な雰囲気は息を潜めており、その代わりに神々しいまでの圧倒的な存在感と威厳が滲み出ていた。そして、本能を感じ取った。

この人は神なんだと!!

相対するだけでひれ伏しそうになってしまいが、相手はスーさんで俺の友人だと言い聞かせなんとか耐えた。

「ふおっふおっふお。相変わらずおぬしは面白いやつじゃな。この姿のワシにひれ伏さないのはおぬしが初めてじゃ」

「・・・そうしてほしかったのか?」

俺は少しムツとして聞いてしまった。こっちは友人として考えているのに、そんなことを言われるのは心外だ。

「ふおっふおっふお。おぬしならばしない、と信じておったよ。友人にそうされるのは不快を通り越して寂しくなるからの……。じゃから、ワシはおぬしを気に入っておるし、そこがお主のよいところと知っておる。普段はへたれもいいところだが」

そう言ってスーさんはいつもの雰囲気に戻った。神様であるスーさんは対等な友人というものが少ないのかもしれない。声に少し嬉しさが混じっていた。やっぱり、ひれ伏さなくて正解だった。友人に對してすることじゃないもんな。なんだか嬉しくなった。けど、

「最後の一言は余計だよ……」

解放された俺はへたり込んでしまった。それだけ、彼からの圧力は足にきたのだ。それにたぶん、本来はもっとすごいと思う。彼からはまだ余力を感じたのだ。彼からすれば俺をからかったに過ぎないだろう。

「それで、スーさんは神様だってことだけど、俺に何の用？」

「なに、おぬし別世界に興味「詳しく聞かせてもらおうか」……あるみたいじゃの」

呆れ返っているが、知ったことではない。だって、異世界だぜ？俺のようなオタクが、心を躍らせないはずないじゃないか！！

スーさんの話では、息子の部下の失態で俺は死んでしまったそうだが、でも、別にそうなくても、せいぜいが気をつけろよと注意されるだ

けで済まされる問題らしい。これは、祝福もしていない人間が一人死んだところで、神様にとってはどうでもいいことだから、輪廻の輪から外れてしまった魂を戻すだけなのだから。まあ、そんなものなんだろう。

ところが、今回は話が別で、なんでもスーさんは何気に神様達の中でも偉い立場の神様であり、既に神界での役職を引退しているが、その影響力は未だに健在なのだとか。そのスーさんに目をかけられていた俺が、下っ端の失態で死んでしまったので、下も上も大騒ぎ。そのことがスーさんに知られてしまい、今こうしてこの状況になったのだ。

元の世界では生き返れないから、新しい肉体を用意するから別世界で生きろとのこと。

テンプレですな。ムフフ。

「なるほどね。その問題の神様はどうなったの？」

「うむ、別にワシは目をかけていただけだったので、その場で減給三ヶ月を言い渡しておいたぞ」

俺の命は減給三ヶ月で済むんかい。どれくらいの賃金かは知らんが、俺の命安くないか？

「まあ、祝福してないならこんなもんじゃよ。今回はワシが絡んでいただけで、本来ならお咎めはなしになるはずだったのだから。おぬしは運がよい」

考えてみればそのとおりだ。スーさんと知り合っていなければ俺はそのまま『俺』を失っていたのだから。儲けものと思おう。持つべきものは友人だな！！相手のスケールでかいけど。

「それではそろそろ・・・」

「あ、ちょっと待った。俺は死んだって言ったけど、俺の死因ってなんだったの？」

「覚えておらぬのか？」

俺は肯定した。

「そうか・・・。あんなひどい死に方だったんじゃ・・・。魂が思い出すのを拒絶しているやもしれん・・・。それでも、知りたいか？」

スーさんは俯いて、震えながら何かをこらえるように俺に問うた。
え、なに？俺そんな惨い死に方だったの！？

「スーさん、教えてくれ！！俺はどんな風に死んだんだ！！」

スーさんは返事をする代わりに、杖を振っただけだった。光が俺を包む。そして、俺は思い出した。

「・・・・・・・・・・うそだ・・・・・・・・」

だが、こんなものを認められるはずがない！こんなものが現実であつていいはずがない！！

「・・・・・・・・うそだ！！嘘だといってくれよスーさん！！なあ、何で俺はこんな・・・・・・・・！！」

「く・・・・・・・・う・・・・・・・・」

そこからは言葉にはならない。俯いて震えているスーさんの姿がこ

プロローグ2（前書き）

少し改訂しました

プロリーグ2

そして、冒頭に戻るわけだ。

なんで足元に注意を払ってないかな俺ヤムチャじゃん俺なんで車には注意を払っていたのにバナナで死んじゃうの俺というのかかつて『こんな死に方は嫌だ』ランキング堂々の一位をとったやつで何で死んじゃうかな俺友人なんか俺の死体を見て泣くどころかあざ笑うんだぜ親なんかはドン引きしてるんだぜああ本当にああいう死に方あるんだってね．．．ははははは．．．はあ．．．鬱だ死のう．．．あ、もう死んでるわ。ふへへへ．．．

「むう、いろいろと駄目になっておるの。だが、悪いことばかりでもあるまい。別世界へといけるのじゃからな。普通の人間ではありえない経験だぞ？」

はっ！ そうだ、考えてみればオタク一同が望んでやまない権利を俺は手に入れたのだ。そう考えれば、俺の死因はそのための対価にならな

「いやあおもしろかったぞ？ワシの息子が息を切らせて報告しに来た時は、耳を疑ったが、実際に映像を見て大爆笑。一緒に見ていた孫なんか、呼吸困難に陥っていたくらいじゃからな。あまりにも面白かったんで、ついワシのブログにものせてしまったわい。おそらく、ほとんどの神が知ったんじゃないかの」

[illegible]

ワシのブログは神界一じやしの、と加え、からから笑うスーさん。

って、何してくれやがりますか!! 神様のほとんど知っているって
どんな拷問!?

「何を馬鹿なことを言うか!! 自分の命を粗末に扱うなどあれ程言
い聞かせてきただろうに!!」

場面が場面だったら感動ものだが、この場合は違うよね? 顔が明ら
かに笑ってるもん!

「第一そんなことをすればつまらな・・・ごほん。皆嘆いてしまう
ではないか。皆お主を気に入っておる。これからのお主の人生を追
って報道しようする動きまであるくらいじゃ。そんな悲しいことを
言うでない、お主はワシの友じゃろう? なに、ちゃんとプライバシ
ーは保護されておるからな?」

しみりとした空気を放っているが、言っていることが残酷すぎる
!!

「うがああああああああ!!」

和樹は暴れだした!!

「では本題に入ろうか」

スーさんによってボロボロに鎮圧された後、表情を改めたスーさん
がそう切り出した。杖を掲げると、あたり一面が闇になった。そし

て数え切れないほどの光球が浮かび上がる。まるで宇宙遊泳をしているような感覚に陥った。

「まず、世界とは一つではない」

それはわかっている。そうでなければこんな状況になっていない。

「無限に存在する世界はこの世界で漫画やアニメ、小説となって世に現れていることがある。それはひとえに、世界同士が衝突した時に、作者がなんらかの形で垣間見てしまったからじゃ」

そして、動き出す世界たち。中には衝突しているものもある。

「世界がぶつかったからといって、何かあるというわけではない。だが、世界にも強弱というものがあり、強い世界の実態を、弱い世界は見るができない。ちなみに、お主の世界は神界の次に強い。神秘を完全に外へ排除したため、それが膜となってより強固な壁になったためであろう」

俺のいた世界すげえ。

「そして、別世界に行こうが何か問題があるというわけではない。架空の世界など存在せず、全てはおぬしの世界と同じ現実なのだから。原作がどうか縛られる必要はないぞ」

そういつて締めくくるスーさん。なるほど、つまり好きに生きろということだな。杖を一振りして、周囲は再び明るくなった。

「では早速、行ってもらおう世界を決めるわけだが」

「ちょ・・・！それは俺にすぐ死ねと!？」

まさか生身で行けと!?! いや、送られる世界によるけどさ!!

「ふむ・・・それもそうか。ワシ平穏な世界へ送る気は全くないしの。」

「今さりげなく不穏な発言をしなかった?」

「気のせいじゃ」

それなら良いのだけど。

「とはいってもただ力を与えるのもつまらぬしのう。ではこうしよう」

指を鳴らすスーさん。表れたるは穴が開いた箱。くじ引きか?

「一枚引きなさい」

と差し出されたので、手を突っ込み、これぞというのを引く。取り出した紙を開くとそこには・・・

『馬鹿がみくるゝ♪豚のけゝつゝ♪』
グシャ

「スーさん?」

「ふおっふおっふおっふお、お茶目な冗句じゃよ。ほれ、もう一枚引きなさい」

今度引いたのは、『死・・・いや、四だったわ。間違えちった、てへ♪』

グシャ!!

「……スーさん？」

「お茶目なジョークじゃって。ほれここから数字の数だけ選びなさい」

色々と突っ込みどころはあったが、今は脇に置いた。目の前に表示された能力表に意識を移す。俺の知っている能力はたくさんあったが、一部知らないのもあった。しかし、能力名の横にちゃんと説明が書いてあるという親切設計だったので問題は無かった。その中から、バランスを考えて四つピックアップしていく。

「選んだな？これがお主の肉体じゃ。年齢、容姿ともに生前のままじゃ。しいて違いを上げるのなら、お主の世界にあった限界がないところか。つまり、鍛えれば鍛えるほど、結果はついて来るという事じゃ。もっとも、最初は生前の力しか出ないが」

「やっぱり俺にすぐ死んでほしいの！？」

「ふおっふおっふお。何を言っておる和樹よ。そんなこと一言もいっておらぬし、生き残るための力は与えたじやろう？それに、仮にそうだとしても神とは元来試練を与える存在。生き返るだけでも感謝してほしいもんじゃ」

はっとした。こんな状況に陥って少し浮かれていたようだ。今の俺はまるで最初から最強で当たり前と考えていたが、よくよく考えてみれば俺のままで生きれることはすごく幸運なことだ。それに、なんだかんだで能力を四つ貰っているのに、文句言うのはお門違いも甚だしいだろう。

「ふおっふおっふお。納得したようじゃな。では、そろそろどの世界へ行くかを決めようか」

「スーさん、そろそろいくよ」

「そうか。どこへ行くかわからんが、達者でな」

「うん……」

先ほどより、身も心もズタボロになってしまったが、やっぱりスーさんと別れるのは寂しい。

「なに、永遠の別れというわけでもあるまいし、そうしけた顔をするではない」

そのとおりだが、今までどおりいつでもというわけにはいかないだろうに。

「ん、そうだな。こういう時はあの言葉だな!!」

「そうそう、その調子じゃ」

でも、スーさんは気負った様子を見せないし、俺もしけた面を見せて別れるのは嫌だ。だから、いつもみたいに俺は満面の笑みを浮かべてこういった。

「またな、スーさん!!」

「うむ、達者でな」

そういった瞬間、俺の足から感触が消えた。

「え?」

「おお、言い忘れておったが、行く時は落ちるでな」

「そ、それを先に言ええええええええええええええええ!!」

そうして、俺は黒い穴の中へと消えていった。

スーさんの『ほほ、たくさんいい映像が撮れたわい、早速放送局に投稿をしようかの』という言葉に殺意を抱きながら・・・

天然に適う奴はいない（前書き）

改訂しました

天然に適う奴はいない

「うああああああああああああああああああああアア
！！・・・あ？」

黒い穴に落ち続けてどれくらい経っただろうか。俺はいきなり投げ出された。

「ぐえ」

蛙がつぶれたような声を出してしまったのはご愛嬌。つか、めっちゃくちゃ痛い。しばらく、体中をマツハで走り抜ける痛みに悶えた。具体的にはその辺をエビ反りのまま、右へ左へゴロゴロ転がりまわった。

「で、ここはどこだよ」

ようやく痛みも引いていき、現状把握をする余裕が出来た。どうやら俺は森の中にいるようだ。草木が雄雄しく生えているのを見て少しうんざりした。空気は美味しいが、もし秘境の地とかだったらどうしようか・・・。そんな不安を押し殺して、とりあえず、出口を探すことにした。

突然だが、俺にはスーさんから貰った素晴らしい能力がいくつかあ

る。どれも、チートと呼べる代物だ。

一つずつ確認していこう。

一つ目、全ての武器ガンダールヴを操る者

言わずもがな、某人気使い魔小説の主人公の持つ能力。武器であれば効率的な使い方を把握でき、さらに身体能力を上昇させてくれる。しかも、原動力は心の力であり、感情が高ぶれば高ぶるほどその力は天井知らずに伸びていく。さらに、幾多の二次創作の設定と同じく、地力が強いほど能力は高まる優れたものだ。貧弱な俺を大いに助けてくれることだろう。

二つ目、答えを出すものファンサーカー

個人的に大好きな漫画の主人公および敵（後に協力関係）が持つ能力。あらゆる事象に対し瞬時に答えを出してくれる画期的な力だ。これによって言語や見知らぬ土地での生活、効率的な修行の仕方などにほとんど困ることはなくなるだろう。さらに、戦闘においても相手がどう攻撃するのか、どうすれば避けられるかという疑問にも答えてくれる。ああ、素晴らしい能力だ。漫画読んでいたときから、これは欲しいなあと夢見ていた。実際に手に入れられて嬉しい。

三つ目、騎士ナイト・オブ・オーナーは徒手にて死せず

超大作のゲームシリーズのバーサーカーの能力。手にしたものをDランク相当の宝具へと変化させ、自分の宝具へする能力だ。元がよければ、つまりCランク以上ならばそのままのランクで支配できる。何これすごいな能力だ。バーサーカーさんマジパネエ。

最後、錬金術

これはあの大人気漫画の錬金術だ。義手義足の主人公のあの手を合わせてなんかすごい力でぶわあってして、対象を練成するもの。こ

れさえあれば荷物いらず。道具が欲しければ、その場で練成しちやえな便利能力だ。ただし、これは一応学問なので、それ相応の知識がなければ使いこなせないのだ。だが、困ったときの答えを出すもの^{カー}。これさえあれば何とかなるんじゃないかね？と思ってもらった。

俺の戦闘スタイルは武器を練成して、宝具化して答えを出すものであらゆる答えを出しつつ、ガンダールブ無双をするのだ。^{アンサートーカー}

ふははは、諸君うらやましかろう？これで俺もチート野郎に仲間入りだ！！

そう思っていた時は一瞬でした。ほかならぬスーさんに否定されました。

偉い人はいいました。『本来お前の力ではないのだから、そう簡単に使いこなせるわけなからう』と。

ええ、そのとおりでしたよ。体に使い方が染み付いていないのに、使いこなせるはずがない。

それ以前に、ガンダールブは現代人気分から抜け出しきれない今の俺では、闘争ではなく逃走に使うことになるだろう。答えを出すものは任意に発動できない。これは、脳に対する負荷がすごいから拒絶反応が起こっているためと推測。原作でも、特殊な訓練をしていないのに、自在に使いこなせるはずがないみたいなのを言っていました。そして、科学知識が乏しく、答えを出すものを自在に使えない俺では本来使い勝手のよい錬金術が使えない。騎士は徒手にて死せず^{オーナー}はそんな俺では宝の持ち腐れ。

はは、なにこの役立たず？チート？なにそれ、食えんの？

そんなわけで、今の俺をスーさんは、王様にヒノキの棒を渡されて魔王退治を命じられた某勇者の少年（レベル1）よりも劣っている、絵に描いたような雑魚と評した。まったく持ってそのとおりだ。

さて、何故諸君は俺が唐突に能力の紹介をしたのか不思議に思っていることだろう。なに、答えは簡単だ。

「グルルッ……」

熊と遭遇したからさ♪

今までの常識を根底から覆すほどの大きい熊が行く手を塞ぐ。木々の隙間から当たる日の光が、黒く滑らかな毛皮に当たり、思いのほかにキラキラと弾く。むせかえるような獣臭が鼻につき、相手の存在を強制的に認識させる。こちらを窺う目には、明らかに友好的な光はなく、獲物を見つけた時のように爛々と輝いていた。ちよつと小腹を埋めるのに十分そうな獲物を見るような目、そうまさに俺みたいな獲物を……。

ザッ

ザッ

「・・・・・」
「・・・・・」

ザッザッ

ザッザッ

「・・・・・」
「・・・・・フンッ」

目をそらさず、ゆっくりと一歩後退すると、相手も一歩前に進む。もう一度後退すると、相手も足を出す。まるで、こちらを嘲笑うかのように鼻を鳴らす大熊。冷たい汗が頬を伝う。

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」

このとき、確かに時は止まっていた。少なくとも俺にはそう感じられた。だから現実でもそうあって欲しかった。

「グオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「いやああああああああああああああああ！」

脱兎の如く逃げ出す。当然、巨大な熊は追いかけてきた！！え？戦えて？無理無理！！あんなのと戦えるはずがないだろ！？こちらと無力な一般人ですよ！貰った力？すでに気迫で負けるから！！それ以前にもう息が上がっている俺にどないせいと！！何が野生の

熊と遭遇した時は焦らず、目をそらさず、ゆっくりと後退しなさいだ！！あんなことされたら、逃げるしかないじゃん！！もうどうぶつ奇○天外なんか信じないからな！！！！

ボクサーみたく、己の拳を頑張って武器と認識することなんかガンダールブの能力を発動できたが、存外に消耗が激しくて、早くも息があがってしまった。心なしかスピードも落ちてきた気がする。このままでは死んでしまう！！

「だれかぁ！助けて下さああああああああああああああああああい！！！」

声よ枯れよとばかりに必死になって叫んだが、それに応えるものはいない。こんなに身近に死を感じるのは初めてだ。全力で走っているのに、ちっとも報われず、むしろ追いつかれているような気がする。じわじわと諦観と恐怖が身体を支配する。

何か、何かしないと……。俺は走りながら、身体をまさぐる。だが、あったのはただのくじ引きを丸めた紙屑だった。

「これだ！！！」

その何の変哲もない紙屑をムツと念じて、数秒かけて宝具化した。そして、一端足を止め、振り返って投げつけた！！紙屑でも宝具は宝具。当たれば少しは……。だが、その期待を裏切るかのように見当違いの方向へと跳んで、木の枝を折っただけだった。そういえば俺ってコントロール力皆無だったわ。

軽く心が折れかけたが、しかし、そこで天が味方してくれた。なんと、勢い良く折れた枝が、回転しながら大熊の左目に刺さったのだ

！！痛みにあえいだのを見て、俺は鉛のように重い足を根性で持ち上げ、我武者羅に走りだした。このチャンスを逃す手はない。今はただ後ろの捕食者から逃げるのみ！！何も考えるな、ただ足を動かせ、腕を動かせ！！死にたくない、生きたいという生存本能に従え！！体に熱を入れろ！！ガンダールブの能力をフル稼働するんだ！

向かう先には、今までの薄暗さとは一転して光が溢れている場所が見えた。逆光になっていて良く見えないが、きっとあそこは出口に違いない！！あそこに行けば！！

藁にもすがる思いで力を込めて走り続けた。そして、遂にその直前にまでたどり着いた。

さて、人は唐突に緊張状態が解けると、えてしてポカをしてしまうことが多い。そして、俺も例に漏れず、大ポカをした。

ありていに言えば、目の前の茂みに足を取られて、転んでしまったのだ。今までの勢いが勢いだったので、それはもう転んだときの反動も凄まじいものだった。軽い無重力を体験ができるほどに。

オワタ

放物線上に光の中へと飛び込んだ俺。

その先にあった湖に思いっきり突っ込み、沈んでいく。水面では凄い水しぶきが跳ねていることだろう。ここ、思ったよりも大分深い湖だった。底が見えない。空気を求めて水面に顔を出す。

真っ先に肺に入ったのは、澄んだ空気だった。太陽の光を反射して輝く、清らかな水の中を悠然と泳ぐ魚。湖の真ん中のあたりに生え

る大きな樹。その樹の根っこに座って、目を丸くしている服を着ていない黒髪美少女。森に囲まれたこの輝ける景色に、一瞬で見惚れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？今、なんか混じっていなかったか？

きれいな湖

泳いでいる魚

真ん中のでっかい樹

裸の少女

ああ、裸の少女は景色じゃないね♪うん、疑問が解けてすっきりすつきり。そして、対象をじっくり観察することにした。どうやら、突然の来訪者に驚いている様子の彼女は体を隠さずにこちらを見て固まっている。長い黒髪に透き通った宝石のような紫色の眼。起伏に富んだ体つきはこちらを魅了してやまない。年のころはおそらく16歳あたりと思われる。綺麗な子だ。でへへ、眼福がん・・・ぷく・・・

この瞬間、俺は正氣に戻った。逃げてきた疲労感と迫り来る死の恐怖が、俺のネジを数本はずしたらしい。女の子の体をニヤつきながらじっくりねっとりまじまじと見るなんて！！俺って奴は・・・俺ってやつはあ！！

だが、俺の目は相変わらず少女に釘付けだ。

「しょうがないよね？だって男の子だもん♪」

そう、俺は男。だから、これはむしろ健全な反応なのだ！人はこれ

を開き直りいう。

だがどうも様子が変だった。我ながら不躰な視線を向けているというのに、疑問符ばかりを浮かべているのだ。その無垢な瞳が心にグサグサ刺さる。って、何で悲鳴の一つもあげないの？この年代の子が??すると、少女はポンツと手を合わせて、

「これがお婆ちゃんのいつていた状況ですね！」

お婆ちゃん？

「だったら、こういうときの対処は・・・」

とぶつぶつ言い出し、突然大きく息を吸いだすと

「きゃあああああああああああああああああああ——ッ！」

と今更大きく悲鳴を上げ、こちらに手の平を向ける。突然だったのでびっくりした。

「それから、こうかな？」

「ぬあああああああああああああああああ——ッ！！」

確認するように少女は呟いた。そして、突如発生した渦により俺は湖に飲み込まれたしまった・・・

薄れ行く意識の中、『プククッ。早速笑わせてくれるとはの。さすがじゃ。皆の期待を裏切らぬ。皆の者！ちゃんと録画したか！？』という声を聞いた気がした・・・。

ネタじゃなくてもつい言ってしまう言葉ってあるよね（前書き）

改訂しました

ネタじゃなくてもつい言ってしまう言葉ってあるよね

「知らない天井だ・・・」

眼を覚ましたとき、思わずそう呟いてしまった。別にネタを言ったつもりはない。嘘じゃないよ？本当だよ？

とりあえず、首回して周囲を見渡す。結構広い部屋にいた。はて、ここは何処だろうか？寝ぼけ頭で考える。・・・そうだ。でかい熊から逃げた後、湖に突っ込んで少女に水の中に沈められたんだ。なんという濃密な一日。というか俺情けないなあ・・・

「この馬鹿娘が！無闇に魔法を使うなどといっただろう！！」

「で、でも、お婆ちゃん、男の人に裸を見られたら叩きのめさせて・・・」

「あれは拳で叩きのめせっていう意味だわい！！ただでさえお前は馬鹿魔力のせいで、制御が下手なんだよ。今回は良かったものの、万が一のことだってありえたんだ」

「・・・ごめんなさい」

「まったく。大体お前は・・・」

いきなりの怒声にビクツとしつつ、次いで聞こえてきた声に、どこかで聞いたかな？と首をかしげる。会話は下の方から聞こえることから、俺のいる部屋は二階にあるらしい。とりあえず、話を聞きに行きたいのだけど入れる雰囲気ではない、というか入りたくない。でも、そういうわけには行かないので、身体に力を入れる。

「う、動けない・・・」

力を入れた瞬間、凄まじい痛みが全身を支配したのだ!! これはまさか・・・

「馬鹿な、この痛みが、これが筋肉痛だということのか・・・」

あの命を懸けた追いかけっこによる影響だろうが、ここまで酷い筋肉痛は初めてだ。少しでも力を入れると、節々がギシギシと軋む。無理に起き上がっても、身体が勝手にプルプルして、生まれたての小鹿みたいになっている。

「む?・・・レイア。男が起きたようだよ」

「本当ですか!?! よかったです!! あのまま目覚めないかと思いました」

どうやら、俺の悲鳴が届いたようで、向こうから来てくれるようだ。というか、俺そんな危険な領域に足浸かったの?

扉の外から階段を上る音がする。そして、次第に足音は部屋に近づいてきた。入ってきたのは二人。一人は腰の曲がったお白髪蒼眼の婆さん。気の強そうなそうなお婆さんだ。後、服装がまんま魔女スタイルの黒尽くめだ。とんがり帽子はしていないが、手に持っている杖とかがいい感じに雰囲気を出している。

もう一人は湖であつたあの子だ。艶やかな長い黒髪を後ろで縛り、綺麗な紫の瞳でこちらを見ている。こちらもお婆さんと似たような格好だ。なんというか、印象的には子犬だ。全身から放たれる純粋オーラが俺の心を撃ち抜く。説教されていたからか、しゅんとしている姿に思わず、

「も・・・!」

———萌え!!

と言いそうになってしまった。だが、ギリギリで踏みとどまった。出会い頭にそんなことを叫ぶとかありえない。断じて全身を蔓延する筋肉痛が口を閉ざしたとかではない

「も?」

「も・・・もう大丈夫ですっ!! あ、俺和樹って言います。あなた方は?」

無理やり誤魔化し、質問することで話を逸らす。

「カズキか。不思議な響きだね。あたしの名はフィリス。見ての通り魔女さ。この子はレイア。私の弟子だよ」

「はい、レイアって言います。先ほどはすみませんでした・・・」

「いや、あれは俺が悪かったから。女の子の体を舐め回すように眺めるのは、失礼だった。すまなかった」

と頭を下げる。ゴカバキメキョンというイカレタ音が出たがスルーした。今は相手に謝罪しているのだ。ところが、少女は慌ててこう言った。

「いえ、そんな!! 悪いのは私なんです! 魔法も使っちゃいましたし・・・」

それからは、フィリスさんが止めるまでお互いが謝り続けた。ああいうのって、途中で意地になっちゃうもんだね。一つ賢くなったよ。

結局、お互いが悪かったという事で場が落ち着いた。

「ところで、自分達が魔女ってバラしてよかったんですか？」

なんていうか、俺的にはそういうのを認めることはタブーっていうイメージがあるんだ。ほら、魔女狩りとかあったしさ。狩られた魔女は本物じゃないけどね。

「その質問するってことは、あんたこの辺りの人間じゃないね。」

「ええ、まあ」

別に隠すようなことでもないので正直に話した。そもそも人種からして違うから、嘘ついてもしかたないしね。肌の色とか顔つきとか全然違うし。せいぜい旅人と思われるくらいだろうな。

「でも、旅人でもないだろう？」

「・・・どうしてそう思うんですか？」

と思ったら、一瞬でそこまで見破られた。今の質問だけでそこまで分かるものなのか？それとも、これが魔女としての力だということのか。

「まずはあんたの質問に答えようか。答えはイエスだ。ここから少し離れた場所にある村には、噂として知られている。だから、あんたに隠す必要も意味もないし、そのせいで連中はこの森に近づこうとはしない。ま、他にも理由はあるけどね。で、あんたが旅人じゃないと思ったわけだが、いくつかある」

どうやら、魔女とか関係なしに状況証拠だけで判断したようだ。

「一つ、あんたの格好。そんな軽すぎる装備で旅をする奴はいない。それに、旅をしてきたというには綺麗過ぎる」

なるほど、全く以ってその通りだ。俺の格好は元の世界の私服そのままだ。下はジーンズ、上はTシャツの上に黒のポロシャツ。この世界にきたばかりなので、服はあまり汚れていない。せいぜい、森での逃走劇で少し泥がついた程度か。

「二つ、あんたを手当てする過程で見たんだけどね、身体も綺麗過ぎるんだよ。それこそ、旅していたのならありえないくらいに」

ああ、それも納得だ。旅人であれば自然と擦り傷とか出来るだろうし、肌も荒れて、髪も傷むだろう。俺の場合、擦り傷とかほとんどこの森で出来たものだしな。

「三つ、あんたはここの森のことを知らないで来たようだ。色々と言いつきがある森なのに、何も知らないのは不自然じゃないかい？」

旅人は情報を大事にするということか？確かに、あんなでかい熊がいる森に何の事前準備もなく入ってくるのは、自殺行為でしかないもんな。いや、それ以前に、彼女は村に知られているといった。なら、ここは魔女の住む森として名高いと言いたいのだろう。それを知らないのは確かに不自然だ。

「最後に、この理由が一番大きいよ。お前さんのような貧弱が旅人のはずなからうて。こことかつついたら・・・ほれ、そんな様ではないか」

「ちょ・・・待って・・・マジで☆○△□◎~~~~!!」

興がのったのか、絶え間なく俺を突く指。それに伴い襲い掛かる痛み。それはやがて甘美な痛みへと昇華して新たな扉を――

「お婆ちゃん!! 相手は病人なんですよ。いじめちゃダメです!!」

——開く前に、幸か不幸か、救われた。

「軽いお茶目じゃないか。そう目くじら立てんでもよかろうに」

「いいえ、ダメです。お婆ちゃんは一度乗ったら、気が済むまで突き抜けちゃう人ですから。研究だって一度始めたら、周りが見えなくなるじゃないですか」

「おやおや、手厳しいね。孫にもこういわれたことだし、ここらで勘弁してやるよ」

息絶え絶えになりながら、レイアにお礼を言う。ふふふ、鼻先に新たな世界へと続く扉が見えたときはどうしようかと思ったよ……。

「さて、冗談はここまでにしてだ。結局、お前さんは一体何者なんだい？」

表情を改め、こちらを探るような目つきでフィリスさんは質問してきた。怪しいのはわかるが、正直、その質問には答え辛い。というか、どう答えれば納得してくれるんだろうか？

「ここは、彷徨いの森。その名の通り、入った人間は皆彷徨ってしまふ。まあそれはあたしがそういう結界を張っているからだけどね。だが、あんたはここにいます。結界を張っているにも関わらず、森の奥にまで侵入できた。仮に、結界をどうこうしたとしても、この森に住む猛獣を相手しなければならない。貧弱なお前さんが、ナイフ一つも持たない丸腰で、森の最奥にある湖まで辿りつけるはずがないんだよ」

『何よりあの時は、無防備なこの子のために見張りもいた』といって、今度は嘘や誤魔化しは絶対に許さないという意志を乗せて、も

う一度聞いてきた。

「結界をものともせず、猛獣の魔の手をぐぐり抜けた、旅人でも村人でもない、まるでここに突然出現した幽霊のような存在。・・・もう一度聞くよ、お前さんは一体何者だい？」

「俺は――」

「神様に力をもらって、異世界から来た一般人、ねえ」

なんか面倒くさくなったんで、洗いざらい吐いた。バナナの皮で死んだこと以外全部。考えてみれば、隠す必要ないし。しゃべった内容はスーさんの事と俺の能力と異世界から来たこと。自分でも怪しいなあと思うが、これが真実である。

さあ、彼女はどう出る？　と思いきや、予想に反してフィリスさんはすぐ信じてくれた。そのことに多少拍子抜けしつつ、初対面である俺の言葉をそんな簡単に信じていいのかと聞くと、ひそかに嘘発見器みたいな魔法、というか読心術をかけられていたことが判明。表層意識を読み取ることで、確認を取ったそうなの。・・・バナナ事件のことばれてないだろうか、少し心配になった。

「ちなみに、一つでも嘘をついていたら・・・」

「ついていたら？」

ゴクツと唾を飲み込み、次の言葉を待つ。

「ひっひっひっひっひ」

「え？　何、どうなるの！？」

結局教えてくれなかった。

その後、行くところがない俺に、しばらくここに住めと言ってくれた。働く代わりに、衣食住を保障してくれる上に、この世界の常識とか色々教えてくれるらしい。ありがたや、ありがたや。今は筋肉痛で苦しんでるけどね。

「カズキさんが住んでいた場所って、一体どんどころだったんですか!？」

話もひと段落ついて、まったりした空気が流れると、レイアが聞いてきた。なにやら眼を輝かせて、顔を近づけるレイア。鼻息を荒くし、元の世界のことを聞きたがっている。異世界に興味あるらしい。とりあえず、当たり障りのないことを話すとすごく喜んでくれた。あまりにも楽しそうに聞いてくれるもんだから、調子に乗って漫画や小説の話を聞かせてあげたりもした。

また、俺の着ている服を物珍しそうに見て来たのは少し恥ずかしかった。どうも、彼女達の服装から察するにこの世界の文明レベルは元の世界と比べて遥かに劣っているようだ。はてさて、ここは一体どんな世界なんだろうねえ。

ま、今はそんなことを聞ける雰囲気ではないから、聞くのはまた今度にしよう。

「子供みたいな子だったな・・・」

目の前で無防備に寝るレイア。子供がそのまま大人になればこうなるんじゃないだろうか。実際、俺の話を一喜一憂して聞く姿はましま子供だった。

「この子は、あたし以外の人間と関わりを持ったことがないからねえ。町に行っても脅えられるから、人間の友人はいない。だから、誰かと会話して得られる経験が無いのさ。最低限の常識は教えているつもりだがね」

驚愕の事実。話によると、男と話したのもこれが初めてらしい。彼女の興奮の理由の一つにこれがあったらしい。近い年齢の、しかも異性との『初めての会話』に心踊ったのだろう。

だとしたら、湖で俺が彼女の裸をみても不思議そうな顔をした理由も納得した。そりゃあ、人と接する機会がないなら、裸を見られたら恥ずかしいという思考はないだろう。そこまで考えて、一つ疑問が浮かんだ。

「なんで脅えられるんですか？」

そう。こんな純心無垢な子に誰が脅えるというのだろうか。むしろ、友達たくさん出来ると思う。第一、こんなに可愛いというのに。こんなに可愛いというのに。大事なので二回言いました。

「簡単な話さ。人間は異端を嫌う。・・・カズキよ、この子の瞳をどう思う？」

いきなり、話題が変えられた。

「すごく綺麗な色ですよね。宝石みたいで」

「そうかい」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「って、それだけ!?!」

一言で済まされた!?! 今の質問には何の意味が!?!?

「お前さんはそう言ってくれるが、他のやつらは違う。昔、レイアを町に連れて行ったときに町の連中はなんと言ったと思う? この子の眼を見て『悪魔』って言いおったのだ! 石を投げたやつもおった!?! いい大人がだぞ!?!」

フィリスさんが憤怒の形相でそう怒鳴った。レイアのが大好きなのが伝わってくる。本当に大切にしているんだな。

「教会の異端審問官まで出張ってきたくらいだ。ふざけるでない! ！ただ、瞳の色が違うだけだろうがっ!」

「ふい、フィリスさん! レイアが起きてしまいますよ!?!」

その言葉で我に返ったのか、肩で息をしながら、自分を落ち着かせるように目を瞑る。

「結局、その時は逃げてきたがな。レイアの脅えた目は今でも思い出せる。だが、問題はそれだけでは終わらなかった。レイアには想像を絶するほどの魔力が備わっている。それに眼をつける輩も数え切れないほどいる。魔力タンク兼欲望のはけ口の人形にする気のやつらがな」

何でフィリスさんは、会って間もない俺にそのことを話すのだろう

か？いや、展開的にわかってるんだよ？一応の確認って大事じゃん。間違ってたら俺イタイ奴だよ。恥ずかしいを超えて死にたくなる。フィリスさんは俺の疑問を感じ取ってくれたのか、俺の目を真剣にみて、こういった。

「お前さんに話したのは、老い先短いあたしに代わって、この子を守って欲しいからだ」

「無理」

俺は即答した。フィリスさんはぽかんとした表情でこちらを見ている。何を言われたか頭が処理できていないようだ。少し笑えてしまう。俺はそんなフィリスさんに畳み掛けるようにいった。

「無理なものは無理です。なす術も無く瞬殺されますって。俺は、そこら辺の一般人に劣る雑魚だと思いますが？そんな俺が彼女を守れるとかうぬぼれる気はありませんよ？」

「・・・そうか。そうだったね。少し調子に乗っていたようだ。この話はきか「まあ話は最後まで聞いてください」・・・お前さん断ったではないか」

「無理とは言いましたが、断っていませんよ？」

そう、俺は断っていない。あくまで、『今』の俺では無理って言うんだ。大体、これから一緒に住む恩人達、それも家族になる人達を見捨てるほど俺は薄情ではない。わけの分かってなさそうな彼女に向かって、俺的不敵な笑みを浮かべこう言った。

「フィリスさん、俺に魔法を教えてくださいませんか？」

何処かで聞き覚えのある声が『和樹はツンデレじゃああああああああっ！！！！ちゃんと撮ったか！？にしても、何じゃ、あの気持ち悪

い笑みは。腹が振れてしまう』と言ったような気がした。

動物は人間より強いのは当然だ（前書き）

改訂しました

動物は人間より強いのは当然だ

「おぬしに魔法を、だと？」

「ええ。俺に魔法を教えてください。俺は特別な力はありませんが、自分でも掌握してません。しかし現状、そんな曖昧なものを頼る他ありませんし、だったら手札を少しでも増やしておこうかと思いついて」

「それで魔法をか」

「はい」

あれから数日が過ぎた。その頃には筋肉痛の脅威はほとんど消え去っていた。森の中に住むことは、都会に住んでいた俺にとって初めての経験だ。同居人がいるとはいえ、慣れるまでに時間がかかるだろう。元の世界の利便性がなくなったのだから、当然だ。その代わり、この溢れんばかりの自然が俺の心に開放感をくれる。こんな生活も悪くないな。

そんな俺は現在、清涼な空気を吸い、頬を撫でる涼やかな風に耳を澄ませ、木漏れ日に目を細め、森のざわめきを聞きながら――――

ギアアギアア

フシャアアア

グルル

グオオン

ウキキー

モオ

キシャアアア

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・ ・

様々な種類の動物たちに囲まれています。

・ ・ ・ ・ ・ どうしてこうなった！

そして、こいつらでかい。どいつもこいつも無駄にでかい。なに、こいつら、ていうかこいつらを動物って言っているの？普通に化け物じゃん。あの熊と比べて遜色ない大きさなのもいるよ？なんなの？死ぬの？

——あ、死ぬのは俺か・ ・ ・

「落ち着け、皆の者。確かにレイアにあんなことをした大罪人ではあるが、こやつも、百歩どころか一万歩でも足りないが、ここは大人になって譲歩するとして、一応はあの家の住人。それに、そんなことをしてあの子を悲しませるのは本意ではないはずだ。こんな屑・ ・ ・ ごほん、変態・ ・ ・ うおっほん、生物の底辺でもあの子は家族のように思っているのだから。・ ・ ・ アア、マエバノサビニシテヤリタイ・ ・ ・ 」

さっきも思ったけど、この鼠こわっ！！てか声がダンディーだな！！？つぶらな瞳の癖に！！違う、それ以前に何故しゃべれる！！？

あ、牛にたしなまれた。

「はっ！！すまない、どうやら我を失っていたようだ。ありがとう、モーちゃん。では！！これより被告人、カズキの裁判を始める！！」

ああ、本当にどうしてこうなった・・・。

そもそもの始まりは、間違いなく今朝おきたアレだろう。

朝起きたとき体が妙に重かった。最初は全身に日々の疲れが残っているのかもと、寝起き頭で考えたが、毛色が違う。じゃあ、金縛りか何かかと考えるが、やっぱり違うような気がする。こう、物理的に何か重い感じなのだ。体に何か乗っているのだろうか？その時、ふわっと、いい匂いが鼻腔をくすぐった。

眼を少し開けると誰かの頭が見えた。どうやら、これが重りの正体で、いい匂いの発生源らしい。だが、寝起きの手というのは得てしてわけの分からない思考回路を持つ。だから、これから起こることは当然の結果だったのだ。

俺は腕を広げて、思いつき体の上の存在を抱きしめた。その際に『ふわっ』という声が相手から漏れたが、気にせずぐっと力を入れる。ああ、柔らかいな。純粹に感触を楽しむことに集中する。一番いい抱き心地はどだろうかと色々体勢を変えた。その際に『あっ・・・』とか『んっ・・・』とかいう声が聞こえてきたが寝起きの手には通用しないのだ。近くで、羽ばたく音が聞こえたような気がしたが、気にならない。

ようやく、一番の抱き心地を見つけた。その時になって俺は何を抱き締めているのかに疑問を抱いた。

一瞬で頭が覚醒しましたよ。もう冷や汗だらだら。

なんと、俺が抱きしめていたのはレイアだった。腕の中にすっぽりと収まっている彼女は少し顔を赤らめているが、規則正しい寝息を立てていた。

心臓大爆発！！

彼女いない暦Ⅱ年齢の俺はこんな経験したこと無いので、頭が真っ白になった。悲鳴を上げなかったのは奇跡に近い。とりあえず、俺は彼女を起こさないようにそーッと離れて・・・はなれて・・・はな・・・

なんということでしょう。よく見ると、彼女の腕も俺の後ろに回されているのです。これでは離れられません。このままでは、先生に色々といわれるのではないでしょうか？

結局彼女が起きるまではそのままだった。先生が、いつまでも起きてこない俺たちを起こしにくるまでですつと。天国のような地獄でした。嘘です、天国一色でした。

朝ご飯のときに一悶着あったものの（具体的には先生の生暖かい視線）、それからは概ね順調に過ぎていった。『昨夜はお楽しみでしたね』なんていわれても無視。

この世界に訪れた日、俺は先生、つまりフィリスさんに魔法を教え
てくれるようお願いした。この世界の魔法がどんなものかは知ら
ないし、俺が使えるか分からないけど、魔法のある世界において魔
法を習うのは異世界トリップの醍醐味の一つである。俺だって魔法
の一つや二つは使いたいのだ。

先生は少し考えていたようだが、一つの条件を提示して了解してく
れた。『魔法の存在を安易にばらさないこと』。この世界では魔法
は秘匿されており、ばれた時は、知ってしまった相手の記憶を改竄
し、ばらした本人には、死なない程度の拷問を仕掛け二度とこんな
ことが無いようにと、文字通り体に刻み付けるのだ。拷問って・・・
。魔法少年先生ではオコジョ刑で済むのに。いや、それはそれで嫌
だが。

俺は約束して習うことにした。必要なとき以外は使わないと肝に銘
じて。拷問とか嫌だしね。

フィリスさんの講義は面白かった。このときから、俺はフィリスさ
んを先生と呼んでいる。先生はフィリスでいいよと言ってきたが、
こういうのは形からだと思うので、そう呼ぶことにしたのだ。先生
と呼んだとき、照れたのか、若干顔が赤くなっていたのも面白かつ
た。

先生の講義は、始まる時間も終わる時間も非常にアバウトで、彼女
のやる気一つで決まる。講義がなかった日もあったくらいだ。

さて、講義を始めるに当たって、最初にやったことは魔力の測定だった。結果、俺の魔力は平均より下であり、強力な魔法は使えないといわれてしまった。少し残念だったが、ないものねだりは見苦しいので、サッと頭を切り替える。

……ことが出来たらよかったのになあ……。いやさ、だって普通さ、こう派手にどっかーんてやりたいじゃん。

魔法は火力。

火力は派手さ。

派手なものはかっこいい。

つまりそういうことなんだよ。魔法といえば、かっこいいんだよ。

でも、ないものはないのが現実。諦めて、しぶしぶと講義の続きを受けることにする。はああああ……。現実 is 厳しいぜ……。

すっかりやる気をなくしてしまったが、使えないとはいっても、知識を蓄えておいても損はないといわれたので、習うだけ習うことにした。

ちなみに、この世界の魔法はまんまネギまの魔法だった。そのことから、ここはネギまの世界、ないしは並行世界だと思われる。ちなみにちなみに、魔力は先生が体に流してくれたおかげで、自分のものは感じ取れるようになりました。掴むまでに二時間ぐらい掛かりましたが。

そして、講義を進めていく内に、更なる問題にぶち当たった。

———言葉の壁

俺の前に高く聳え、並大抵の努力では超えられない。そう、彼女の板書は全て英語表記な上に、呪文もラテン語あるいは古典ギリシャ語なのだ。読めるわけない。理解できるわけない。

その時になってようやく気づいた。

生まれも育ちも日本の俺が、何故彼女たちとしゃべれるのだろうか。考えても分らないので、スーさんのサービスということにした。そうでなければ、説明がつかない。俺には日本語に聞こえるのに、相手の口の動きは違うのだから。だとしたら、文字もサービスしろやと文句を言いたい。

なんにしろ、読み書きが出来ないのでそこから始まった。・・・無理。ぜんぜん謎。慣れていくしかないといわれたが、出来るようになるとは思えない。

講義が終われば、次は薪割り、水汲みなどの力仕事をした。非力な俺を少しでも鍛えるためにガンダールヴの力は使わない。毎日続ければがっしりするだろう。最初は筋肉痛のせいで、持ち上げること出来なかったのはいい思い出だ。

一通り終わって、自分の時間が出来たら庭で瞑想している。魔力を運用するためだ。これは、ある漫画を参考にした。

『四人行』

これ、すごく分かりやすくていい。『燃』にしろ『念』にしろな。

瞑想は心を深める『燃』を、運用はオーラを操る『念』を応用している。少ない魔力をせめて綺麗に無駄なく使うようにするためだ。あと、ここだけの秘密だが、オーラの如く、魔力が増えないかなあ

と願望も抱いていたりする。後、アンサートーカーを安定させるために、似たようなことをしていた気がする。いや、詳しく覚えてないけど。

こういった時間に能力の研鑽もしている。能力を洗練させるためだ。能力に振り回されるのではなく、使いこなせるように。

ガンダールヴは、武器と認識すれば、たとえ素手であろうと発動することがわかった。このとき、武器の情報とかも入ってくるので、どう振り回せばいいのか、どれが効率のいい使い方なのか、などを知ることが出来る。だから、その情報に従って武器を振るうことにしている。

錬金術は科学知識が穴だらけなため、うまく発動しないと思っていたが、意外に出来た。イメージするだけでよかった。考えてみれば、原作でも主人公達は、ただの石を金に錬成していた。元の世界の科学ではありえない現象であることを考えると、色々と融通は効くようだ。ただ、出来たといっても形が歪な上に、少量の質量しか錬成できなかった。それに、簡単なものしか出来なかった。錬金術の基本、理解、分解、再構築のうち、理解が全然なっていないからだろう。今後の課題は山ほどあるということだ。ちなみに金の錬成は出来ました。少量だったけど。

次に、拾ってきた枝や石にナイトオブオーナーを発動。徐々に侵食されるように黒くなっていく枝。そして、十秒くらいかかってようやくすっぽり覆われた。これで、世界一強い枝になったわけだが、そこに至るまでが少々時間がかかっている。実際、熊に追われていた時、くじに使ったわけだが、紙一重だった。後1，2秒遅ければ捕らわれていた。これを一瞬に出来るまでが目標だろう。

ここまでやってみて、やはり、能力は貰っただけという印象が強いと改めて思った。所詮は俺のものじゃないということだ。これらの能力を自分のものにするためにも、日々の研鑽が大切だ。そうすれば、念願の俺tueeeeeも出来るし。

いや、まだ、解消しなければならないところがあった。

心だ。

どんなに研鑽しようと、一番の問題は自分の心だ。現代人として生きてきた俺は、精神が脆い。すぐ逃げる。というか暴力に軽く忌避感がある。振るわれるのもそうだが、振るうのも嫌だ。かつての世界なら問題なかっただろうが、この世界では脆弱といわれそうだ。実際、先生にも似たようなことを言われた。俺はやるかやられるかの世界に来てしまったことを認識しなければならぬし、レイアを守ると約束してしまったのだ。それ以前に、自分の身は自分で守ることが出来なければならぬ。甘いことを言っている場合ではない。

第一、巻き割り一つにしたってそうだ。ガンダールヴを使わないように自制するのに苦労するのだ。楽な道が目の前にこれでもかと思はれて、誰だって辛いだろう。楽な選択を取りたくなってしまうのは人間の性だ。こういうところも含めて、精神を鍛えなければならぬだろう。

でも、いきなりは無理・・・。

そんな感じで、一日を過ごしていたら、前触れ無く首筋に衝撃が走り、目の前が暗転した。そして、気がついたら動物に囲まれていて、こう言われたのだ。

「貴様が不屈き者か・・・」

と。

つづらな瞳の鼠に言われたという事実が、より恐怖を煽った。

そして現状に戻るわけだ。もう、意味わかんねえ。

切れた時に発揮される力は怖い（前書き）

編集しました

切れた時に発揮される力は怖い

俺を囲む動物達

その正体は、この森で生存競争に敗北したやつらだった。たまたま通りかかったレイアに治療してもらったのだって、恩を感じているのだとか。治療してもらった際に、偶然パスが繋がり、本能だけだった思考に理性が生じ、彼女と使い魔契約したような状態になっているらしい。いわば、ハイパーアニマルだ。

チューダムを筆頭とする彼らはレイアの盾であり、矛である。レイアに敵対するやつらをとことく葬る彼らのことを、森の住人は恐怖と畏怖をこめてこう呼ぶ。

『聖女親衛隊』と・・・

そして、今朝、いつも通り朝を知らせる鷹のような鷲の様な鳥が、俺がレイアの体をまさぐっていたのだから、さあ大変。ただでさえ無防備な彼女のために日ごろから気を張っていたにもかかわらず、昨日の出来事があったというのに、昨日の今日で再び、しかも今回は直接汚い手で体を弄繰り回していたのだ。その怒りはとどまることを知らなかった。すぐに八つ裂きにしても良かったのだが、そんなことすればレイアの上良くないし、何より彼女の眼を汚すことになる。彼女のためを思い、怒りを何とか抑え、このことをチューダムに報告しに行つて、今の状況が出来上がったわけだ。俺が一人になる機会をずっと窺っていたらしい。

どうして一人になってしまったんだろうか。そうでなければ、こんな状況にならなかったのに。

「というわけで、貴様には両腕を切り落としてもらう」
「なっ!？」

裁判が始まって、罪状が述べられてから、不条理な判決が下された。

「なにか不満でも？」

「大有りだ。確かにレイアの体をなで繰り回したのは悪かったけど、それで腕を切り落とすのはやりすぎだろ!!」

「ふん。殺されないだけでもありがたいと思え。これでも最大限譲歩したのだ。ただでさえ、貴様を彼女から引き離せば彼女は悲しむのだ。それが出来ないなら、彼女を抱いた（変な意味にあらず）その両腕を切り離すのが妥当だろう？」

「ふざけるな! 大体からしてあんたらに従う必要はないんだ。悪いが帰らせてもらおう」

言葉は通じてても話し合いにはならない。おそらく、このまま話し合っても平行線だ。俺は踵を返して歩き出す。

「言葉で言っても分からないのなら・・・」

不意に不穏な空気になった。体が自然と震えだす。何かが俺の肌を突き刺す。何だ、これ？

「体に刻み込むしかあるまい!!」

突然視界が反転した。足が地面から浮いている。景色が流れていく。

「がはっ!」

気がついたら俺は木に叩きつけられていた。一瞬息が詰まる。全身に迸る痛みが俺の意識を保たせる。さっきまで俺がいた位置に足を上げた体勢でいるチューダム。どうやら、蹴られたようだ。

「この森では弱者の言葉は届かない。届かせたいのなら力を示せ」

自然体でありながら、こちらを圧倒する覇気を放つその姿、まるで森の王者！！彼よりも図体がでかく、強そうな動物達が彼に頭を垂れるのも頷けるそのたたずまい。そんな奴が俺の前に立ちふさがる。

「フィリスさんは貴様を気に入っているようだが、我らはちがう」

一足飛びで間合いを詰められ、鳩尾に拳が突き刺さる。

「カハッ・・・」

「貴様のような貧弱な野郎にあの子を任せらるか！！」

全身をくまなく殴りつけるラッシュュ！！何かをしようとしても、能力を発動する暇が無い。それ以前に、日本で争いのない人生を送ってきた俺が、いきなり戦えるはずがない。

途切れることなく続く猛攻。目の前を火花が飛び散る。

「チュワ！！」

その声を最後に思いつき蹴り飛ばされ、背後の木と激突した。目の前が白くなっていく・・・。薄れていく意識の中、視界に映ったのは、つぶらな瞳の鼠だった。

Side チューダム

目の前で倒れふす奴を見て私は我に返る。すぐに熱くなってしまうのは悪い癖だ。

「おい、さすがにやり過ぎだ」

私の頭を冷やすように狼のフー君が、声をかけてきた。その眼にはいささか非難の色が入っている。格下相手に熱くなり過ぎだと。他の仲間も同様のようだ。

「だが、フィリスさんは容赦をするなど言っていた」

そもそもの始まりは数日前、月の無い夜だった。

「では頼んだよ、チューダム」

森に静けさが訪れた時、フィリスさんは私にある依頼をしてきた。あの子の裸をじっくりねっとりまじまじと見たカズキという小僧を鍛えて欲しいのだとか。心も体も。

「わからんな。あいつの何処が気に入ったんだ。私からすればただのもやし小僧だぞ？」

「ま、確かにその通りだがね。でも、あたしの勘が囁くんだよ。カズキになら、あの子を任せられるんじゃないかってね」

「そのようには見えないがな」

フィリスさんの勘は良くあたるが、あの子を任せるかどうかになると話は別だ。レイアは私たちの聖女であると同時に愛し子でもある。あの子の過去は知っている。

フィリスさんがあの小僧に語ったことよりも実際はひどいものだった。あの子を避ける。そんなのはまだマシだった。

石を投げる。

蹴り飛ばす。

集団で襲い掛かる。

あの子がどんなに泣き叫んでも手を止めることはない。あいつらは笑いながらひたすら彼女を襲った。『悪魔は殺すべきだ』と！！フィリスさんには感謝している。この人がいなければあの子は潰れていただろう。

「ひっひっひ。だったら試せばいい。所詮はあたしの勘でしかないのだからね。お前さんが見定めてくれればいいよ。ああ、容赦する必要はないからね」

そういつて愉快そうにしながら彼女は家に戻っていった。

フィリスさんをして、そこまでいわしめたのだ。まずは小僧のことを知ろうと、しばらく影で観察した。

「仲間が皆やられ、唯一残ったとんがり頭は無謀にも包帯男に向かっていた。『フタエノキワミアツ——！！』。だが、包帯男は強かった！！とんがり頭の拳は届かず、返り討ちにされてしまったのだ。薄れ行く意識の中、とんがり男は絶望した……。『無理だ。俺の実力ではこいつには……。』と。完全勝利という美酒に酔う包帯男。そこに現れたのは、十字傷の男に敗れたはずの隠密頭領だった！」

「そ、それでどうなったんですか!？」

「残念、今日はお終い。続きはまた明日」

「えー！酷いです。そんな気になるところで終わっちゃうのはずるいです!!」

「いや、もう外は真っ暗だしね。夜更かしは健康に良くないよ。ほら、フィリスさんも寝ちゃってるし迷惑になるからね」

「ぶう」

「膨らんでもダメ。今日はもう寝るよ」

「・・・わかりました。続きは楽しみにします」

「うんうん。でもいいの？明日も同じ話で。さっき明日は海賊の話とか言ってたじゃん」

「・・・カズキさんは意地悪です」

・・・不覚にも私まで気になってしまった。

調査の結果、この数日であの子の笑顔が増えていたことが判明した。そして、その笑顔がこれまでよりも、輝いていることにも。小僧が馬鹿をやって、あの子が笑う。なるほど、私にはあの子をあそこまでする笑顔をさせることは出来なかった。フィリスさんの言っていることもあながち間違っていないかもしれん。そこに、一抹の寂しさの小僧に対して嫉妬を自覚しつつも、ほんの少し、ほんの少しだけ納得した。他の人間と比べてマシという程度には。

だから、彼女の言うとおりに、試すことにした。本来はただ呼び出して、覚悟を見せてもらうつもりだったんだが、あの小僧があの子に破廉恥な行為をしたと聞いたので、それを大義名分にさせてもらった。まあ実際に腹に据えかねているわけだが。

近くでみたそいつは、やはり風が吹けば倒れてしまいそうな印象の男だった。一言で言えば藁だ。そんなこいつが、あの子を護れるとは到底思えない。だが、判断するのはまだだ。適当に茶番をはじめた。小僧は、遠い目をして現実逃避をしている。話を聞いてないようだが、別にかまわない。そこは重要ではないのだ。

「というわけで、貴様には両腕を切り落としてもらう」

そう宣言したら一転して強く反発してきた。それまでは私たちの牙や爪に脅えていたのに、変なやつだ。そいつが帰ると言い出した。

ここからが本番だ。

こんな藁人間相手にあの子から賜った能力を使うまでもない。私の身体だけで十分だ。一瞬で間合いを詰め、警戒も全くない背中にも足を叩き込む。事情を知っている仲間も止めに入らない。というか手を出さないように指示してある。

罵倒しながら、追い討ちをかける。正直弱いものいじめにしかなくていいが、人間追い詰められると本質を出すという。こいつは一体何を見せるだろうか？

ほどなくして失望した。正直期待はずれだった。逃げもしない、反撃もしようとしない。出来ないのではなく、そんな素振りが見当たらないのだ。つまりこいつは諦めたのだ。それもまた、戦いにおいて選択に入っている。

脳裏にあの子の笑顔が浮かんた。

われ知らず、齒ぎしりをしていた。こんなやつにあの子を任せられるはずがない。だから、最後の一撃は少し本気になってしまった。あまりにふがないから。あの子の信頼を勝ち取っているこいつが弱いのが許せなかったから。ついカッとなってやった。後悔も反省もしない。

結果、小僧は倒れた。それを見て、やはりこいつには任せられないと確信し、フィリスさんの見当違いだったなと胸中で呟く。だが、次の瞬間目を見張ることとなる。

S i d e o u t

一つだけ分かったことがあった。

——この鼠、俺を見てため息をつきやがった!!

その瞬間、何かが切れた。

相手の攻撃が終わったあと、必死に意識を繋ぎとめて手を合わせた。そして、倒れたときに相手に見えないよう、地面を練成して歪なナイフを作り出し、騎士は徒手ナイト・オブ・オーバーにて死せずで宝具化。ガンダールブの能力で身体能力が上昇。答えを出すものアンサートーカーがうなりを上げ、相手の行動の全てに答えを出す。

全ての能力が歓喜の悲鳴を上げた!!

[illegible]Side
チュウダム

- パリツ
-
-
-
-

何かが弾ける様な音と同時に、小僧が手をつけている部分がへこんだ。そして、立ち上がり、叫びながら今までとは比べ物にならない動きで間合いを詰める。

[illegible]

どこから取り出したのか、その手には今にも黒く染め上げられようとしている歪なナイフが握られていた。凄まじい速さで駆け抜ける奴は、しかし、一直線に向かってくるが故に避けるのは造作もない。避けた後、小僧に止めの一撃をくらわせれば……

「そおい！！」

「!？」

こいつを潰す道筋を組み立てた時、それを遮るかのようにナイフを投げつけてきた。予想外の攻撃に意表を突かれたが、この程度なら問題なく対処できるレベルだ。横に一步踏み出すことで斜線上から外れる。これで、あいつは丸腰だ。だが・・・

「おらあああああああああああああ!!」

意識を小僧に戻そうとして、視界が揺れ、軽く意識が飛びかけた。いつの間にか、至近距離まで近づいてきたこいつに、殴られたのだ!

「クッ・・・!?!」

今ので脳が揺れたのか、身体がふらつく。

「これで、終わりだあああああああああああ!!」

勝利を告げる男の手は、高く、そして硬く握られていた。もやしとはいえ、今の体勢で殴られるのはまずい!だが、何故か今のこの男には下手な攻撃も防御も通用しように無いと勘がささやいた。

(だったら、こうするまでだ!!)

気合で無理矢理意識を集中する。こいつの追撃を防ぎ、かつ倒すには予想外の攻撃しかない。そして、刹那の差で、私は集めた力を解放した。

「水よ、在れ」

その言葉が鍵となり、私と小僧の間に水の塊が現れる。それはやがて全てを飲み込む激流となって、奴を押し流した。小僧は、そのまま木に叩きつけられ、今度こそ意識を失ったようだ。

「はあ、はあ」

少し無茶な力の行使だったせい、吐く息が少し荒くなっている。

深呼吸をして、落ち着こう。

「ひっひっひ・・・終わったようだね」

「フィリスさん」

どこかで見えていたであろう彼女は、何がおかしいのか、ニヤニヤしながら現れた。

「何か？」

「おっとこれは別に、格下相手にチューダムが追い詰められた挙句、使うつもりがなかった能力を使わされたことを笑ってるわけじゃないよ。ああ、もちろんここ数日観察していた男が思っていたよりもレイアの近くにいたんで嫉妬して八つ当たりしちゃっておやまあなんてことも思っていないからね」

そんな意地の悪い笑みを浮かべていても説得力が皆無だ。

「これで認めないわけにはいかないだろう？」

「・・・ああ、いいとも。鍛えてやる。私という格上相手に一発を入れたんだ。鍛えれば相当なものになるだろうよ」

「それだけかい？」

「何が言いたい」

しかし、彼女は依然として嫌らしい笑みを浮かべるだけで、口を開かない。

「ふん。まあいい。私は森に帰るぞ。あの子によろしく言っといってくれ。それと、小僧は任せたぞ」

「あいよ」

背を向けて、この場を去る。

道中、先ほどの戦闘のことを振り替える。すごく弱いくせに、突如強くなったり、意味が分からない。だが、それでもあの小僧はこのルールどおり、力を示した。なら、私が認めないわけにはいい。

自然と口がつりあがる。フィリスさんの勘はともかくとして、面白い奴だというのは分かった。フィリスさんの勘はともかくとして。相当に鍛えがいがあることだろう。これからが楽しみだ。

ただ・・・

「つぶらな瞳は余計だ」

フィリスさんに引きずながら、呑気に眠りこけているであろう小僧に向かって、言うておいた。

S i d e o u t

天国と地獄は紙一重の差だと思う（前書き）

改訂しました

天国と地獄は紙一重の差だと思う

眼が覚めた時には、日を跨いでいた。

先生に昨日の顛末を聞いた。先生が、大きいヌイグルミくらいはある鼠ことチューダムに俺を鍛えるよう頼んだところ、試してから決めるということになったのだと。

結果、俺は無事合格。

正直なんじゃそりゃと思わないでもない。大体からして、意識が朦朧としていた時の単純思考で、『ため息をつかれたから切れた』で発揮した力が合格の決め手ってどうよ？あの時は、色々と頭のネジが吹っ飛んでいたから、もう一度やれといわれても無理。

なににせよ、俺はちゃんとした師匠……かどうかはともかくとして、独学から抜け出すことができたわけだ。いつまでもそれだと流石に限界があったから渡りに船だ。それで、お互い自己紹介したわけだが、なんとも個性的な連中だった。

「私は『聖女親衛隊』リーダー、チューダムだ。好きに呼べ」
つぶらな眼を持つダンディーボイスの白鼠。その迫力とカリスマはとどまることをしらない。

「私はモーターテイルです。主にレイアの護衛とリーダーの補佐をします」
冷静沈着な凜とした声の雌牛。人間でたとえると委員長というのがしっくりくる。

「・・・ティガーハウル・・・」

可愛い声の綺麗な毛並みをもつホワイトタイガー。でも、見た目はすごく怖い。

「クレイジーラビダ!! キヤスクヨブナヨ!!」

いかれた目つきの兎。赤い目が怖い。

「僕はスリザールだよ。君には色々と僕の手伝いをしてもらおうよ」
昨日追っかけてきた爽やかな大蛇。でも腹黒そうだ。何をさせるつもりだ?

「ノーブルホースですわ。以後よろしくしてやります、感謝しなさい」

高飛車な真紅の馬。第一印象、ツンデレ。

「メーブルレムだからな。忘れるなよ? 忘れるなよ?」

同じ事を二回言うもこもこ羊。その毛皮に顔を埋めてモフモフしたいと思ったのは秘密。

「おいらは斉天大聖孫悟空!!・・・に憧れてる、キーグランだぜ。おいらと一緒に遊ぼうぜ!!」

腕白そうな大猿。その巨体に反して、軽快かつ俊敏な動きをしながらの自己紹介。落ち着きがないともいう。

「イーグルハークよ。あの子に悪戯したのは許さないから」
鷹のような驚のような巨鳥。むき出しの殺気が肌寒い。

「ホワイトファングだ。まあ、頑張れ」
貫禄の凄まじい銀狼。何かを予期しているのか、頑張れの一言がすごく重かった。

「ブルークラスだよ。レイアちゃんに、ちょっかいかけたらぶっ飛ばすからね!!」

レイアの護衛の猪。その巨体に吹き飛ばされると、軽く星になれそうな気がする。

彼らがみんな俺の師匠になる。それぞれの分野を分担して鍛えてくれるそうだが、動物と人間って、武器も戦い方も違うよな? その辺は大丈夫なのだろうか? と思いきや、どうにかなるで返されてしまった。まあ、いいか。それはやってから考えることだ。

「さて、紹介が一通り終わったところで、早速はじめるぞ。ああ、もちろん合間には仕事もやってもらうからな。あと、全部終わるまでは寝かさんからな?」

どうやら、しばらくは地獄の日々が続きそうだ。

「大丈夫ですか、カズキさん?」

ベッドで死んでいた俺に声をかけるレイア。だが正直俺には返事を返す気力も無い。何ていうか、修行というよりは苦行だった。さっきまで朝だったはずなのに、今はもう真夜中だと思うくらい、時間が一瞬で過ぎ去った。

森での生活のおかげで少しは体力ついていたと思っていたが、そんなことはなかった。いや、文字通り少しだったんだろうな。今後、この修行に着いて行けるかわからん。一応、休憩はあるにはあったんだ。でも、それが罨だった。一度へたり込んだら、立ち上がる気力なんて消えうせる。だが、そんなことを許してくれる師匠達では

なかった。結局、疲れはピークに達し、こうしてベッドで垂れている。明日の筋肉痛が怖いぜ……。

いつもは、こういう暇な時間を利用して能力を研鑽するのだが、今日はそんな気にならない。

「疲れてますね……あ、そうだ」

レイアが何かを思いついたようだが、うつ伏せで眼を瞑っている俺は、意識の半分が夢の中なので考える能力が欠落している。というか、ところどころ意識が飛んでいる。

「よいしょっと」

何故か彼女にひっくり返された。そして、後頭部に感じる柔らかな感触。頭に置かれる冷たい手。髪の毛が梳かれるのが心地いい。ていうかこれって……膝枕!?

「何やってんですかあ、レイアさん!!」

疲れも忘れて叫んだ。が、体は意志に反して動かない。これは疲れているからなのであって、断じて後頭部の感触を楽しんでいるわけではない。ていうか疲れのせいで、スルーしてたけど何でこの子俺の部屋にいるの!?

「お婆ちゃんに、カズキにこうすれば元気になるっていわれたんです。あと、ここにいるのは昨日のお話の続きを聞きたかったからですが、疲れているようなのでまた今度にしますね」

先生なんてグッジョブ!!!……ではなくなんて事を教えているん

だ。こんな純粹無垢な子に。おかげで疲れが吹き飛んだ、ありがとう！でもなくて、萌えた・・・じゃない、ああ何をやっているんだ俺は！！

なんにしろ眠気なんて吹き飛んでしまった。

「あゝレイア。とりあえず、離してくれないかな？」

「え・・・？迷惑でしたか？」

何その涙目。なんか罪悪感がひしひしと湧き上がるんですが。というかその表情に萌えてしまった俺はもう末期だ。それは置いておいて、その表情は反則だと思う。

「ああ、やっぱりしばらくこのままで」

「はい！！」

嬉しそうに笑うレイア。この子の笑顔を見るだけで癒される。ただでさえ、レイアはとてつもなく綺麗な女の子なのだ。そんな彼女と二人きりの状況が心臓を活性化させる。爆音を鳴らす心音のせいで眠りに逃げれないし、女の子と二人きりの状況は正直耐えられない。だから、気を紛らわすために昨日のお話の続きをすることにした。

「レイアのおかげで疲れが飛んだから、希望通りに昨日の続きを話すよ」

「本当ですか！！」

笑顔に磨きがかかる。もう輝いていると錯覚したほどだ。その光はまぶしすぎるぜ・・・。

「昨日は確か麦わらの男が海上レストランで働くことになってしま

ったとこまで話したかな？」

「はい！！何でも海軍との戦いでレストランを少し壊してしまったんですよね」

「そう。じゃあ、今度はその次の話な。麦わらの男の仲間達が・・・」

そうして、二人だけの夜は更けていく……。扉の影にお婆さんが一人口元をにやりと歪めているのに気づかずに。そして、再び前と同じ状況に陥ると思ってもせずに・・・。

そして、結局疲れに勝てなかった上に、膝枕という状況に慣れてしまっ、話の途中で寝てしまい、朝起きたらレイアが拗ねていて、機嫌を直してもらうために苦勞することにも・・・

このときの俺は何も知らない。

修行とは自分が思っているより辛いもの 前編（前書き）

大分改訂しました

修行とは自分が思っているより辛いもの 前編

「さっさと起きろ、小僧」

俺の一日はその一言で始まる。ちなみにまだ日は昇っていない。時間をもったいないからという理由で、朝早く起きるのだ。

そして、毎日の修行という名の苦行によって疲れていて、なかなか起きない俺を起こしに来るのは、チューダムだ。

朝一番に目に入るのがつぶらな瞳のでかい鼠っていうのは、シュールな話である。ちなみに、彼は俺のことを小僧と呼ぶ。何度名前を呼べと講義しても、呼んでくれないので、もうこのままでいいかと最近思っている。

「んゝもうちょつと、もうちょつとだけでも・・・」

「早くしろ。足を齧り切るぞ？」

「すぐに起きさせてもらいます、sir」

この掛け合いはいつものことだ。とはいえ、以前は冗談抜きに齧られかけたので、トラウマの一つになっている。魔力がこれでもかというくらいに無駄に込められた前歯を、思いつき足に突き立てられそうになった時は、過去最高の反応で避けた。ベッドが見るも無残なゴミ屑になったのを見て、怒るよりも、良く避けたと自分を褒めた。

ちなみに、ベッドは錬金術で簡単に直せた。ぶっ壊れる前の姿を思い出しただけでいけたのだ。その勢いで武器とかを一から練成しようとしても、うまくいかなかった。出来たのは、へんてこりんな形状の棒だった。やっぱり錬金術の基本がなっていないからなんだろうな。そのせいで、俺という錬成陣の構成が出鱈目になるのだ。今まで一度も反動が起こらなかったの奇跡に等しい。

嫌な想像に体をブルツと震わせ、のろのろと起き上がり、着替え始める。修行が始まる前までは、レイアが俺を起こしにきていたのだが、チューダムの『こんな奴のために、レイア自らが時間を無駄にすることはありません』の一言で交代した。

さらに、レイアが俺のベッドに入ってくることはなくなった。呪文、『次入ってきたら物語の続きを話さない』が効いたようだ。

毎回、『寝ぼけハグ』↓『赤面硬化』して、思考停止してしまうとはいえ、個人的には残念ではある。俺だって男だからな。

レイアの捨てられた子犬のような眼にグラッと来たが、命には代えられない。魔力強化した前歯で死に掛けるのは、もうごめんだ。

ほかほかの朝飯を頬張りながらこれまでのことを振り返る。

俺の修行が始まって一ヶ月。ようやくこの生活にも慣れてきた。当初と見違えるほど俺の体は作られている。鍛錬と森の生活で、しなやかな筋肉と引き締まった体を手に入れた。

最初の頃は、皆に『もやし・・・』と言われていた。そんなことは分かっていたから気に留めなかったのだが、レイアと一緒に薪割りをしていた時に、笑顔で言われた『カズキさんて貧弱ですよ』の言葉に全俺が泣いた。あの子、隣で平気な顔してサクサク切っているんだぜ・・・。その時から、修行により力を入れようと思ったのは余談である。

さて、修行の話だが、簡単に言えば、チューダムと先生ことフィリスさんで分けられている。肉体の改造や戦い方など戦闘のいろははチューダムが担当し、魔法関連を先生が担当している。他の親衛隊は気が向いたときや、二人に要請されたときに現れる。基本的に修

行はチューダムと先生の二人で回っているのだ。

「いいか、カズキ。戦いというのは、いわば駆け引きだ。自分の持てる手札を性格に把握し、切り札を確実に決めるための道筋を考えなければならぬ。たとえば、最高位の魔法を持っていたとしても、当たらなかったり、そもそも出させてもらえなければ、宝の持ち腐れになる。そのために、戦術と戦略は大事だ」

「ふあい」

切り株の上に立つ、つぶらな瞳の鼠、チューダムが教鞭をとっている。

この時間は、チューダムによる戦術・戦略講座。まだ、朝も早い時間で、日々の修行に疲れている俺は睡魔に陥落されそうになってる。そのため、返事が腑抜けたものになっているのは仕方がない。

「では、まずこの展開における云々……」

絶え間なく襲いくる睡魔から、必死に船をこぎ逃げ切ろうとする。だが、ついに睡魔の持つ三叉の槍の先端が止めを刺すべく俺を貫かんと……

バsshアアアアアン

かなり冷えた水を頭からぶっかけられ、俺の頭は覚醒した。てか、今俺考えてた？？

「眼が覚めたか、ノータリン？」

「イエッサー」

へくち、とくしゃみをしつつ俺はチューダムに応える。少々、体が冷えた。

「ふん、すぐに服を乾かせ。貴様の使う・・・念威魔法だったか？その練習にもなるだろう」

講義中に眠られたのがよほど腹に据えているのか、目が据わっている。こういうときのチューダムには逆らわないほうがいい。何を言っても水が返って来る。俺は言われたとおりに服を乾かすことにした。

「弾けろ」

――パシヤツ

俺の言葉に反応して、付着していた水分が一気に流れ落ちた。結果、服は少し湿っている程度になった。まあ、まだそこまで慣れていないから、こんなもんなかな。

念威魔法。ネギまの魔法、いわゆる精霊魔法が精霊を通しての間接的な魔法なら、こちらは直接的な魔法だ。世界の法則に魔力で穴を開け、そこにイメージを叩きつけることで現象を起こす。イメージによって、得られる効果が上下するが、使い勝手のいい魔法だ。この魔法はイメージ次第で何でも出来る上に魔力の消費が一定である。つまり、俺の少ない魔力でも、使いようによっては大きな効果を生み出すのである。さらに、展開スピードが、精霊魔法に比べて桁違いであるので、戦いでは有利だ。もちろん、欠点もあるが。

この魔法では、特に呪文を唱える必要はないのだが、イメージが重要なので、言葉にすることで、イメージの補佐をさせている。実際にこれをするのではないとは、威力に差が出たのだ。いわゆる言霊

思想というやつだ。

本当は先生のもとで精霊魔法に重点を置くはずだったのだが、あることがきっかけに出会ってしまった念威魔法に重点を置くことにしたのだ。まあ、そのあたりの事情は機会があれば語ることにしよう。

「そういうところだけは無駄に器用になりおって・・・」

「日々の成果といってもらおうか」

当初は、半分も落ちず、何回もやってようやく今のレベルまで乾かした。毎日修行の後に、瞑想するのが聞いたかな？ 9割方そのまま夢に向かって旅立っちゃうけど。

「とはいえ、眠ってしまうような教え方をする私も悪かったな」

お？ 今日はいつになく殊勝な態度をとるな。

「だから、眠くならないような、いや、眠ってしまったても大丈夫な形式をとってやる」

「え？」

突如水で出来た糸が体に絡みつき、動けなくなった。

チューダムを筆頭とした聖女親衛隊には、それぞれ特殊な固有能力がある。何でもレイアに治療してもらったら、発現したのだとか。

彼の固有能力は、東方風に言えば、水を操る程度の能力だ。至極単純な能力で、単純であるがゆえに広く応用が利き、鼠としての狡猾な頭脳と合わされば、一気に凶悪な能力へと変貌する。また、状態

変化も可能である。

って、解説している場合じゃないね。

「ちょっ!？チューダム、少し落ち着こう。な？」

周囲の空間が歪むような彼の迫力に晒され、脳裏に浮かぶは『絶賛大ピンチ』の六文字。

「私は十分落ち着いている。何、抗議の内容を、体に叩き込んでやるから、寝ても大丈夫だ。さて、敵を捕らえた今この時にこそ、自身の持つてゐる最高の技を叩き込めばいい」

「ちよっと待った!それは寝たんじゃなくて——」

気絶したっていうんだよ!! その叫び声は、迫りくる水の激流にかき消された。

「おい、チューダム。そろそろ時間だ・・・って、またか。いい加減こいつも慣れるということをしてないな」

「全くだ」

人の惨状を軽く流されて引きずられていった。水だけに・・・。

初っ端からいきなりトラブルが発生したが、鍛錬が始まった。

最初はウォームアップのためにジョギングから始まる。朝の爽やか

な空気を吸い、森の目覚めを感じながら走る。程よく温まった体はこれからの始まる運動に最適な温度となる・・・少し言葉を変えるだけでなんと素敵に聞こえることか。当然の話だが、現実とは全然違う。

実際は・・・

「イヤああああああああああああああああ！食くべくらくれくろうろうろうろう！！」

「もっと早く逃げなければ、追いつかれるぞ？」

「人間きの悪いことをいうな。貴様のまずそうな肉などこちらから願い下げだ」

「だったら追いかけてくるなよおおおおおおお！！もう嫌だあ！お家帰るう！！」

背後から迫るホワイトフアングから逃げる命がけの鬼ごっこだ。ウォームアップどころの話ではない。森での全力疾走によって、足場の悪さやら障害物の多さなどのおかげで、足腰が鍛えていくのだ。追いつかれたら、あの鋭い牙でガブリと噛まれてしまうので、命懸けで走らなければならないのだ・・・何処とは言えんが。

一言だけ言いたい。

———逃げ切れるわけねえだろ！？

大体、俺の身体能力は多少マシになったとはいえ、未だレイアにさえ劣る。いや、先生以下かもしれない。更に言うと、修行では、魔力の強化や一切の能力が禁止されている。つまり、素の自分の身体能力だけで逃げ切れないといけないのだ。理由が、能力に頼らない心構えを養うためだとか、何らかの補正は鍛錬において非効率だとか色々言われた。

生身の俺が手加減してくれているとはいえ、あの巨大狼から、どう逃げ切れと？ただでさえ、動物の性能は人間のそれと比べて段違いなんだぞ！？それがあんな巨大な生物なら尚更だ！！

牙を剥き、輝ける銀毛をなびかせ、俺を生き生きと追いかけて来る姿は、果てしなく怖い。漫画とかだったらコミカルで笑える光景でも、現実ではホラーでしかないのだ。想像してみてください。後ろから気配が無くなったと思ったら、突然真横から飛び掛ってくる現実を。恐慌を起こしても仕方ないと思うんだ。

生存本能に従って、ただひたすら逃げる。今の俺の顔はよだれやら涙やらで人様にお見せできる有様ではない。

「ふん、昨日よりは伸びたか。が、まだまだだな」

「あんぎゃああああああああああああああああ！！！！」

結局、噛まれたよ。……どことは言えんけど。毎回同じところを噛むのは残酷だと思う。頼むから、これ以上割らないでくれ。

「ぜえ……ぜえ……少し休憩を……」

「口が動くなら、まだいけるはずだ。というわけで。休憩はなしだ。このまま次のメニューへと移るぞ。時間を見失うには出来ないからな。」

何と言う鬼畜……。この惨状を無視するなんて、あんたは人間じゃないやねえ！！

「私は鼠だ」

ですよねー

何度もかまれ、その部分は青紫色に変色してしまっただけで見るに耐えないというのに、そんなことはどうでもいいとばかりに、すぐさま次に移ったチューダムであった。

「ふぬおおおおおおおおおおおおおおおお」

「静かに来んのか」

簡単に言えば、やっていることは空気椅子だ。それ単体だけでも、俺には辛いというのに、今の格好が辛さを二倍にも三倍にもしている。なんと、水のたっぷり入った桶を太腿と両手に装備しているのだ。太腿に落ちないように固定し、腰を落とし、手に持った桶は腕を上げて水平に持つ。水の自重によって、苦行を強いられている俺。

「いや、でも毎度思うけどこれ絶対指がちぎれるって！！」

「大丈夫だ。毎日そう言って、まだちぎれたことがないだろ。だからこれからも大丈夫だ」

「そんな保証どこにもでしょうがああああああああああああ！！」

「大丈夫だ」

それに、指だけではない。全身がプルプル震える。だが、ここで一瞬でも力を抜いてしまったら、お終いだ。お尻の真下に突き刺さっている杭。丁度尾てい骨を打つように計算して打たれているため、一瞬たりとも気が抜けない。更に二の腕に括りつけられている小さな刃。腕が下がれば脇に刺さってしまうのだ！ほとんど拷問の域に入っているのか！？

「この人でなしイイイイイイイイイイイイ！！」

「私は鼠だ」

「ですよね ええええええええええええええええええええええええ——」

「！！！」

最初の休憩を挟み、軽い傷を負った箇所には、サツと先生謹製の良く効く傷薬を塗った後、木の枝に両足を括り付けられ、その下で焚き火を設置された。熱さから逃げるために腹筋背筋をしなければならぬ。少しでも休めば、腹筋すれば背中が、背筋すればお腹が焼けるのである。

「ほれほれ、きりきり動かないところがいとおしく焼けるぞ!!
ほれほれほれ!!!」

「いやああああああああああああああああ！！！！！！人殺し」

「自然界において殺しは罪にならないのだ！」

今の状況は自然界云々言えるような光景じゃねえだろ!?

焼けるスルメのように踊った後、チューダムに呼ばれたキーグランに足を持たれ、勢い良く押される。こうすることで、腕の筋肉を鍛えるのだ。チューダム曰く、『人間は足で歩くから、足の筋肉のほ
うが強いのだ。だったら手で歩けば足並みに鍛えられるだろう』と
のこと。

「ウキキキ!! カズキ、すこしペース上げるよ!!」

「ふはははははは！もつとだあ、もつと腕をうごかせえええええ
！！」

[illegible][illegible]

若干トラウマになりつつある鍛錬を終えたころには、太陽が大分昇っていた。とはいってもまだ真昼には及ばない。元の世界の感覚でいうと十時くらいだろうか。もう、時間なんて気にしてないなあ・・。前はあるなに気にしてたのに。

「これは鬼畜過ぎる！」

「文句言ってる暇があったら、避ける」

チューダムが作り出した水球を避ける訓練だ。

見切りと度胸を養うための特訓。見切りはいわゆる第六感を伸ばすことも含まれている。度胸は、武器などに晒されても怯まないためのものだ。

そのために、水球はただの水球ではない。少しでもかすったら挟れるように、螺旋○張りにラン回転しているので、死ぬ気で避けないと大怪我する仕様になっていた。俺が手を抜かないようにという意味合いもあるらしい。くそ！！螺旋○のことを話したのは誰だ！！って俺か！！

水球の大きさは野球ボールくらいで、俺を中心に半径30メートルの半球上に大量に配備している。そして、チューダムの気分で適当にこちらに射出するのだ。全部一遍に来ることはないが、下手を打って、避け損ねたりしたら、本当に死ぬので、死ぬ気で避けている。だから、無様に転げまわったり、傍から見れば変な踊りみたいに見えるたり、なりふり構ってなんかられないのだ。

かっこいい身のこなし？はっ、そんなものをつくの昔に肥溜めに棄てたわぁ！！！！

当たらなければよからうなのだよ！当たらなければなぁ！！

「何度も言うけど、これ絶対無理だから！！」

「無理じゃない。やれば出来る、ほら次行くぞ」

「ほえ？ぎゃああああああああああああ！！」

時速150キロぐらいという脅威の速さで、しかも時間差で飛来してくる水球を、最近とみに上達した身のこなしで、避け続ける。だが、最後の一個が肩をチツかすめた。肩の肉が挟れているなんてことは、運よく無かった。皮一枚で済んだ。しかし、逆にそれが余計に恐怖を引き立てる。

「今かすったぞ!？」

「もたついているからだ」

「そうは言っても能力なしでこれっとうお、きついいいいいいいいいい、んだけどううおおおおおおおおお!?!？」

「ふむ、若干余裕があるな。テンポアップするか」

「ちょ?!」

その言葉と共に、飛来してくる量が徐々に増えてきた。スピードも上がっている。

「マジ勘弁し……ひよおおおおお、はあああああ、ひいいいい!?!」

俺は、必死に、命がけで、一生懸命、泥に塗れながら、避けていった。そして遂に全ての弾を避けきり、その場で大の字で寝転がった。起き上がる気力はもうない。

だが、そこで許してくれるほどチューダムは甘くなかった。

「次は俺の攻撃を捌いていけ。能力は使うなよ？」

「もうやめて!俺のライフはもうゼロよ!?!」

「それだけ、吼えられれば十分だ。ほら、逝くぞ!?!」

「字が違……いやあってる!?!? じゃない、ぎゃあああああああああああああ!?!?!」

猛然と襲いくるチューダムのラッシュを、必死に避けたり、捌いたり、いなしたり、攻撃の合間に混ぜてくる乱回転する水球に涙目になって、その日の鍛錬は終了した。その頃にはただ、真っ白な姿で荒い息を吐くだけの存在へと成り果てていたのだった。

修行とは自分が思っているより辛いもの 後編（前書き）

ものすごく改訂しました。

修行とは自分が思っているより辛いもの 後編

「大丈夫ですか、カズキさん？」

「もうダメポ・・・」

テーブルで垂れながら、返事をした。ふひひ、燃え尽きたぜ、真っ白に・・・。

だが、実はこれでも、以前と比べて随分とマシになった。前は、森を駆け巡る時点でぶっ倒れていた。当然だ。こちらと一般人の体力の持ち主だ。そんな奴がいきなり森を全速力で駆ければ、結果は自ずと分かるだろう？

それが、今ではメニューを最後までこなせるのだから、俺も成長したもんだ。まだ一ヶ月しか経ってないと考えると、凄くね？

「ほら、さつさと食いな。じゃないと午後を乗り切れないよ」

「ういーっす・・・」

先生に言われ、さながらゾンビのように返事を返す。いくら、地力はついたとはいえ、未だ修行後に体にモノを受け入れることを良しとしない。モシヤモシヤとゆっくり食べても、胃が拒絶する。それでも意地で食べ続けた。今は休憩の時間だから、この時間に体を休めないと後半が辛いからな。・・・今度、体力を回復させる魔法薬でも研究してみようかな。ポーシヨンとかさ。

「今日は樹の御爺さんに呼ばれていますので、後はよろしくお願いしますね」

「ああ、洗い物はカズキに任せて行っというで」

昼飯を食べ終わると同時に、レイアが席を立った。って、俺がやるんかい。まあ、それくらいならやるが、正直疲れてやる気が出ない。だが、そんなどうでもいいことよりも気になる言葉が聞こえてきた。

「先生。樹の御爺さんって誰ですか？」

この森に人間は俺たちしかないはずだが。

「人間ではないよ。この森の最奥にある湖の中央に生えた巨大な樹のことさ。私には分らないけど、あの子にはその樹からはっきりとした意志を感じているようだ。話によると、随分愉快な性格らしくてね。しかし、呼ばれている、ねえ・・・」

先生はなにやら考え込んでいるようだが、俺は別のことで頭がいっぱいだった。その湖ってもしかして、俺達が初めて会ったあの・・・

「・・・お前さん、何鼻の下をのばしてるんだい？」

「はっ！！いや、これはその・・・そ、それよりレイアはそんな場所一人で大丈夫なんですか？」

場所の記憶と一緒にあの時の記憶まで復活してしまった。具体的に言うとなレイアの・・・い、遺憾（誤字にあらず）、口が自然と吊り上ってしまう！

冷たい視線をこちらに向ける先生を誤魔化すために話題を変えた。実際に心配だということもあったけどね。

この森は奥に行けば行くほど動物達は強くなる。そして、目的の場所是最も深い場所。

「問題ないさね。いつも森の動物達が護衛してくれているからね」

ギャアギャア

フシャアアアア

キシャアアアア

グルル

・
・
・
・
・

森の外で、護衛の親衛隊だけではない、元の世界で言うレイアフア
ンクラブが、勇ましく鳴く。なるほど、アレなら余程の間抜けでな
い限り襲い掛かる奴はいないだろう。どこの遠征だ。

「ふん、あたしがいるんだ。レイアには傷一つ負わせないよ」

「では、行ってきます」

巨大猪であるブルークラスが鼻を鳴らし、レイアは彼女の背に乗っ
て、森に突貫して行った。・・・途中の木々をなぎ払っているけど
いいのか？しかし、何故だろう、レイアが野生児に見えてしまう・
・。

「レイアは世界に愛されておるからねえ。お前さんが心配するよう
なことは何一つないさね。それより、さっさと食って食器を洗いな」

これ以上のスピードで食べたら吐く自信があります。

「精霊魔法というのはその名の通り、精霊に代行してもらって発動する現象だ。つまり、あたしたち人間が実際に現象起こしているわけではないということをお忘れちゃいけないよ」

ふんふんと頷いき、メモをとる。今は先生による魔法学だ。魔法、魔法薬、錬金術、結界術、封印術など、様々な分野に分けられ、先生の気分で変わる。今日は、精霊魔法についてだ。

この時間はまじで辛い。午前の修行によって体が眠りを欲しているのに、寝れない。

以前、そんなことをしたら、氷の槍が降ってきた。顔面すれすれのところに。そして、笑顔でこう言った。

『あたしの講義を寝て聞くなんて、大した度胸だね?・・・少し、目を覚まそうか?』

人間の一番怖い表情って笑顔って、知ってた?もう、笑顔恐怖症になりかけるくらい怖かった。某白い悪魔の恐怖が理解できた。あれは怖い。よい子の皆は、老婆の持つ迫力を侮ってはいけないよ?特に、長年生きてきた経験から来る貫禄が合わさった笑顔というものを・・・。

余談だが、この時罰として顔以外を氷付けにされ、そのままの状態ですべてを凍かされた。凍傷になる前に、解凍してくれて本当に良かった。神界にいるであろうスーさんに感謝したくらいだ。解放された後の震えは、きつと冷えたからだけではなかったと思う。

「極端に言えば、もし精霊のいない空間があるとしたら、そこでは使えないというわけだ。まあ、精霊は何処にでもいるから、そう

いう事態は考える必要はないがね」

へえ、じゃあ何らかの方法で『精霊がない空間』とやらを作れば、魔法使いの力の大半を封じれるわけか。今の主流は精霊魔法だし。あれ、でも・・・

「先生。確か精霊を召喚する魔法ってありましたよね。あれを使えばそこでも精霊魔法を使えるんじゃないですか？」

『パンがないならお菓子を食えばいいじゃない』的なノリで、精霊がないなら呼べばいいと思うんだが。

「いい質問だ。確かに、そういった魔法は存在するが、結論を言うと不可能だ。そもそも、アレも周囲の精霊に頼んで呼んできてもらっているんだよ。いわば、友達が友達を誘うようなもんだ。例外は、自身と契約した精霊ぐらいかね」

なるほど。精霊召喚も精霊魔法に含まれるというわけだ。契約できる精霊は、中級からだ。ここ、テストに出るから要注意。

「お前さんは念威魔法に重点を置くようだから、関係ない話だったかもしれないが、知識というのは、知っておけばそれだけで力になる」

いつものように締めくくって、今日の講義の終わりを告げた。

「ゲホゲホッ!？」

直後、苦しそうに咳をする先生。本当に苦しそうなので、背中をさすってあげた。

「か、風邪ですか？」

「まあ、似たようなもんさね。私ももう年だからね」

『薬を飲んで、ゆっくり休むよ』と言って、自分の部屋に入っていた。大丈夫かな？

「ノーブルホースにあんたを見てもらうよう頼んでおくからね」

場所は移り変わって、森の中にある岩場。

いつもであれば、講義の後は先生監督の魔力制御が行うはずであった。俺も漫画や小説などの知識をもとにやっているが、魔法のあるこの世界にも当然そういったものは存在する。それは実際の経験から来るものであり、俺のなんちゃってよりと違い、明確な裏づけがある。

瞑想は鉄板であり、他にも魔力そのものをつかって物を浮かべたり、体内に先生の指示に従って魔力を流していったりなどした。四五行と似たようなことだっただけしている。

先生の口癖は『魔力コントロールを完璧にせい』だ。

曰く、半人前にも満たないお前が一端に魔法だなんだと言う前に、当たり前のことをしろと。

なるほど、当然のことだとすんなり胸に入ってきた。ただでさえ少ない魔力。どうせたいした魔法も使えない俺が、その程度のことすらも出来ないというのは如何なものか。後世までお笑い種として語り継がれてしまうかもしれない。ならば、胸を張って極めたと言えるようになるまで鍛えるしかあるめえ、そう思ったのだが。

「さあ！念威魔法を練習しますわよ！」

この炎のように真っ赤な毛並みの馬は、来て早々、真逆のことをのたまったのだった。

炎の固有能力だけでなく、火炎系統の精霊魔法も扱える不思議馬、ノーブルホース。

「いや、お前・・・」

「何か文句でも？」

文句も何も先生の方針と全然ちゃうやん。

「フィリスの言っていることも確かに一理ありますわ。精霊魔法にしろ、念威魔法にしろ、魔法を扱うものにとって、魔力コントロールこそが基本にして奥義。自身の魔力さえも存分に扱えない輩に、魔法を使う資格はありませんわ」

そこまで言うのか。いや、だったら何でいきなりの実践？

「魔力コントロールが完璧であっても、魔法そのものが使えなかったら意味がありませんわ。それに、あなたの場合もう一つ大切なことがあるでしょう？」

「？」

「イメージですわ」

彼女のいわんとしていることが分かった。ある程度精霊任せになる精霊魔法とは違い、念威魔法は術者のイメージによって成り立っている。だが、人間の想像力というのは、自分が思っているよりもずっと乏しいのだ。

「だけど、そのための修行だってしてるけど？」

そういった修行の例を挙げると、一つにりんごを使うものがある。触ったときの感触、嗅いだときの匂い、舐めたり齧ったりした時の音や味、内外を観察した時の見た目・・・りんご一つから出来るだけ得た情報を何度も頭の中で繰り返し思い浮かべたり、何回も地面に絵を描いたり、詳細を記したりするのだ。それが想像力アップに繋がっているのである。

「そんなこと知っていますわよ。まあ、うだうだ言うよりはやってみれば分かりますわ。それに、フィリスには許可を貰っています。次のステップに進むには頃合ですって」

だったらいいや。結局、今一何を伝えたかったのか分からなかったが、やれば分かるというのでやってみることにする。

「とりあえず、火の玉を作りなさい」

「分かった」

何度も言うようだが、俺は精霊魔法ではなく、念威魔法に重点を置いている。その理由は以前述べたとおりだ。

この念威魔法なのだが、実は使い手はほとんどいない。というか、下手すればもう俺だけという可能性が限りなく百パーセントに近いそう。理由は、適正が必要だからだ。

以前、魔力で世界の法則に穴を開けると軽く言ったが、実際は危険な行為である。というのも、それは世界に喧嘩を売るような行為なので、繋がった魔力を伝って、肉体を破壊しようと反撃されるのだ。どんなに強靱な肉体を持っていようと、耐えられるのは適正がある者のみ。

しかし、その適正を持つ者は、年月と共に減少していき、世間に精霊魔法が広まったので、念威魔法の存在はほとんど忘れ去られてしまった。

だが、俺はほんのささいな偶然でその存在をしり、そして適正があった。だから、俺はこれに手をつけた。想像を現実を持ち込めるなら、精霊魔法では出来ないことを色々とやってみたいことからだ。後、ほとんどの人が使えなくて、俺だけが使えるというのは凄く響きが・・・ゲフンツゲフンツ。貴重な文明の財産をみすみす失うのは、大罪だと思うんだ（キリッ

そんなわけで、ノーブルホースの指示に従い、火の玉を具現化したのだが・・・。

「……なんですよ、それ？」

「……カズキ、それはないとオイラ思う」

「……すぴ」

注文どおりの念威魔法を発動させることを今やっているのだが、ノーブルホースに冷めた目を向けられ、暇なのか、いつの間にか来ていたキーグランから心底呆れられた。そんな目で俺を見ないでくれ。後、メーブルレムは寝るな。ていうか、注文どおりちゃん作つたのに、何がいけなかったんだろうか？

「何って、火の玉だけど」

指示に従つたのだから、文句など無いはずだ。何が不満だというのか。それともあれか？ 姑が『味噌汁が熱すぎるわあ！！』と理不尽なことで嫁に八つ当たりするようなものか？

「ええ……そうですわね……確かに火の玉ですわ……でも……」

「

ノーブルホースの声が低くなり、体から火が噴き出す。

「私が言ったのは、火のみで構成された玉であつて、一丸めた紙に火をつけたモノ《……》じゃありませんわ！！」

そして、爆発するように、噴出した！！それは収束し馬の形を取り、襲い掛かってきた。

「あっちいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

」

正座していた俺は避ける間も無く、焦がされた。

「全く、あなたはこんな簡単なことも出来ないんですの!?!それとも、私を馬鹿にしているのですか!?!?!?」

「いや、至って真面目に・・・」

「尚更ダメですわ!もう一度やり直しなさい!」

「ええ?」

「燃やしますわよ!」

そんなこといわれてもなあ・・・。

「ノーブルホース」

「なんですの!?!?」

凄く怒っている。もう一度、能力である火を放たんとせん勢いだ。

「何で、出来てるのにもう一度作らないといかんのだ」

「は?」

意外な言葉に勢いを殺されたのか、炎がしゅるしゅると収まり、間拔けな声を発した。

「だから、出来てるんだって。ほれ」

思考停止に陥っているノーブルホースに、右手を見せ付けた。そこには、火を圧縮して出来た、火の玉が浮かんでいた。改善点は多々見られるが、ちゃんと火のみで出来た火の玉だ。

「これで文句無いだろ?」

「・・・・・・いつ？」

「いや、最初から」

俺はちゃんと真面目に作っていたのだ。紙に火をつけただけのを参考にして。もう一度いうが、想像というのは意外に難しいことで、鮮明に思い浮かべているつもりでも、実際は・・・・なんてザラだ。

だから、『現実には反映したらこんな感じかな』な現物を見つつ、想像で補正して顕現させたのに・・・・って

「もしかして、気付いてなかったのか？」

「・・・・・・ももちろん気付いていましたわよ!？」

「でもさっき『ただ火をつけたもの』って・・・・」

「あ、あなたの空耳ですわ!!」

「いや、でも・・・・」

「空耳ですわ!!」

「いや」

「空耳!!」

どうあっても、自分の非を認めるつもりは無いようだ。

「まあ、ここは俺が大人になって・・・・」

「私が子供と言いたいんですの!!」

「ぬおあ!?!いきなり焼こうとすんな!!」

「問答無用!!」

「ぎゃああああああああああああああああああ!!
!!!!!!」

理不尽にも燃やされました。それはもうコンガリと・・・・。

「カズキはよくあれで生きていられるなあ・・・」

「全くだ、全くだ」

おい、猿と羊！？そんな事を言ってる暇があったら助けるとかしてくれよ！

「カズキ、いつまでも寝てないで次をやりますわよ！！」

お前は鬼か！？

その後もノーブルホースの指示通りの現象を引き起こしていった。数メートル離れている俺くらいの大きい岩に向かって、火の塊をぶつけていく。何度も何度も。そして、単純作業にならないよう、彼女はタイミングを見計らって別の指示を出す。例を挙げると

『青い火をぶつけろ』

『雷を放て』

『水で岩を傷つけろ』

などと様々だ。

矢継ぎ早に繰り出される指示に従ううちに、今度こそ彼女の言いたいことが、なんとなく分かった。

正確なイメージと魔力の精密操作、その二つを両立させることの難しいこと、

難しいこと。イメージをより明確なものにさせると魔力コントロール

ルが疎かになり、無駄が多くなる。逆に後者を丁寧にするとイメージが曖昧になり、威力に影響が出る。

勿論時間をかければ出来る。だが、そんなのは論外だ。念威魔法のメリットは魔力一定と展開速度。その片方が潰れてしまう様では本末転倒もいいところである。

「分かったようですわね」

「ああ、それに今後の課題も見えてきた」

今後の課題は、完全なる想像力と完璧なる魔力操作の両立だ。その道のりは遠い。

「では、続けますわよ。こんなものは慣れです。何度も練習あるのみですわ。次はそうですわね・・・」

その後、魔力を使い果たし、その場から一步も動けなくなった俺は、キーグランにお姫様抱っこで家まで運ばれてしまったという事実から逃げるように、部屋に閉じこもってしまった。

先生の生暖かい目が忘れられない・・・。

ある日、森の中で熊さんに出会った（前書き）

加筆修正しました。

ある日、森の中で熊さんに出会った

この世界に来てから半年の月日が経った。

俺はそれなりに強くなったと思う。最近では、余裕をもって修行を終えることが出来るので、余った時間に色々している。

例えば、この世界の錬金術。この世界の錬金術は神秘の側面が強い。材料を混ぜ合わせ、常識に当てはまらない効果をもつ道具を生み出す。俺の錬金術は曲がりなりにも科学の分野だから、得られる効果は基本的に物理法則に則っている。その違いが面白い。

今は家の近くで見つけた岩の上で、『燃』の四大行をしている。アンサートーカーを自分のものにさせるためだ。俺が貰った能力の中で、これだけが任意に発動できない。

『点』で成し遂げたい思いを一点に集中

『舌』で実際に『アンサートーカーを使いこなす』と口に出す

『錬』で意志を増幅

『発』でアンサートーカーを発動。

これをする事によって、頭痛はするものの、十回に一度は発動に成功している。今回は駄目だったが、いつか使いこなせるようになるかもしれないのだ。ああ、偉大なる富○先生。

任意でオンとオフが切り替えられるようになるまで、続ける。ものがものだから、使いこなせる日がくるのが楽しみだ。

その時、背後から気配がした。この半年で慣れ親しんだ気配だ。

「どうした？ チューダム」

「そろそろ頃合だと思ってな」

真面目な表情でそう切り出した。はて、なんだろうか。

「我々がいるここは森の中心。森の入り口に近いほど森に住む生物は弱いものになる。日ごろの糧となっている動物をそこで狩っているのは理解しているな？」

何度も聞いた事だ。この森は尋常ではない魔力で満ち溢れている。それが、森の生態系に影響を与えている。どうも、奥に行くほど濃いらしく、それに比例するように獣も強くなっている。

だから、森の奥には許可があるまで、絶対に入るなって言われてきたのだが・・・

「お前には今回から一ヶ月間、ここから更に奥の森に入ってもらおう」

ああ、ついにサバイバルが始まるのか。すっかり忘れていた。

「先に言っておくが、森の奥に住むのは全て化け物だ。入り口の方でもたまに見かけることがあったな？ 常に気を張らなければ、一瞬でやられるぞ」

マジか。

「それと、クレイジーラビとティガーハウルも一緒に行く。ただし、それはお前のためではなく、むしろお前を襲うためだ。奴らは好きなタイミングでお前を襲いに行く。せいぜい気をつけろ」

マジか・・・ってなんで!!?」

「色んな状況に対応するのとお前の能力を鍛えるためだ。とはいえ、優先事項は生き残ることだ。間違えるなよ?」

この瞬間、地獄のサバイバルが幕を開けた。

Side チューダム

「少し早すぎないかね?」

「問題ない。あいつ自身も最近地力もついてきているし、魔法と能力をうまく使えば生き残れるくらいの實力はあるはずだ」

事実、ここ最近のあいつの伸びは大きい。

「だが、持っている力に対して心が弱い。スリザールの報告では、あいつはまだ命を奪う事に慣れていない」

普通の動物を殺すことにさえ、未だに慣れていないのだ。本人は慣れた気でいるようだが、無意識で躊躇している。それだけ、平和な世界に身をおいていたのだろう。しかし、この世界、特にここでは一切の甘えは許されない。

自然界では弱肉強食が唯一絶対の真理だ。

今まではあいつより弱かったから、それでも倒していけたが、森の

奥ではそうはいかない。一瞬の隙が命取りになる。純粹な力比べと狡猾な騙し合いの世界。やらなければ、やられる世界。

「あいつには、無理やりにも覚悟を決めてもらわなければならぬ
い」

命を奪うことに。これから先、結界に護られているとはいえ、人間がここまで入ってこないという保障はどこにもない。その時、場合によっては、カズキは命を奪うことがあるかもしれない。同属の命を。

ならば、今のうちに腹を括らせるべきなのだ。この子を守るということはそういうことなのだ。

「そうだね……。優しいというよりは、甘さが目立つほうだしね」
「カズキさんは大丈夫でしょうか？」

我らの主が心配そうに顔をゆがめている。だが、その心配はしなくても大丈夫だろう。

「大丈夫ですよ、あれでも、私たちの弟子です。それに——」

——あなた聖女の祈りもあるのだから

S i d e o u t

さて、奥の森にやってきて早々、スリザールとの狩りの経験を生か

してすぐに食料を確保したわけだが、正直他にやることがない。仕方が無いから、岩の上で『念』の四五行や応用技をしている。

ちなみに、微々たるものだが、これのおかげで潜在魔力が増えたと気付いた時は、偉大なる富○先生に感謝した。変化が凄く緩やかなものだったから、気付いたのは最近だけ。

先生は、『ありえない』と言って珍獣を見るような目で見てきたが。魔力の総量は生まれたときから決まっており、これを潜在魔力という。どんな存在も外に放出できる魔力・・・顕在魔力を増やすことは出来ても、潜在魔力はどうにもならない。そこに俺という例外が出たのだから、その驚きは凄まじいものだろう。

先生に向かって、『ありえないなんてことはありえない』と返せたときは普通に快感だった。あの言葉いいよね！！まあ単純に体質の問題だけと思うけど。ほら、スーさんの用意したこの肉体に限界は無いらしいし。だから、潜在魔力を増やせるのは俺だけだ。ふははは！！羨ましかろう？

などと馬鹿なことを考えていたら、目の前の茂みが揺れた。何事かと警戒し、即座に身構えた。しばらくすると、一匹の兎が飛び出した。大きさは普通だ。ただの兎か？拍子抜けした俺は警戒を解き、胡坐をかいた。兎はそのままこちらへ駆け寄り、俺の膝の上にちょこんと乗った。何これ、可愛い。

「おー。かわいいなあ、お前」

どこかで見たことある気がしたが、気のせいだろう。俺は、その可愛さに俺はメロメロになった。プリチーな眼、雪のように白い体、ふわふわな毛、その全てが俺を虜にする。

だから、それに気づいたのは偶然だった。地面に影が映ったのだ。たくさんの影が……。咄嗟に振り返ると、そこには大量の兎がこちらに降り注いでいた。びっしり鋭い牙が生えている口を開けて！！

「いつっ!?!」

足に痛みが走る。見ると、先ほどの兎が喰らいいついているではないか。だが、傷は浅い。俺は腰につけていた短刀を抜き、その場を離れた。そして、短刀を足に喰らい付いている兎に突き刺す。しかし、あっさりと逃げられ、一ツ跳びで仲間の下へと戻られた。結構距離が離れていたのに見た目に反してすごい脚力だ。

どうやら、さっきのは囧だったようだ。下に意識を集中してる間に、本命がガブリってか？笑えねえ。

俺は短刀を構え、相手の出方を窺う。ウサギたちもこちらの様子を見ているようだ。緊迫した空気が走る。先に動き出したのは兎だった。別々の方向から縦横無尽に襲い掛かってくる兎。その脚力から発揮される高速移動、そして連携によって小さな傷が徐々に増えていく。一匹一匹は大したことないが、これだけの数が集まれば厄介だ。しかも、逃げ道がない。

「逃げ道がないなら……」

俺は魔力を消費して、念威魔法を発動する。イメージするのは直線状に走る炎！！

「つくればいい。走れえ、炎!!」

顕現する炎の槍。その方向にいた兎は身軽な動きで避けるが、狙いはそこではない。ガンダールヴの能力に魔力での身体強化を加え、開いた場所を一気に駆け抜ける。後ろを追いかけてくる気配を感じるが、俺は愚直に逃げていった。

威力はそこそこ増えてきたが、こいつらを殲滅できる程ではない。また、数が多いため物理攻撃による撃退は賢明ではない。なので、逃走を選択した。

兎の脚力を生かした攻撃を捌き、いなし、逸らしながら走り続ける。しばらくして、兎たちの気配が無くなった。どうやら、あきらめたらしい。俺は気を抜いて、噛まれた足の止血をする。一端休憩。

だが、背筋を走った悪寒がそうさせてくれなかった。全力で前方に跳んだ。次いで、響き渡る轟音と激しい振動。振り返り、次の攻撃に備える。

「で、でけえ……」

はたして、そこにいたのは巨大な熊だった。全長6メートルくらいの熊だ。左目はつぶれているが、無事な目からはギラギラした光が映る。全身から放たれる強者としての風格が俺を威圧する。

「あの時の……ッ!!」

以前遭遇した大熊だった。あちらも俺を覚えているのか、その目には凄まじい敵意が浮かんでいた。

全身から冷たい汗が吹き出る。見た瞬間分った。分かってしまった。

——こいつ、強い!!

あの時はわけがわからないまま逃げていた。だが、この森での生活によって鍛えられた今の俺は相手の実力を正確に読み取った。ここまで、近づかれるまで気付かなかったというのが、何よりの証拠だ。この巨体で気付くことが出来なかったのは大きな失態である。

視線をそらせばやられる。気を抜けばやられる。戦えばやられる。魔法は効果的なのがいまいち浮かばない。ナイフで相手取るのは命取り。

ならば、俺の取れる行動は、逃げの一手だけ。

だが、こいつから逃げ切れるのか？ いやそもそも、見逃がしてくれるのか？ あの時は所詮格下だと油断があった筈だ。だが今は？ そんな隙を与えてくれるほど甘い存在じゃないだろう。しかも相手は自身の左目を潰した憎い敵だ。見逃してくれると思うのは聊か樂觀が過ぎるだろう。

つまり、相対してしまったこの瞬間こそ、詰みの状態になってしまったのだ！

それでも、何とか逃げようと相手の出方を伺う。大熊は、こちらを嘲笑うように見下し、されど油断なく腕を振り上げる。

「グオオオオオッ！！」

「うお！？」

大熊が腕を振り下ろした。巨体に見合わぬ速さ。間一髪避けたが、俺がいた場所は大きく挟まれていた。あれが、当たっていたらと想像すると、ゾツとした。

ここで生き抜いてきたという絶対的な自信と相手を圧倒する殺気が肌にピリピリと触れる。

再び、大熊が動き出した。幸いなことに、速さは小回りの聞く俺のほうが少ないだけ上だ。

次々と繰り出される攻撃を紙一重で避け続ける。まるで、嵐のようだ。

かつて無い集中力でひたすら避け続けた。完全に避けきれず、徐々に傷が増えていっても、無心になって、ただただ足を動かした。

一撃を避ける度に、五感が研ぎ澄まされていくのが分かる。そして、気付いた。

口が我知らず吊り上っている事に。

一撃を貰えば一気に劣勢に陥るという状況であるというのに、俺はそのやり取りを楽しんでいるのだ。

格上の相手と渡りあうスリル。これは、ジェットコースターに乗っている時と似ている。誰しも、怖いと思いつながら、頭のどこかでそれを楽しんでいるという体験があるはずだ。

脳の活性化。アドレナリンの大量分泌。精神の高揚。何より――――

――今、俺は生きている

そんな実感が湧き上がる。

この極限の状況の中、それが影響を与えたのか。

アンサートーカーが発動した。

その毛皮に刃物は通らない。Dランク相当の宝具では傷一つ付かない化け物だ。

その爪は必殺。一撃でももらえば、よくて瀕死だろう。

その巨体に見合わぬ速さ。身体能力が上がった俺に勝らぬとも劣らぬ動きをする。

発動したアンサートーカーから次々に与えられる熊の情報。頭痛はさほどしない。無視してもいいレベルだ。日ごろの成果が出てきている。

「グオアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

熊が攻撃を仕掛けてきた。分かる。なぎ払うように振るわれる右と、そこから流れるようにつながらる左！！相手の攻撃の答えが分かる。どう避ければいいのか分かる。

避けながら俺は手を合わせる。そして、避けた先にあった大きな岩を練成して刀にする。アンサートーカーのおかげで綺麗に出来た。

ナイト・オブ・オーナー
騎士は徒手にて死せずを発動し宝具となったそれを構えた。

——やる!!

隙を見て逃げるつもりだった俺は、いつの間にか倒す気になっていた。いや、正確にはアンサートーカーによって、逃げるより戦ったほうがまだ生き残るという答えを得たからだ。意識を集中しろ。魔力を研ぎ澄ませ。飲まれるよりは飲み込め!!

今が修行の成果の見せ所だろうが!!

大熊は雰囲気の変わったことを感じ取ったのだろう。動きに慎重さが混じった。俺は切りかかった。それに応戦する大熊。一撃では相手のほうが圧倒的に上だが、スピードでは負けない。相手の後ろに回り翻弄しつつ、チャンスを窺う。見えない片目の死角に入り、常に相手に映らないように心がける。物理的な攻撃はこいつの毛皮がほとんど弾いてしまうが、ある場所を除いては話が別だ。

天井知らずにスピードがあがっていく俺に大熊はいらだっているようだ、止まらない。俺の攻撃はほとんどダメージになっていないが、挑発にはなっているようだ。大熊の動きが雑になってきた。

そして、ついにそのときが来た。

「グオンッ!？」

相手が地面に手を付いたのだ。俺に追いつかんとせんと体をひねり続けたのだ。その巨体で!! 足に負荷がかからないはずがない。所詮相手はケモノ。頭の足りない力自慢。自分の体を省みないのだ。

「このときを待っていた!!」

俺は足を痛めて動けないでいる大熊に突撃した。こいつの弱点。すなわち、毛皮の覆われていない口の中と目だ！！だが、俺の脚力ではまだ6メートルは跳べない。それ以前に、空中では叩き落される可能性の方が大きかった。だったら、こいつに膝をついてもらうしかない。

「オオオオオオオオオオッ！！」

力を一点に収束した、全身全霊の突きを放つ。これで、俺の勝ちだ！！

だが、ほんの一瞬、俺の中で迷いが生じた。命を奪うことに対する忌避感。相手の未来を奪う罪悪感。全てがスローモーションで動居中、確かに切っ先が止まってしまった。

それは、本当に一瞬の迷いだった。

だが、弱肉強食の世界を生き抜いてきた大熊にとってはその一瞬でよかった。

「しまった！？」

突きを避けられ、死に体となった俺の体に必殺の爪を刻み込んだ。咄嗟に、後ろに飛んで威力を殺したが、即死を免れただけで、重症を追った。血がとめどなく流れる。

・・・一瞬の隙が勝敗を分けた。膝が笑う。刀の支えが無ければ立ってられない。

大熊が鋭い爪を振りかぶり、こちらに振り下ろした。俺は何とか避けたが、倒れてしまった。未だに足の痛みが引いていないのか、四足歩行でこちらに向かってきた。その動きはゆったりとしたものだ。その間に俺は何とか立ち上がった。血を流しすぎたのか、ふらふらする。

渾身の力を振り絞り、間合いを詰めた。今度こそ迷わない！！

大熊も腕を振るってきた。今の俺では到底避けられない。だから、魔力を使って一気に加速した。後のことなど考えない捨て身の一撃だ。

「オラアアアアアアアアアアアアッ！！」

「グルアアアアアアアアアアアアアッ！！」

目標を見失った爪は空を切り、俺の刀は見事大熊の口の中から脳を貫いた！！いや、大熊の頭が弾けとんだ。曲りなりにも宝具である刀の一撃を口内で受けたんだ。こうなるのも当然か。

「あれ・・・？」

視界がぐらぐらしている。血を流しすぎた。冗談抜きでやばい。俺は手を合わせ、途切れそうになる意識を必死につなぎながら、傷口に当てる。

「死んで・・・たまるか・・・っ！」

まだ、俺は満足していない。もっと色んなものを見たいのだ。こんな所で死にたくなんか無い。傷口にあて、アンサートーカーによって生体練成に必要な情報を得る。そして、すぐさま発動。

「があああああああああああああああああああああああああ
あああああああッ!!」

予想以上の激痛が走った。無理やり傷口をふさぐことがこんなにきついななんて思わなかった。失血死を防ぐための練成が終わった後、力尽きるように熊に重なって倒れた。失った血は戻らない。体力も今ので一氣に持っていかれた。体が眠り・・・を・・・欲して・・・い・・・る。

俺は意識を失った。

幕間

Side
レイア

『やめて、お父様!!』

泣き叫ぶ私

『お前は私の最高傑作だ！！はーっはっはっはははははははははははは！』

・
・
・
狂ったように笑う誰か
・
・
・

『レイア、あたしがあんたを守るからね!! たとえどんなことをしても!!』

・ ・ ・ 私と同じ黒髪の女性 ・ ・ ・

『ごめん、レイア……。でも、あなたは存在してはいけないんです!!』

泣きながらをナイフを突きつける金髪の男性……

『消え失せろ、悪魔！！』 『あの人を返して！！』 『貴様がいたから、あいつは！！』 『いたぞ！！あいつだ！！』 『殺せえエエエエエ！！』 『悪魔だ、あいつは悪魔だったんだ！！』

・
・
・ 私に怖い目を向ける人達
・
・

夢現の中を私は落ちている．．．
そこに映る断片的な光景．．．
私はただ、落ち続ける．．．
不意に、私の体が止まる．．．
いや、捕らえられたのだ．．．

ドロドロしたもの・・・
やがてそれは手になった・・・
全身を絡みとる・・・
あるいはそれは顔となった・・・
口からは悲鳴を上げ・・・
眼は絶望に染まっている・・・
何百・・・何千・・・何万ものそれが私を囲む・・・
私はただ、それを受け入れるだけだった・・・。

だって、私は――――

Side レイア

眼が覚めたとき、私は汗だくでした。動悸が激しく、汗が私の体を冷やします。私は深呼吸をして、落ち着くのを待ちます。

「今の夢はなんだったんでしょうか？」

とても、怖い夢でした。一部は私のトラウマを元にした夢のようですが、それ以外は分かりません。とても、大事なことだと分っているのに、頭に靄が掛かったように思い出せません。とても、怖くて、悲しいことなのに・・・。

何故か、カズキさんに会いたくなりました。

無意識のうちに、胸元の首飾りを握り締めていました。翼をかたどった銀細工。カズキさんに貰ったものです。

本人は錬金術を試したときの失敗作だと言っていました。私はそれを譲ってもらいました。何処と無く、暖かい感じがしたのです。今

も、指先でいじっていると、心がぽかぽかして、元気が出ます。まるで、カズキさんが傍にいるみたいです。

「えへへ」

自然と笑みがこぼれ、あの時のことを思い出しました。

実は私、和樹さんが来た日の夜の会話を聞いてしまったんです。

お婆ちゃんはまだ、あの時のことを気にしていました。もう過ぎたことなのに……。あの時のことは今でも思い出せます。私のことを悪魔だといってくる大人たち。それにつられるように怖い眼で見てる子供。石を投げられたり、殴られたりと痛かったです。お婆ちゃんがいなければ、もっとひどいことになっていたと思います。

森に帰ってきたときにはすっかり人が怖くなっていた私は、お婆ちゃんさえも、怖がってしまいました。でも、お婆ちゃんの優しさが私を救ってくれました。今でも森の入り口にいる人達を見かけると、体が少し強張ってしまいますが……。あれ？でもカズキさんはそうでもなかったような……。。

そういえば、間違えてカズキさんが寝ている部屋に入ったときもそうでした。体を触られた時は、何故か顔が熱くなってしまいました。が、腕の中に抱きしめられた時は強張るというよりもむしろ、安心しました。あんまりにも寝心地がいいので、腕を回してそのまま寝てしまいました。

お婆ちゃんが起こしに来たとき、暖かい眼でにっこり笑ってくれました。私も嬉しくなったので笑顔を返しました。その際に『レイアももうそんな年なのかね』と昔を懐かしむような眼をしていました。

カズキさんが『そんな生ぬるい眼で見ないでえええええ!!!!』とよく分からないことを叫んでいましたが。話がそれました。

とにかく、あの日の会話は知っているのです。

カズキさんの言ってくれた言葉も一字一句ちゃんと覚えています。

突然やってきた人。私を怖がらない人。面白い話をしてくれた人。私を守ってくれる人。そして――

「私の新しい家族・・・」

声に出してみても、嬉しくなった。

あなたは知っているでしょうか。

私の目を宝石みたいに綺麗だと言ってくれた。
私を守るために強くなると言ってくれた。

それがどれだけ、私の心を救ってくれたのかを・・・

でも、それは私だけの秘密です。

S i d e o u t

S i d e フォリス

「どうだ?」

部屋を出ると、チューダムが深刻そうに聞いてきた。その表情から

もおそらく、感づいているだろう。

「ああ、やっぱり術が解けかけていたよ」

「では・・・！」

「いや、まださ。まだしばらくは持つよ」

何重にもかけてあるんだ。そう簡単に外れてもらったらこまる。とはいえ・・・

「何かしらのきっかけがあれば別だがね・・・」

あの子の心を揺さぶるような出来事は早々起きないだろうから、安心していいはずだ。ただ、嫌な予感もする。こういう時は大抵あたってしまふのが恨めしい。

そう言ったあたしに、チューダムはイーグルハークに調べさせまようと言った。さて、鬼が出るか蛇が出るか。

『まあ、なるようになるさね・・・』

胸中でそう呟いて、私は朝食の用意をするために階段を降りていった。

Side out

Side 三人称

「あれから、何か進展はありましたか？」

「はい。まもなく、報告があがるかと」

松明のみが光源となっている教会に伸びる二つの影。一人はひざを付き頭をたれ、もう片方はその影に背を向けて立ち、何かを聞いた。立っている方の影の視線の先には彼らの信仰対象が掲げられている。そのとき、教会の扉が荒々しく開いた。

「報告します！！対象を追い詰め深手を負わせることに成功！！が、対象は最後の力を振り絞り、彷徨いの森に逃げ込みました！！」

その報告に息を呑む二人。彷徨いの森。町郊外にある禁忌の地。入れば、彷徨い続けた挙句、何故か再び入り口に戻ってしまうため、そう名づけられた。

「あの森に入られたのですか！？」

何故彷徨って入り口に戻るのか。その実態はあそこに住む魔女の張った結界だ。彼らが眼の敵にする忌々しい魔女が、あの悪魔を守るために張った結界。人間を絶対に通すことの無い迷宮にして要塞。

「また厄介なところに・・・」

「しかし、いい知らせもあります。対象の流した血で、結界に惑わされずに森の奥まで追跡可能となりました」

それが意味するところは、うまくすれば魔女と悪魔も一掃できるかも知れないということだ。結界は人間以外は通すのだ。そして、対象は人間ではない。血が彼らを導いてくれる。

「これは神の思召しです。災い転じて福と成す。すぐに準備をなさい。この機会を逃す手はありません！！」

「「はっ」」

高らかに宣言する影と駆けていく二つの影。

「我らの行く先に幸があらんことを・・・」

突如吹いた突風に松明の火が消える中、残った影は一人月に照らされ神に祈る。

幕間（後書き）

もう一話投稿。

これから、前と同じ感じ、というか引用しまくった文章を投稿していきます。

大分整頓したので、少しは分りやすい展開になっていて欲しいです・
・。

何か、めんどくさい作者でござんなさいorz

仲良くなるコツは鍋（前書き）

すみません。投稿する奴間違えたので、削除させてもらいました。
これが、本当の奴

仲良くなるコツは鍋

Side ????

『あなたも大きくなれば自分の主となるものを見つけなければなりません』

昔から母さんが言ってきた言葉だ。僕たちの一族は古くから誰かに仕えることを誇りとしている。一生に一度の主を見つけ生涯忠誠を誓うのだ。ある時は人間だったり、魔王だったり、吸血鬼だったり、神様だったり。その話を聞いては、僕もいつかはと憧れてきた。だって、普段感情を表に出さない母さんがその時だけは嬉しそうにしていたから。よっぽど、今の主・・・というかお父さんに出会えたことに誇りを持っているのだろう。

そして、ついに僕にもそのときが来た。旅立ちの時は、親を含めたみんなが見送ってくれた。母さんなんか泣いていたしね。お父さんは正直クネクネしてて、キモかった。皆の声を背に、僕は意気揚々と飛び立ったんだ。いつか、素晴らしい主を見つけるという夢を抱きながら・・・。

・・・どうやら、俺は寝ていたらしい。・・・ちっ。少し不愉快な夢を見たな。

アレから百年の時が過ぎた。俺たちの寿命からすれば、ほんの一時のことだ。だが、未だに俺の上に立つ資格のあるやつは現れない。人間以外のやつにも、あったことが無い。神、吸血鬼、魔王・・・

どこを見てもそんなものはいなかった。人間に仕えようとしても、あいつらは俺の姿を見たらすぐに襲ってきやがる。正直俺はもう疲れた。

そんな折だった。また人間どもが襲ってきた。ただ、今回は何か違った。

気が付けば、俺は逃げていた。全身が血まみれになりながら。もちろん、これは返り血だ。おれ自身に傷なんてあるはずも無い。だが、俺は逃げていた。簡単だ。恐怖したんだ。どんなに殺しても、死を恐れないで向かってきやがった。イカレテヤがる！！

そのとき、逃げている先に現れた人影。さっきの奴らと似たような服装をしているが、放たれている雰囲気違った。

奴らは手に持っていた武器をこちらに叩き付けた。一撃が重い！！

「見ろ、敵が怯んでいるぞ」

「さすがは異端審問官様だ」

「ありがたや、ありがたや」

勝手なこと言いやがって！！

俺は全力でブレスを吐いた。だが、奴らは避け、一瞬で間合いを詰めてきた。そして、また俺に攻撃を叩きつける。今度は、投擲された剣を槌によって釘の如く俺に打ち込んできた。俺の鱗は並大抵の硬さではないと自負している。そんなもの効かない！

「ギャオッ！」

剣は俺に深く突き刺さった。何故だ!!この程度の攻撃など効かないはずなのに!!

よく見ると剣には魔力が纏われている。これか!!

体勢を整えるために、尻尾を振るい、敵をなぎ払って距離をとった時、それは聞こえてきた。

———来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の風!!

この呪文は———

「これで、とどめだ!!雷の暴風」

———やば・・・ッ!!

風を纏った雷が、俺の体を貫いた。血が止めどなく流れる。雷によって体は痺れ、頭が白くなった。

「おお、法術だ」

「俺たちも信仰を深めれば俺たちにも使えるようになるそうだ」

「いいよなあ」

朦朧とする中で俺はもう良いかなと思った。百年も主を探すのはもう疲れた。行く先々で排斥され続けるのも飽きた。このまま、眠りについても・・・

———ふざけるな

心が否定した。

———今更になって引き下がるわけないだろうがっ！何が何でも見つけさせてもらう！！

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッン！
」

最後の力を振り絞り、翼を広げ空へと逃げた。

傷が深いせいか、うまく飛べない。ふと、向かう先に森が見えた。境界が張られている。人間だけを惑わす境界のようだ。あそこに逃げれば！！

必死に飛んだ。徐々に暗くなっていく視界の中、俺は高度を少しずつ下げながら、森の奥へと着地した。いや、着地なんて綺麗なものでもないか……。そう考えて、俺は意識を失った。

それで、昔の夢を視たと。久しく忘れていたが、今の俺にとっては正直まぶしすぎる内容の夢だった。主を見つけたと思ったら捨て駒にされたり、裏切られたりで散々だった人生(?)を歩んできたので、今の俺は我ながら相当捻くれていると思う。

「何で今更になってあんな夢を見たんだろうな？」

傷はすでに塞がり始めている。が、重症には変わりないので、派手には動けない。やることがないので、夢の考察をしようと考えていると、轟音が響き渡った。近くで先頭の気配がする。気になったので、そちらに向かってみた。あいつらもしくはらくは追ってこれないだろうし、今は回復に専念する時なので基本暇なのだ。

現場に向かうと、細い片刃剣を持った人間と熊が戦っていた。両者

ともに凄まじい攻防だ。途中人間が重症を負ったが、最終的には人間の勝利だった。ん？おお、傷をふさいで寝ちまった。

俺は人間に近づいてみた。少し興味が出来たからだ。普段の俺とありえないが、こいつは他の人間とは違うような気がしたんだ。だって、命のやり取りで、奪うことに躊躇したんだぜ？その時点で今までのやつらとは違う。

とりあえず、血のにおいに引かれてやってきた気配に殺気を放って蹴散らしといた。呑気に寝こけているの見て、危機感が無さ過ぎとも思ったが、考えてみればさっきまで激闘を繰り広げていたのを思い出した。そこまで、頭が回らなかったのだろう。

俺は呑気に寝こけているこいつの傍で寝ることにした。こいつと話してみたくなったので、食われてもらっても困るし、なんとなく、こいつの傍は居心地がいいと感じたのだ。

何より、今は体を回復しなければいけないのだから。

S i d e o u t

目が覚めたらドラゴンのドアップでした。

全身が黒に近い灰色の、金属のようならここに覆われている禍々しい外見。頭に生えている二本の角が怖い。また、ところどころにある傷跡が歴戦のドラゴンを髣髴させる。

「フオオオオオオオオッ！」

HG調で叫んでしまった。ビククリするでしょう。眼が覚めたらドラゴン。何の冗談だ。これでびびらないやつがいたら、そいつは人間じゃない。きっとサイボーグか何かに違いない。

いや、俺のビビリ方はいろいろと駄目だけどな？

「うるせえ」

ガシャン！！

金属が揺らされたような音がした。一瞬何の音だか迷ったが、檻が尻尾で叩かれたらしい。そういえば、気を失う前に錬成してたね。忘れてた。叩かれた所の歪みがその威力を語っている。って・・・

「お前しゃべれたんだな」

「しゃべらいでか」

なんと、こやつしゃべりかけてきおったよ。

血が足りなかったので、とりあえず、でかい鍋を錬成して、やっつけた熊と糞ってきた食用草を使って熊鍋を作りながら話を聞いた。熊肉の量が半端無いのでこいつにも消化を手伝ってもらおう。

勝手にそう決めて、相手を観察する。よく見ると、今のこいつはどこかで負けてきたような印象で、体に深々と突き刺さった剣が痛々しい。見てるこつちが痛いので、ひっこ抜いて、傷を治してあげた。そしたら、何故か驚かれた。

ああ、もちろん生体錬成なんていうまどろっこしい方法じゃないよ。念威魔法でちよいちよいと。

「そうなのかー」

話してみると厳つい外見に反して、根はいい奴っぽい。・・・外見に反して。

こいつが俺に接触をしてきたのは、興味が湧いたからだとか。逃げてきた先で起こっていた命のやり取りの最中、命を奪うことに躊躇するやつがいるなんて思わなかったんだと。俺も躊躇しているつもりはなかったんだが、今回のことで浮き彫りになったため、なんとも言えない。

それにしても・・・

「バハムートにそっくりじゃね？」

ドラゴンというよりは人に近い骨格の竜。いや、近いってのは少し違うが、従来のドラゴンとは全く異なる、いわば竜人の姿。四足歩行ではなく、二足歩行の歩く最強。

見たところ、こいつは俺の一番好きなFF9のバハムートだ。もともと、大きさは俺の知っているのより一回りも二回りも小さいが。いやいや、やっぱりカッコいいぜ!!

本人（本竜？）に聞いてみると肯定された。逆に何で俺の名前を知っていると尋ねられた。とりあえず、有名だからと答えたら納得し

てくれた。どうも、いろいろ心当たりがあるらしい。

「なあ。お前は何で俺の傷を治したんだ？」

いきなりそんなことを尋ねてきたバハムート。何を言ってるんだこいつは？

「今までのやつらは、治そうとするどころか逆にとどめを刺しに来た。どこへ行っても俺は、襲われてきた。だが、お前はそうするどころか治してくれた。何故だ？」

何気にこいつは苦勞してきたらしい。雰囲気からしてそう思った。でも、理由を問われてもなあ・・・。

「しいて言うなら――」

Side バハムート

いきなり剣を引き抜かれて、手当てをされた時は痛みよりも驚きが勝った。今まで出会ってきた人間は俺の傷を治してくれたことなんか無い。むしろ、チャンスだと襲い掛かってきやがった。

人間は俺の存在を認めなかったのだ。

だから、聞いた。

何故お前は俺の傷を癒したのか？
傷が治ったらお前を襲うとは思わなかったのか？

——お前は俺が怖くないのか・・・？

目の前の男はこう答えた。

「しいて言うなら、血生臭い格好で飯を食うのは嫌じゃね？」

と笑顔で言いながら、こいつからしたらかなりでかい器と二本の棒を、俺に差し出してきた。中には見たことの無い料理が入っている。俺の分か？

「いや、せっかく同じ鍋を突くのにさ、血の匂いがしたら不味くなるだろ？それに、痛みのせいでうまく食えないなんてのは損だしな」
そういつて男は自分の分を、二本の棒で器用にがつと食いだす。

「この熊の肉の量が多いから、お前にも手伝ってもらいたいんだよ。相手の命を奪って、俺の糧にするんだ。残すのはもったいないからな。だから、お前も食え」

今までで、こんなやつがいただろうか。目の前で『あれ、こいつ箸使えるのか？』となにやら首をかしげている男のような人間が・・・

竜の心臓を食べれば無限の魔力を得られるといった魔法使いがいた。
竜の血を飲み干せば永遠の命が与えられるといった王がいた

竜の牙使えば素晴らしい武器を作れるといった人間がいた
竜の鱗を使えば最強の防具が完成するといった人間がいた

純粹に俺の姿を恐れ、排除しに來た国があった

たまたま通りがかった俺の姿を見て、全ての災厄を擦り付けられた

——俺を利用しようとする人間共

——
——
——
欲に驅られる人間共

——俺を邪竜と呼ぶ人間共

——俺を悪魔の使いとほざく人間共

人間は俺の存在を認めなかった

だが、俺という存在に対して、こいつは対等に見てきた。こいつの傍は、居心地がいい。

——ああ、今理解した。

一目見たとき、こいつは他の人間と違うと思ったが、その考えは少し間違っていた。俺の心は、一目見たときに分かっていたのだ。

——俺はこいつと会うために生まれてきたのだ！！

それは本能の叫び。今になってようやく聞こえた声。無意識領域において漠然と聞こえていた想い。ようやく、見つけた。俺／僕の主に相応しい存在。俺／僕が生涯をかけて忠誠を誓う者

——そして、俺／僕が安らげる場所……

このとき、昔の俺があふれ出してきた。もう、『俺』から『僕』に戻れないが、思い出せた。

冷めてしまった願い。諦めてしまった想い。忘れかけていた夢。

白と黒しかなかった世界に色がついた。

「く、
くくく、
は
は
は
は
は
は
は
は
は
は
は
は
は」

笑いがこらえられない。俺／僕は流されるがままに、感情の波に身を委ねた。いつ以来だろうかこんな気持ちよく笑えたのは。なんだろうか、この清々しい気分は。俺は、手に持っている謎の料理を一気に食った。うまい。不思議な味ではあるが、うまい。少し塩辛のような気もするが、うまい。

今は遠くにいる母さん……。俺／僕もようやく出会えたぜ。俺／僕が命を賭けて仕える人が。色々あったけど母さんの言ったとおり、一目見たら分かった……。本当に色々あった。だからさ……。情けないと思うだろうけど、今は許してくれよ。

頬を伝う涙はこれが最初で最後だから……。

Side out

唐突に笑ったり、器で顔を隠したりしている変な奴、その名はバハムート。少し引いてしまったよ。ていうか、俺そんなに変な事いつたか？ ああ、あまりにも馬鹿馬鹿しすぎたとかかな……

「おい、お前の名前は？」

考えてみれば、俺の名前を覚えていなかった。

「カズキだ。カズキしノモト」

「カズキか。このあたりではあまり聞かない響きだな。まあいい」

そういつて、バハムートは神妙な顔つきで、俺に頭を下げた。うお！！いきなりなんだ！？

「我、臣竜バハムートが古の神々に誓う」

バハムートは謡い出す

「我、契約者カズキⅡシノモトの従者となることを」

その姿は神々しく

「我が業火が立ちふさがる全てを焼き払おう」

その姿は禍々しい

「我が鱗が降りかかる火の粉を振り払おう」

竜は朗々と誓いを立てる

「我が翼が遥かなる空を捧げよう」

空に高らかに吼え

「汝、カズキⅡシノモトよ、我が契約に応えるか？」

そして、いきなり俺に聞いてきた・・・。

って、おい！！何だよ。意味不明だ。理解が及ばないわ！契約って何だよ！俺は混乱していた。バハムートはただこちらを見るだけで、何も言わない。だが、その目はものすごく怖かった。頷かなければ・・・といっているようだ。ていうか、これ脅迫じゃん！！目にハイライト無いぞ！？

「・・・だああああ！！分かったよ！受ける、応じる、応える！！」
やけくそでそういった瞬間、バハムートは少しほっとした様子を見せた。いや、断れませんか。あんな目を見たら無理。

「ここに契約はなった！！今このときを持って、我は契約者カズキ
Ⅱシノモトと同じ時を歩まん！！！」

その言葉と共に、目の前の竜は輝きだした。あまりのまぶしさに、目を瞑り手を前に翳した。今日を開いたら、絶対リアルムスカをやる自信がある。『目があ、目があアアア』ってやつね。お、どうやら、収まってきた。

光が収まったとき、そこにいたのは少女だった・・・。

・・・あれ？

何事にも上には上がいる（前書き）

せつかなので、もう一度投稿します。

何事にも上には上がいる

「おらぁ!!」

短く息を吐き、襲い掛かる兎の大群を巨大フライパンでつぶしていく。初日に俺に攻撃してきた可愛い外見を持つ凶暴な兎だ。だが、大きさは異なっており、今の奴らは鼠サイズだ。ああ、チューダムじゃない普通の鼠な。実はこいつら

「カズキヲマルカジル!!」

「アシマズソウ!!」

「テマズソウ!!」

「トイウカ!!」

「ゼンブマズソウ!!」

「やかましいわぁ!!」

クレイジーラビの分裂体だったんだ!!

クレイジーラビの能力だ。体を分裂させ、それぞれが意識を共通しているために連携をとる上、分かれれば分かれるほど、より強く強くなるとかいう極悪な能力だ。しかも、一匹でも生き残れば、たとえ他のクレイジーラビが全て消滅しても丸一日経てば、復活するのだという。もちろんリスクもあり、分裂すれば小さくなっていくし、防御力が低下していき、今のサイズだと一撃で葬れる。

「イイカゲンオレサマニクワレロ!!」

「オウジョウギワワルイ!!」

「ムシロウザイ!!」

「カズキクツテモマズソウ!!」

「うるせえ！！まずそれで悪かったな！！」

が、こいつらの攻撃力はマジやばい。さっき避けた場所にあった岩が噛み砕かれたくらいだ。しかも、連携によって徐々に追い詰められていく。こいつら、見かけによらず頭使ってやがる！！気が付けば、何百を超えるチビ兎に囲まれていた。前戦った大熊が雑魚に思える。

「イクゾヘタレ・・・クワレルジュンビハバンゼンカ？」

某紅い弓兵！？何でお前が知ってんの！！？てか、ヘタレで悪かったな！！

「伏せろカズキ！！」

声に反応して俺は伏せた。瞬間頭上を通り抜ける光線。一瞬で俺の前方にいたクレイジーラビたちを焼き尽くす。俺はそこから抜け出し、声の主に礼を言う。

「助かった、ムーちゃん！！」

「ムーちゃんって呼ぶな！！」

「ごふっ！？」

恩人は、俺に跳び蹴りを放って綺麗に着地した。それは、綺麗な少女だった。金属のような黒に近い灰色の髪に、鋭い二本の角。顔を上げ、金色の瞳が煌き、吊り上り気味の眼で睨んでくる十六歳くらいの少女。その正体は数日前に俺の使い魔になったバハムート。今は、俺と一緒に修行をしている。いや、修行せざるを得なくなったというべきか。

俺が望めばいつでも竜の姿になれるらしいが、それ以外の時は基本この姿で過ごすらしい。人間の姿になったのかは、彼女の一族は忠誠を誓った証として、仕えるものの種族の容姿を得るのだとか。例えば今みたいに、人間なら人間のといったように。

少女なのは、彼女はもとメスであり、人間の年に当てはめると今の容姿になるため。つっても、竜の国に住んでいた時も人間の姿をとっていたらしいけど。その方が色々と便利だったらしい。

それはもう、驚いたさ。だって一人称が『俺』なのにこいつメス・・。なんか今の姿だと違和感があるから言い変えるけど、女の子だったんだぜ。あんな歴戦の強者と主張していたドラゴンが、端的に言えばすごく厳ついドラゴンが、女の子だったんだぞ。思いつきり悲鳴を上げましたとも。ええ、森中に響き渡るくらいに。殴られた。

んで、人型になっても力はそのままなのだが、リーチやら何やらが元の姿から逸脱しているので、体慣らしをしているのだ。

バハムートという厳つい名に反して、相手は可憐な少女なので、可愛い呼び名を考えた。バーちゃんとかバハリんとか色々悩んだ末に、バハムートのムーを取って、ムー○ンにした。そしたら『俺をあんなコビトカバと一緒にするな』と殴られた。仕方が無いのでムーちゃん（仮称）にしたのだが、それも不満らしい。

おっと話が飛んだな、今は目の前の敵に集中しないと・・・

「ムーチャンジャマスルナ」

「サスガムーチャン、クウキヨメナイ」

「ムーミ○ハヨメルケド、ムーチャンハヨメナイ」

「ムーちゃん、オソロシイコ」

「うるせえ!!! ムーちゃんて呼ぶな、食うぞ!!!」

さて、目の前で展開されているコントにどう対応しようか……。じゃないだろ、俺!!!

今の状況は一緒に森に入った二人に襲われている最中だ。もう片方はさっきまでムーミンが相手をしていたのだが……

「……どいて……クレイジーラビ……」

風に乗って聞こえてきた涼やかな声によって、嫌な悪寒が走った。未だに文句を言っているムーちゃんを抱えてその場を飛び去る。突如、飛来してきた巨大な何か。これは……!!!

「ああ、テメエマジでしつこいな!!! ええ、虎野郎!!!」

「……野郎じゃない……皆が認めるお嬢様……」

「そんな事いつてる場合じゃない、逃げるぞムーちゃん!!! 発芽するぞ!!!」

「だから、ムーちゃんって……!?!? だああああ、またか!!!」

それは巨大な種だった。半分は土に埋まっているが、もう半分は表に出ていることから、この種の大きさが分かるだろう。ちなみに、表に出ているのは俺の膝くらいまである。

これこそがティガーハウルの能力だ。詳しい原理は知らんが、とにかく植物の品種改良というか品種改造!!! あらゆる植物の種に色々な属性や性能を付加する能力。これまでに『火吹き草』^{ヒイフキンウ}とか『凍り草』^{コオリ}なんていうのが出てきた。名前から侮るなよ? 方や周囲の酸素を一気に燃やす大喰らい、冷気を撒き散らして周囲を必ず凍らせる草。どちらも致死性のもの種だった。

二つともまだ常識的な種の大きさだったことから、これははまた別の植物だろう。

「・・・弾^{ハジケ}け妖花・・・」

ティガーハウルがそう呟いた瞬間、種が爆発した。種は周囲に飛び散り、瞬時に発芽。花をなしては爆発、花をなしては爆発した。どの方向へ逃げても、それは先回りするかのように現れた。そして、ついに俺の足元どんぴしゃに生えて、爆発した。

「「のああああああああああああああアアア！！」」

二人して吹き飛ばされました。こいつら、絶対俺よりチートだろ！！

何とか、あの二匹の猛攻を凌ぎきり、ムーちゃんと二人で、錬成した小屋の中で休憩している。辺りは既に闇に染まっている。命がけの生活を送っているせいか、最近急激に強くなっている。戦場での一日は、百日の鍛錬に勝るって言うけど、その通りだ。それに、常に気を張るような生活の恩恵か、アンサートーカーが発現しやすくなってきたのは、行幸だ。

今は魔力を用いて、『念』の四五行を行っている。徐々に増えていく魔力に高笑いをしたら、ムーちゃんにドン引きされた。少し自重しよう・・・。

「お前、毎日それやってるけど意味あんのか？」

ムーちゃんが俺のやっている魔力の運用について聞いてきた。

「じゃなかったら、やってないって。やっている主な理由は魔力を増やしたいんだよね。それで、増やした魔力を丁寧に操るんだ。そうすることで、無駄な魔力を使わない洗練された魔法と迅速な肉体強化が出来るようになるわけだ」

「んー、よく分からんな・・・」

「まあ、人間のための技術だしね。ムーちゃんもやってみる？」

彼女は元から地力が凄まじいのだが、本人はそれを大雑把に振るっているため無駄が多い。もし、人間が連綿と受け継いできた技を彼女が手にしたとき、敵無しになるんじゃないだろうか？

つつても、今俺がやってるのは漫画の知識だけどNE!!

「ムーちゃんって呼ぶんじゃねえ!!・・・まあ、遠慮しておく」

「そうか？まあ、興味があつたらいつでも言えよ」

そういつて彼女は眠りに付いた。彼女は警戒しながら眠れるのでいきなり襲われてもは迅速に対応できるのだ。俺も最近ようやく出来てきた。でなければ死活問題だったから。一度眼が覚めたら、狼の集団に襲われていた時はマジで焦りました。ムーちゃんがいなければ、気づかないで胃袋の中だったな。火がついていようと来る時は来るんだねあいつら。獣は火を恐れるって聞いていたのに。

ムーちゃんといえば、俺の使い魔になったというのに全然態度が変わらない。もつとも、そっちのほうが嬉しい。いきなり、従者然とした態度をとられても、不気味を通り越して笑ってしまうから。スーさんの気持ち分かるかも。

この世界に来て、毎日が充実している。元の世界では現実に打ちのめされ、色彩のない世界で生きてきたが、今は色の着いた世界で生きている。辛いことが多いけど、それを帳消しどころか釣りが出来るほど楽しい。

お世話になっている先生

チューダムを筆頭とした聖女親衛隊

俺の使い魔となったムーちゃん

そして、俺の妹分のレイア

元の世界での家族や仲間には二度と会えないけど、今こうして新しい絆ができた

「願わくば、この生活が続きますように・・・」

俺は一人、神の一柱たる友人スーさんに願う。

『か、和樹はMなんかのう・・・？今の部分は消したほうが良いのじゃろうか？』

何かとんでもない勘違いをされたような気がした。

土下座は日本の文化

「で、何か言い訳はあるのか？」

帰ってきて早々、土下座の体勢に移行した俺。目の前には、俺に背を向け、木に頭をコツ、コツ、と当てているチューダム。滲み出るオーラが静か過ぎて、すごく怖いです。いや、そもそも何で俺怒られてるの？

「私が怒っている理由が分からないようだな・・・」

こちらを見ないで断定することのできるこいつは何者だろうか。エスパーとかそんなのか？

「貴様が使い魔にしたと連れてきたその御方は——！！！」

「名前は何ていうんですか？」

「バハムートだ。とりあえず「ムーちゃんて呼んであげてね」カズキてめえ！」

「わあ、ムーちゃんさんですか！！私はレイアと申します！！これからよろしくお願いします」

「ムーちゃんて呼ぶな！！」

「さん是要らないよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全くレイアは相変わらず天然さんだな。『ちゃん』の後に敬称をつけるなんて。少し離れた場所にいる二人の様子を見る限り、仲良く出来そうだな。ん？チューダムが震えている。寒いのか？最近は底冷えするような温度だからな。風邪引かないようにしないといけない。

「レイアアアアッ!? 何を和んでいるんですか!? その御方は――」

「ひっひっひ、あたしはフィリスって言うんだ。何とでも呼びな、ムーちゃん」

「だから、ムーちゃんて呼ぶなって!!」

「でも、他に呼び名がないだろ？」

「もっとマシな呼び名があるだろ！？」例えは・・・」

「あ、ムーミ」あんなカバ妖精の種族名にするなら、いくら主でも燃やすぞ？」ごめんなさい」

「フィリスさああああああああああん!？」

チューダムがまるで裏切られたような表情をして、先生の名を叫んでいる。なんか、キャラ崩壊起こしてないか？つか、レイアには敬語で話すんだな。

「……リーダーうるさい……」

「ヤカマシイズ、リーダー!!!」

[illegible]

森で俺を定期的に襲ってきた二匹に怒鳴り散らしている。やはりリーダーともなると、ストレスとか溜まるんだろうか？ ああして、八つ当たりしているくらいだな・・・。

「チューダム・・・色々大変なのはよく分かるけど、部下に八つ当たりするのはよくないぞ？俺で良ければ相談に」

「諸悪の根源は貴様だあああああああああああああああ

「ミギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア！」

魔力の込められた前歯でガジガジと齧ってきやがった。人がせつかく善意で訊いてやったのに！ハッ、待て！？考えてみれば、『訊いてやった』というのは物凄く上から目線だ。相手からしたら不愉快なのは当然だろう。今のは俺が悪いな・・・。

「ごめんチューダム。流石に今のは上から目線だっ・・・」

「お前はもう黙れ！！」

泣いてもいいだろうか・・・。

「一体何を騒いでるのですか、チューダムさん？」

レイアが心底不思議そうに首を傾げていた。

「ああ、やっと説明できる。いいですか、レイア。その御方は竜の国の国王、神竜の娘です！！」

「え？でもこの子、人間の姿をしていますよ？頭に角ありますけど」
「たとえばどんな姿をしているとも、鼠の鼠による鼠のための情報網で配られた魔力反応は騙せません！その御方は、百年前に家を出奔なされたバハムート王女です！！神竜直々に見つけ次第連れて参れと命を出し、数々の目撃情報を元に大規模な搜索をしても、一度も捕まらなかったお方です！！」

へえ、ムーちゃんて凄かったんだね。神竜の娘ってまた凄い血筋だな。

「そんな高貴なお方をキサマアアアアア！！」
「落ち着いてください」

冷静な声と共にチューダムはつぶれた。そして、現れたモーターテイル。多分今のも固有能力だろうな……。

「モーちゃん!? これが落ち着いて……チュワ!?」

すぐに飛び起きて、一瞬で沈められた。モーターテイルさんは無表情にそれを眺めている。その恐怖は冒頭のチューダムなんか目じゃないな。

「落ち着きましたか?」

「ああ、落ち着いたから、能力の発現をやめてもらえるかな?」

その言葉を境にモーターテイルはチューダムの一步後ろという定位置についた。

「全く騒がしいと思って来てみれば……」

その後、眉間にしわを寄せたホワイトフアングを筆頭に、残りのメンバーも続々と来た。何か、大事になってきたのか?

「さて、見苦しいところをお見せしましたな」

正気に戻ったチューダムが口を開いた。やはり、場をまとめるリーダーだからだろう。この場を代表している。……さっきの錯乱に目を瞑れば。

「しかし、お聞かせ願いたい。何故、こやつを使い魔などになったのですか?」

まるで、俺の使い魔であることが駄目みたいな言い方だが、ムーち

やんは一国の王女（？）だ。そう簡単な問題でもないということなのだろう。

「知っているようだからいうが、俺の親父は確かに神竜だ。だけど、母さんは臣竜の一族なんだ」

しんりゅう・・・流れ的に同じ漢字じゃないよな？

「臣竜・・・生涯でただ一人の主に全てを捧げる誇り高き竜か」

「そうだ。母さんは、父さんに忠誠を誓った竜だったんだ。それで、父さんが母さんを見初めて、二人は婚姻を結んだんだ。ただ、母さんは一つだけ条件をつけてたんだ」

ああ、なんとなく話が読めてきた。

「男の子だったら跡継ぎとしての神竜、女の子だったら臣竜として育てる。生まれてきた俺は女だった。だから、神竜の娘である前に臣竜なんだよ俺は」

「じゃあ、百年前出奔したのは・・・」

「主を探しに旅立ったから。それで、カズキの従者になったのは、一目見た時に分かったからさ。『俺の主はこいつだ』って」

「あなたは、それでよかったのですか？」

だから、まるで俺が駄目みたいな言い方はよせ。

「ああ、むしろ夢が叶って清々したくらいだ」

そうやって俺の腕を取るムーちゃん。腕にあたる柔らかな感触にドギマギしつつ、俺は一つの疑問が浮かんできた。

って、レイアさああん、何であなたまで空いてる方の腕を掴むんですか！？ムーちゃんよりも豊かな胸がああ当たっているんですけどおおお！？！？え？カズキさん分を補給してる？何恥ずかしいことを平然と・・・！今まで会えなかったので寂しかったって、嬉しいことを言ってくれるなこの子は！？

「では、何ゆえ神童はあなたを連れて来いと命じているのですか？話からすると、その必要はないように思えますが・・・」

あ、チューダムも俺と同じ疑問を抱いたらしい。じゃない！！チューダム、スルーしないで助けて！！女性に囲まれるのは嬉しいけど、いきなりは対処が出来なくて困る！！女慣れしていない俺では凌げないんだよ！！Help Me！！

「さあ・・・俺も今始めて知ったしな。たまに動物たちが追いかけてきたんだが、眼が怖かったから、話も聞かずにすぐ逃げてたんだよ。どいつもこいつも目がギラついていたから・・・そいつらのことだよなあ、多分」

「・・・ああ。手配書の報酬目当ての連中のせいだ・・・」

「まあ、こうして仕えるべき主君も見つけたし、今度胸を張って一度帰ることにするわ。何かあったかもしれないし」

そういわれると照れるな。胸を張るほどの主君ではないと思うのだけど。まあ、嬉しそうにしているからいいか。ところで、故郷で何かあったという心配は皆無だな。それだけ、信用してるのか？

「話は済んだようだね。まあ積もる話もあるだろうから、家に入ろうじゃないか」

「そうですね。カズキさん。森であったことを教えてくださいね！！」

ああ、なんというか彼女たちの顔を見たら帰ってきたって感じがするな……。

「じゃあ、家に入ろうか、ムーちゃん」

「ムーちゃんって呼ぶな!!」

ド突かれながらも、家に入っていく。周りにいた親衛隊がムーちゃんに声をかけて、賑やかになった。うんうん。仲良きことは良いことだ。

幕間 2

Side 三人称

「ふむ、少し甘く見ていましたかね？流石は『幻惑』といったところですか」

男は今彷徨いの森入り口で佇んでいた。

先日逃げていったドラゴンの血のおかげで、森の深部まで入れると思っていた彼だが、少し当てが外れていた。未だに森の入り口で足止めを喰らっているのだ。

とはいえ、彼らにしてみれば、この程度で破れたら、とっくの昔に入れていた。今までも、似たようなことをしても入れなかったのだから、予想の範囲内である。

だが、今回は違う。あのドラゴンの血に含まれている豊富な魔力は、彼らがある程度中まで案内してくれる。そこまで行けば、仕込むには十分だ。

「ただいま戻りました」

森から、十数人の男女が姿を現した。

「全ての準備が整いました」

「ご苦労様です。それでは急いで戻りましょう」

遂に、彼らと敵対する忌まわしき魔女の張った結界を破る時が来た。

無駄に広い森に、術式を仕込むのは手間が掛かったようだ。

時間をかけてしまったので、あの邪竜には遠くに逃げられことを残念に思う彼らだが、魔女と悪魔を討てるようになるので、気にしていない。それに、どうせ地の果てまで追い詰めるつもりなのだ。優先順位が変わっただけである。

「では、始めますよ」

暗い部屋の中に響く男の声。それを合図に床が光始める。線が浮かび、やがてそれは弧を描きながら、一つの図形を刻んでいく。魔方阵だ。その光によって、部屋の中がある程度把握できた。

その部屋は石造りで出来ていた。必要なもの以外は何もない質素な部屋。魔方陣を囲む数人の人間が、所狭しと佇んでいる。壁には彼らの神を象徴するものが描かれていた。

十字架

それこそが彼らの信仰を象徴する。彼らの正体は、十字教徒。レイアを悪魔と呼び、その悪魔を守る老婆を魔女と貶める者たち。

「ついに、長かった戦いに決着をつける時が来ました。これで、あの悪魔たちは無防備になります」

リーダーと思しき人物に頷いて応える影たち。ここにいる彼らは全員異端審問官であり、その実力は折り紙つきである。魔法、いや法術を駆使し、あらゆる敵を打ち砕いてきた精鋭。各国に散っていた

彼らを招集するのに時間がかかったが、これで戦力は整った。

「結界が破れるまで、丸一日かかるでしょう。しかし、敵はあいつらだけではありません。あの森は、マナが異常に満ちている場所。それに影響されて、動物たちもみな化け物です。油断しないでください」

だが、男は別に心配などしていない。何度も言うが、彼らは強いのだ。豊富なマナに影響されたからといって、たかだか動物程度に遅れを取るはずはない。

「それでは、各自明日に備えて休みを取ってください。相手はあの悪魔と魔女です。それに、彼女を守るあの怪物たちも相手にしなければなりません。万全を期して挑まなければいけません」

異常なほど警戒しているのは、あの悪魔に従う怪物の存在を知っているからだ。

ゆえに彼は釘を刺す。少しでも万全のまま森の奥に至るために。

「我らの行く末に幸があらんことを・・・」

「「「「「「あらんことを」「」「」「」」

信者たる彼らは、己の神に祈った。

「・・・フィリス、レイア。これで、終わりにしましょう」

初老の男が呟いた言葉は、誰の耳にも拾われること無く、消えていった。

Side ファリス

「やはり、結界が侵食されているようです」

カズキがサバイバルにから帰ってきて数日、嫌な予感は一日に日に膨れていった。そして今日、イーグルハークの報告により、予感は確信に変わった。

「何らかの方法で侵入し、至る所に結界破壊の術式を植え込んでいたのでしょうか。凄まじい速さで侵食されています。おそらく、もって一日になるかと」

「やれやれ、厄介なことになったね」

おそらく、ムーちゃんの血を辿って、ある程度中まで進入したのだろう。実際ひどい怪我をしていたと言ってたし。竜の血はそれ単体で豊富な魔力を含んでいる。それを追跡したのだろう。

とはいえ、別に責める事はない。こういった事態は想定していた。それに、近い内に似たようなことがあると分かっていたのだから、遅いか早いかの違いだ。

その時、喉に不快な感触が走り抜ける。

「ごほごほっ」

「だ、大丈夫ですか!？」

むせただけだよ。そう言おうとして言えなかった。収まった時には手の平に血がべったりとついていた。イーグルハークが心配して駆け寄ってきた。この程度のことはいつものことだろうに……。イ

ーグルハークは焦りながらも、てきぱきと水と薬を運んできてくれた。震える手で受け取って、息を整える。

結界はあたしを媒介として発動している。この森に満ちる膨大なマナを取り込み、制御し森を覆うほどの大結界を発動するのはちと骨が折れる。特に老いたこの身では、少々きついものがあり、徐々に体を蝕んでいる。この膨大なマナを制御するのは、人の身では余るのだ。だが、それでもあたしは結界を張り続けた。愛すべきあの子のために。いや、そうすることしか出来なかった。この森を離れるという選択は出来ないからだ。

森の外は、教会のやつら以外にも敵がいる。そもそも、教会の奴らはまだマシなのだ。つかまってもただ、処刑するだけだろう。だが、他のクズどもは違う。生かしたまま、レイアの全てを壊しにかかる。それは、死よりも残酷なこと。生き地獄をあの子に味あわせるわけにはいかない。だから、この森で守り続けた。

確かに親衛隊は強い。だが、それでも予感があった。あたしが死んで、結界が破られればレイアは間違いない捕まり、そして壊されると。勘を超えた確信。根拠はあの時の漆黒に包まれた存在。あの存在に勝てる者がいるとは思えない。

だが・・・

「くく・・・」

カズキが来たことでその不安は消えた。一目見た時に感じたのだ。ああ、これでレイアは救われると。運命の一端を垣間見た気がした。たとえば、あたしが永遠の眠りについても大丈夫だ。

カズキには、あの子の秘密を教えていない。いや、そもそも話したのは嘘混じりの本当。まるで、外の奴らが悪であるかのように話を持っていった。度が過ぎているのは確かだが、あの事件の当事者としては、彼らの過敏な反応はわからないでもない。

でも、それでもあたしは彼女を守ると誓ったのだ。あの子はあたしの――――だから。

あたしは自分の都合のいいようにカズキを動かしているのは理解している。罪悪感もある。でも、それがどうしたというのだ。罪なら背負う。たとえ、レイアたちに嫌われようが、あたしは構わない。あたしの一生は全てレイアに捧げたのだから。

それに、確信がある。たとえ真実を知っても、あいつは彼女から離れないと……。まあ、あたしが言っているいい台詞ではないね。

「なんにせよ、とりあえずは目先の危機を凌ごうかね」

「はい」

あたしは、イーグルハークをお願いして、親衛隊を呼びにいった。らった。

敵は明日攻めてくるだろう。カズキとムーちゃんには、レイアを連れて避難してもらおうかね。今はぐっすりと眠っているであろう三人を思って口がつりあがるのを感じながら、あたしは明日の戦いに思いを馳せた。

―――来るならおいで『疾風迅雷』……。いや、クラウド。あたし達がいる限り、あの子に指一本触れさせないよ！

私は、相変わらず教会に在るであろう男に心の中で宣言した。

Side 三人称

「ふむう……。手間が省けて助かりますねえ」

暗闇の中で、男が一人水晶に映っている映像を見ていた。水晶からもれた光程度では、男の容姿を照らし出すことは出来ず、むしろより濃い影を生み出していた。

「ようやく完全回復したのにい、娘達に会いに行こうとしたらあ、結界の中に引きこもっていましたからねえ。丁度良かったですう。あれもついでに試しちゃいましょうう」

光が水晶の映像しかない空間で、独特の間延びした口調で楽しそうに予定をたてていく。

「くふふふ。楽しみになってきました」

男は一人、暗闇の中で笑う。全てを嘲るように嗤う。暗闇には、男の狂ったような笑い声だけが響いた。

———水晶には、森に術式を刻み込んでいく名も知らぬ異端審問官の姿が映っていた。

そして、戦いは始まった(前書き)

修正しました

そして、戦いは始まった

「カズキさん、朝になり・・・ま・・・」

「ふわぁ〜。今日はレイアが起こし・・・ってどうした？」

今日は、レイアが起こしに来てくれたのだが、部屋の入り口でなにやら固まって、こちらを凝視している。

「・・・どういことですか？」

「何が？」

初めて聞くレイアの低い声に、腰が引け・・・って、何だあ？異様に動きづらい。見れば、なにやらもぞもぞ布団が盛り動いている。

これはまさか・・・。俺は咄嗟に布団を剥ぎ取った。

「ん〜・・・」

はたして、中から出てきたのは、ムーちゃんだった。唐突に布団が無くなって寒かったのか、俺に抱きついて丸くなった。役得役得・・・って違う。何ゆえこいつは俺の布団に入っているわけ！？

「カズキさん・・・」

「ち、違う！こいつが俺の布団に勝手に・・・っ!？」

動揺している俺の言い訳は、彼女の鋭い視線で止められた。なんていうか、いつもほわほわなレイアがここまで怒るのは初めてなので、怖い。無言の圧力が俺を金縛り状態にする。もしかして、彼女は嫉妬しているのか？だったら、照れるなあ・・・とでも考えると思うなよ！そんなことを考える余裕などないわ！！

怖くて、冷たい汗しか流れん！しばらく、静寂が続き、彼女はこう言った。

「ずるいです！！私がベッドに入るのは嫌がるのに、ムーちゃんさんは受け入れるなんて！！」

「って、そっち！？」

どうやら、彼女の嫉妬は別方向にあるようだ。

その後の朝食では、彼女はプンプン怒っていたので必死に謝った。今度から一緒に寝てもいいことを条件に、許してもらった。話がおかしくなって無いだろうか？先生もニマニマしてないで何とかして！孫の心配はしないのか！？俺の理性が跳ぶとか・・・お前さんにそんな度胸はないって？それ以前に親衛隊が本気で殲滅に掛かるから何の問題はないって？じゃあ、安心だな。俺まだ死にたくないも

ん。

「ヘタレ・・・」

俺にどうしろと！？

「全く。先生は絶対楽しんでるよ」

今日の修行はなしと言われたので、ムーちゃんと一緒にレイアの手伝いをしている。暇になっても、やることがないのだ。だから、レイアの手伝いをしつつ、魔力の運用をしている。日常生活の中でさりげなく行うのがポイントだ。魔力増えてきたので、すぐにばてない。が、魔力総量ではレイアの足元にも及ばない。レイア、マジパ

ネエっス。

今は、休憩時間とやらで、森の最深部にある湖でまったりしていた。サバイバル中にも、ここを偶然見つけた。具体的には以下のとおりに

『み、水・・・』

←

『目の前にきゃわいい動物が・・・』

←

『動物の血も液体だよなあ・・・』

←

『あいつの血を・・・』

←

『待てやゴラアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

←

『ちっ、逃げられたか。ん？この音は・・・』

という思考回路を踏んで。あの時は二人そろって精神的にやばかった。体を潤した後、魔法で出せばよかったと思いついたので、なおさらそう思う。

実はここ、レイアと衝撃的な出会いを果たした場所なのだ。こういった静かな場所でのんびりすると癒される。いわゆるマイナスイオン効果か？

しかし、どうにも胸騒ぎがする。森に入る前にチラッとみた、先生の異様に優しい顔が引つかかる。親衛隊もどこか変だったし、レイアを絶対守れと念を押してきた。何かを隠しているのは確かなんだが、肝心の内容が見当もつかない。

声をかけられ、俺は現実を意識を戻す。悩んでも仕方ないがないか俺に話さなかったのはきつと、俺が必要ない問題だったからだろうと結論付けて、意識を現実に戻す。

まだそれほど経ってないのに、もう何年も前のことのように感じる。過ぎしてきた時間が濃密だったからだろう。レイアを見ると、俺を撃沈した記憶を思い出してるのか、少しあわてている。ムーちゃんを交えて、その時の思い出話をした。

その時、轟音が響き渡った。雷？こんな晴れた天気にな？しかも、家のほうだ！！

「……!! ああ、今気付いた」

「覺悟！！」

突然、茂みから、たくさんの黒い影が飛び出してきた。俺はドンと地面を踏むことをキーとして、影から大熊の命を刈った刀を取り出し、敵と切り結ぶ。中々強いが、サバイバルの最中に鍛えられたムーちゃんとの連携の前では無意味！焦ることなく、峰打ちで相手の意識を刈り取っていく。

ちなみに、影から取り出す術式は、フィリスさんに習った刻印術を駆使して刀のほうに刻んだから、しまう時に魔力を込めるだけでない。

「こいつら、前俺を殺しきた奴らだ」

ムーちゃんはいいつらのことを知っているようだった。神父服を動きやすいように改造した服装を着ていることから、相手はどっかの宗教の信者。いわゆる僧兵というやつだろう。中にはシスターも混じっている。とりあえず、気絶しているうちに、蔦で錬成した縄で縛っておいた。

・・・エロいな。

「カズキ」

「ひゃい！？お、俺は別に疚しい目で見てなんかいないぞ！！！？」

縛り方のせいかな、縄が体に食い込んでおりそこはかたなく怪しい雰囲気醸し出していた。それに目を奪われていた俺は、唐突に呼ばれたことで動揺をあらわにってしまった。

「・・・とりあえず、あとで、面貸せ」

「？」

ジト目で見られ気まずくなった。レイアは、キョトンとしていて何のことが分かっていないようだ。

「って、そんな話をしてる場合じゃねえ。こいつらが、ここにいる理由が分からねえけど、一度戻ったほうがいい。ここにいてことは、多分・・・」

「ああ、間違いなく家でも襲撃を受けてるだろうな」

「そんな！？だって、この森には結界が・・・！」

現状を見る限り破られたのだろう。とにかく、一度戻らなければならぬ。

「ムーちゃん！！」

「分かってる！！乗れ！！」

先ほど聞こえてきた謎の声を片隅に置き、竜化したムーちゃんの背に乗って、先ほど雷が落ちた場所に向かった。先生たちの無事を祈りながら。

戻った時、その場所は至る所が戦闘の被害でぼろぼろになっていた。木が燃え、地面にはクレーターが出来、家は半分程消滅していた。少し離れた場所では先生が一人で多人数相手に応戦していた。親衛隊の連中が見当たらない。どうやら、引き離されたようだ。先生は魔法を駆使して敵を片付けていくが、数が多い。次第に押され始めている。俺も加勢を・・・！？

「させるか！！」

レイアを討たんとする男にカウンターで切りつけるが、避けられた。咄嗟にとはいえ、申し分ないタイミングで放った攻撃を……。こいつできる！！

「ふむ……。あなたは誰でしょう？ 以前はいなかったようですが・・・」

「この家の新しい住人だ」

最も、今は半分程消し飛んでいるけどな、と心の中で付け加えて、相手を観察する。

そいつは、初老の男だった。先生と同じくらいの年齢だろうか。他のやつらとは違う、ただだけで分かる上質な神父服。およそ戦いに向いてないような姿だが、それはフェイク。向かい合っていると圧力が凄まじいし、ナイフを隙なく構えていることから、さっきの奴らとは一線を画してる。

こいつがリーダーか？

「……ムーちゃん。俺は大丈夫だから、レイアを連れて先生の援護に行ってくれ」

「……分かった。気をつけろよ」

ムーちゃんは少し迷ってからそう先生の方へと駆けつけた。彼女も分かったのだろう。こいつは一筋縄ではいかないと。本来なら俺の援護をしたいのだろうが、先生の方がやばい状況にあるし、何よりレイアが一人になってしまう。先ほど、一直線にレイアの命を狙いに来たことから、狙いは彼女だ。誰かが守らなければならない。

緊迫した空気が、場を満たす。隙のない構え、こちらを圧倒する気迫。向かいあうだけで、怖気づきそになるのを必死に抑える。

———えい、男は度胸！！

先に動いたのは俺だった。地面を蹴り、爺さんに襲い掛かる。同時に、相手も大きく踏み込み、迎撃する。

俺達の衝突は、空気を震わせた。

目にも物を見せてやる(前書き)

修正しました

目にも物を見せてやる

辺りに響き渡る凄まじい剣戟の音。何度も刀を走らせては受け止められ、ナイフで急所を狙われては刀で受け流すを繰り返した。こいつの攻撃は、避けれない。ガンダールヴと魔力で加速したスピードについてきやがるのだ。しかも

「雷の暴風!!」

「又オオ!？」

風を纏った雷の光線が、地面を抉り取った。

この爺さん、至近距離で唐突にほぼ無詠唱魔法を撃ってきやがる。こちらにも、念威魔法で防ぐが、その一瞬で出来た隙を寸分違わず狙われる。何とか急所ははずしているのだが、徐々に劣勢に陥っていく。こいつ、やっぱり強い。というか、あのレベルの魔法をほぼ無詠唱って……。

このままでは埒が明かないので、相手を思いっきり蹴飛ばして、更にその反動で自分も間合いを取った。油断なく相手を見据え、アンサートーカーで相手の次の行動の答えを探り続ける。どれだけ答えを見つけても、それを超える攻撃をしてくるこいつはマジ強い。さて、どうしたものか。

「……何故あなたは悪魔を守るのですか？」

「妹分を守るのに理由なんているのか？」

「しかし、彼女はこの世には在ってはならない存在です」

「はん、たかだが、紫の眼ってだけでそこまで言うんだったら、おたくの神様は随分と心が狭いな？」

明らかに、こいつらが信仰するのはスーさんじゃないだろうな。

レイアをぼろくそ言ってくるこいつにイラッとした俺は、神（笑）をけなすことで挑発した。これで、我を失って、攻撃が単調になってくれれば活路を見出せる・・・かもしれない。

だが、予想外にも相手はこちらをマジマジ見つめて、ついで同情の視線を向けてきた。何この人。ムカつくんですけど。って、俺が我を失ってどうする。

「どうやら何も知らないようですね・・・」

はあ？先生ほどではないが、少なくとも俺はお前よりはあの子のことを知っているつもりだぞ。

「そこをどきなさい。無関係の人間を襲うほど私たちは落ちぶれていません。私たちの狙いは悪魔と魔女なのだから」

いきなり何を言ってるんだこいつは。馬鹿なの？死ぬの？それに、俺と彼女達が無関係だって？はっ、笑わせるな。

「なおさら駄目だな。まだ日が浅いとはいえ、家族を売るほど俺は落ちぶれちゃいないよっと!!」

そう宣言してから、俺は念威魔法で地面を巻き上げ、砂埃に身を隠す。塞がる視界。サバイバルのおかげで気配というものを察知できるようにになった俺は、迂回して背後を取る。

「であ!!」

「ふっ！」

だが、どんぴしゃで投げつけられたナイフを受けたことで、勢いを殺された。

「あくまで、敵対するというのはなら、残念ですが本気で排除させて頂きます」

圧力が増した。まじかよ。あれで、本気じゃなかったのか!?

「雷の暴風!!」

何の予備動作もなく放たれた『雷の暴風』は、宙を舞う砂を吹き飛ばし、しかし俺には向かってこなかった。

「なっ!？」

その光景に咄然とした。吹き荒ぶ風を纏った雷は、術者自身に向けられたのだ。そのまま爺さんは、風と光に飲み込まれ——

「『疾風迅雷』と呼ばれている、その所以をお見せしましょう」

——なかった。そこには、風と雷を纏った爺さんが立っていた。

「術式兵装!？」

マギア・エレベア
闇の魔法…術式兵装という魔法がある。魔法を取り込み、その魔法の持つ性質を発現する、不死の魔法使いエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが編み出した禁呪。

時代的にまだ彼女は生まれていない（先生の授業で知った）ので、これは彼独自で編み出した別の魔法ということになる。

———考えることは皆同じってことか！！

視た感じ某不良霊能探偵漫画の三つ目妖怪が、黒龍を喰ったような状態だ。動揺している間に、爺さんが消えた。いや、目にも留まらぬ速さで駆け抜けてきた。初めの一步でトップスピード！？

「その若さで、この強さ。実に見事です」

「くっ！？」

首を狙ってきたナイフを一步どころか二歩も三歩も遅れてギリギリ逸らしたが、体が痺れた。体に帯びている電気が、武器を伝ってくるのだ。

「が、甘い」

体を思いつき蹴飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「あなたの攻撃にこちらの命を奪うような意志が感じられません。急所を狙った攻撃が来ません。無意識かどうかは知りませんが、相手を殺さないようにしているのですね。」

痺れを残したまま、刀を支えにして立ち上がる。だが、身体に力が入らない。

「それは美徳ではありますが、しかし、それでは私に勝てない。脅威も何もない攻撃で止まるほど私達は甘くありません。例え敗れても再び機会を窺い殺しに来るでしょう」

爺さんの言葉には、教会以外のレイアを狙う存在も含まれていた。爺さんの言うとおり、俺は人間を殺すことに抵抗がある。いや、殺せない。それが例え敵でもだ。動物の命を奪えるくせに、人間はダメなのだ。元の世界の強い倫理観が俺を強烈に縛り付ける

戦闘において、格上相手に殺さないように心がけて戦うことは自殺行為に他ならない。本来の力を出せないからだ。

本気を出すというのは、相手の身体のことなど、一切心配しないこと。

全力入れて、仮に死んでもそれを受け入れられるだけの度量があること。

だが、俺は人間を、人の形をした存在を殺せない。

だけど

「・・・それが・・・どうした」

以前、チューダムにも言われたことがあった。

彼女を守ることは、世界を敵に回すということに他ならない。

容赦をするというのは許されない。躊躇をすることは許されない。襲ってくる敵を殺せ。

その仇を討とうとする者を殺せ。

彼女を利用しようとしている敵を殺せ。

生かせば、再び襲ってくるぞ。

だから、殺して殺して殺しつくせ。

敵がいなくなった時初めて安らぎを得ることが出来るのだ。

血に塗れる。

一生をかけても償いきれない罪を背負え。

彼女を守るということはそういうことなのだ。

だから、もう一度聞く。

『それでも、お前は彼女を守れるのか？』

あの時、俺は――――

現実に意識を戻す。

「爺さんみたいな老いぼれを殺すなんて目覚めの悪いだろ。ていうか、爺さん程度に本気を出す必要なんてないね」

「・・・そうですか。ならば主の御許へ逝きなさい」

どれだけ強がっても相手は俺よりも強い。

経験に裏打ちされた勘と洗練された技術、魔法と体術を流れるように繰り出してくる。全てが俺を上回っている。それでも、俺が今生きているのは能力のおかげだ。だが、術式兵装によってそれさえも及ばないレベルになった。このまま、ズルズルと戦っていても押し切られるのは時間の問題だ。

致命傷にはならずとも、際どい傷が増えていく中で頭を働かせる。

俺がこの爺さんに殺さないで勝つには、殺さないで済ませるには、爺さんより強くなければならない。ならば、アレをやるしかない。だけど、一度も試した事のないぶっつけ本番。

———できるのか？

そう自分の中の弱気な心が尋ねて来たが俺は跳ね除けた。それが出来なければ死ぬだけだ！！

やることは決まった。後は、行動に移すのみ。

「百重千重と重なりて・・・」

激しい攻撃の中であっても尚、その詠唱が聞こえてきた。最初の節を聞いただけで、戦慄が駆け抜けた。

『千の雷』

上位古代語呪文。幾千もの雷が連なり、共鳴し、増幅して敵を討つ人間が放つ人間による天災。立ちふさがる障害全てを殲滅する。その威力は天然の雷を遥かに凌駕する。

やっばー！！

俺は急いで魔力を収束し、世界を支配する法則に穴を開ける。念威魔法の前段階だ。ここに、とあるイメージを叩きつけられただけだ。イメージ次第で何でも出来るのが念威魔法の真骨頂。ならば、俺がやろうとしていることも、不可能ではない！！

イメージするのは常に最強の自分。

あの弓兵はいいことを言った。元の世界で俺は常に願っていた。こんな力が俺にも欲しい。こんな世界で生きてみたい。俺もこんな主人公になりたい。厨二病？何とでも言え。俺はつまらない現実に絶

望していたんだ。唯一スーさんと話せる時は違ったけどな。それでも俺は渴望していた。

——俺は誰よりも何よりも最高で最強の男でありたいと

別に俺は自分が嫌いなわけではない。かつこ悪くても、情けなくとも受け入れるさ。それが俺だからな。だけど、俺はそうありたいと願った。だから、俺は世界に穴を開ける。イメージを叩きつける準備はとっくの昔に出来ている!!

法則を歪めろ。理想で塗り固められた俺を世界に示せ!!

「千の雷!!」

同時に相手は千の雷を放ってきた。全てを滅する光の槍。

「————!!!!!!」

脳を駆け巡る激しい頭痛と共に、カチリと何かがはまる音がした。

Side バハムート

「まだ、この森にいたんですか、邪竜」

「ふむ、手間が省けて助かる」

「一人一匹ってか？」

少し離れた場所で戦闘を繰り返しているカズキを横目に、眼の前の奴らを見据える。あの時は不覚を取ったが、今回はそういかない。投擲剣の伶俐な男、大槌のがっしりした偉丈夫、そして包帯を全身

に巻いた男。

「クラウドさんを相手に戦うあの男、すごいですね」

カズキたちが戦っているほうを見て、何やら感心している怜悯な男。当たり前だ。普段は情けない所が多々目立つが、あれでも俺のご主人様なんだから！！

「しかし、最強の名を欲しいままにしています。いくらあの男が強くても、彼には適わないでしょう」

「けっ、カズキが爺にやられるかよ。それより、自分の心配しな」

そういうや否や、俺は相手に突っ込む。

不安はある。事実、あいつは今窮地に立たされている。だが、あいつは大丈夫だといったのだ。なら、俺はやるべきことをやるだけだ。

「その言葉、あなたに返しますよ」

相手も八本の剣を構え、そう応えた。他の二人もそれぞれの得物を構える。俺の役割は、フィリスとレイアの二人を三人の攻撃から守ること。そうすれば、二人は十分な威力の乗った魔法を放てるだろう。レイアには必要なさそうだが。まあ万が一って奴だ。

「前みたいに尻尾を巻いて逃げないのか？」

「その必要は全くないな」

俺は三人をブレスや爪、尻尾などで牽制しつつ、足止めしながら軽口を叩く。そもそも、あの時逃げたのは、色々と混乱して上に、意地でも生き延びなければならぬ理由があったからだ。

「風の精霊さん！！力を貸して！」

レイアの言葉に呼応して、風が渦巻き敵を切り刻む。

一緒にいて分かったことだが、レイアには呪文が必要ない。ただ、魔力を分けてお願いすれば勝手にやってくれるのだ。全ての精霊に愛されているレイア。魔力量も底が知れないほどあるので、戦闘中に尽きる心配もない。しかも、どんな魔法でも少量の魔法で高威力をたたき出すので、魔法使いに喧嘩売っているとしたか思えない。大体、上位古代語魔法を無詠唱で放てるとか、存在自体が反則だ。

「氷の鏡盾・・・」

今度はフィリスが魔法を、静かに唱え終えた。出てきたものは数十枚の氷の鏡。それが一瞬で相手を取り囲み、ドーム状に相手を閉じ込める。そして、

「光の精霊さん、あの鏡に攻撃して！」

レイアがそういった瞬間、光がドームの中で乱反射した。閉じ込められ、避ける術のない彼らは一瞬で倒れた。まさに瞬殺。以前俺が手こずったのが、間抜けみたいだ。

「殺したのか？」

「いいえ。気絶しているだけです。でも、当分は起きないと思います」

そうやってこちらに微笑んでくるレイアに、少しドキッとしてしまった。眼の光が、いつものような能天気なものではなく、どこことな

く大人びていた気がして・・・

「?どうしました?」

だが、もう一度見た時は戻っていた。気のせいだったのか?

ドガアアアアアアアアアアン

俺の思考は遮られた。カズキが戦っていた場所に、おびただしい量の雷が降り注いだからだ。辺りが、巻き上げられた砂埃で覆われる。

「カズキ!?!」

一瞬嫌な想像が頭をよぎる。頭を振って振り払い、二人を翼の中に隠し、警戒する。砂煙が晴れ始めた頃、一つの影が現れた。

S i d e o u t

状況が次々に悪化していくのはこの世の真理（前書き）

修正しました

状況が次々に悪化していくのはこの世の真理

何かが、ストンとあるべき場所に収まったような感覚。

噛み合ってなかった歯車がかみ合ったような感覚。

歯茎に挟まっていた食べかすがうまく取れたようなときの爽快感。

それ以上に体と精神を駆け巡るこの全能感は一体なんだろうか!?

世界を置き去りにし、俺は加速した。

迫りくる幾本の雷を、刀で真っ二つに切り裂く!!

「ソイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

割れた雷が地面を穿つ。が、俺は無傷だった。感電もしていない。それよりも早く振りぬいたから。

「なっ!」

そのまま、驚愕に目を見張っている爺さんとの距離を一瞬で詰めて、峰で相手を昏倒させる。

砂埃が晴れてきた。そこで俺は感慨にふける。

「ふー、うまく成功してくれてよかったあ」

安心したら力が抜けた。いや、フラツとしたから血の流しすぎか? まあ、何でもいいか。心地のいい疲れによる清々しさに身を任せた。

俺が爺さんに対抗できていたのは、修行の成果もあるが、大半が能力のおかげである。だが、能力を使いこなせていると自惚れるほど、俺は愚かではない。クジの数字だけ得た能力はあくまで『使える』ようになるっただけだ。本来の使い手たちのように正規に手にしたものではない。

使い魔契約なんかしてないし、禁忌を犯して真理の扉を開いてもいい。心臓が止まる事態なんて論外だ。当然俺は忠義の騎士などでもない。

『使えること』と『使いこなせること』には天と地の差があるのだ。つまり、俺は本来の使い手ほど完璧に使いこなせていなかったのだ。いや、修行のおかげで七割程度力を引き出せていたという自負はある。だが、その状態でも爺さんの攻撃をギリギリ防ぐのが精一杯だった。

ならば、完全に使いこなせれば？

つまり、先ほどの戦闘で俺がやったのは、念威魔法による能力の完全掌握。全ての能力を極限にまで無理矢理引き出した。これで、せいぜい互角かと思ったのだが予想外のことが起きた。それもいい方向に。

何故か能力の効果が倍増したのだ。・・・違うな、相互干渉と言えバいいのだろうか、能力がそれぞれ共鳴し、互いが互いを高め合

い、感情の高ぶりによって更に影響を受けた。……いや、この言い方もなんかしっくりこないな。

まあ、とにかく身体に馴染んだ。今はそれだけでいい。確認は後だ。爺さんは魔法を放った時点で勝敗が決まったと思ったのか、ほんの少し気を抜いていたので、その隙を突いて簡単にのすことができた。たとえば、油断していなくても勝てた気もする。……最後はあっけなかった気がしないでもない。

それが、さっきの詳細だ。そんなわけで、気絶した爺さんを引きずってムーちゃんたちと合流することにした。

「にしても、やっぱりリスクがあったかぁ……」

ぶり返してきた鈍く痛む頭を我慢し、目から流れる赤い液体を拭いながら、呟いたその声は一陣の風によって誰の耳にも届くことなく流されていった。

「大丈夫ですか、カズキさん!？」

「おま、ぼろぼろじゃねえか!!」

レイアとムーちゃんはこちらの姿を確認すると、顔色を変え一目散に駆け寄ってきた。そして、すぐに傷を治療してくれた。

「それより、こいつらどうする？」

錬成した縄で縛りつけ、魔法媒体と思われるナイフは全部預かった。これで、こいつらは魔法を使えないだろう。

「いっそ殺しちゃえよ」

いやいや、ムーちゃん。それは酷くないか？

「だ、駄目です！」

レイアも反対の声を上げた。

「確かにこの人たちは森を荒らしましたが、だからといってそれはやりすぎだと思います！！」

「けどよ、今回は何とかなったけど、万が一ってこともありえただんぜ？」

ムーちゃんが、諭すように言う。彼女は、今まで人間に追われてきたから、人間の執念というものを甘く見ていないのだろう。レイアは反論できないのか、俯いてしまった。それでも何か言葉を搜している。そこに、追い討ちをかけるように言葉をつなぐ。

「それに、生かしたまま帰せば、カズキや俺の情報が伝わっちゃう。そうなれば、今回みたいに、対策とられるぜ？ 結界も破れちゃったしな」

その通りだ。おそらく、彼らの作戦は親衛隊を彼女と先生から遠ざけて、そこを叩くことだったようだ。うまくいったのは、彼らが親

衛隊のことを良く知っていたからということになる。なるほど、情報
の恐ろしさだな。

「でも、・・・でも彼らにだって待っている家族とか・・・」

レイアが駄々をこねる子供みたいになっている。目にいっぱい涙
をためている。その姿を見て、決めた。うん、女の涙は武器だね。
それに、一つ思いついた良いアイディアもある。

「俺も「くつくつく・・・」」

レイアを支持するために口を開こうとしたら、誰かに遮られた。

「相変わらずあなたは優しいですね、レイア」

それは、俺がのした爺さんだった。視線をレイアと先生に向ける。

「久しぶりですね『幻惑』、相変わらず憎たらしい顔です」

「そっちは、しばらく見ないうちに随分ふけたじゃないのかい、『
疾風迅雷』？」

どうやら、二人は知り合いのようだ。ていうか先生にも二つ名ある
んだね。

「それはお互い様ですよ。あなたたちが引きこもってから四十年も
経っていますからね。老けもしますよ。とはいえ、そっちの悪魔は
変わらない様で」

「は？」

レイアを横目で見ながらそうのたまった。・・・今何て言った？

四十年？変わりない？誰が？俺の頭がこんがらがった。今の発言の意味が分からない。見れば、レイアもムーちゃんも同様のようだ。

「少年。あなたは私たちが彼女を殺しに掛かった理由が『紫の瞳だから』って言いましたよね？」

ちんぷんかんぷんな話の流れにおいていかれていた俺に、話しかけてくる爺さん。少年って年でもないわ！と突っ込む余裕がない。

「本当に私たちがその程度^{……}の理由でそんなことをすると思っているのですか？」

——ドクンッ

心臓が大きく跳ねた。我知らず息苦しくなった。なんだこれ？一体何の話をするつもりだ？

「悪魔……いえ、私たちがレイアを狙っているのは——」

「彼女が何万もの魂を閉じ込めているからです」

——その声は何処から降ってきたのか

異常な気配にレッドアラートを鳴らす生存本能とこれまでに感じたこともない寒気に従い、反射的に顕現させた障壁と両腕に集中させたほぼ全魔力で防ぐべく構えた。

——そして全てが蹂躪された。

「ん？今のでしとめたと思ったのですがねえ」

・・・何とか防いだ。辺りを見渡すと生い茂っていた緑は既になく、ただ焼けた大地に現れた人影は、意外そうにそういった。

そうだ、皆は？

「カズキ！！」「カズキさん！？」

ああ、良かった無事だったか。声が聞こえてきた方に振り返ったら、何故かバランスが崩れ、その場に倒れてしまった。

「あれ？」

その時になって、自分の体に違和感を感じた。立とうとしても、左手が地面についた感触がないのだ。

「え？」

不思議に思って左腕を見ると――――

.....!!!!

何も無かった。

その事実を認識したと同時に、想像を絶する熱さが左腕があつた場所から広がった。

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱いアツいアツい
アツいアツいアツいアツいアツいアツいアツいアツいアツい
アアアアアアアア——ッ！！！！！！！！

脂汗が止めどなく流れる。傷口から伝わる熱さに、齒を食いしばりながら必死に耐える。

「カズキさん!!」

「カズキイツ！！」

レイアに支えてもらい、ムーちゃんが俺を守るように、新たな敵の前に立ちふさがる。

「待っていてください。今、傷をふさぎます!!」

レイアが俺の傷口に癒しの光をあてがう。少しずつ、痛みが引いていき、呼吸も安定してきた。傷は焼けていたので血がそれほど流れていなかったのが不幸中の幸いだ。少し余裕が出てきた。

「ふうむ、やはりあの方のような威力は出せませんでしたかあ。しかも、一発の使い捨て・・・これでは使えませんねえ。まあ、今後の課題ですねえ」

先ほどから、間延びした口調で、ぶつぶつと呟いている男。銀髪銀眼の見た目麗しい男だ。右手には複雑奇怪な形状の杖を持ち、なにやらいじっている。

「貴様、生きていたのか!？」

先生が鋭い声を上げ、闖入者に詰問した。

「ふっふっふ。天☆才たる私があの程度のことで死ぬはずがないじやあないですかあ。とは言ってもお、動けるようになったのはあ、最近ですけどねえ。あのゴタゴタのおかげでえ、石が空気蒸発してしまったのは残念でしたけどお。また、作れば良いんですけどねえ」
「石……? まさか、『生命の水』^{アクア・ウィタエ}か!？」

「オーイエース」

アクアウィタエって聞いたたら、あの人形サーカス漫画の『柔らかい石』を思い出す。丁度奴さんも銀髪銀目だし。いや、もしかしてそういうことなのか?

「それにしてもお、久しぶりに会った父親なのに、喜ぶどころか落胆するのは酷いんじゃないですかあ？」

「……はあ? 今なんていった? こいつが先生の父親? こんな若いのに??」

「はっ、誰が父親だ」

そう吐き捨てる先生の顔はありありと不快感が刻まれていた。

「まあいいですう。今日の目的は親子の感動の再会じゃあないです

しい。いやあ、ある意味ではあ「主の御許へ逝くがいい！！千の雷！！」ううん？」

突如、幾本もの雷の奔流が銀髪の男に向かっていく。魔法を使ったのは、先ほど俺がのした爺さんだ。さっきの攻撃で縄から解放されたいらしい。ていうか、どうしてナイフを持っている、さっき全部回収したはずだぞ！？

『千の雷』は、男に直撃した。

「君もまた随分とお酷いことをしてくれませうねえ、クラウド君」

しばらくして、砂埃の中から現れた男だが、爺さんはそれで倒せるとは思っていなかったのか、既に次の行動に移っており、ナイフで切りかかった。

「ふう、これじゃあ落ち着いて話も出来ないですう」

それに対して男は、ため息をついて、指を鳴らした。そして、影から現れた巨大な手が爺さんを殴り飛ばす。爺さんは空中で体制を整え、構える。視線の先には手から先が徐々に影から這いずり出てきていた。

「チッ、悪魔ですか」

「その通りであり、その通りではないですねえ。こいつは私が呼び出した悪魔を更に改造したものですねえ。そんじょそこの悪魔より強いですよお？」

現れたのは、ツギハギだった。全身の至る所に縫い傷があり、いかなれば悪魔版フランケンシュタインといった容姿だ。顔は三つの目

が縦に描かれた布で覆われており、下半身は影の中に、顕現している上半身は鎖でつながれていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいんですよ。少しい、大人しくしていただくさあいねえ」

その言葉が合図となり、悪魔から闇が放たれた。そして気付いたら、地面に叩きつけられ、闇に拘束された。何をされたのかさっぱり分からなかった。魔法ではずそうにも、その魔法が発動しない。魔法を封じられた!!

周りを見ると、レイアと先生だけが拘束されていない。

「これで、落ち着いて話が出来ますねえ」

そういつてこちらに向き直る。

「さてえ、少年。何も知らないあなたのために、説明の続きといきましょうか。つと、その前に・・・」

何かを思い出した男。レイアに近づいていく。

「お前！レイアに何をするつもりだ!!」

俺の叫びを無視し、そのまま近づいていく。そして、震えるレイアの前で止まり、手を広げた。

「ああ、レイアア!!私の可愛いもう一人の娘え。会いたかったですう!!」

そう高らかに吼え、レイアを抱きしめた。こいつ、さっきから言動がおかしくないか？先生やレイアを娘といったし、意味がわからん。

「や、いや！！放してえ！！」

レイアは拒絶し、腕の中で暴れて男を押しつけた。

「むむう。娘が二人とも手厳しいですう・・・っておやあ？」

何かに気付き、不意にじろじろと彼女を見始めた。そして、納得したように手を合わせてこういった。

「レイアの記憶が、ほとんど封印されているようですねえ。まあ、大方フィリスでしょうけどお」

記憶が封印されている？何のために？さっきの魂がどうのとかの話と関係しているのか？

「じゃあ、あなたの役割も――」

「レイアから離れなあ！！」

先生から放たれた氷の嵐が男を襲うが、悪魔によってたやすく防がれた。

「おやあ？どうしましたかあ？もしかしてえ、フィリスも父さんに抱きしめられたいとかあ？」

「戯言は良いんだ。さっさと死にな」

そういつて、氷系統の魔法を連発する。その全てを悪魔が防いでいく。

「光の精霊さん、お願い!!」

そこに、レイアが光の魔法を放つ。光は男の周辺に落ちていた氷に当たり、一気に乱反射をする。だが、悪魔が闇を展開してこれも防いでしまった。

「実の娘にはあまり手荒なまねをしたくなかったんですがあ……まあ仕方ありませんよねえ？」

男が酷薄に嗤うと、改造悪魔が防御に使っていた闇で二人を拘束した。

「くっ……!」

「うう……!」

「まったく、あまり世話をかけないでください」

そして、男はレイアの頭を掴み、こう言った。

「とりあえずう、レイアには全てを思い出してもらいますかねえ」

「やめ——」

「やゝめゝなゝいゝよゝ」

————パキイイイイイン

何かが割れるような音がすると同時に、レイアが悲鳴を上げる。

「あ、あああ、あああああああああああああああああああ
ああああああああ!!」

レイアの様子を見て俺は目の前が真っ赤になった。

「レイアになにを……!!」

「別にい、何もお。ただ、思い出してもらっただけですよお」

「貴様、よくも……ッ!? がはぁ!!」

「おやぁ?」

「先生!？」

先生がいきなり、血を吐いた。

「ああ、この森に結界を張っていた反動ですか。そうですよねえ、ただでさえ負担が大きいのに、無理やり術を破られたら術者に反動は帰ってきますからねえ」

「こ……こんな時にい……!!」

ああ、困りましたねえ……とほざく男を、咳と吐血のせいで、うまく話せないのか、先生はただ睨むだけだ。状況は次から次へと悪くなっていく。手詰まりだ。

いや、親衛隊の連中が来ればまだ……

「ああ、ちなみに、この子の使い魔はここにいるので援軍は期待できませんよ? 流石に彼らの力は侮れませんからね。隙を突かせてもらいました」

俺の考えを読んだかのようにそう言って、虫かごのようなモノを取り出した。中には、親衛隊を模した人形が入っていた。まさか、捕まったのか!？

「何の下準備もなく来るはずありませんよお。というわけで……」

「おや？」

「―――万事休……何だッ!？」

「―――ッ!！」

唐突に、レイアの周囲に黒い風が巻き起こった。徐々に勢いを増していくそれは、彼女を守るように吹き荒れる。そして、

「な、なんだあれ……」

俺の目には、彼女の足元で這うように四方八方に広がっていく闇が映っていた……。

始まりの物語の準備に取り掛かろう（前書き）

修正しました

始まりの物語の準備に取り掛かろう

Side レイア

夢現の中ただ堕ち続ける・・・

必死にもがいても・・・

大声で叫んでも・・・

限界まで手を伸ばしても・・・

私の体は捕らえられる・・・

私の声は悲痛な声でかき消される・・・

私の手はどこにも届くことはない・・・

絶望と己の罪を嘆くこと・・・

それが・・・それだけが私に許されたこと・・・

私は一人・・・

『渦』の中心に立っていた・・・

涙を流すことさえ許されず・・・

伸ばした手は誰の手にも届かない・・・

Side out

レイアの足元から徐々に広がっている闇は、その先にあるものを全て飲み込んでいく。土も、草も、樹も、水も、火も、空気も、動物も何もかもを。そして、取り込まれたそれは、闇の中で混ざり、一

つになつていった。

「なんだよ、これ・・・う」

俺は吐きだしてしまった。胃から逆流してきたものが喉にやけるような痛みを与える。

・・・声なき者の声・・・
・・・魂の悲鳴・・・
・・・生命の苦悶・・・

俺のアンサートーカーは、その全てを理解した。してしまった。ああ、何て歪で不快で最悪で凶悪で極悪で醜悪なものなのだろうか、アレは!!

「今すぐアレを止めろ!!」

俺は銀髪を怒鳴りつけた。発動したのがこいつなら、止められるはずだ。

「・・・何故・・・術式はまだ・・・もしかして・・・神樹が・・・聖域・・・」

だが、男は俺を無視してぶつぶつと何かを呟いているだけだった。

「・・・そういうことですかあ」

一通り考え抜いて、答えを得たのか、うんうん頷いたと思ったら、何の前ぶりもなくこっちを振り向いた。そして、

「少し確認したいことができましたあ。とりあえずう、これが落ちていたらあ、また来ますねえ？このまま、ここにいたら巻き添えになりますしい」

はあ、今なんていった？また迎えにくる？それってどういうことだ・
・・？その言葉を正しく理解できなかった、というか認識できなかった。脳の情報処理能力を大幅に超え、思考停止に陥った。そして、その言葉の意味を正確に理解した時には、男は魔法陣の描かれた紙、おそらく転移符を取り出していた。

・・・・・

ふざけるなああああああああああ！！

あの野郎、場を乱すだけ乱して、自分だけトンスラこくつもりか！
？俺たちの拘束を解かずに！？って、こいつ敵だから当然だね！！

どうすればいい！！何をすればこの状況を打開できる！？

こちらの事情などお構いなしに広がっていく闇を視界に入れながら、必死に頭を動かせる。そのとき、男の腰に括られているものが見えた。

「その手があったあ！！」

腰にあるあの籠は親衛隊の皆が閉じ込められているものだ。あれから皆を奪回すれば。ならば、この拘束をはずそう。俺を拘束しているものは闇、つまり本来は非物質的なものだが、今は物質化している。だったら、手で掴んでナイトオブオーナーによって支配できる。アンサートーカーのお墨付き！！

早速行動に移った。残された右腕で発動する。

「よし！！解けた」

俺が支配した瞬間、それは空気に溶けるように消えていった。

「おやあ？」

「ふっ！！」

親衛隊の皆を返して貰うぞ！！腰に引っ掛けてある籠を取り戻すべく、襲い掛かった。影から刀を取り出すのはそれだけで時間のロスだ。だから、俺は爺さんから取り上げたナイフを投げつけた。

ナイフは寸分変わらず、転移符を切り裂いた。これで、ある程度時間が稼げるだろう。

「むう、邪魔しないでください」

男の言葉を見無視し、今度は影から刀を取り出し切り掛かる。一步遅れてツギハギ悪魔が手を振り回してきたが、屈んで避けた。そして、横に振りぬいた一閃は見事に籠を切り裂いた。同時に再び拘束された。だが、目的は果たされた。

籠が壊れ、チューダムを筆頭とした親衛隊が外に解放された。

「しまったですう」

本当に焦っているのかとは思うほど、気の抜けた声を発したがもう遅い。十一匹の獣を超えた獣が彼を包囲する。いくらあの悪魔が強

くても、親衛隊全員を相手にして勝てるとは思えない。

「さっきは不覚を取ったが同じ失態はおかさないぞ、アレイスター」
「・・・これは少年を甘く見すぎていましたかねえ。どうやって『閨錠』を外したんですかあ？」

チューダムにアレイスターと呼ばれた男が俺に聞いてきた。教えるわけないだろ。さっきと同じように拘束、『閨錠』とやらを外し、先生とムーちゃんを解放した。爺さん？爺さんはほら、敵だから。気を失っている先生を少し離れた場所で寝かせ、武器を構える。

年貢の納め時ってやつだ。だが、こんな状況だというのに敵は忍び笑いを漏らしていた。

「普段なら面倒なことになりましたあと溜息ものだったんですけどお、今回に限ってはそれは悪手ですよお少年」
「は？」

その言葉の意味をすぐに悟った。地を這うように広がっていた闇が突如活発に動き出した。手のようなものを形成したと思うと、いきなりこちらを掴みかかりに来了。いや、正確に言えば親衛隊の皆を、だ。

何故だ？あれにそんな機能は無いはずだ。現に俺やムーちゃんとかには向かってこない。

これによって包囲は崩されたが、それどころじゃない事態目を見張った。闇と繋がっている手は際限なく伸び、親衛隊の面々を狙う。その速さは凄まじい。どうして、彼らだけが狙われるのか、アンサーカーでもその理由を見出せない。もしかして着眼点が違うの

か？

「やっぱりこうなりましたかあ。まあ好都合ですけどねえ」

こいつは事情を知っているようだ。だが、問いたただす時間などない。時間が経てば経つほどその数を増やしていく手。確実に捕らえようと挟み撃ちに追い詰めていく。このままでは、捕まるのは時間の問題だ。

「今助けに・・・」

「させませんよお、ディアボロスう」

「そこをどけえ！！」

「だが、断りますう。こんなチャンスはそうそう無いですからねえ」

助けにいいこうにも、悪魔が邪魔をしていけない。さっきは逃げるとか言っておきながら、今は親衛隊を一網打尽にするつもりでいやがる。ムーちゃんも足止め喰らっている。早くしないと！！焦りが焦りを呼び、攻撃は単調なものとなっていく。遂に二人揃って捕まった。俺は悪魔の手に、ムーちゃんは『闇錠』に。そして、杭のように鋭く変化させた手を突きつけられた。

「少年は少し厄介ですからねえ、今ここで始末を・・・」

「させん！！」

氷の槍が悪魔の腕に刺さった。悪魔の手が緩み、解放された。フィリスさんは未だに気を失っている。じゃあ、他にこんなことが出来るのは・・・

「今だ！！」

その声に従い、目を丸くしているアレイスターを刀で・・・刀で・・・

「くそっ!!」

——貫けなかった。

もしかしたら死んでしまうのでは？そんなことを考えるべきではないのに、その思いが行動を制限する。その隙を見逃すほど敵も愚かではなく、あっけなく地面に押さえ込まれた。

「残念でしたね少年、しかしその甘さは命取りですよお？」

「全くだ、そしてお前の余裕もな」

再び飛来してきた氷の槍がアレイスターの胸を貫いた。その方向に目を向けると、チューダムがこちらに手を向け、ニヒルに嗤っていた。

「この馬鹿の性格など把握済みだ」

どうやら、俺のことなどお見通しで、それすら計算にいれての一連の流れだったらしい。つまり、『俺を助ける』↓『俺が囷になるだろう』↓『チューダムの攻撃』↓『チェックメイト』。

「ぐふっ・・・またあ・・・あの時と同じ場所をお・・・」

「地獄で懺悔しろ」

「ふふふ・・・甘い・・・甘いですよお」

流れ出した血が地面に魔法陣を描き出す。

「この程度で・・・この程度で『知』のアレイスターは死なないぞお！地獄に行くのは貴様らだけだぁ！！はっはっはっはっはっはっはっはっは！！！」

壮絶な哄笑と同時に光に包まれて、姿が消えた。後には、静寂が残る。逃げられたようだ。

「逃がしたか」

「チューダム、助かった・・・」

そこで、今の状況を思い出した。チューダムにあいつを攻撃できるほどの余裕なんてあったか？嫌な汗が背中を伝う。ぱっと、振り向いた。

視線の先の光景に絶句した。既に全員闇に取り込まれていた。

「どうもあの籠に力の大半を吸い取られていたようだな。逃げ切るまでの体力が失われていたようだ。全く、我ながら情けない話だなあ皆？」

その言葉に親衛隊の皆は苦笑する。だが、言うほど疲れているようには見えない。それはつまり

——俺のせい？

あの時俺は殺されそうになっていた。もし、皆がその光景をみて動きを止めてしまったならこの状況はありえない話ではない。なんだからで、彼らはいつも俺の心配もしてくれていた。

もはや無事なのは、かろうじてチューダムだけだった。チューダム

にしても、既に片足が取り込まれており、もはや助からないだろう。
だからといって、指を加えて見てられるかあ!!

俺がふがないせいで捕まったというのなら、救い出すのは俺の義務だ。親衛隊の救出に掛かる。しかし、

「やめておけ、お前まで巻き添えを食うぞ?」

「黙ってろ。今助けてやる!!」

ムーちゃんも駆けつけてきて、俺に加勢してくれた。だが、闇から引きずり出されることはない。むしろ、沈んでいつている。

「おい、離せ」

「ふざけるな!この中に取り込まれればお前も・・・」

「ふん。そんなことは私たちが一番良く知っている」

何を言っているんだこいつは?ああ、もうさつきから分からんことばっかだ!!くっ、そんなやり取りをしているうちに、チューダムは顔だけになっていた。

「いいから離せ、私たちはただ戻るだけだ。だが、お前たちは違う」
「わけのわからんこと言っていないで、お前も抜け出す努力をしろよ!!」

もう、助けられる可能性のあるのはチューダムだけだ。他はすでに取り込まれた。だから、俺は意地でもこいつを助ける!!だが、片腕だけでは、十分な力が入らない。

「みぎゃ!!」

チューダムが突然俺の手を噛みやがった。魔力を込めて思いっきり。

「しまった!!」

思わず離してしまった。その時、闇がチューダムを取り込まんと膨れ上がった。そして

「この結果は私達の責任であって、貴様が気に病むことない」

「チューダム!!」

「安心しろ。私たちは――」

全てを言い切る前に完全に取り込まれてしまった。最後に笑顔を見せて・・・

「アア・・・ああああああああああああ!!」

助けられなかった・・・。

助けられなかった!!!!

その事実が俺の心にのしかかる。

「カズキ! あぶねえ!!」

茫然自失としていると、ムーちゃんが俺を掴んで、後ろに思いっきり跳躍した。いつの間にか闇が俺の足元にまで来ていたのだ

「ポケットしてるんじゃないか! お前も取り込まれてえのか!!」
「取り込まれる・・・?」

それもいいかもしれない。取り込まれれば俺も・・・

「ふん!!」

「~~~~~っ!!!!!!?????」

いきなり、ムーちゃんに殴られた。今は人化しているがそれでも力は本来と同じなので、結構来た。殴られた箇所がヒリヒリする。

「いきなりなにを・・・」

「何をじゃねえよ!!お前今、くだらないこと考えてたろ!!やめろよ!!そんなことされたら、俺はまた・・・!!」

ムーちゃんが眼にいっぱい涙をためて、すがりついてきた。

「ムーちゃん・・・」

「そうさ。お前さんのやるべきことは・・・ごほっ・・・そんなことじゃない」

苦しそうな先生は爺さんを見てこういった。

「あゝ苦しい。クラウド・・・後の説明任せた・・・」

「・・・・一応あなた達とは敵同士ですが?」

「はっ・・・今はそんな場合じゃあ・・・げほっ・・・ないだろう?このままだったら・・・」

「はいはい。無理はしなくていいです。分かっていますから。このままだと、あの時の二の舞になることくらい」

爺さんは、こちらを向き口を開く。

「説明を始める前に、場所を移動しましょうか」

闇はすぐ傍にまで広がっていた。

全ての始まりは・・・前編（前書き）

修正しました

全ての始まりは・・・前編

ムーちゃんの背に乗って、あの不思議で巨大な樹の生えた湖まで移動した。

少しだけ低空飛行での空の旅を楽しんだ。さっきまで色々状況がごちゃごちゃしていたので、今だけは一息をついた。ムーちゃんの飛行速度は速いので、森の最奥にはすぐ到着した。

湖周辺も生き物の気配は感じられなく、不気味な静けさが場を支配していた。森の生物は迫り来る脅威に気付いて逃げたか、息を潜めて巣に閉じこもっているようだ。

「ここが・・・・・・・・・・ですか」

「ん？」

爺さんが何か言ったようだが、良く聞こえなかった。

「・・・・いえ、なんでもありません。早速はじめましょう」

十字のペンダントを手を持ち、呪文を唱える。ちなみに、全部取り上げていたと思っていたナイフを爺さんが一つ持っていたのは、これだ。あのナイフはこのペンダントに変形できる代物だったので、見落としていたのだ。このときはアンサートーカーなんて発動していなかったのも、迂闊だった。まあ、別に大した問題は無かったわけだし、いいか。

「これから見せるものは、私、そしてフィリスの記憶です。全ての答えはそこにあります」

・・・歌うように・・・

・・・謡うように・・・

・・・唄うように・・・

・・・謳うように・・・

呪文を唱え、術式を形成し、魔法陣を顕現させる。

それは、記憶を共有する魔法。先生の記憶ともリンクし、俺に全ての始まりを見せる。

激しい眠気に襲われて、俺の意識は闇に沈んでいった。

・・・

・・・

・・・

気がつけば、何処かの街に立っていた。見た感じ、町の広場のようだ。中央の噴水にカップルが愛を語りあっていたり、近くで子供たちが遊んでいる。その場でキョロキョロしていると、見覚えのある姿が見えた気がしたので、視線を向けたら教会が目に入った。

「おい、クラウドス！！迎えにきたぞ」

「クラウドスさん」

同時に広場に声が響いた。

声を張り上げたのは、長身の女性とその女性の肩ぐらいの少女。こちらに背を向けているので、顔は分らない。二人とも黒髪なので、恐らく姉妹だと思われる。

しばらくして、教会から一人の若者が現れた。金髪碧眼の見るからに優男といった風貌の男だ。なんとなく爺さんの面影がある。

「迎えに来てくれるのは嬉しいのですが、朝から声が大きいですよ。あの人なんて迷惑そうにこっち見ているじゃないですか」

「いやいや、クラウスくん。それは違うというものだよ？ 私たちのような美女と美少女に見惚れているのさ、あれは」

「あら、照れますね」

「いや、そんなわけではないですから。あの目は明らかにうるさいと言っています。というか何ですか、その口調は？ それにあなたも本気にしない。そんなんじゃない、いつか騙されますよ」

「あら？」

「ひひ、そんな時はあんたが助けてやりゃあいんだよ」

「なっ／＼／＼そ、それもありかも知れませんが……」

「……はっ！！ち、違うんです。今のはその……！！」

「はいはい、あんたがこの子にお熱なのは皆知ってるからね」

「クラウスさん、熱があるんですか！？」

「……」

どうやら、あの男が俺と戦った爺さんらしい。じゃあ、あの二人のどちらかが先生なのだろう。それにしても、あの三人仲いいな……
・ていうか仲いいなあ！？

あるえー？ 先生と爺さん、あの人達敵同士じゃないの？ 何でこんな親しげなの？ 意味わかんない。

三人が移動し始めたので、俺も着いていこう足を動かした。

「え？」

その時に見えた少女の横顔が、レイアと似ていた・・・というかまんまレイアだったので、驚いて足を止めてしまった。

「いやあ、助かったよ。これで、新しい薬が出来そうだ。やっぱり、持つべきものは、強い幼馴染だな!!」

「フィリスが狼の群れを刺激しなければ、あんな事にはならなかったじゃないですか! 私の苦労も考えてください!!」

「申し訳ありません・・・」

「あゝ、女の子をいじめるなんていけないんだ」

「あなたが元凶でしょう! レレイアも泣いたって許しませんによ。一歩間違えれば危ない状況だったんですからね。大体教会の教えでは、無闇に命を奪うことをよしとしていないんでふ」

「・・・動揺が表に出てるけど？」

「うおっほん!!」

あの後、いつの間にか小さくなっていた背に急いで追いつき、無事に後を着いていった。

彼らが向かっていった先は町の外だった。

その時、判明したのは、やはり黒髪の女性が先生、金髪の優男が爺さん、レイアそっくりの子の名前がレイアであること。区別するために、今後は三人のことをフィリスさん、クラウドさん、レイアさんと呼ぶ。

・・・レイアと同じ容姿で、同じ名前を持つこの子は一体誰なんだろうか？瞳の色がフィリスさんと同じ透き通った蒼色であることだから、俺の知っているレイアとは別の人っぽいけど、見れば見るほど重なるんだよなあ・・・。何気ない仕草とかほとんど変わんないし。でもフィリスさんの妹らしいから、やっぱりあのレイアじゃないってことだよなあ。

「まあ、いいじゃん。結局一匹も死ななかつたんだから」

「そういう問題じゃありません！！いいですか、命というものは・・・」

「うだあ・・・また始まった・・・」

「であるからして・・・聞いているのですか、フィリス、レイア！！」

まあ、今結論を出しても仕方がないか。

さて疑問は横に置いておくとして、何故彼女たちは怒られているのか。それは、さっきの手に汗を握る事件にある。

町の外にある森で、薬草を摘みに来た彼ら（十俺）だが、目的の場所に狼さんの群れがいたのだ。若かりし頃の爺さん（若）が諦めて別の機会にしようと、提案したのだが、フィリスさんが『ここまで来て引くのは『幻惑』の名が廃るってもんよ！！』といって、突貫してしまった。

唐突な彼女の無謀ともいえる行動に焦る爺さん。そこにレイアさんが『私も行きます』とノリノリで彼女を追いかけてしまった。ついに、『ええい、後で説教しますからね、二人とも！！』とクラウドさんも参戦。魔法で翻弄し、拳で殴り飛ばしてと大暴れして徐々に、

狼の群れを蹴散らしていき、最終的に一匹残らず追い払ったのだ。

そして、無事に目的のものを確保して、帰還している途中だ。既に日は沈み始めていた。この街は意外と大きいので、外に出たり入ったりするのに時間がかかったのだ。

爺さんはよほど腹に据えているらしく、説教をしながら歩いている。目なんか限界まで釣りあがっている。俺がああ立場だったら嫌だなあと思う光景だった。誰だって隣で暗い声で延々とぶつぶつぐちぐちといわれるのは勘弁だろ？

「じゃあ、あたしたちはここで」

「いつも、私たちのことを守ってくださいあってありがとうございます」

「い、いえ・・・か、神に仕える者として当然のことを・・・」

「神に仕える者として、ねえ？」

「な、何ですか。何か言いたいことでもあるんですか、フィリス？」

「んふふ、べつに？」

フィリスさんはなにやら、クラウドさんを見て目を光らせている。

『チヨロイな（にやり）』という姿が彼女の背後に映っている気がする。

「まあ、いいです。とりあえず、私はもう帰ります。また何かあったら、いつでも訪ねてきてください。教会は、救いを求める者の手をとるためにあるのですから」

そういつて、クラウドさんは、教会の中へ入っていきました。

「さて、私たちも帰りましょうか、レイア。父さんも待ってるし」「はい！！」

二人は笑いながら、帰路に着いた。

それから、景色は何回も流転した。

ある時は、教会の手伝いをしたり、ある時は森で傷ついた動物を癒したり、ある時は三人で買い物に出かけたり、家でのおんびりしたり、町の不良をぶちのめしていたりした。

共通しているのは、フィリスさんが突撃して、レイアさんがそれに続いて、大騒ぎになったのを、毎回文句いいながらも、クラウスさんが助けているのだ。そして、最後にはみんな笑顔で楽しそうにしている。何ていうか、青春してるなあ。

俺はそれを見て、何度も笑ってしまった。そして、元の世界での俺を思い出した。俺にもこうやって馬鹿騒ぎしていた時があったのだと。見ていて懐かしくなり、寂しくもなった。元の世界に大した未来練が在るわけではないが、其れでも友人と別れてしまったのはどこか感じ入るものがあるのだ。

そして、また場面が大きく変化した。

———ドクンッ

その時、怖いような苦しいような、なんともいえない複雑な感情の波が胸の奥でうねりを上げて暴れだす。暖かい気持ちが一気に吹き飛んだ。

———ここだ、ここで何かがあったのだ!!

誰に言われるでもなく、理解した。

記憶を見る限りレイアさんのことはともかく、フィリスさんとクラウスさんは随分と仲が良い。それこそ、今のような殺し合いするような仲になるなど毛頭考えられないほど。ならば爺さんの言ったとおり、全ての答えはここにあるのだ。

街は人々の喧騒で賑わっていた。夜の闇に覆われているというのに、明かりはそこかしこに灯り、人々は歌って踊って騒いでいた。どうやら祭りが開催されているようだ。右を見ても左を見ても人間で溢れかえっていた。現実であれば、相当な熱気の中だろう。

そこには笑顔しかなかった。俺も釣られて愉快にならないでもない。

だというのに、この冷や汗の量は何だ？俺は一体何に脅え・・・いや、これは俺ではなく、記憶の持ち主の感情に感化されているんだ。ということは、フィリスさんか爺さんか？

その時、横をフィリスさんが走り抜けていった。流れる夥しい汗も気にせず、スピードを緩めず一直線に駆け抜けていった。誰かにぶつかりそうになっても、時間が惜しいとばかりにわき目も触れずただ走る。

何かがあったのは明白だった。俺もすかさず追いかけた。全ての真相を確かめるために。

そして、一つの大きな屋敷にたどり着いた。平時なら圧倒されていたが、今はそんなことにかまけている暇は無い。

『やめて、お父様!!』

フィリスさんを追いかける。何かを探すように辺りを見回している
せいか、その足は少し遅くなっている。

『お前は私の最高傑作だ！！はーっはっははははははははは！
術式の調整は完了した！！あとは発動するだけ！！ふはは、はー
っはっはっはっはっは！！私は天☆才だあ！！』

『さっさと始めろ。それと、口調が変わっているぞ』

不意にフィリスさんが壁を叩いた。壁は倒れ、その先には地下に続く階段があった。

『おつとお、これはあ、少し見苦しいものを見せましたねえ。では、早速う。ぽちいとなあ』

ツ！！！！

らせん状に下る階段は未だに先が見えないが、悲鳴が響く。

「レイアッ！！」

フィリスさんは誰の悲鳴か分かったのか、更にスピードを上げる。限界を超えて筋肉を稼働しているせいかな、足からところどころ血を噴き出している。それでも、足を止めない。

『はーはっはっは！！成功です！！これで、あなたの悲願の第一歩になりましたよ！！』

「ふん。これでは使えん」

螺旋階段の先には一枚の鉄の扉があった。少し内側に開いており、そこから光が漏れている。そこから、声が漏れていた。一人は男の声、もう一人はどちらとも付かない中性的な声……という表現がしっくり来るだろう。

『ええ？何でえですかあ？？』

『よく見ろ。暴走している』

『あ、本当ですねえ。って、これでは不味いじゃないですかあ！！』

私たちも巻き添えくりますよお！！』

『だから、使えんといったのだ。制御できないようでは意味がない。まあ、所詮は予備でしかないがな』

フィリスさんが呪文を唱え始める。彼女が唯一できるという攻撃魔法だ。空気中の水分が固まり、二つの氷の槍が形成された。

そして全力で地面を蹴り、扉を蹴破った。

中には、二つの人影があった。一人は黒髪の男。そいつは、さっきいきなり光線を放ってきやがった奴だ。髪と眼の色が違うが。そして、もう一人は、真っ黒なローブのような服装を着た、顔も性別も何も分からない人。というかこいつは

「造物主^{ライフメイカー}！？」

思わず、叫んでしまった。そう、そこにいたのは紛れもなく造物主^{ライフメイカー}だ。原作で始まりの魔法使いだの呼ばれている正真正銘の化け物。こいつがいるということは、『完全なる世界』が絡んでいるのか？

その時、その造物主^{ライフメイカー}がこちらを向いた気がした。まさか、俺が見えてるのか！？嫌な汗が額を伝う。しばらく、じっとしていたがそれ

以外は特に何の変化も無かったので、気のせいだったのだろうか。

「レイアッ!!」

血を吐く様な叫び声に意識を戻した。視線の先には、中心に描かれた巨大な魔方陣と鎖で縛られたレイアさん。

魔方陣が禍々しい血のように紅い光を放つと同時に、レイアさんに刻まれた術式が、応えるようにやはり紅く明滅する。黒い風が彼女を守るように吹き荒れる。

白目を剥き、口から泡を吐きながらひどい形相で苦しむレイアさんを中心に、魔法陣が一気に広がり、そこから闇が凄まじい勢いで溢れ出す。

「ああ、私が思い描いた効果と全然違うですう……。うあああああああああああん……。そんなあ……。またあ最初から作り直しですかあ……。いやあ? でもアレをああして、これを……。って、今は考えている場合じゃあないですねえ。とりあえず、逃げましょう!!」

「させるかあ!!」

「がふう!!……………こ……………これはま
ずい……………ですう……………」

それまで呆然としていたフィリスさんが我に帰り、黒髪の男に氷の槍を放った。魔法は胸の中心を貫いた。が、すぐに転移で逃げられてしまった。

「あんた……………も……………っ!!?????」

フィリスさんはすかさず、もう一人に狙いをつけたが、壁際まで一気に下がってしまった。そして、それは正しい選択だ。記憶でしかないはずなのに、俺でさえ垂れ流している覇気に萎縮しているのだ。現実遭遇したのなら尚更だ。原作のラカンのように絶対に勝てないとは思わないが、絶対に戦いたくない。そう感じた。トラウマに似た忌避感がじわじわと上り詰める。

記憶でできた偶像でこれほどの脅威を感じるというのは恐怖より先に感情が来てしまう。

「・・・我が手を出すまでもないな」

しばらく膠着状態が続いたが、興味が失せたのか、そのまま去っていった。フィリスさんは安堵したように、腰をついたが、レイアさんの状況を思い出し、すぐさま駆け寄る。しかし、黒い風と徐々に膨らんでいく闇が邪魔でたどり着けない。

「レイア、待ってて！今助けるからね！！」

それでも、無理やりにでも通り抜けようと、徐々に前へ進む。蠢く闇には触れないよう杖に乗って。黒い風は氷の盾で防いで。それでも彼女の体を隙については蝕むし、刻んでいく。だが、たとえどれだけ闇に体を蝕まれようと刻まれようとも彼女は止まらない。

遂に、レイアさんのところまで辿りついた。

「すぐにここから出して——ッ！！！！！！！！！！」

だが、レイアさんを抱きしめた直後闇が急激に膨れ上がり、四方八方に弾け飛んだ。それは、地下室という狭い枠をこえて、町を飲み

込むように広がっていく。

―――全てが闇に飲み込まれた

全ての始まりは・・・前編（後書き）

造物主の口調がわからなくい
作者的にも凄く違和感があるので、また折を見て直します。

全ての始まりは・・・後編(前書き)

修正しました

全ての始まりは・・・後編

――――何だこれは!?

闇に飲み込まれた先には地獄が広がっていた。

肉体は空間に積み重なって大地となった。紅く、赤く、あかく染まった肉の大地。その顔は恐怖と絶望と生への渴望に染められていた。

その上を肉体にこびりついた魂の残滓、思念体が漂っている。霧のように一定の形を持たず、水のようにとらえどころのない姿。恨み辛み妬み憎しみ苦しみなど負の感情が顕現した存在。何をするでもなくただ漂っていた。

そして、空には『渦』があった。生きとし生ける者の肉体から強制的に引き剥がされた魂が渦巻いているのだ!!

悲鳴をあげ、絶望し、死にたくないと嘆きながら、血と肉を持つ者を妬み、『渦』となっていく。それは良く見ると気色の悪いオブジェであった。文字通りドロドロとしたものが、滅茶苦茶な造形を取っているのだ。例えば、口の中に舌の代わりに手があったり、目が葡萄の如く幾重にも重なっていたり。

通じるか分からないが、あの人気漫画ベルセ○クの『深淵』みたいな状態だと思ってくれればいい。あるいは、練金漫画の嫉妬さんの本来の姿みたいなものだ。気持ち悪さとその醜悪さが通じるだろうか?

だが、この記憶があるのはどういうことだ? フィリスさんは生きて

いたはずだろ？爺さんにしてもありえない。ここに取り込まれて戻ってきた？それもまたありえない。そんなことがありえるほど優しいところではないとあの時アンサートーカーは教えてくれた。

アンサートーカーは、この場所では危険だ。先ほどその一端を見ただけであてられたのだ。これ以上は恐らく脳が焼けきれるだろう。ならば、直接どうなったのかを知るために、フィリスさんか爺さんの姿を探そうにも、こんな混沌とした場所では不可能に近い。

その時、また闇が訪れ、場面は移り変わってしまった。

クラウドさんがいた。街の外から帰っている途中らしい。いきなり地面が揺れたと思ったら今度はクラウドさんが肉体を魔力で強化し走り出した。同時に前方から様々な動物が脇目もくれず、駆け抜けていく。まるで何かから逃げ出すかのように・・・

「何ですか・・・アレは・・・」

クラウドさんが震える声で呟いたが、それに反応する余裕は無かった。その光景があまりに異様過ぎたからだ。

遠くでは、夜よりも尚暗い闇が生まれていた。

地面からまるで、噴水のように噴き出した『それ』は、我先にと這い上がり強大な手の形をとった。何かを求める様に生えた手は、天に向かって、聳え立つ。側面からはまるで枝のように生えていく腕。

それは、まさに巨大な樹であった。

今まで見てきた何よりも雄雄しく、猛々しく、禍々しかった。

見ているだけで畏怖を感じ

視ているだけで背徳的な神々しさをに身を震わせ

観ているだけで放たれる狂気に戦慄した

だというのに、あの湖の巨大樹と頭の中で重なったのは何故だろうか？

静寂

クラウドさんは正氣に戻り、全力で走った。近づくにつれ、騒ぎに起きたのか、人々の戸惑いの声が聞こえて来た。そして丁度町の入り口にたどり着いた時だった。

————ドクンッ・・・

何かが脈動し、静寂を破る。それは、空気を伝って、己の鼓膜を震

わせた。直感が危険を訴えたのか、クラウドさんはその場から勢い良く離れた直後、その場所には数個の黒い手が地面に突き刺さり、闇と同化するように消えた。

その手は、樹の枝に当たる部分が、爆発するように散っていったものだ!!

小さな手となり町へと降り注ぐ。いや、それは本体と比較しているからだあり、家一つは軽く覆うくらいの大きさではある。木の葉のように舞い落ちる『手』は、徐々にその数を増やしていき、町一つを丸々包み込み、吹き荒ぶ!! 何かの作用か、雷のようなモノが闇を切り開く。

———まるで嵐だ・・・!!

無機物に触れれば容易く消えるが、生命に対しては違った。町の中から上がる悲鳴が証明した。町を囲む壁によって中は見えないが、阿鼻叫喚の地獄絵図がありありと想像できてしまう。

——ある者は痛いと呼ぶ

——ある者は苦しいと嘆く

——ある者は助けてと救いを乞う

彼はその場で耳を塞ぎ、蹲った。

「おお、神よ・・・」

クラウドさんはただ祈るだけだった。肩を震わせ、歯を食いしばりながら、懺悔をするかの如く、祈り続ける彼の姿は鬼気迫るものがあった。実際に、彼は惨めな思いを感じているのだろう。魔法とい

う人にはない力を持ちながらも救いを求める声に手を差し伸べられないのだから。

一夜が明けた。クラウドさんはあの『樹』が出現したであろう場所に向かった。道に行く途中には誰も見当たらず、人の気配も、いや、およそ生き物の気配というものを感じることが出来なかった。それでも、歯を食いしばり愚直に駆けていく。

魔力の残滓を辿り、一番濃密だった場所を探す。そして遂に特定した。

「嘘でしょう・・・？」

そこを、良く知っているからか、クラウドさんの口からは戸惑いの声が漏れる。当然だろう。そこは彼にとっても俺にとっても大切な人の住む家なのだから。それでも、口を引き締め中に入っていた。

扉を開けても、人の気配は感じなかった。

どうやら、誰もいないようだ。嫌な想像が頭を横切ったのか、彼は頭を振って切り替え、何か手がかりを探す。とりあえず、異常に濃い魔力を発している地下室に向かった。

そこで見つけたレポートを見つけた。

そこで、場面は再び変わった。

「……ん……」

レポートは読めなかった。だが、読んだクラウドさんの顔から血の気が失せていたのだ。あまりいい内容ではなかったのだろう。

ここはどうやら、屋敷の家の地下だ。魔法の儀式を行っていた場所。石造りの部屋の中、身じろぎする人影が一つ。うーうーうなりながら大の字に寝転がり、苦悶の表情で夢の世界にいるフィリスさんは、急にビクンとしたかと思うと、がバツと起き上がった。

……一体どんな夢をみていたのだろうか。息を荒げ、身体を伝う冷や汗となかなかおさまらない動悸を落ち着けようと深呼吸をします。少なくともいい夢ではないようだ。

「はあはあ……夢……？……そうだ、レイア、レイアは！？」

しばらく、ポケットとしていたが、寝ぼけていた頭がようやく回転し始めて状況を思い出したようだ。腕の中にはレイアさんがいた。同じように、苦悶の表情を浮かべている。フィリスさんはすぐに体を軽く揺さぶった。

「……んう……ここは……私は一体……？」

「良かった。レイア、大丈夫……夫……」

フィリスさんはレイアさんが目を覚ましたことに安堵したが、すぐ

「いってことよ。それよりここを出るよ」

家を出て直ぐ起こった、『瞳の色が変わってるね』の言葉で始まり『瞳の色くらいどうってことない、寧ろきれい』で終わった一悶着の後、二人は町に蔓延する違和感に気付いた。

「姉さん、何かおかしいです」

「うん。町に人氣がなさ過ぎる」

外に出ても、誰も見ない。太陽は既に昇っており、普段は人々が賑わうはずの市場は今は閑散としている。それどころか、これまで人っ子一人見ていない。何を今更とも思ったが、彼女達は知らない人だった。

「おい。誰かいらないの？」

フィリスさんが大きな声で辺りに問いかけてみるが、拡散していった。二人は当てもなくぶらついていった。二人の中で、不安と焦りが生じた。そして、日が落ち、夜が訪れても町の何処にも人の気配はなかった。

最初は楽観的だったフィリスさんも、町の住人全てが一夜で消え去ったという現実を突きつけられ、恐怖した。誰だって不安になるだろうし、怖くなるだろう。あんなに賑わっていたはずの街が静寂に満たされたのだから。

そして、一端家に帰ることにした、その時だった。

「この町にいるのは、もう私たちだけですよ・・・」

背後から聞こえてきた声に、振り返った。そこにいたのは、クラウドさんだった。少し俯き、眼が髪に隠れている。

「クラウド！？お前も無事だったのか！！」

「ええ、まあ・・・」

だが、彼の返答は歯切りのいいものではなかった。

「クラウドさん？」

なにやら、暗い雰囲気醸し出すクラウドさんを心配して、レイアが彼に近づく。

「っ！？」

「クラウド！？」

クラウドさんが懐からナイフを取り出した。それに気付いたフィリスさんが咄嗟に彼女の腕を引いた。かすったのか、頬から血を出しながらレイアは信じられないような顔で、クラウドさんを見る。クラウドさんは間合いを取って、構える。

「今、本気だったろ！？何でレイアを・・・！！」
「・・・・・・・・」

しかし、クラウドさんは黙して答えない。再び、襲い掛かった。

「レイア、行きな！」

フィリスさんが迎撃した。

「でもっ」

「あんたがあたしを心配するのは、百年早い」

しばらく、躊躇していたが、すぐに走り出した。これは、レイアが自分がいかに姉の足でまといかを、理解しているからだ。

ただでさえ、この戦いは、明らかにフィリスさんが不利である。彼女の魔法はそのほとんどが攻撃には向いておらず、幻術系が多いそう。それを補うために、そこそこ体を動すが、クラウドさんに叶うほどではない。そこに、レイアがいたら、意識するあまり戦いにすらならないだろう。

そもそも、クラウドさんは近距離、中距離、遠距離の全てをこなせるオールラウンダーであり、中でも接近戦を最も得意としている。そんな男が、レイアを守るフィリスさんに本気で襲い掛かっているのだ。どちらに軍牌が上がるかは明白である。

「……がはあっ」

しばらく、凌いでいたフィリスさんだったが、ついにやられた。クラウドさんの拳が、彼女の鳩尾を正確に殴り、気絶してしまったのだ。

クラウドさんは、眉を潜め何事かをを呟き、しばらくフィリスさんを見つめたが、すぐにレイアを追って行った。

月明かりに照らされる教会の前で、二つの影が向かい合う。レイアとクラウスさんだ。

「ね、姉さんはどうしました・・・？」
「彼女なら寝てますよ」

淡々とした返事が返ってきた。まるで、何かを抑えこむように顔は無表情だ。

「死んでいないんですよね？」

「ええ」

「なら、いいです」

そして、レイアは顔を上げ、首を差し出した。その姿はまるで、神に命を捧げる聖女のようなだった。彼の眉が動く。

「何のつもりですか」

「あなたは理由なく命を奪う人ではないです・・・」

言葉が続けるのが辛いような表情になり、言葉が切れた。

「今日、夢の中で町の人が肉体から無理やり何かを剥がされて、混ざっていくのを見たんです。悲鳴を上げて『痛いよ、苦しいよ、誰か助けて!!』って叫びながら……。そして、私のことを恨めしそうに見て来るんです・・・」

その夢を思い出したのか体を抱きしめ、震え出す。

「そして今、町には誰もいないんです。それが、意味するのは、昨日あったことは本当のことだったってことですよね・・・？」

彼女にはうつすらとだが、昨夜の記憶が残っているらしい。父に酷いことをされ、何らかの魔法が彼女を中心に発動した記憶が。そして、その記憶は彼女にある事実を知らせていた。

「私が、皆を取り込んでしまったんですよね・・・？」

二人の間に重い沈黙が流れる。しばらくして、クラウドさんが口を開いた。

「・・・そうです。僕は幸い、用事があった町の外に出かけていたが、帰り道に、背筋を走る悪寒と共に、町が闇に覆われていくのを見ました。悲鳴が溢れ、まるで地獄が出現したかと思いましたよ」

そこまで言って、彼は懷から紙束を取り出した。端に穴を開け、紐で括ってあり、ノートとして機能しているそれは、魔力の反応が一番濃かった中心、すなわちレイアの家で発見した研究のレポート。

「これには、昨日発動した魔法の詳細が事細かに書かれていました」

~~~~~



この魔法を使うには以下の条件が必要である

- ・一つ、『魔法無効化能力』と同じくらい稀な素質『聖女の資格』を持つ者を媒介にしなければならない
- ・一つ、あらかじめ対象とする範囲に魔方陣を描かなければならない
- ・一つ、媒介とする者には、魔方陣を刻まなければならぬ
- ・一つ、上記の一つでも条件を満たさなければ、魔法は発動しない

この魔法によって得られる結果は、理論上一つの世界を作れる。範囲内にいるあらゆる生命を取り込み、魂だけの状態にし、それに蓄積された情報を元に、世界を構築する。ただし、その世界は、媒介となった者の中、いくなれば心にできる。つまり、媒介者が世界になる魔法と言い換えてもいい。その中では、一つ一つの魂が、自身が住むのに最適の環境を構築するため、誰にとっても楽園のような世界になるはずだ。

また、媒介者は自分以外の魂を取り込むために、人の身から外れることになる。具体的には不老不死へ。いや、それは正しくない。魂は情報の宝庫であり、命の燃料だ。魂の数だけ生が伸びる。一人を百年生きると換算して、それが百あるとした時、単純計算で一万年生きるというように。死にづらいといった方が正しいかもしれない。魂を使い果たせば死ぬのだから。

これは、いわば人類が一つにまとまる魔法でもあるのだ。

私はこの魔法を用いた計画を『人類補完計画』と名付けようと思う。もし、あの方の計画が何らかの形で頓挫せざるを得なくなった場合に備えてこの魔法を作った。

既に理論は完成し、後は発動するだけだ。幸い、媒介者となる資格

を持つ者は、レイアがいる。この魔法のためにわが子を犠牲にするのは非常に心苦しいが、それでもあの方のためならば喜んで捧げよう。全てを救おうと考えるあの方の代わりに泥を被るのは私達だけでいい。

以下実験の詳細など

~~~~~

「つ、つまり私は死ねないんですか？」

「いえ、魔法は確かに発動しましたが、そうなるには魂が馴染まなければなりません。逆に言えば、今なら、まだ死ねます。」

彼は構えた。

「だからごめんよ、レイア……。でも、あなたは存在してはいけないんです!!」

それに対して、レイアの表情は安らかな笑顔。全てを諦めるかのように、彼を許すかのように、ただただ、優しく綺麗で儚い笑顔を浮かべる。それを見て顔を歪ませながらも、せめて、安らかに逝ってもらうため彼女を気絶させた。そして今、彼女の首にナイフを突きつけた。

「解放するんです……」

荒い息を吐き、力を込めるが、そのナイフは動かない。

「彼女を……。魂を……。解放するんです……。動きなさい、私の

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一部疑問を残したが、そのほとんどを知って、俺は考えを巡らせた。
そして、

「じゃあ、とりあえず馬鹿娘を迎えに行こうかね？」

レイアがいる場所に向かって、そう宣言した。

骨って軽いんだぜ。知ってたか？（前書き）

修正しました

骨って軽いんだぜ。知ってたか？

爺さんから全てを聞いて、俺は考えを巡らせた。

何で先生も取り込まれたはずなのに無事だったのかなとか爺さん結局殺せなかったんだとか何で今あの魔法が発動したのかなとかこの魔法ってよくよく考えてみれば『賢者の石』の製法みたいじゃね？ていうか『賢者の石』だろとかだったらベルセ○ク混ぜんなどかていうかああいうのをリアルでみると怖いグロい気持ち悪いその上意味分からん＋αで吐きますよとか、まあその他にも色々と考えたわけだ。

「それで、どうするんだ？」

ムーちゃんが聞いてきた。そんなもの決まってる。

「迎えに行く」

「どうやって」

「ムーちゃんに乗って」

「・・・それで？」

「それだけ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙が場を支配する。

「それじゃあ、取り込まれて終わりじゃねえかあ！！」

「H A H A H A」

「H A H A H A じゃねえ!!」

そんなこと言われてもあの闇に触れたら問答無用で取り込まれるしねwwwwでも、大丈夫。あの闇は俺達に対して追跡機能はないから。現に記憶にも、闇は膨らんでいるだけで、触手を伸ばしてこなかったし、葉のような手も舞い降りただけで狙いを定めていたわけじゃない。要は触れなければいいのだ。黒い風だって、術式が本格的に始動するまで、術式を中心たるレイアに危害を加えられないように護るだけのただの防衛システムだ。先生のように魔法で防げないことも無い。

「今の俺は魔力がほぼ底を尽きた状態だからその方法はとれない。使えても二回かな。だから、ムーちゃんに乗っていく。その二回は俺の考えている作戦に必要なだから」

ムーちゃんだけが頼りなんだよ? そう言外に付け加えた。ムーちゃんも気付いたのか、嬉しそうに

「へっ! だったら最初からそう言えよな!!」

そう笑顔で言ってこちらの肩をバンバン叩いてくる。今は人形態だから見えないが、竜化したら絶対尻尾が振られている。

身体を輝かせて竜化し俺に乘れと催促してきた。あ、尻尾がブンブン唸っている。

「少年、少し待って下さい」

その時、ムーちゃんの勢いに水を指すタイミングで爺さんが話しかけてきた。先ほどの記憶を見て何も思わないのかと訊いてきた。こ

んな時にと思わないでもないが、その時の爺さんの表情が真剣でありまた苦しそうであったのを見て、答えてしまった。

少し言い過ぎたかなと思う程度に心情を吐露し、ムーちゃんの背に乗って飛び立った。途中黒い風の妨害があったが流石は我らのムーちゃん、スピードを落とすことなく全て紙一重で避けていった。巻き上がっていた岩や木も彼女の鱗の前では意味をなさなかった。

「じゃあ、手筈どおりに」

「気をつけろよ？」

「当然。ムーちゃんには辛い思いをさせるけど・・・」

「何度も言わせんなって。この程度、そよ風ぐらいにしか感じねえよ」

タイムリミットは闇が森を覆うまで。だが、ムーちゃんのためにも出来るだけ早く戻らなければならない。

ムーちゃんの背で立ち上がり、レイアを見据える。目の前浮かぶレイアは、涙を流していた。その涙を拭い、無意識にも関わらず誰かを求めるように伸ばしている手を掴んで、ある漫画の技を念威魔法で再現する。同時に魔力が抜けていく感覚が身体を蝕み、眩暈に襲われた。いい加減体力も魔力も限界で気力だけで経っているようなものだ。そもそも、俺がやろうとしていることは、功を為すかはわからない見切り発車。だが、それでもやるしかない！！

「有線トランス」

有線トランスによる精神体のみの干渉。正門からではなく裏口からの侵入なので、問答無用で取り込まれることはない。勿論彼女の中の魂やら負の思念体やらに道連れにされる危険性は大きいが、自由に行動できる分何とかなると思う。

俺は具現化したケーブルみたいな線を繋げ、レイアの中に潜った。

「ぐっ・・・!!」

入った瞬間に訪れた苦痛と恐怖と絶望そして生への渴望に染まりきった魂たちの津波の如く強烈な思念波。肉体という鎧がなく、精神に直接襲い掛かるそれに飲み込まれ、流されていく。自身の位置を見失い、このままでは彼女の中に取り残されてしまう！！

ぐ
・
・
・
る
じ
い
・
・
・

・
・
・
・
ダレカ
・
・
・
タスケテ
・
・
・

・
・
・
・
イタイ
・
・
・
・
・

カラダ・・・ドコ・・・？

・
・
・
・
・ニクイ
・
・
・
・ウラメシイ
・
・
・
・

歯を食いしばり、耐える。だが、取り込まれた魂たちによる不協和音になす術も無く流されて流されて流されてながされて・・・そして弾き飛ばされた。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああ!!!」

視界の端に小さな人影を見つけて。

————レイアッ!!

その声は彼女には届かなかった。

そして、俺は記憶の中でみたあの棄てられた肉体でできた大地へと落ちた。そこでは、相変わらずグロテスクな光景が広がっていた。血の涙を流す肉体が折り重なって出来た足場、そして遠くでは荒ぶる魂が作り出した『渦』が屹立していた。あそこから、弾き飛ばされたのだろう。記憶と違ったのは、白骨死体も見受けられたり、魂の残滓たる思念体が見当たらないことだ。白骨はともかく、後者はどうしてだろうか？まあ、今はそんなことを考えている暇はない。ここはレイアの心象世界だ。当然だが、心には特定の形など無く、人の数だけその形が存在する。そして、レイアの場合は魔法によって無理矢理その在り方を決定付けられた。

『楽園』

本来ならばそうなるはずであったのに、皮肉なことに、ここの惨状はそれとは正反対のまさに地獄という表現がぴったりだ。間違っても楽園と呼べる場所ではない。

気が狂いそうになるのを必死に抑えて、俺は『渦』に向かって歩き出した。と同時に足場が隆起した。転びそうになる体勢を整えて、何事かを確認する。

間抜けな声が漏れた。だが、仕方のないことだと思う。だって、隆起した地面が形をとって、俺の前でドロドロしつつも立ちふさがったそいつは間違うことなき

地面となっていた肉体がドロドロに溶けて、巨神兵となったのだ！
ご丁寧なことに、腐っているところまで同じだ！！

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ああああああああ」

「くるなあ！！」

そうか、奴らは魂を奪われた肉体だ。故に奪われた魂を探している。例えば他人の魂であろうと奪いにかかる。つまり、捕まれば最後、というわけだ。断じて捕まるわけにはいかない！！幸い奴らの動きは鈍い上に遅い。余裕で逃げられる。そう思っていた時だった。

「
・
・
・
・
オイオイ」

それは軽快な音をたてて立ち上がった。

——カカカカカカカッ

こちらを嘲笑うかのように体を揺らすそれは肉を失った骸骨だった。同時に、そこかしこで、起き上がり始める骸骨共。中にはゾンビも含まれていた。もちろん、全てではない。それでも取り込まれた人間の数が数だから、非常に多い。

俺は、再び逃げた。逃げて逃げて逃げまくった。これほど恐ろしい鬼ごっこは未だ体験したことがなかった。修行でもこれほどの恐怖は感じたことはない。

骸骨共のスピードは速かった。

肉という無駄な重しがないからだろう。俺ほどではなかったのだが、遠くから巨神兵の口から吐き出された真っ黒な光線によって、地面から『オオオオオオオオオオ』と噴き出した怨念のせいで足止めをくらって、その間に骸骨に追いつかれる、というのを何度も繰り返すはめになった。いちごっこは止まらない。

当然本来の目的どころではなかった。

俺は焦っていた。このままでは、取り込まれてしまうし、ムーちゃんも傷も黒い風によって切り刻まれ増えてしまう。だからこそ俺は早く戻らないといけないのに！！

——こっちだ、たわけ

その時だった。聞き覚えのある声を聞いたのは。それはあのつぶらな瞳のげっ歯類の声で……。声は目の前に宙を浮かぶ形のない思念体から、でも放っている雰囲気はよく知っていて……

気付いた時の判断は早かった。一気に加速して、そのシルエットがいる方向に向かう。

——レイアはこの先です

——……遅い……

——マルカジルゾ！

——女性を待たせるのはマナー違反だよ、覚えておくといいね。
——相変わらず情けないですわよ、カズキ！！

——レイアはこの先だ。この先だ。こけるなよ？

——レイアをちゃんと護ってやれよな！

——あの子は渦の中心にいるわ。

——さっさと行け

————あの子を泣かせたら許さないんだからね！！

俺が走り抜ける度に次々と現れる実体のない揺らぎのような存在。だが、その正体は明らかだ。そして俺は疑問が解けた。あの時の言葉の意味が理解できた。彼らの正体も分かった。しかし、今はただ、彼らが導いてくれるままに駆ける。心からの喜びと感謝を抱いて。

渦の目の前までたどり着きどう入ろうかと悩んでいた時、渦が自ずから開いて人一人通れるくらいの隙間ができた。まるで、ここから入れとでも言うように。

その隙間をくぐった時、あの子をお願いしますと聞こえたような気がした。今度は思念波に弾き飛ばされることはなかった。

幕間3（前書き）

SEKKYO回

・・・作者はこういう描写がすごく苦手なので意味不明なことになって
いるかも・・・

幕間3

Side クラウス

物心がついた頃から、神という存在は私にとって身近なものでした。両親が信者だったので、二人の真似をして祈りを捧げていたのです。当初はただの形式だけだったはずの祈りに、信仰が帯びてきたのはいつからだったでしょうか。

この世界は神が創造し、そこに住む私たちもまた神によって作られた存在。故に、神は私たち生きとし生ける者達の父であると同時に、仰ぐべき尊いお方なのです。私達が生まれた奇跡に感謝の意をしめし、毎日礼拝堂で祈りを捧げてきました。

私は自身の信仰に疑問は持ちませんでしたし、フィリスやレイアといった大切な人達と出会えたという奇跡によって、確信を得ていました。

しかし、その確信は揺らぐことになりました。

そのレポートに書かれた内容は驚くべきものでした。それは、ある魔法に関する記述。そう、昨日のあの異常な光景を説明したものでした。

レポートは彼女達の父親（私自身たいした面識はありませんが）で、裏の関係者達からは歴史上最高の天才と名高いアレイスターの筆跡

で書かれており、それによると昨日の現象は彼とレイアの引き起こしたもののらしいです。正確には魔法を発動させたのはあの男であり、彼女の意志は関与していません。結果、レイアは町の住人の魂を取り込んでしまいました。

———その媒体となった者は、人の身を外れることになる

それだけなら私は構わなかったでしょう。彼女が化け物に成り果ても、私は愛せます。たとえば、どんな存在となっても彼女には違いないからです。だが、このレポートに載っていた記述はそれだけではなかった。

———魔法陣の範囲内全ての魂を取り込む

心を抉られる。

———取り込まれた魂は媒体者の内にて、永劫の安らぎを得るだろう

私の心を軋む。

———彼らは媒介者の元で一つになるのだ。

人は死ねば、魂は神の御許へと逝き、審判の時を待つ。だがこれではまるで神の真似事ではないですか！？人の身でありながら、神の領域に足を踏み入れようというのですか！！

禁忌

頭の中に浮かんだその言葉は、私を焦燥させます。私は一人の男と

して、レイアを愛しています。できるなら、私の生涯の伴侶として共に人生を歩んでいきたいとも考えています。

だが、信者としての私は数万の魂の救済をしなければと言ってくるのです。魂は主の元へと還らなければなりません。

葛藤が私の心を縛り付ける。

「私はどうすればっ・・・!!」

教会で一人神に祈っても答えは得られませんでした。私は当てもなく誰もいないこの町を歩き回りました。どこかにいるであろうレイアを探して・・・。

「クラウドス!!」

レイアの気配を探り当てた時、同じ場所にフィリスも立っていることをして軽く驚きました。次いで、彼女の安否を全く考慮の入れていなかったことに罪悪感を覚えました。月明かりだけが頼りになる暗闇の中であつても尚映える美しい二人の顔を見て、私は理解してしまった。

——ああ、この子は苦しんでいるんだ

レイアの顔には深い悲しみと恐怖と嘆きが混ざったような複雑な表情が浮かんでいました。全てを理解しているのかもしれませんが。そして、いつも隣にいるフィリスが、そんなレイアの感情に気付かな

いはずがありませんし、彼女自身少しどこか不安・・・いやどちらかといえば畏れが浮かんでいます。彼女もうすすなにかを悟っているのかもしれませんが。しかし、例え真実を知ったとしても、レイアを最後まで見捨てないでしょう。彼女はそういう人です。

だから・・・

レイアが私を心配して、無防備に近づいてきた時には私は決心していました。

私がこの子を主の御許へと送り、内にある魂を全て解放する！！

彼女の手が私の肩に触れた瞬間、ナイフで首を狙いました。迷いのせいか、少し定まっていみせんでしたが、神の御許へ送るには十分でした。最も、その攻撃は警戒していたフィリスによって妨げられました。

すぐさま間合いを取りました。

レポートによれば、魂は一つだけでも膨大なエネルギーを秘めており、擬似的な不老不死至るまでには、全ての魂が馴染まなければならぬ。逆にいえば、今の彼女なら一回で十分。いや、たとえ馴染んだ後でも、彼女が死ぬまで殺しつくそう。彼女が泣いても、狂っても、私を憎んでもだ！！

彼女は死によってしか、その重い『業』から解放されない。

私は全てを信仰に捧げた者。そこに私情が入る事など許されません。しかし、今回は私情も入っています。他の誰でもない私がしなければ、誰が彼の者のうちに閉じ込められた魂を救済するのですか。救

われぬ者に救いの手を差し伸べるのが我々の義務なのです。そして、レイアもまた救済の対象。

だから、神よ、今この時この瞬間だけは御許してください。

——あなたが途方も無く憎い……

生まれて初めて、そう思ってしまった私を……。

結局私は彼女の命を奪えず、むざむざ取り逃してしまいました。

それはもう四十五年前の昔のことです。その五年後、彼女達が森に引きこもるまで私達の戦いは続きました。

その後の私は教会の異端審問官として活動してきました。竜や吸血鬼といった化け物たちを殺して殺して殺して殺して殺して殺し尽くしました。殺せば殺すほど、心は凍てついていきました。世界で誰よりも愛しいといったあの子ですら殺すことを誓ったのです。ならば、その他大勢である有象無象の『敵』は全て排除するのは私の義務であり、使命です。仲間達からはその冷酷さと容赦のなさから恐れられました。そんなものは関係ない。私は私のやることをやるだけでした。

いずれ来るだろう『その時』のために備えて

しかし、やってきた『その時』はとある少年に邪魔されました。

その少年には殺気というものがありませんでした。全ての攻撃が当たっても支障ない程度の威力。剣に迷いすらありました。人を傷つけることに人一倍の抵抗があるようです。

その姿が少しまぶしく見えました。

それは異端審問官となって命を奪うことに何の躊躇もしなくなった私が、既に失ってしまったものだったからです。今でも無闇に命を奪わないことは代わりません。しかし、今まで敵であっても傷つけると心が痛かったのが何の感慨も湧かなくなってしまったのです。

“邪魔をするなら殺す”、そんな思考まで生まれてくる始末でした。

同時に、私にそんな資格などないというのに、少年に対して極端な怒りで我を見失いかけてました。

彼女を守るといいながら敵に情けをかけるというのは何事か！！

済んでのところで理性が勝りましたが、それでも胸のつかえは取れませんでした。それが攻撃にも現れていました。私もまだ未熟というわけですね。

どれほど身体が傷だらけになろうと、どれほど血が流れようと少年は向かってきました。その精神力は認めましょう。ですが、あなたは決定的に認識が不足している。私を含め敵は強大なのだ。それではいずれ必ず負ける。彼女を守るには、敵対する者を殺し続けなければならぬ。

だが、少年はそれでも頑として頭を縦に振らなかった。その姿がたまらなくまぶしかった。

それは少年の儚い幻想

現実をもっと厳しいというのに

あなたはそれでも敵を殺さないという

そんな甘く脆い信念がどこまで続くか

その可能性を私に示してみろ！！

私の意志を乗せて放った『千の雷』に巻き添えにならないよう、後退しました。『雷の暴風』を取り込んだことによる肉体活性のおかげで、軽々と効果範囲から抜け出せました。

直後、その名に恥じない稲妻の奔流が直撃したのを確認。

私は、纏っていた『雷の暴風』を解除しました。精霊を介した魔力、いうなれば精霊の力が宿った魔力を取り込み制御下に置く、私が私のためだけに創り出した禁術。身体に多大な負担をかけるので、長時間は使えません。だが、大抵の相手はこれで終わります。そして、少年も恐らくこれで終わるでしょう。私の切り札を受けたのです。・・・その事実に対し落胆を感じた。結局は彼の理想でしかなかったのだと。

だが、空気が揺れ同時に、長年の戦闘によって蓄えられた経験が危険だと警告した。

「なっ!?!」

終わったと気を抜いたところを狙われた!?! いや、そもそもどうや

って?!!

それが致命的な隙となりました。凄まじい速さで迫り来る少年は、剣で私を切り裂きました。

最後に見たのは、背中に純白に輝ける魔法陣を背負い、光に身を包んだ少年の姿だった……

目が覚めて、全ての元凶を取り逃がしてしまった後、何も知らない少年に全て教えました。記憶の旅から戻ってきた少年の最初の一言はレイアを迎えに行くということでした。

何故あなたは全てを知って、全てを見て、尚そう言う事ができるのですか？

レイアは苦しんで、彼女のうちにある魂たちは荒んでいるというのに、どうしてあなたはそんな目ができるのですか？

だから、私から尋ねました。

それに対しての少年の回答は

「そんなもん家族だからに決まってる」

単純明快なものでした。

「不老不死？魂が閉じ込められてる？その程度の理由で命を奪うなんて、馬鹿のすることだ。どこぞの優男風味な金髪神父みたいにね」
それは私のことでしょうか？

「爺さん、あんたは彼女を解放するためじゃなくて、楽な答えに逃げたんだよ。分かるか？それは何処までもあんたのエゴであって、あの子の意志は皆無だ。ん？だったら、あの子が首をさらした理由はだって？そんなもん決まっておろう！！」

そこで、一拍おいてこう叫びました。

「爺さんの思い込みだぁ！！！！！！！！」
「いや、それは・・・」

明らかに命を差し出しましたよね？

「お前の意見は聞いていない！俺の目にはそう見えたもんね！」

私の記憶全否定・・・だと？ていうかあなたの目がおかしいです。

「百歩・・・いや、大人になって一万歩譲って、それが真実であつたとしてもだ。その時のレイアは極限に混乱していたのは必死。そこに爺さんが渡したレポートによって、鬱状態に入り、『つい魂取り込んだじゃった・・・鬱だ・・・死のう』という状況を生み出したのだ！！！！それは逆に言えば、爺さんの思考誘導に引っかかったに過ぎないのである。つまり、彼女の意志皆無。オーケー？」

何気に私に罪をかぶせてませんか？

「つまり、何を言いたいのかというのだ」

少年は一拍置いて結論を述べました。

「レイアが好きだったんなら、見放すべきじゃなかったんだよ」

その言葉は単純明快であるがゆえに、私の心の奥底に深く突き刺さった。

「いや、もちろん爺さんも悩んだと思う。でも、殺すっていうのは本当に最後の手段だと思う」

ではどうすればよかったんですか！？そう怒鳴りそうにもなる。

「彼女が人の身を外れたなら自分も人外になれば、彼女の中にたくさん魂や怨念があるなら、丸ごと彼女を愛せ。至極単純、これで万事解決。あるいは、その逆に彼女を元に戻す方法を探せばよかったんだ。なければ作ればいい」

『あれ？でも、人外になったらあのレイアのことだから逆効果・・・？
？ていうか、俺の言ってること支離滅裂だったりする？』と一人
呟いている少年の言った言葉を反芻する。

彼の言ったことは私にとって狂気の沙汰であり、同時に一つの真理を突きています。その発想はありませんでした。だが、たとえば、浮かんでもやらなかったでしょう。私は神に全てを捧げた信者ですから。

人外になるということは、神の定めし自然の法に反する行為であり、神の創造物を歪める結果になります。そして、魂ごと彼女を愛する

ことは出来ません。それは、神のモノである魂を間接的にでも所有することと同義であり、おこがましいことですから。

彼女を元に戻す方法を探ることや作るとは頭にかすりはしてましたが、手を出そうとしませんでした。それは何故？

それもまた、異端の研究になると分かっていたからです。しかし、

——結局のところ彼の言うとおり、私は楽なほうへ逃げただけですね・・・

私は声をあげて笑った。嗤った。晒った。

何かを投げ捨ててでも彼女を救うという覚悟が無かった。そんな私がよくも、レイアを愛しているといえたものです。レイアよりも神への信仰を選択し、神の提示した試練さえも楽な方へと逃げたのです。

自分が滑稽で、愚かしく、情けない。

だから、晒った。嗤った。笑った。

皮肉なことに神への信仰が枷になり、行動はがんじがらめに縛られました。

彼女たちを悪魔と魔女と称したのも、あつてはならない存在としたのも、全ては私の弱さが招いたことでした。本心では彼女たちと共に行きたかった。彼女たちの味方でありたかった。しかし、私は信者としての私を最優先しました。それが、私の罪です。

だが、目の前の少年は違います。

彼には枷も何ありません。故に自由な発想が出来、自由な行動が出来ます。そんな彼ならば、彼女を別の方法で救ってくれるかもしれません……。

「少年、これを」

私はこの四十年前、レイアに突きつけたナイフを手渡した。

それは、対価

その刀身には『絆』を意味する言葉が古代ラテン語で刻まれています。ペンダントにもなるこのナイフは、フィリスとレイアに送られた私の宝物だ。それを渡すことで、対価とした。自分勝手に、彼自身は知らない一方通行の願いの。それでも、彼は果たしてくれるだろう。

彼女を救ってくれという願いを

私は間違えていたのかもしれませんが。いえ、結論を急ぎ過ぎたとはいえ、彼女を救いたいと願ったのは間違いではないはずです。そう、間違いではありません！

まだ、自分の半分も生きていない若者に諭されるほど、私は甘くはないです。実際私からすれば彼の意見は彼のエゴでしかない。私は自身の考えを否定しない。私は私のやり方で彼女を救おうとしました。

しかし、今その役目は終わりました。

新たな者が彼女の隣に立ち、彼なりのやり方で彼女を救ってくれるでしょう。時代は既に移り変わり、私の出る幕はもうありません。

「少年、長々と引き止めて申し訳ありません。ただ、最後に一つだけ」

今の今まで彼のことを少年と呼んできましたが、もうそういうわけにはいきません。彼には、今後何度も苦難が待ち受けています。そして、それを打ち破っていかなければなりません。

神の試練に挑むかの如く。

だから聞きました。このときまで知らなかったのは間抜けな話ですが、今まで敵同士だった仕方がないです。

「あなたのお名前を聞いても？」

意表を突かれたのか、少しだけ間抜けな顔を見せたが、すぐに笑って答えてくれました。

「カズキ・シノモトだ！」

そのままドラゴンの背に乗り、レイアのいる場所に向かいました。

「ひっひっひ。面白い奴だろう？」

「ええ、あの少年、カズキなら大丈夫でしょう・・・」

これほど安らかな気分は久しぶりだ。まるで、昔に戻ったようだ。

「さて、私は私のやるべきことをしますかね」

「ほう？　じゃあ、私も付き合おうかねえ」

「病人が無理をしないでください」

「ひっひっひ、それはお互い様だろうて。それに、私がいないと始まらないだろ？」

ふう・・・相変わらず変なところで鋭い。私がやろうとしていることにうすうす気付いているようですね。

「ほれほれ、あたしとのデートだよ。うれしいだろ？」

「昔ならともかく、今はありえませんよ」

とりあえず、鼻で笑っておきます。少しビキイっとなっていますが、私は事実を言ったまで。全く面白いジョークDEATHね。レイアだったらそんなこともありえたかも知れませんがね・・・っ!？

体に走った激痛に顔を顰め、しかし、一瞬で表情を消しそのまま森の中を移動する。

幕間3 (後書き)

SEKKYOUって難しい!!

言葉には気をつけよう（前書き）

修正しました

言葉には気をつけよう

そう。

確かに弾き飛ばされることはなかったし、前回のように思念を叩きつけられることはなかったさ。

でもな・・・

代わりに魂の螺旋に巻き込まれたんだよ！こいつら俺を招きいれたくせにこの仕打ちとか酷すぎる！！魂の波を叩きつけられたり、怒涛の勢いでぐるぐ回っているため、自分がどうなっているのか把握できない上に呼吸もできない。精神体のくせに俺は魂でできた海にされるがままで、溺れかけていた！！

そして――――

「いほごほっ・・・息が・・・へ？」

楽になった呼吸にすぐさま疑問を抱いた。ポクポクポクポクポクポクチーン。現状把握。どうやら俺はスッポーンという擬音が聞こえるのでないかと思うくらい綺麗に飛び出したようだ。

「のあああああああああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

文字通り上げて落とされたのだ。何この理不尽。この場所に地面は無かったので地面迫ってくる圧迫感を感じなかったが、むしろ底なしの闇が視界に広がっている光景がより肝を冷やしていく。

同時に自由落下の旅の最中に徐々に大きくなっていく点が視界に捉えられた。レイアだ!!

俺の目に映る彼女には、刺青のようなものが自分の存在を主張するように淡く真っ赤に輝いていた。あれが、彼女に刻まれたこの魔法の術式だろう。また、彼女は懺悔するように頭を垂れていた。

先生の話では、森に引きこもる前の数年間、いろんな人に憎まれ、命を狙われていたという。当然だろう。そのほとんどが、残された者達であり、当人からすれば大切な人の魂を奪われたのだ。教会の手の者も襲い掛かってきたわけだし、単純にこの魔法自体を狙って襲ってきた輩だっていただろう。

なにより、レイア自身は罪の意識に苛まれており、目を離れた隙に何度も自分の体を傷つけてきた。だが、彼女は簡単には死ねない。それが更に彼女の心を蝕んだ。だからこそ、先生は彼女の記憶を何重にも封印し、俺の知る『レイア』としての生を歩ませたのだ。

そして、今その記憶は解放され、全てを思い出した人物がとる行動は明白である。

だが――――

「鬱ってる暇があるとおもうなよおおおおおおお!!」

『死にたい』とか『殺して』とか、今はそんな戯言に構っている暇など無い!!

「グエツ」

もっとも、呼んだ直後彼女の目の前で、例えるなら見えない床に叩きつけられたが。精神体だからこそその結果だろう。現実ならばぶちまけられたトマトの如く真っ赤に染まって死ぬ高さだったというのに、カエルが潰されたような間抜けな声を発するだけで済んだ。

何はともあれ、遂にレイアの元へとたどり着いた。

「か、カズキさん！？どうしてここに・・・」

「どうしてもくそもない！！そんなのは後だ。とりあえず、早く起きるぞさあ起きるぞ速やかに起きるぞ！！！！」

「で、でも私は・・・」

「デモもストもねえ！！死にたがろうが、俺の知ったことじゃない。今お前がすべきことは早々に起きて外の騒動を静めることだ。いや、俺がさっさと外に出るために起きることだ！！」

このままここにいたら、取り込まれるかもしれない。自分の心配ばかりして最低だって？けっ、他人への配慮なんて心に余裕があるときしか出来ないんだよ。

「・・・カズキさんも知ってしまったわれたんですか？」

「うん？何を？」

「とぼけないで下さい！わ、私がたくさんの魂を取り込んできた悪魔だって！！」

「・・・」

「町の人数十万人の魂をすすって生き永らえている私は不気味ですか！？どれほど、時が経っても姿の変わらない私は、恐ろしいですか！？ええ、そうですよね！！私はもう、人間じゃなくて、化け物になってしまったんですから！！」

涙を流しながら、取り乱すレイア。

「私だつてなりたくつて、そうなつたんじゃないです!! あなたに分かりますか? ある日尊敬していた父に身体を切り刻まれる気持ち!! 残された親族の方達に悪魔つて罵られる苦しみが!!? 毎日毎日、命を狙われる恐怖が!!」

• • • • •

今まで溜め込まれてきた毒を一気に吐き出す。

「私だけならよかった。でも、姉さんまで狙われた。其れでもあの人は私にいつも笑顔を向けてくれた。弱音一つ吐かないで！！その笑顔に救われて、でもそれはこの上ない拷問もありました。彼女が存在が私を狂わせてはくれませんでした！！！！！！」

「いっそ狂えば楽になれたかもしれないのに！！！」

• • • • •

俺はただそこに胡坐をかいて座っているだけだった。

「身勝手なのは分かってます！！でも、私は楽になりたかった！！！！私にはこの世界に安らげる場所なんて無かったんですよ！！夢の中にだって！毎晩毎晩彼らに捉えられて耳元で悲鳴を聞かされる気持ちがあなたに分かりますか・・・？」

ただただ、沈黙を持って彼女の言葉に耳を傾ける。

「私は……もう死にたいんです」

辺りに静寂が舞い落ちる。すすり泣く音と魂の奏でる不協和音だけ

が耳に入る。

「言いたいことはそれだけ？」

間をおき意識して声を少しだけ低くしながら、口を開いた。

「・・・お前が苦しんでいるのは分かった。俺はお前じゃないから同情ぐらいしかできない。でも」

自分をどこまでも否定する彼女をまっすぐに見て。彼女は苦しんでいる。当たり前のことだ。望んでもいないのに化け物にされ、憎悪を一身に叩きつけられてきたのだ。その上、夢の中でさえ怨霊達が現れる。安らげる居場所は姉であるフィリスさんの傍だけ。それにしたって、巻き込んでしまった罪悪感やら、捨てられるかもしれない恐怖からほとんど安らげることはない。

なるほど、酷くて同情を禁じえない話だ。想像しかできないが、それだけでもストレスが溜まる。

でもな・・・

「貴様の不幸なんぞ、俺に比べれば甘いんだよおおおおおおおとおおお!!!!」

それは魂の咆哮だった。俺達二人を包囲していた荒ぶる魂達が、一瞬怯むくらいだ。相当な迫力が出ていただろう。

「いいか、耳の穴かっぽじってよく聞け」

俺は大きく息を吸い、世界の中心で哀を叫んだ。

「俺はな、バナナの皮で滑って死んだんだよ!!」

———バナナの皮で滑って死んだんだよ

———滑って死んだんだよ

———しんだんだよ

——だんだよ

悲痛な声は、何処までも響き渡り、『オオオオオオオオ』と唸っていた魂たちですらなにやら粛々とした態度をとり始めた。同情の視線が痛い。一部『?』というのも混じっているが。

「・・・・・・・・・・」

痛い沈黙だけが場を満たす。そんな空気を全力全開でスルーして言葉が続ける。俺の黒歴史の一つを暴露するのを続ける。

「今ここにいるのは、神様、いやスーさんのおかげ。でもな、バナナの皮で死んだっていう事実は変わらないんだ。実際もこの世界では、そんな話で持ちきりだと思う。家族は後ろ指を指され、友人達からは嘲られ、第三者（主に神）の間では笑い種。死してなお、俺の名前を聞けば『バナナの皮』が思い浮かぶ死に方だぞ!?!俺〳〵バナナの皮だぞ!?!?」

そして、逆に訊き返す。

「ふとした拍子に思い出すんだ。ああ、何でバナナの皮で死んでしまったんだって!!その度に死にたくなる。何度も、何度もだ!!!そんな俺の気持ち分かるか!!」

「あの、えっと・・・」

「そんなことで、ってか？ そんなもんお互いさまだ。俺からしたら、レイアの話はどこにでもあるお涙頂戴な悲劇だし、レイアからしたら俺の話はくだらないことに感じるかもしれない。でも、そんなもんなんだよ」

良く言われることだが、不幸話なんていうのはするだけ無駄なのだ。そんなものを比べるのは不毛でしかない。レイアの悲劇も俺の奇劇も俺からしたら同じくらい不幸な話なのだ。聞いていてもっと鬱になる話なんかいくらでもある。

でもスーさん曰く、『人間に限らず誰だって生きていれば、良いことも悪いことも起こりうる。じゃったらよほどのこと以外は、目先の闇に捕わらず、人生を楽しく謳歌せねば損ではないか。ワシを見なさい。金ない家ない家族ないの、ないないづくしの老いぼれでもこんなに人生を楽しんでいるではないか』、だそうだ。

そんな言葉を胸中で思い出し、俺的かつこい笑い顔を浮かべ言葉を重ねる。

「何よりレイアがいなくなったら寂しいし、先生も悲しむ。ムーちゃんや親衛隊の連中にだってどやされちまう。それに、周りの魂はレイアが思うほど恨んじやないよ。お前のことを頼んできたくらいだし」

少なくとも、俺はそう思う。現に、ここに俺を招き入れたのが証拠だ。自分で言うのもなんだけど、うらみ辛みの集合体が彼女にとって救いになるかもしれない存在を招きいれるだろうか？それに、彼らのレイアを見る目は確かに憎しみにみちているが、同情や慈しみも多く見受けられる。結局のところ、彼らもまた彼女のことを心配

なのだと思う。俺の妄・・・ごほん、推測でしかないが。

そのことを突きつけた上で俺はレイアに向かって手を差し伸べた。

「つまりだ、結論をいうと俺と一緒に楽しく愉快に生きよう！」

レイアは、しばらく呆然としていた。まあ、錯乱したら目の前で俺が暴走したり変なこと言い出したりしたわけだし、こうなるのも仕方ないわな。

しばらくして彼女は口を開きこういった。

「・・・わ、わたし・・・」

「お前の意見は聞いていない！！」

時間は無いし、少々まどろっこしくなったので強引に手を取り、腕の中に引き入れ抱きしめた。篠本和樹、男いや、漢をみせまーす！！

腕の中のレイアは、徐々に震えだし

「う・・・うわあああああああああああああああああああああああああ
あああああああん」

彼女は、弾かれように泣き出した。この空気をぶち壊さないためにも、胸に染みこんでいく鼻水とかには触れないでおいた。そこ、自分で招き入れておきながらって言わない！！

しばらくして、彼女は腕の中で徐々に落ち着いてきた。なので、外の様子に気がなるのでさっさと残りの作業するために、離れてほしいのだが・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・動けない。というか、彼女が離してくれないのもそうだが、何よりも空気がそうさせてくれない。なんか動けば負けみたいなの？無理矢理引き離してもいいんだけどほら、日本人としての性というか、ノーと言えない人種というか。ていうか、なんだろう、この周囲に醸し出している異様な空気は！？荒ぶっているはずの魂がニヤニヤしている・・・だと・・・？

「あつあの、カズキさん」

思考に没頭しかけていたというあまりにも見事なタイミングに話しかけられたので、ビクウ！！っと動揺をあらわにしまった。落ち着け俺。ていうか、自分から抱きしめたのに何緊張しているんだ。相手はレイアだぞ？

「なんでせうか？」

「カズキさん！？だ、だめですよ！！そんなことで死ぬなんていっちゃあ」

「ええい、離せえ！！！！？お前に格好つけたあげく盛大に滑った男の気持ちがあつてたまるかあ！！！！」

「だめです！？だめですってば！！！！ってその刀どっから？」

「切腹じゃあ切腹じゃあ！！！！H A ☆ N A ☆ S E ！！！！H A ☆ N A ☆ S E ！！！！」

今度は混沌とした空気が場を支配した。

閑話休題

バナナを知らない彼女に、『バナナ』黄色いアレは天下無敵の食べ物編』を語り終えた時、時間が大分過ぎていたのに気付いた。全くレイアのせいで無駄な時間を過ごした。早くすることしないと、今もなお外で頑張っているはずのムーちゃんに申し訳たないではないか。

「途中から『ばなな』を語るのに熱くなつてたのはカズキさんじゃ・・・」

「シャラップ、口答えしない！！」

全く。レイアはすぐそうやって責任転嫁をする。

「そうですよね・・・全部私が悪いんですよ・・・」

「わあああああ！ごめん、ちよつとしたジョークジョーク！！」

冗談抜きでズーンと影を落とし、落ち込む彼女に向かって大げさなくらいに謝る。具体的には、その場で土下座。それはもう『第1回全世界土下座大会』君は卑屈になれますか？』で優勝を取れるの

ではないかというくらい綺麗な土下座をした。

「・・・フフツ」

レイアがとめるまで謝り続けたら、レイアが笑い出した。何が楽しいのか分らないが、今の彼女からは影が薄れていた。楽しいという感情が表に出ている。俺も釣られて笑い出した。なんとなく楽しくなったからだ。

「私、もうちょっとだけ生きてみます」

笑いの波が引いたのか、彼女は口を開いた。その声には少しだけ余裕が回復していた。心に押し隠していた鬱憤を解き放ったからだろう。人間溜め込んでおくのはよくないからな。

「考えてみれば、まだあの海賊さんのお話の結末を聞いていませんでした」

むしろ俺が知りたいんだけど、それ。でも、軽い理由だけど生きる理由というか未練があるだけで人間は明日を生きていけるからな。

「それに・・・」

「ん？」

そこで、なにやら口ごもった。顔をりんごのように赤くして、こちらをちらちら見る姿は初々しい。可愛いなあと思っていたら、爆弾を投下された。

「夫婦になって早々、カズキさんを残して逝くわけにはいきませんから」

.....

あれ？めおとってなんだ？めおと？メオト？・・・ああ、夫婦か。あれ？夫婦ってなんだっけ？どうでもいいけどメオトとメテオって語感にでない？ていうか何で古風に言うんだ？あ、この時代夫婦のことを夫婦めおとって・・・言わないよ。あれは日本だけだろ、多分。何だよ。どうなってるんだよ日本語翻訳機能。

「って、夫婦って何ぞ！？今までの流れでどうやったらそんな流れに！？」

「え？でもカズキさんさっき『俺と一緒に生きてくれ』ってプロポーズを・・・」

嘘っ、あれってプロポーズの言葉になるのか！？・・・いや、そう聞こえないこともないけどさあ。いや待て、『楽しく愉快に』が抜けているぞ？

「あれはそういう意味で「それとも私のような化け物は嫌ですか？」」
「・・・」

訂正を遮られ勢い良く迫られた。うほっ、目尻に涙！な、泣き落としとは何と言う高等テクを。しかも本人は計算していない（と思う）ので余計にたちが悪い。そ、そんな顔をされたらおっ俺は・・・俺はあー！！いや、まだだ。まだ終わらんよ！！！！

「ま、まだレイアにはその手の話は早いと・・・」
「私はもう大人です」

そうだったね。彼女見た目に反して歳くってたね。もうピー才だったね。おいおい、俺の退路ふさがれたぞ？ていうか、レイアってこんな押し強い性格だったか？あれか、記憶の封印が解けた反動とか？・・・レイアみたいな子が伴侶になったら・・・ハッ！駄目だ、俺！！『俺もしかして勝ち組か？』なんて考えるな。それは、レイアが俺を陥れるために仕組んだ罠だ！さあ、今こそ彼女持ちのくせして結婚の話題をのりくらりとかわす独り身の男達に伝える魔法の言葉を唱えるのだ！！

結婚は人生の墓場……結婚は人生の墓場……リピイトオ……！！

「結婚は人生の墓場ああああああああああ……！！！！！！！！！！」

よし！！思わず口から熱いパトスが迸ってしまったが問題ない。相変わらず渦巻いている『オオオ』な魂たちがドン引きしているのも問題ない。今の俺なら徹底抗戦できる。

「レイア」

「か、カズキさん？」

いきなり、雰囲気の変わった俺に驚いているようだ。顔を赤くしたけど、些細な問題だ。心なしか目が少し潤んでいるけど、気のせいに違いない。何か勘違いしているようだけど、軽くスルー。そして、出来るだけ優しい声で諭すように意識する。

「今はそんなこと話している場合ではないだろ？」

究極奥義『話を逸らす』

説明しよう!! この技は自分にとって都合の悪い話題が場が上がった時、別の話題を以って意識を逸らす大技である。ただし、言葉には注意しなければ・・・

「そんなことって、私にとっては大事なことなんですよ?」

とこのように相手の逆鱗に触れるから、気をつけてね!! 口は災いの元だよ♪ふふ・・・黒い笑顔が怖いぜ・・・

「後でちゃんと答えるから今はやることをやらしてください」

結局その場はジャンピング土下座をお願いした。

Side レイア

『消え失せろ、悪魔!!!』

『あの人を返してよ!!!』

『貴様がいたから、あいつは!!!』

『いたぞ!!! あそこだ!!!』

『殺せえエエエエエ!!!』

『悪魔だ、あいつは悪魔だったんだ!!!』

毎晩夢を見ました。場所はいつも同じ。ただ黒だけが際限なく広がる空間。そこに青白い影がでてきて、いつも言うのです。『お前は罪深い娘だ』って。

その言葉に対して私はいつも言いました。私は悪くない。アレを引き起こしたのはお父様で、私だって被害者ではないですかって。

でも、彼らは聞いてくれません。彼らの言い分は、あの魔法は私でなければ発動しない代物。つまりお前の存在があ魔法を許したのだと。

——見よ、現にあれを作ったのはお前ではないか

青白い影が指し示す方向には、苦悶の表情を浮かべ、負の感情に彩られた魂の織り成す『渦』でした。その目はこちらを向き、その口は悲鳴をあげ、救いを求めています。それを見るたびに私は何も言えなくなりました。

涙を流しても、影はなんと浅ましい娘か、涙を見せて同情を誘おうというのか、町の皆をあんな姿にしておきながらと嘲ってきます。

泣くのをやめ、許しを乞うても影はなんと見下げ果てた娘か、お前一人が救いを得るつもりかとなじってきます。

死ぬつもりで首にナイフをつきたてようとしても、なんとおろかな娘か、お前が死ぬたびにお前の変わりに魂が消費されるのだぞ、と言葉を突き立ててきます。

ではどうすればいいのでしょうかと問いただしても、答えてくれません。そして、気がつけば私は『渦』の真ん中にいたのです。おびたしいまでの目に見つめられて……

違う、私じゃない……私のせいじゃない!! やめてください!!!

——私をそんな目で見ないで!!!!!!

何度も何度も自分の身体を傷つけました。

苦しみを少しでも紛らわしたくて

罪悪感を少しでも減らしたくて

あるいは、もしかしたら運良く死ぬるかもしれない、そんなことを
思って・・・

でも、数え切れないほど多くの魂が馴染んでしまったこの身体はす
ぐに傷を癒していきました。私は死んで詫びることさえ出来なかつ
たのです。いえ、そもそも私は楽になりたくて死にたかったのかも
しれません。

簡単に死ねない私は、やがて次第に感情を表に出さなくなっていき
ました。

もし、神様がこの世界にいて、私の願いをかなえてくれるのならど
うか私を■■■■てください。

いつの日からか、私の頭はそのことだけが締めていました。

その人は、初めて会ったときと同じように突然現れました。

黒目黒髪の私がかつて住んでいた街でも見ない珍しい顔立ちの人。
実際の年齢よりも若く見える人。毎日を楽しそうに生きて、面白い
お話で私を笑わせてくれた人。そして、記憶のない『レイア』とし
ての私が無意識のうちに惹かれていた大切な人・・・

何で、あなたがここにいるんですか？どうやってここに来たんですか？混乱しましたが、直後、心臓が凍りついたような錯覚を受けました。この光景を見てもあまり驚いていない彼を見て、すぐに悟りました。

この人には知られたくない、この人に知られたら私は……

でも世界はどこまでも無情でした。彼は知ってしまった。その事実を悟って、私は頭が真っ白になってしまいました。彼は悪くないのに、彼に当たってしまった。

でも彼はただ黙って聞いてくれました。そして、話してくれました。彼にも死にたくなるような過去だってあるのだと（ばななが何かは知りませんが）。彼はどこまで言っても彼でした。全てを知った上で、彼は『その程度』と両断してくれました。つまらないことを考えるよりもっと楽しいことを考えよう。そうすれば、見えてくることもあるんだって。

「だから、俺と一緒に（楽しく愉快に）生きよう！」

その言葉に顔が真っ赤になるのを感じました。こ、これはいわゆるプロポーズって言うものでは！？わ、私で良いんですか！？そういうおうとして、しかし彼は私の返事を聞かず、腕の中に抱きしめました。胸の中に暖かいものがあふれ出てきました。そして、私は堪えきれず泣き出してしまいました。

未だに自分を好きになれないけれど

それでももう少しだけ生きてみたいと思います

泣くことも許されなかった私に涙を与えて

誰にも届くことは無かったはずの手を掴みに来てくれたあなたのためにも

この気持ちをくれたのはあなた

だから、絶対に逃がしませんよ、カズキさん？

S i d e o u t

「さて、やりますか」

「何をですか？」

「事態に収集をつける」

今からやることは、誰にも言っていない。ただレイアの中に入って起こしに行くと言っただけだ。その具体的な方法は告げていない。俺は残ったなけなしの魔力を解放した。

「カズキさん？」

唐突に魔力を解放したことに軽く驚いたようだ。俺は安心させるように笑顔を浮かべた。そして、次の行程に移る。

ここで一つ、念威魔法についておさらいをしたい。何度もいったように、世界を支配する法則に穴を開け、底に自身のイメージを叩きつけることで現象を引き起こすだ。

だが、もっと詳しくいうと、その本質は『書き加えること』である。

例えば指先に魔法で火を灯したとしよう。その時、精霊魔法ならば魔力が続く限り永遠に灯り続ける。だが、念威魔法は世界からの修正により程なく消える。魔力関係なしにね。なぜなら、世界は穴を塞ぐため、そこに刻まれたイメージを押しつぶしてしまうからだ。そして、継続時間は意志の強さに依存する。つまり意志が強ければ強いほど、火は灯り続ける。もちろん、任意で取り消すことも出来る。

だが、例外はある。

思い出してみよう。この理屈なら俺が魔法で強引に掌握した能力はまた元通りになるはずだ。しかし、実際は今も掌握できている感覚がある。この違いは何なのか。それは、先ほどのべた意志の強さに関係している。意志の強さが極限にまで高まり、世界の穴を閉じさせなければ、いわば世界との大規模な喧嘩に勝てば、やがて世界は『イメージ』を『現実』として認めてしまう。その認可証となるのが魔法陣だ。魔法陣が出れば、永続して効果が続いてしまう。

新たな法則として！！

新たな法則となったものは既存の法則と同様に取り下げることが出来ない。何故なら世界に存在を認められてしまったからだ。

それ故に人々は、『魔なる法』すなわち『魔法』と名付けたのだ。

それ故に念威魔法の本質は『書き加えること』なのだ

もちろん、大きな力にはそれに伴うリスクも存在するが、既に周知の事実なので省く。

では、そんな魔法を使って俺は何を新たに書き加えようというのか。それは・・・まあ見ていれば分かる。

「なあレイア。外は現在進行形でお前の故郷を一飲みにした大魔法が発動しかけているんだ。先生によると、この環境のせいらしい」
アレイスターⅡクロウリーの創った循環型魔力増幅魔法具『神樹』による『聖域』。『神樹』とはその核を埋め、その土地のマナを吸収して育ったものであり、ある程度まで成長したら、マナを増幅させて吐き出してはまた増幅させて・・・を繰り返してマナ異常の地『聖域』を作り出す代物である。

「レイアの悲しみによって普段は隠れていた術式がほんの少しだけ発動したんだ。それは、すぐに押さえつけられる程度のものだった。でもこの環境と、そして荒ぶる魂が許さなかった。膨大なマナと魂の意地。その二つが合わさったことで魔法は結果的に発動してしまった」

それはまるで洪水の決壊の如く、起こってしまった。ほんの少しだけ開いた扉に闇が飛びつき、その隙間から外の異常なまでに満ちているマナと結合。そして、その膨大なマナが満ちた場所を範囲として闇は徐々に広がっていった。すなわち、この森全土に！！

「じゃあ、その魔法を消すにはどうすればいいのか？俺が思いついた方法は二つある」

「ま、待ってください！いきなり何の話を・・・」

俺はレイアの言葉を無視して言葉を続ける。

「一つは膨大なマナを枯渇させることだけど、これは不可能に近い。神樹の存在があるし、何より外のマナを扱う魔法は使えないから」

俺は自身に流れる魔力しか扱えない。それにこの方法だとレイアを救えない。

「だから、必然的にもう一つの方法になるわけだ」

そこで、目を閉じてあるイメージを確立させる。

「・・・まさか!？」

どうやら、気付かれたようだ。俺がしようとしていることに。

「マナがダメなら荒ぶった魂をどうにかするしかない!!」

だが、魂を解放する術なんて持ち合わせていない俺に出来ることは一つ!!

「レイアの悪業を俺が背負い、悪意を俺の魂に向ける!!」

俺の脳裏に浮かぶは、ある世界でかつて人間の身勝手であらゆる悪業を背負わされ、反英霊となった男の身体に刻まれた刻印!! その刻印を俺の魂に刻み込む!!

魔法陣が俺を中心に浮かび上がり、激痛が走った。

レイアが何かを叫んだが、もう遅い。魔法は発動した。

それは、悲鳴であり、怨嗟であり、呪詛であり、悔恨であり、拒絶であり、渴望であり、絶望であった。レイアの中にあつた負の感情が遍く流れ込んでくる。それらを前にして、俺は恐怖した。同時に後悔もした。圧倒的な奔流を前にして、自分が押しつぶされそうになつてゐるからだ！！

他者に侵食される本能的な嫌悪と自分という存在が掻き消される根源的な恐怖。情けないことに、俺はその二つに支配されてしまった。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひい！」

292

レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ
ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク
レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ
ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク
ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル ク ワ レ ル

——もつと後先考えろ、馬鹿者

もう少して精神が崩壊しそうになった時、聞き覚えのある声に心底救われた。

そして、俺は賭けに勝ったことを確信した。

Side
バ
ハ
ム
ー
ト

カズキがレイアの中に入ってしばらくして風が突然凧いだ。

「カズキが成功したらしいな」

カズキを動かさずにじっとしていたので、少々傷だらけになってしまったが、この程度どうってことねえ。俺の主はもっと酷い怪我を負っていたのだから。

あのフィリスとレイアの父親だとか言う変態野郎のせいでカズキの腕が吹っ飛んだとき、自分が情けなかった。あいつを護るとか言うておきながら、逆にあいつに護られたのだ。

あの時、俺は全く動けなかった。ただただ、迫り来る光線に脅えていただけだったのだ！！

そのせいで、本来は俺が受けるはずだった怪我はあいつが全て負ってしまった。これでは従者失格だ。それでもあいつは俺の心配をしてきた。

こんな無様を晒しておいて、どうして臣竜を名乗れるだろうか!!

だから、俺は今度こそ誓った。絶対にあいつを護ると! 迫り来る光線が何だ!! 次は絶対に俺が防いでやる!! 俺のせいでいらない傷を負ってしまったあいつのためにも!!

その矢先にカズキが俺を頼ってくれたのが嬉しかった。今度こそ俺は逃げない。また逃げたらもう二度と自分を許せなくなる。

強くなる。やっと出会えた主のためにも絶対に強くなってやる!!

その時だった。

「なっ!?!」

カズキの身体にも変化が訪れた。カズキの身体を中心に魔法陣が浮かび上がったかと思えば、身体が切り刻まれていくのだ。手が腕が足が胴が顔が切り刻まれていき、やがて、何かをあらわす刻印のようになった。

「な、これは一体どういう・・・?」

突然の事態に混乱した俺に更に追い討ちがかけられた。

闇が輝きだしたのだ。いや、光に変化していくといった方が正しい

だろう。光は膨らんでゆき俺を、いや森を包んだ。

その中で俺が見たものは『楽園』だった

色とりどりの花が咲き誇る草原に、遙か遠くで見える山々。風が踊り、澄み渡った蒼い空には竜が飛び回り、妖精が舞い、ペガサスが駆け抜ける。他にも様々な幻獣たちが跋扈していた。だが、何よりも目を引くものは樹であった。

ユグドラシル
「世界樹・・・」

それはあまりにも巨大すぎる樹であった。あの湖に根を張っていた『神樹』とは比べ物にもならない。地面に限らず、天にすら根を張っているように錯覚するほど大きな樹だ。

何より、神々しく光り輝く姿はまさに伝え聞く世界を支える樹である。

だが、それらは一瞬で掻き消え、後は刺青の入ったカズキと地面に横たわるレイア、そして森が残された。

言葉には気をつけよう（後書き）

これが書きたかった！！

神の裁きは不浄なる大地を滅す（前書き）

修正しました

神の裁きは不浄なる大地を滅す

S i d e バハムート

闇が消え去り、元通りになった地面に二人を横たえる。

「うおっ、熱っ!？」

苦しげな主の額に手を当てたら、酷い熱だった。刺青が刻まれた直後、急激に上がっていったのだ。もう少し、まともな場所で休ませて上げたいんだが何処を向いても戦闘の痕跡だらけで、まともなところがない。その時、カズキの隣で眠っていたレイアが身じろぎをした。

「ん・・・んう・・・」

目を覚ますようだ。・・・？何かレイアを見るとムズムズするな？

「・・・ムーちゃんさん？」

「ムーちゃんって呼ぶんじゃないか！！」

反射的に返しながら、奇妙な感覚に捕らわれていた。なんていうか、レイアが妙に輝いているというか、煌いているというか。・・・今はそんなことを詮索している場合じゃないか。俺は疑問を脇に置いて、カズキについて尋ねた。

「なあ、レイア。カズキの身体にこんなのが刻まれたんだが」

何を象徴しているのか分らないが、なんだか嫌な感じがする。一体

この刺青は何だ？左腕が失われたところにも、あたかもあるかのように空中に刻まれているのも不気味だ。

「そうです。カズキさんが！！」

「カズキがどうした？」

なにやら焦っている彼女を落ち着かせて、話を聞いてみると、ふつふつと怒りが湧き上がってきた。あの野郎、レイアの代わりに『罪』とやらを背負ったらしい。この刺青はそれを象徴するもので、彼女の背負っていたものはカズキの中へと行ってしまったらしい。

「あいつは、どうしようもなく、馬鹿だな！！」

下手したら、怨念に潰されて、人格が変化、最悪消滅する危険もあるのにふざけてんのか？起きたら、お仕置きだな。

「ええ、二人で懲らしめてやりましょう！！」

ぐっと握りこぶしを作って腹に据えかねているレイアに頷く。くっくっく、本当にどうしてくれようか。我ながら主の心配をするより先にそんなことを考えるのは、不謹慎なことだと思うが、まあカズキなら大丈夫だろうと変な信頼もあるが故だ。普段は、ヘタレもいいとこだが、変なところで大胆だからな、今回も何らかの考えがあったに違いない。

それにしても、レイアの雰囲気が変わったな。どうも芯がしつかりしているというか……。記憶が蘇った影響だろうか。神官達との戦い後と同じように大人びた顔をしている。それともこれが元々の彼女だというのだろうか？それにしては、なんだか印象が変わり過ぎる気がする。凄く輝いて見えるのだ。

「とりあえず、下手に動かすのは怖いから、ここでフィリスたちを待とうぜ」

「じゃあ、精霊さんをお願いして、伝えてもらいますね」

言うやいなや、レイアは風の精霊を集め、お願いし始めた。俺は井戸から水を汲んでくるか。ついでに、ボロボロの家の中に綺麗な布残ってねえか探すか。

二人で看病し始めてしばらく、フィリスがジジイと一緒に森から現れた。

「どうやら、何とかなったようだね。おや？」

うなされているカズキを見て、フィリスが何かに気付いた。

「その刺青・・・もしかしてアンリ・マユの刻印かい？ ははあ、この子も大概無茶をする子だねえ」

一目見ただけで把握したのは流石だ。

「フィリス、『アンリ・マユ』って何だ？」

「ふむ、それはね・・・」

説明しようとした瞬間、地面に魔法陣が現れ、そこからぞろぞろと数体の悪魔が現れた。全員が全員瞬時に反応し、俺は素手で、レイ

アは精霊に呼びかけて、フィリスは氷の槍で、爺さんはナイフで敵を掻き消した。一体何事だ？

「恐らくお父様、いえアレイスターの仕業でしょう。あの人自身は深手を追ったので、代わりに悪魔を放ってきたのですね。目的は多分、私と姉さんを捕らえること、そして邪魔者の排除といったところですか」

「おいおい、また面倒なことを・・・」

「二人とも、気を抜くでないよ!!」

「来ます!!」

老人二人の短い警告にすぐさま身構える。直後巨大な魔法陣が空を覆い、そこから大量の悪魔があふれ出す!!まるで、堰が決壊したかのような勢いで次から次へと際限なく現れたそいつらは、ツギハギだらけだった。中には、本来生物にはないはずの金属製の部品までついている奴もいた。

「お父・・・アレイスターの改造悪魔です!!」

「あの厄介なやつか!!」

あの銀髪変態野郎の影から出てきた奴とは違うが、似たようなのだろう。うっとうしいことこの上ない!!

「ギ・・・ギィ。レイア・・・フィリス・・・イツショニクル・・・」

「モリノソトモ・・・カコンダ・・・ニゲラレナイ・・・」

「アレイスターサマ・・・マツテイル・・・」

気がつけば、空も改造悪魔で埋め尽くされていた。これでは、飛んで逃げれない。

「こんだけの悪魔を召喚、しかも改造して従えるって・・・お前の親父って一体・・・」

「アレイスターは性格はともかく、天才ですから。それと父じゃないです」

「忌々しいことにねえ」

「全くです」

「天才で済ませる話かよ！」

軽口を叩いているが、退路を塞がれて、絶体絶命の状況に陥っていた。しかも、病人を一人護りながらこいつらを相手しないといけないうってのは冗談抜きでやばい。それと、レイア、悪かったから、そんなに嫌そうな顔をするな。

「こっちだよ!!」

フィリスが半壊した家の中に逃げていく。フィリスは無意味なことはいらないから、何か意図があるんだろう。カズキを担ぎ、後を追った。当然悪魔たちも追いかけていくが、俺が火のブレスを放ったり、爺さんが『雷の暴風』を叩きつけて足止めをしたので問題なく入れた。

家の中に入ると、フィリスが床をなにやらいじっていた。

「いざという時のために、この家には色んな仕掛けを仕込んでいたのさ。例えば・・・」

パンツとフィリスが床を叩いた瞬間、魔法陣が形成、家周辺に結界が張られる。視た感じ結構な強度だ。

「これで、少しは時間を稼げるはずさね」

結果が張られたのを確認すると、フィリスは床に備えられた扉を開いた。現れたのは、地下へと続く石造りの階段だった。

「着いてきな」

フィリスが先導し、階段を降りた。抜け道になっているのか？俺の予想は程なくしてはずれ、質素な飾りの木製の扉が行く手を塞いでいた。松明に晒された扉の中は、必要最低限のものしかおいていない部屋だった。

「行き止まりじゃねえか！！」

「焦るでないよ。ほら、さっさと部屋に入りな」

後ろから急かされて部屋に入った。見れば見るほど質素な部屋だ。その時、フィリスが懷からペンダントを取り出し、俺に投げつけた。卵のような形の蒼い石に古代ラテン語の文字が刻まれていた。

「持っていきな」

「それは！！」

レイアはそれを見て、何故か驚いていた。

「こんな時になんだよ？」

「いんやあ、こんな時だからさ」

「は？」

疑問の声を上げたら、フィリスが足を踏み鳴らした。瞬間光が走り抜けた。それはあたかも命令を送るように。いや、実際に送ってい

るのだ。一拍遅れて形作られていく魔法陣を見て考えを訂正した。
レイアはその正体を見破った。

「転移魔法!?!」

「そう、あんた達を森の外へと送る魔法さ」

まるで、自分達は含まれていないという言い草だった。そして、実際に大きな弧を描き、徐々にその姿を完成させていく魔法陣はやがて俺とカズキとレイアを囲んだだけで、フィリスとジジイは範囲外だった。

「おい!! 何してんだよ!?! 早くこっちに・・・!?!」

手を伸ばそうとしたら、弾き飛ばされた。あっちへいけない、なん
でだ!?!

「姉さん、クラウドさん!!」

「あたし達にはやり残したことがあってね」

「まあ、野暮用というやつですね」

遠くで、結界が碎けた音がする。その音に反応してか、二人はそれぞれの獲物を取り出す。老婆は杖を、老爺はナイフを。そして、外に続く扉へと歩き出す。

「待って下さい!!」

「待ちやがれ!!」

拳をたたきつけても、依然としてびくともしない。床にある魔法陣を壊そうとしても、魔力に護られているのか、やはりものともしない。

「レイア、泣くでないよ。女が泣いていいのは男を落とす時と相場が決まってるんだ」

「そんなことはどうでもいいです!! 早く魔法陣の中に!」

「そうだ!! 早くしないと発動するぜ!!」

「ひっひっひ、一度起動したらもう無理さ。それに、言っただろう、遣り残したことがあるって」

「そんなの関係ないです!! 今外に出たら姉さん達は・・・」

レイアは必死になって引き止める。そうだ、外には今改造悪魔で埋め尽くされている。だからここに逃げてきたというのに!!

「おやおや、レイアや。お前さんは私達が悪魔の攻撃で死ぬと思っているのかい? 何て酷い子だよ。あたしたちが悪魔にやられるはずがないだろう」

「そうですね。悪魔如きにやられてあげるほど、弱くはないつもりです」

二人はおどけて言った。ちょっとそこまで散歩に行くといった軽いノリだ。

「お願いします、待って下さい!!・・・わたっ・・・私は・・・二人にたくさん・・・ひどいことしたのに・・・何も・・・何も返せてません!!」

嗚咽交じりの言葉に、フィリスは振り向き笑いながらこういった。

「ふふ、もう返してもらったよ。抱えきれないくらいね。だからね」

その笑顔は綺麗で、慈愛に満ちていた。心の底からそう思っている

目だった。そして、その言葉を最後に、遂に魔法は発動し、俺達は飛ばされた。

レイアの悲痛な声を聞きながら……。

Side out

Side ファリス

「行っちゃったねえ……」

姿が掻き消えた三人の姿を見て胸に少し寂寥感がこみ上げてくるが、これで心残りはない。ムーちゃんにもアレを渡したしね。

「感慨に耽っている暇があるなら、あなたも手伝ってください」

「ああ、この老いぼれは何てことをいうんだろうねえ。か弱い老婆をこんな恐ろしい相手と戦わせようとするなんて……およよ」

「そっちに一体いきましたよ」

この野郎、わざとだろ。間違はなく棒読みだったよ。人がしんみりとしているのに、空気が読めない奴だ。冷静に改造悪魔たちを相手取っている老いぼれを見る。

あの子達が跳ぶタイミングと紙一重で押し入ってきたのだ。あの転移魔法、内外の干渉には強いのはいいのだけど、距離がそれほどでもないというのが欠点だ。せいぜい森の向こうの山を越えるくらいさね。もしかしたら悪魔は追いついてしまうかもしれない。なら、誰かがここに残って足止めする必要がある。

もつとも、一匹も逃すつもりは無いんだけどねえ。

それに、この森には『神樹』がある。どの道、あたしはここから離れられなかったさ。

向かってきた敵に氷の槍を投げつける。

「ギィ!!」

氷の槍に貫かれてあっけなく消える悪魔。一口に改造悪魔と言っても、ピンからキリまでいる。下級を改造した程度ならあたしでも何とかなる。つまり、こいつらは雑魚ってことだ。

「さてと、ふざけていないでさっさと行くよ」

「じゃあ、時間を稼いください。大技で一気に突破します」

「魔力は持つのかい？」

「正直ギリギリですが、目的を達するまでは持つでしょう」

なら、問題ないか。悪魔が群がる扉の入り口に目を向ける。隙間がないほどぎっしりと詰まっているので、怖気が走るほど気持ち悪い。だが、逆に言えばたくさん悪魔がいるってことだ。ひっひっひ、

『幻惑』の腕の見せ所さあ!!

クラウドが足止めている間に、あたしは呪文を唱える。何も無い所から靄が現れ、扉へと向かう。それを確認したクラウドが引き挙げた。直後、悪魔たちが隣にいた仲間を殴り始めた。

「相変わらずえげつない」

悪魔たちは隣の連中があたしたち二人に見えるのだ。ただの幻覚じゃない。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、そして触覚。五感全てを騙しているのだ!!

「ギィ!!」

「グオ!!」

「ガァ!!」

「・・・本当にえげつない」

「ほれ、さっさと詠唱しな」

目の前に広がる地獄絵図、もとい仲間割れの光景を見て、ドン引きするクラウド。全くもって、失礼な話だ。確かにこの効果は結構凄まじいものがあるが、魔力消費も半端ないし、範囲はそれほどでもないのだ。現に、後ろのほうにいた奴らには効いていない。惑わされている仲間を押しつけて、襲い掛かってきた。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻、『千の雷』!!」

その時、クラウドから放たれた雷の束が、行く先を塞いでいた全ての悪魔を焼き尽くす!! できた道に再び集まってこない内に杖に乗って駆け抜けた。クラウドは片腕で杖にしがみついている。どうやら、これ以降の無駄な魔力消費は極力抑えるつもりのようなのだ。

「このまま一気に行くよ!!」

階段から地上へとでて、そのまま森を翔る。当然、改造悪魔たちも追いかけてくるが、クラウドが反撃をしてくれているので、木を避けることに集中する。少しでも気を緩めると大変なことになるしね。

目指すは、森の最奥!!

やっぱり、数の不利は大きいねえ。倒しても倒しても敵は湯水の如く沸き上がってくるから、キリがないったらありやしない。だが、壮絶な追いかっこのにも終焉が来た。遂にたどり着いたのだ。

神樹の前に降り立つ。水面に映るあたし達の体には、軽い傷があちこちに出来ていた。敵の数が数だから当然の結果だね。

「お互い、慢心創痕もいいところですね」

「おや、もうへばったのかい？ 情けないねえ」

「馬鹿を言わないでください。私はまだまだ余裕です」

「じゃあ、せいぜい派手にぶちかますとしようじゃないか！！ 今更傷がどうのこうのと言いつけるでないよ！！」

「フィリスこそ病気で途中退場は勘弁してくださいよ！！」

正直、これが最後の攻撃になるだろう。度重なる戦闘で、体力も魔力も限界に来ている。何よりあたしは長い間大結界を張り続けてきた影響もある。それに、クラウドも隠しているつもりのようだが、あのクソ親父の攻撃のダメージが残っているようだ。だから、これが本当に最後の攻撃。意地でも発動しなければならない！！

そして、これが人生最高にして最強の華となるだろう。最後を飾るには相応しいさね！！

「ウギ・・・モウオイカケツコハオシマイカ？」

「ケケッ、アツケナカタナ」

などと嗤っている悪魔たちを尻目に、残った全魔力を解放する。それに呼応するように、クラウドも解放した。

「ムダナテイコウヤメル」

「ソウダソウダ！」

「イノチハタスケル」

無駄な抵抗・・・ね。

「気付かないのですか？」

こっちを見下し嘲笑う悪魔達を、さらにクラウドが嘲笑う。あたしの口も自然と吊り上る。

圧倒的優位に立っているはずなのに、逆に見下された悪魔たちは不愉快そうに顔をゆがめた。

「ナンノ、ギイ——！？」

いぶかしんだ悪魔は、疑問を最後まで言えずに雷に貫かれて消えた。

「ナニィ！！」

その後も、続々振ってくる雷は徐々にその数は増やしていく。一筋から十筋へ、十筋から百筋へ、そして、数え切れないほど数を増やしたそれは、まるで牢獄の如く森を囲む。それに当てられまいとして逃げ惑う悪魔達。

「本来ならレイアを確実に殺すための術式だったですけどね。あなた方如きに使うのですから、しっかり味わってください」

彷徨いの森全域にわたって展開したこの魔法は、クラウドが長い年月をかけて編み出した、あの子を殺すための魔法だという。対象が死ぬまでこの雷は収まらない。雨の如く降り注ぐ雷は、悪魔たちを捕らえて逃がさない。

「ギィ！オマエラノドコニコンナチカラガ！！」

強大な力というのは、当然それに見合うだけの対価が必要だ。例に漏れず、この魔法にも発動させるのにいくつかの条件がある。

一つが、あらかじめ対象となる範囲に術式を刻むこと。これは、クラウドたち異端審問の連中がここへ攻め入る時にやっていた。森の外近くに、線で繋げれば丁度五紡星になるように設置してある。

また、発動させるのに大量の魔力が必要だ。それこそ、何百人もの人間を生贄にして発動する大魔法並みに。だが、これに関しても何の問題もなかった。『神樹』があるからね。

だけど、普通はこんなに簡単に発動できないことから見ると、明らかにこの土地の条件に合わせてあることが窺える。つまり、本当にあの子を殺すための魔法だったんだろう。全く、こんな隠し玉を披露されたときは肝が冷えたもんだ。

その時、『神樹』が発光し、成長しだす。幹が蠢き、枝が伸びる。あたしは血を吐いた。

「けほ・・・、やっぱり、今までの比じゃないねえ」

「まだ、倒れないでくださいよ？敵はまだたくさんいるんですから」

発動するのに『神樹』の力を用いているため、負担が半端ない。全く、もう少しレディには優しくしろってんだ。ボロボロの身体に鞭打って使うのは大変なんだよ。まあ、それはあんたも同じか。神樹を用いて術式の制御をしてるからね。脂汗そんなに掻いてるんだ。許してやるよ。

「コノマホウヲトメロ、ニンゲン!!」

「あなたはアホですか？止めるわけないでしょう」

あれほど猛威を振るっていた悪魔達の半分以上が、既に跡形もなく消えていた。神樹の成長が更に加速する。ちなみに『神樹』が成長する理由は簡単だ。それが周辺のマナを取り込んで増幅する対価だからだ。雷が落ちるたびにマナは急速に減少していく。その分を補うために取り込んだマナを増幅させ排出する。

では、この増幅分はどこから来たのか？答えは、神樹が持つ寿命からだ。

樹が持つ寿命は人間のそれに比べて遥かに多いのは周知の事実だ。そして、木はそれ単体で完成した循環経路が成り立っている生物だ。それらに目をつけたアレクスターが創り出したのが『神樹』の苗。養分や水の変わりにマナを吸収し、寿命を絡めてマナを吐き出す。その成長は普通の樹木の何倍も早い故に、たかだか数十年で他の木の何倍も大きくなった。そして、人の何倍もの年月を生きれるが故に、すぐには命が尽きない。

大量の魔力を喰っているせいか、かつてない勢いで成長していく。このままでは枯れてしまうのは目に見えている。そうなれば、もう二度と『神樹』はその機能を果たさなくなる。だが、少なくとも、こいつらが殲滅するまでは確実に持つはずだ!!

その時、今までアレほど悪魔達を打ち据えていた雷が止んだ。

「ギ・・・？」

突然舞い降りた静寂に悪魔達は戸惑っているようだ。数拍置いて、魔力が尽きたのかと口を吊り上げているが、もちろんそうではない。

この魔法の真髄はここからだ。

パリッと紫電が走る。微弱なそれは、やがて至る所で走り始める！！

「何を勘違いしていたのかは、手に取るように分りますが、本番はこっからですよ」

落ちた雷は地面で帯電していたのだ！そして、紫電に呼応するかのように地面が鳴動する。

最初は気付かないくらい小さかった揺れは、段々とその幅を広げ、遂には大地をめくりあがる。そして、一つ、また一つ大地が天へと墮ちていった。それは、まさにこの世の光景ではなかった。

紫電はやがて迸る電流となり、一つに収束していった。

ああ、これで最後だね・・・

地面が天に堕ちていくという光景を目の当たりにして、あたしが思ったのはそんなものだった。

そして・・・

森全体を吹き飛ばすほどの光の柱が天を穿った！！

光の奔流が己の身体を灼いていく

でも、不思議と痛みはなかった

言っただろう？レイア

私達は悪魔なんかにやられたりはしないって

ま、結果は同じだけどさ

でもあたしは全く後悔していないんだ

そこには何一つ難しい理屈なんてありはしない

だって姉は妹を護るもんだから

なあんて・・・・・・・・少しクサイかねえ・・・・

神の裁きは不浄なる大地を滅す（後書き）

本当に難産でした

これでいいのか？このほうが面白いんじゃないか？ていうかここま
で説明する必要あったかな？あっさりしすぎ？

とか考えて考えて考えて、結局こうなりました。

本当に難しい！！

ちなみに、もうすぐ、第一章は終わります。

ようやく終着点が見えたぜい！！

そうしたら、第二章へ移れるんだYO！！

脳内プロットでは原作キャラは出ても、本筋は彼方へと吹っ飛んで
います！！

・・・実際に書くかどうかは別にして

俺たちの旅はこれからだ!! (前書き)

加筆修正しました

俺たちの旅はこれからだ!!

砂場、滑り台、ブランコ、中心にある変な形の木、その下のベンチ。そんなものくらいしかない小さな小さな公園に俺はいた。

そこは、血が滴るような真紅の瘴気に満ちた世界だった。禍々しい波動を放つ黒い太陽が空を支配し、黒い泥が大地を侵食していく。泥はまるで意志があるかのように蠢き、途中にあった、俺にとって見慣れた街を飲み込んでいった。栄華を誇っていた摩天楼さえも、今や見るも無残な残骸へと姿を変えた。

俺は『俺の世界』が変貌していく様を見ていただけだった。後に残ったのはこの公園だけ。スーさんとたくさん語り合った、思い出の詰まったこの公園だけだ。黒い泥は公園の周囲には近づこうとしなかったのだ。でも、そのほかは見たとおりだ。例外なく全て飲み込まれた。ふひひ、少し早まったかもwwww
.....笑い事じゃねえorz

なるほど、これが『この世全ての悪』の刺青の影響らしい。刺青を魂に刻んだ瞬間、俺の中に流れた悪意・・・人間の狂気、絶望、恐怖、渴望、憎悪、嫉妬・・・その他ありとあらゆる負の思念は俺の魂の性質を『絶対悪』へと変異させ、侵し、犯し、おかし、オカシテイッタ。

もちろん、今こうして考える余裕があるように、『俺』という自我は保たれたわけだ。もしかしたら、公園と保たれている自我には関係があるかもしれない。まあ『この世全ての悪』を身体に刻んで『俺』が消えなかったのはもうけものだった。下手すれば、喰われてたし。

そう考えるとぞっとしない話だ。他にも副作用とかありそうだけど、知りたくないな……。アンサーカード 答えを出す者で調べるのは覚悟が決まったらだな。それはともかくとして、俺は助けてくれた見覚えのある泥の動物（とはいっても普通サイズ）にむかつて頭を下げた。

「助けてくれてありが」

「――フン！」

「ふべらばあ！！??」

助けてもらったお礼を言おうとしたら、無駄に気合の籠った拳で思いつき殴り飛ばされた。そこから、始まったのは、集団リンチ。

「ぐはあ」

吹き飛んだ俺に一瞬で間合いを詰め、鳩尾を的確にブレイクしてきた。堪えきれずその場に膝を着いてしまった。だが、奴の猛攻は止まらない。

―――チュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワ
ユワチュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワチュワ
アアアアアアアアアアアアアッ！！！！

「……が……くペ……ぱ……！」

碌な悲鳴も上げられず、また、絶え間なく殴られ続けているせいで息が全然できない。チュワワアアアの声で吹き飛ばされ、向かう先にいた泥の牛（やはり普通サイズ）が

「―――私はやりませんよ」

とスルーした。

やらねえのかよ!!

とつつこむ暇もなく、泥の虎、兎、猪、そして馬（どいつもこいつも普通サイズ）が俺を前後左右からタックルで挟みこむ。ミシッ、バキッ、ボキッ、メメタァ!!と四つの嫌な音が奏でるハーモニーを子守唄に意識が遠のきかけたが、そこへすかさず泥の蛇（何度も言うが普通サイズ）が尻尾で俺の顔を往復ビンタ。強制的に意識を覚醒させられ、フラフラになったところへ、泥の鳥（くどいようだが普通サイズ）が足で顔を引っかいた。こりゃたまらんわと二、三步後退した瞬間何かに足を取られ、モコモコした感触が背中に生じる。そこにいたのは泥の羊（徹頭徹尾で普通サイズ）で、俺が背中に乗ったのを不快に思ったのか後ろ足で蹴飛ばされ、再び宙を舞ったところに泥の猿（全く以って普通サイズ）が俺の腰を掴んで地面にダンク!!顔面から突き刺さり、あまりの痛みに白目をむいてうめく俺はあまりにも無様な上に気味が悪いだろう事は誰かに言われるまでもなく自分で理解しているのだが、問題はまだこれで終わりでなかった。いつの間にか最初にした位置に戻っていた。そこで、興味なさげに寝そべっていた泥の狼（貫禄の凄い普通サイズ）が目の前でため息をつき、足で俺の背後を指差す。そこには、何とどこの世紀末覇者だといわんばかりのオーラと濃い影を宿した泥の鼠（相変わらず普通サイズ）が構えていた。

—————これでおわりだと思ったか・・・くくく・・・むしろここからが始まりよ!!!

そして、始まる疾風怒濤の乱打!!常人には見切れぬ速度で繰り出される拳の嵐は、全身を隈なく打っていく!!

にきてるのか、身体から凄まじい怒気を放っている。だから、素直に謝った。

「うん・・・悪かった」

———言いたいことは山ほどあるが、今は預けておく。外に出たらレイアにも謝るんだぞ

「分かってるよ・・・」

———・・・半殺しで済めばいいがな

「ん？何か言ったか？」

———いや

気のせいだったのか？不穏な発言が聞こえたような気がしたんだが？それにしても、自分でやらかしたこととはいえ、胃がきりきりする。絶対レイアとか泣いてるだろうなあ。むしろ、怒ってるだろうか？ムーちゃんは・・・考えるのをやめよう。あれ？寒くないのに身体が震えるよ？

「でもな、チューダム。一応俺にも勝算はあったんだぞ？」

チューダムたちの正体に気がついたからこそ、実行に踏み切れたわけだし。チューダムたち親衛隊は、魂を奪われた後、その苦痛やら何やらで生まれた思念体同士が集まってできた集合体、他の有象無象とは違ってそれがどういいうわけか意志を持った存在なのだ。とはいっても、その根本は悪霊の一種に違いない。ならば、その性質上、俺が魂に刻んだ『この世全ての悪』を肯定する刺青に引き寄せられて、俺の中に入ってくるのも当然の帰結であり、レイアを救うために悪意を受け入れた俺が食われないように護ってくれかもと、思ってたわけだ。何のことはない、彼らもまた俺が受け入れた悪意の一角だったのだ。

・・・そうでも思わないと踏ん切りがつかなかったのだ。どんな理由で自分を納得させようとしても、心のどこかで拒絶する俺がいた。むしろ、その声の方が大きかった。何度言い聞かせても、怖気ついてしまったのだ。発動するのは一瞬だが、その一步を踏み出すのが大変だったわけだ。

だから保障が欲しかった。何があっても何とかするという保障が。そして、運よくそれがあった。自分勝手な上に、他力本願な話で申し訳ないが、もし、彼らの正体に気付けなかったら、心の声に負け、一步を踏み出すことなく、ただレイアを強制的に起こして終わっただろう。彼らの正体を知ったからこそ、俺はそれに賭けたわけだ。彼らは悪霊としての彼らではなく、俺の師匠でレイアの守護者としての彼らを信じたのだ。

果たして、俺は賭けに勝った。意志なき悪意の塊は蹴散らされて、何処かへと消えた。だが、これで終わりじゃないだろうな。隙を見ては・・・なんてことは大いにありえる。

怨念の襲撃は俺が一生をかけて付き合うべき事柄なのだろう。赤黒い、どこかの壁画にでも描かれていそうな刺青を撫で、先ほどの出来事に身を震わせる。

本当の意味で悪意を受け入れるということを理解してなかったために、手も足も出す暇なく一方的に蹂躪されて、恐怖し、レイアには悪いが後悔しかできなかった。人間の悪意を、そして何より、『この世全ての悪』を甘く見たツケといえる。文字通り身をもって思い知った。

自我はチューダムたちに護られたが、今日初めて知った心象風景は、こうして姿を変えてしまった。あるいは、これは戒めだな。

———既に気付いているだろうが、今回のことで、貴様は人の身から外れた。今の貴様はアンリ・マユという悪魔だ。いい見方では存在の格が上がったともいえるが、その代償は大きいことを忘れるな。今はまだ、私達の力で護れるだろう。しかし、その刺青は絶えず貴様に悪意を流し込んでいる。近い内に、破綻する時が必ず来る「うそ！？マジで！？」

———「……気付いてなかったのか？」

いや、もちろん人間じゃなくなるんだろ？なあとはいってたけど、悪意が今も流れ込んでいて……。これは当てが外れた。レイアの心の中も一つの世界と考えていたから、そこで刺青を刻めば外の世界で、赤の他人の悪業は背負わなくて済むと思ってたんだけど、流石にそううまくはいかないか。行き当たりばったりだったしね！！

その時、俺の身体がぶれた。

「あ、どうやら起きるみたい」

———「そうか」

ブレ徐々に大きくなっていく中、親衛隊は背筋を伸ばし、こちらに向かって頭を下げる。動物が頭を下げる光景は正直シニールだが、それを口に出して言える空気ではない。

———「方法には問題があるが、それでもあの子の重荷を軽減してくれたことには変わりない。親衛隊を代表して礼を言わせて貰う。

「あゝ……ま、まあ気にするな」

正面向かっていわれたので、照れた。こういうのをいわれるとやった甲斐があったってもん。口の緩みが抑えられなかった。

———それと貴様の左腕だが・・・

「ん？何か言っ——」

最後まで聞き取れず、俺の身体は光の粒となった。

「ん・・・んうあ？」

パチパチッ、と何かがはじけるような音を聞きながら、意識が浮上した。なんだか寝苦しかったので目を開くと、どうやら、地面に直接寝そべっているようだった。ここどこだ？見た感じ大型の動物が住処にしそうな洞穴のようだけど・・・。外はもう夜のようにだ。そこまで把握して気付いた。

じくくく

・・・見られてる。なんかごつつ見られてる・・・。

穴が開くほど俺を見つめるその存在はたくさんいた。というか、地面に横になっている俺を少し離れた場所から見ている。小さな身体を持ち、ふわふわしながら、形が定まっていなにかのように揺らいでいる存在。ある者はまるで火のように猛々しく浮かび、ある者は風のように軽やかに舞い、ある者は水のように静かに漂い、ある者は土のようにどっしりと構えている。他にも色々いて、一体一体は可愛いと思うのだが、天井を埋め尽くすほどの数にじくくくく

くくくっと見つめられているのは、恐怖だ。

寝起きでいきなり一対多数の壮大なにらめっこが始まり、不気味な沈黙だけが過ぎていく。得体の知れない不安に身を晒されているせいか、嫌な汗が背中を濡らす。

「カズキさん!!」

「カズキ!!」

「おはよう、二人とも・・・よかった。ちょっと少し聞きたいことが――」

ようやく、救いの神は訪れた。正しくは女神だった。ていうか、何で近くにいたのに、気付かなかったんだろう？救いの女神は、レイアとムーちゃんだった。起きた俺に気付いたのか、看病してくれていたらしい二人が俺の名前叫ぶ。嬉しそうな笑顔を浮かべつつも、反響した声にやられて、耳を塞ぐ姿はシュールだ。そんな二人に、こいつらのことを聞こうと思ったが、程なくして口は閉ざされた。

見られているのだ!!というか、彼女たちの体中のあちこちに奴らが纏わりついているのだ!!

見た感じレイアのほうが多いようだ。だが、今はそんなことは関係なかった。見られている。こいつらは俺には寄り付かないが、ただ見つめているのだ!!

「う、うわああああああ!!!!???」

「カズキさん!」

当たり前のように恐慌を起こした。もう怖すぎた。恐怖とかそんなレベルを超えている!!何だ、こいつらは一体なんなんだ!!!!

！俺だけが見えてるとかそんなオチはやめてくれよ！！

「ど、どうしたんですか！？何か怖い夢でも・・・」

「ち、違う。もやもやした生き物が・・・！？」

「もやもや？ああ、この子達ですか。大丈夫ですよ、この子達に害はありません。むしろ、私達魔法使いはお世話になってます」

「ほえ？」

間抜けな声が漏れた。魔法使いがお世話になってる？何のことだ。

「もう、分らないんですか？精霊さんですよ。そういえば、カズキさんは視えてなかったんでしたっけ」

呆れたように言うが・・・精霊？あ、ああ。なるほどこいつらが精霊か。多分実体を持たない下級精霊だろう。言われてみれば、火とか水とか風とかまんまだね。今になって見えるのは俺が人外になったせいかな。はは、何だ。そうと分れば安心だが・・・

「じゃあ、こいつらなんで俺の方をみてくるの？」

目とかないので、正確には視線を感じるだけだが。これで、そんなことありませんよなんて返されたあかつきには、自意識過剰で死ぬ自信がある。

「お礼が言いたいんじゃないか？レイアの中で根を張ってた穢れを取り除いてくれたおかげで、ワールドフェイバリット聖女の資格がもとに戻ったからな。そのお礼」

ワールドフェイバリット聖女の資格が元に戻った？良く見るとレイアの瞳が空のように澄んだ蒼になっている。これも関係しているんだろうか？

「ちょっとその辺りを詳しく――」

「ところでカズキさん。私達に言うことがありますよね？」

その時、背後からとてつもなく強大なプレッシャーが迫ってきた。振り向くと、そこには壮絶な笑みを浮かべたレイアの姿が！！隣のムーちゃんも若干引いている。

「あ、あのレイアさん、何をそんなにふべあ！？」

――パシイイン

「あらあら、自分のやったことを忘れてるなんて、カズキさんは馬鹿なんですか？」

「ご、ごめだばあ！！」

謝りきる前に思いっきり頬を張ったかれた。

「何をふべし！！」パシイン

「何かいいましたか」「ちょあべし！！」パシイン

「聞こえませんかえ」「やめ・・・」パシパシパシイイン――

以下エンドレス

「ほ、ほめんなはい。もうひまへん。ふみまへん、ふみまへん、ふみまへん・・・」

顔の原型が分らなくなるほど叩かれ続けた俺には既に気力もなく、ただ謝り続けるだけの存在と成り果てた。

「本当に、心配したんですからね！！」

「ふみまへん、ふみまへん、ふみまへん・・・」

「聞いてるんですか!？」

「アイ・ママ!!」

その日、彼女を絶対に怒らせてはならないという法が身体に刻まれた。またムーちゃんがあまりにも惨すぎて怒るに怒れなかったと後に述べた。ていうか俺殴られてばかりじゃね？

「それで、俺が気絶した後の話を・・・って」

レイアが落ち着き、俺が正気を取り戻して、話をシリアスに持っていこうとあの後の状況を聞こうと思ったが、今度は二人に抱きつかれて、それもままならなくなった。

「本当に心配したんですから・・・」

「まあ、あれだ。良く帰ってきてくれた、主」

本気の怒りは心配の裏返し、かぁ。俺愛されてるなあ。良く見ないとわからないけど、目の下にクマできてる。ちゃんと感謝しないと。ちなみに、普段こんな状況になったら、照れて焦るけど、そんな気力ないです。疲れてます。顔が腫れてます。後、空気も読んでます。

二人が落ち着くのを待ってから、改めて聞くと、レイアは、悲しそうな表情になり口をつぐんでしまった。それを見かねて、ムーちゃんが代わりに話してくれた。

「そうか・・・」

俺はお世話になった人の訃報知って、静かに涙を流す。

俺が気絶してから丸二日、色々とあったようだ。今後はどう転ぶかは知らないが、今のところ追っ手とかはないようだ。先生と爺さんが文字通り命を賭けて切り開いてくれた道は無駄にできないな。てか、彷徨いの森を跡形もなく吹き飛ばすほどの魔法って・・・。

今夜は、偶然見つけた洞穴があったので、この場所で野宿するようだ。サバイバルな時代を思い出す。

「それにしても、お前も眼の色変わったな。最初は火のせいかと思っただが・・・うん、やっぱり変わってるぜ」

「そうですね。私も最初は気のせいかと思ったんですが、カズキさんの瞳は赤くなっているような気がします?」

いや、何でそこで疑問系?

「なんていうか、分りにくい色なんですよ。元々の色が黒だったじゃないですか。でも今は、そこに赤がプラスされたような感じで」

「要は、光に当てないと分らないってことだ」

「ああ、でも今は焚き火しかないから、分りづらいと。おけ、把握」

もしかして、他にも変化があったりするのだろうか。つっても、特異さで言えばこの宙に浮かぶ刺青には及ばないだろうけど。この刺青、自分の意志で動かせるんだぜ。凄くね? ちなみに、この刺青

の詳細を聞かれたときは口を濁しました。まだ心の準備ができていないので。二人も、俺から話してくれるのを待ってくれるようだ。ホンマいい子らやで。

「それで、これからどうする・・・て話・・・何だがよ・・・」

「どうしまし・・・た・・・」

「どうしたんだよ、二人とも。俺の顔に何かついてるか？あ、刺青があるね」

「ちげえ！！左だ、左腕を見ろ！！」

「左・・・うおあ！！！！！！！！！！」

ムーちゃんが指差した場所にはなんと、泥があふれ出してきた。

「え！？なにこれ、知らないよ！？何事だよ！？！？」

俺の混乱をよそに、とどまることを知らない泥は、刺青という器を満たすようにゆっくりと増えていく。

「カズキ左腕を上げろ！！」

ムーちゃんの指示に従った後、俺は後悔した。何と、彼女が口を開けて火を噴き出したのだ！！お得意のブレスだ。火炎放射の如く吐き出された業火は、俺の左腕に向けて一直線に向かう！！って、馬鹿！！こんな狭いところでそんなの使ったら、危ないだろが！！

時既に遅し。

左腕に食いつく炎。熱に晒されてもだえる俺。

だが、事態はさらに予想外の方角へと向かった。燃え盛る左腕の一

部が焼いた餅のように急激に膨れ上がったのだ。そして、グネグネと形を変えていき、牙が生え揃った口をつくって、炎を一飲みにした！！これには流石のムーちゃんも面食らったのか、動きが止まる。当然俺もレイアも。

その隙に、泥は器を満たしていく。そして遂に浮いていた刺青があった場所に、ドス黒い瘴気をそのまま腕の形にしたような腕が生えた！！ものすごくおどろおどろしい気配を放つそれは、見るものを圧倒する。なんて、禍々しいんだ・・・。

一同呆然。

しかし、これだけでは終わらなかった。

「カ、カズキさん？」

「お、おい、カズキそれ・・・」

「なに、まだ何かあるの！？」

二人して顔面蒼白になっていた。なんだか嫌な予感をしつつ、二人に促されてみて見ると、そこには・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ what?

それは常軌を逸した光景だった。

左腕が俺の意志を無視して、ウネウネと動いていた。人体の構造上ありえない動きなのは、これがただの左腕ではないということだろう。そして、前触れもなくぴたりと止まると

『ふむ、こうなっているのか』

としゃべったのだ。

「くぁwせdfgrtqふじこlp;@~~~~!!!!!!?????」

自分でも良く発音できたものだと後に振り返った。そんな俺をよそに、左手がボコボコと崩れたかと思うと、何か別のものに変形していった。それはやがて、上半身だけの鼠となった。真っ黒くろすけでどこことなく愛嬌があ・・・ねーよ!! 禍々しいよ!!

「もう何だよ次から次へと!!! 何、そんなに俺を困らせたいの!?!? ねえそうなの!!! スーさん!!!!!!」

『落ち着け』

「ふべあ!?!」

鼠のパンチを顔面に受けその場に倒れる。

「まさか、チューダムか!?!」

「「ええ!?!」」

ムーちゃんとレイアの仰天した声が聞こえた。

『はっ、親衛隊隊長チューダム、今ここに戻りました』

とりあえず説明しろや。

その後、他の親衛隊も左腕にキノコのようにニョキッと生えては、

レイアに復帰の挨拶をする。その姿は、生前(?)とは逆にかなり小さい。もうミニチュアサイズだ。そんな奴らが、左腕に所狭くひしめいていた。

チューダムが代表して説明する。何でも、これも刺青の影響らしい。失われた左腕の代わりに俺の中の悪意の泥が補ったのだとか。で、その怪奇な代物は中と外をつなぐ門となっているらしく、チューダムたちもこうして出てこれたのだ。もっとも、この左腕からは離れられないようだ。

「お、俺のプライバシーとかは!？」

『ふらいばしーとは何だ』

『いつもの馬鹿発言でしょう』

『・・・所詮はカズキの戯言・・・』

『バカズキダシナ!!』

『そんなことを言ったら失礼だと思うよ、馬鹿なのは事実だけどさ』
『問題ないわ。そんじよそらの虫けらにも劣る脳ですもの』

『バーカバーカ』

『まあ、カズキだしなあ』

『馬鹿あつての彼でしように』

『むしろ馬鹿を超えているんじゃないか?』

『馬鹿を超えている・・・チョバカだね!!』

ミニチュア版親衛隊のちんま姿は和むが、それに反して口が悪い。俺に対しての愛が感じられない!!あの時俺を助けてくれた彼らは何処へ消えた!!

『・・・愛?』

『寧ろ哀ですね』

『・・・その顔で愛とか・・・マジ気持ち悪い・・・死ねばいいの』

に・・・』

『シネッ!!』

『あっはっは、君の言っている言葉が理解できないよ』

『燃やしますわよ?』

『あいあい?』

『あいあいならオイラの知り合いにいるよ、呼ぼうか? 求愛されるかも』

『妄想乙』

『哀で満たされてしまえば良い』

『あんたは世界の中心で哀を叫んでいるのがお似合いだよ!』

ちよっとしたジョークだったのに……。皆が辛辣すぎる。本当にあの時助けてくれた優しさはどこにいったのだろうか……。身も心もズタズタになり、いじめていたかったのに、皆そんなことを許してくれるはずもなく、無理矢理参加させられた。

「それで、これからのことだけど、俺に当てがある。多分あそこなら追っ手も早々来ないはずだし、衣食住にも困らない」

口を開いたのはムーちゃんだった。てか、そんな都合のいい場所あるのか?

「もしかして・・・」

「竜の国、つまり俺の故郷だ」

なるほど・・・確かにムーちゃんの故郷なら信用できるし、考えてみれば彼女は神竜の娘だ。安全は確実に保障されるだろう。

「ど、どうだ?」

上目遣いでこつちをチラチラと見るムーちゃんは可愛い。じゃなくて

「いいのか？自分で言うのもなんだが、俺達って結構迷惑じゃあ・
・」

「問題ねえ。というかお前らに限っては大丈夫だ。俺の主ワールドに、聖女フェイバリットの資格だからな。それにあの国の方針は来るもの拒まず、去るもの追わずだ」

と自信を持って断言する。

「そ、それに、これは俺の里帰りも含まれてるんだ。俺にも生涯無二の主ができたって報告しないとならねえしな！！！」（あの変態に会わせるつもりはないが）」

と顔を真っ赤にして言う。最後になんかいつてたけど、よく聞こえなかった。・・・むう、そんな顔でそんな風に言われたらこっちまで照れるな。気恥ずかしくなって視線を逸らしたら、レイアがなにやら不機嫌そうにこちらを見ていた。

「どうした？」

「・・・何でもないですよ？」

そういっても、こちらを咎めるような視線をやめない。何だ？一体俺が何をしたというのだろうか？

「そこまで言うんだったら、そうしよう。正直何処かで足を休める必要があるからね」

ま、仮にそれがダメでも、俺にも当てがある。何とかなるだろう。

「じゃあ、今後の方針も決まったことだし、飯にしよう。二日間何も口に入れてないせいか、腹が減ってしょうがないんだ」

その一言で、皆で鍋を囲った。俺が気絶している間でも、食料調達はしてくれていたらしい。レイアが相変わらず頬を膨らましているが、今はスルーしておく。というか、ぶっちゃけどうすればいいのか分らんからね。

飯を食い、各自でそれぞれ眠りに入る。チューダムたちは、俺の中に戻っていった。俺の場合は今まで寝ていたので眼が冴えてしまい眠れない。だから、見張りは必然的に俺がすることになった。

「相変わらず綺麗だなあ・・・」

洞穴の外で、満点の星を見ながら一人思う。元の世界では空が汚れていたせいで、ここまで星が見えるのは山の上ぐらいだった。つまり、早々見る機会がなかったのだ。だから、余計にこの星空は美しく感じる。

周辺には特に気配もないので、しばしボーっと空を見る。

よく言われてたことだけど、平穏で本当に一瞬で崩れるものなんだなあ。知りたくなかったわあ。・・・今更になって震えが来るなんて、少し情けないか？まあ、こんなもんだろう。初めての实战だったわけだし、うん。誰だって最初はこんなもんだ

実戦、かぁ。改めて、レイアを護れるかというチューダムの問いに
対する俺の答えを思い出す。あの時の俺の答えで、チューダムは呆
れてたっけか。

「くく、我ながら面倒くさい道だ」

そのことを実感した。でも、そっちのほうがやり甲斐があるしな。

さて、随分とやっていないように感じる四大行をするか。まずは『
点』だ。

しかし、俺は知らない。翌朝出発する、魔法世界のどこかにあると
いう『竜の国』で、行くのを後悔するほどの事件に巻き込まれるこ
とを。後に俺はこう述懐することになる。

———嫌な事件だったと・・・

しかし、それは別の話。いつか、機会があればまた語ろう。

今はただ、一時の休息に身を任せることにする

俺は絶対に相手を殺さない。

敵が来ても、その全てを蹴散らしてやるさ。

そもそも殺すなんて後味が悪いし、そんな面倒くさいのは願ひ下げだ。

『レイアを護るため』なんて尤もらしい大義名分は、結局のところ彼女に全てを押し付けているだけになっちゃうから。

だから、俺は敵を殺さない。

要は俺が強くなればいいんだ。

相手を殺さずに退けることが出来るくらい強くなれば、殺す必要なんて全く無いんだ。

それが俺の覚悟だ。

――――どうだ、格好いいだろ？

――――フッ、その覚悟に見合うだけの強さが身につけばな

番外1 ゲロから始まる二人の友情のヒストリー（前書き）

これは以前誤って削除してしまったものそのままです。

番外1 ゲロから始まる二人の友情のヒストリー

Side スーさん

「ほっほっほ、いい声で鳴くのゝ和樹は」

和樹が落ちていった穴を見ながら、わしは和樹と初めて会ったあの日のことを思い出していた。

和樹との出会いは面白いものだった。

「へっへっへ、お兄さん方、何をしてるのかな？」

三人の不良に襲われているワシを、その日はお酒のせいで、判断能力が大暴落していた和樹が、助けに入ったのだ。いや、正確には絡みついたので。

「あゝん？何だ、テメエは？」

「ほっとけ、ただの酔っ払いだ」

「うわ、マジウザ。こっちに來るんじゃねえよ」

突如現れた酔っ払いに気分がそがれたのか、一人が和樹をターゲットにした。

「おうふ、ぶうう。痛いじゃないかゝww」

殴られた和樹だが、そこから、酔っ払いの力を見せ付けた。

痛みなど酒のおかげで麻痺して平気だったのか、すぐに起き上がった和樹は相手を掴んだ。

「ふっふっふ、酔っ払いをなめんなよ？うぷっ・・・」

「ちょ、ま、待て!!」

「ウオエエエエエエエエエ・・・」

「ギャアアアアアアアアアアアアア!!」

襟元から服の中にゲロをぶちまけてやったのだ。

「あっはっはっはっはっは」

「てめえ、笑ってんじゃねえよ!？お、おい、何かタオルとか・・・」

「

「うわあ、こっち来るんじゃねえ!!？しっし」

「お前くさいんだよ!!」

「俺のせいじゃないだろお!？」

面白いように和樹と被害者から距離をとる不良たち。

「う、やべ、気持ち悪・・・ウボエエエエエエ・・・」

「うわ、きったね!!」

「その姿げーっ!!」

パシャ

あまりの臭さに被害者もぶちまけてしまつてさらに地獄絵図。その

姿を携帯に取りけらけらと笑う和樹。あまりの雰囲気になんて耐え切れなくなったのか、不良たちは逃げ去ってしまった。

「あゝ？ いっちゃったよ……。じゃあ、御爺さ〜ん」

「ほっ！？ ワシ？」

「爺さん以外に誰がいるんですか？ ……はっ！？ まさか、爺さんには幽霊とか見えてるんじゃないか？ ……？」

「いや、この辺には居らんぞ？」

「ならいいや、へっへっへ」

陽気に笑う和樹。むう、なんていうか凄く酒癖悪いな……。

「あゝでも、なんか怖いな……。というわけで、僕ちゃんもう帰るわ。バイビー」

「む、待たぬか。礼ぐらい言わせろ」

「うん？ ああ、別にいいやゝ、それじゃあバイバイキーン♪」

そういう残して、去ってしまった和樹。結局礼は言えなかったのだが、次に会った時にでもいおうかの。と思ったら意外に早く再会したのだ。

あの衝撃的な出会いの日の翌日、わざわざワシを訪ねて謝罪をしにきたのだ。不愉快なものをみせた。その時から、和樹との交流が始まった。

よくあやつの相談に乗ってやったものだ。それに、ワシの話を面白そうに聞くあやつを、もう一人の息子のようと思った。いや、どちらかという、孫の方が正しいかの？

なんにしても、あの時助けてもらった借りをようやく返すことができた。だが、しばらく寂しくなるものだと胸中で呟く。ワシにひれ伏さなかった最初の人間。そして、人間で初めてできた友人。

ワシを飽きさせない彼との雑談は楽しかった。また、機会があれば会いに行こう。

「あの者に幸あれ」

ワシは一人彼にただの祝福の言葉を送る。

———手に先ほどの和樹の壮絶な姿を映したカメラを持って……。

番外2 バナナの皮ラプソディ（前書き）

後半を改訂しました。

皆様お久しぶりです。作者の猫世界でございます

ようやくリアルの忙しさから少し解放されたので、開いた時間にこうして更新することが出来ました。今後も不定期更新ではありますが、ちよくちよく更新していきます。

しばらくは番外になると思います。

番外2 バナナの皮ラプソディ

「まあ、減給三ヶ月じゃな」

それが、彼に下された判決だった。

それは彼の好奇心だった。

下界には、小説、漫画、雑誌、アニメなどを通して様々な神秘の考察がなされていたのは知っていた。もっとも、そのほとんどは世界同士の衝突によって垣間見たものを描写しているだけであるが、それは素晴らしく思えた。中には独自の考察もある。神秘を捨て、科学のみを追及してきた下界の人間たちがほかのどの世界よりも神秘を知っている。面白い。

そして、近年なって現れたネット上にはびこる小説。その中の転生モノは、興味を引かれるものがあつた。

転生トラック

何でもトラックに轢き殺された者は無条件で何処かの世界に記憶を保ったまま転生できるのだとか。さらに、大抵その背後には神々が関わっているというのだ。そして、神は人間に強力無比な力を授けるといふ。ありえない。第一神はそんな暇ではないし、自分を信じていない者に与える力はない。

だが、この内容はとても心引かれる。

だから試したくなった。幸い、もうすぐ長期休暇がもらえる。そのときにでも実験してみよう。とはいえ、人間を殺すのはご法度である。相手は厳選しなければならない。そこで、ふと考えた。

——何のひねりも加えなくてもいいのか？

せっかく休暇を消費して実験するのだ。もっと有意義にしなければならぬのではないか？ 第一、人間の考えをそのまま使うのは神としてだろうか？ それに、できるならいろんな神々に知ってもらいたい。ならば、神界ネットワークやバラエティ番組に投稿できるようなものにしよう。なるべく、面白くできないだろうか？

その時に彼は手に持っていた存在に気づいた。そして、ひらめいた。神である彼がこういうのもなんだが、天啓を得た。

——そうだ、転生トラックならぬ転生バナナの皮、略して転生バナナにしよう

今現在の芸能界は日々新たな芸が生み出されている。確かにそれはいいことだが、ここらで一度振り返るのも悪くないだろう。古きよき時代の芸をみんなに思い出してもらおうんだ！！

それから、彼のバナナの皮に対する研究が始まった。まず、どのような角度が一番すべるか、どうすればきれいに滑ってくれるか、どこに、そしてどのように置けば人間は引っかかってくれるだろうか。一見くだらないように思えるが、そこが肝心なのだ。休暇が終わっても彼の研究は続いた。彼の業務にも少し影響が出始めた。彼の研

究の疲れが尾を引いて、些細なミスが増えたのだ。友人も徐々にやつれていく彼を心配して、何をしているのかを聞いた。

その日から、彼の研究に助っ人が入った。友人が彼の熱意にいたく感動したのもあるが、学生時代から久しく忘れていた、あのころの馬鹿騒ぎの情熱が再燃したのだ！！研究がはかどり始めた。一人でやってできないことも、みんなでやればすぐにできるのだ。仕事が終わればすぐ研究。最近はその繰り返しだった。ついに上司が何をコソコソやっているのかを聞いた。

そして、新たな仲間が増えた。上司は以外にもこういう馬鹿騒ぎは大好きだったのだ。今ここにいるのは身分の壁を越えた戦友だった。彼はいたく感動した。

彼の好奇心から始まった研究はようやく終わった。その日の晩はみんな朝まで飲んだ。

ついに、運命の日（週末）がやってきた。下界につながるゲートの前に立つ彼とその周りを囲む友人たち。上司は休日にも関わらず、仕事が入っているため、いない。残念ではあるが、本人は

『私のことは気にするな。こうして、君たちと戦い抜いたという思い出があるだけで十分さ』

と男前な発言を残していった。そんな上司を思っ目を瞑った彼は、ついに研究の成果、転生バナナの皮を右手に構える。周囲が異様な緊張で満たされる。誰かが生唾を飲み込む音が響く。そして、彼はゲートに投げ入れた。後は結果を待つだけだ！！

固唾を吞んで、転生バナナの皮が落ちた先を見つめる。

そして、運命のときがやってきた!!

対象は、以前あの御方を殴ろうとしていた屑どもの一人だ。生きて
いる価値もない動く生ごみだ。しかし、それだけの理由で彼を選ん
だわけではない。

実は奴は隠れオタクなのだ。そして、勿論転生を題材としたネット
小説だって読んでいる。

つまり、そういうことだ。

だが、直接的に殺してしまうのは問題である。

だから、転生機能を持ったバナナの皮である。

バナナの皮を誤って下界に捨ててしまったという建前で、法の穴を
突く。つまり事故として処理をする。

こいつには、恥を掻かせた上で、更に転生という名の制裁を受けて
もらう。

だが、慈悲深い私は彼にチャンスを与えているのだ。

考えてみるといい。如何に凄まじいバナナの皮といえど、所詮はバ
ナナの皮。確かに数あるバナナの皮において、最高峰の滑り度を発
揮するだろう。

しかし、しかしだ。それで死ぬ可能性というのは一体いかほどであ
るか。寧ろ生き残る可能性のほうが大きいのだ。これがトラックで

あれば、確実に死ぬだろう。しかし、今回はバナナの皮。

もし、ここで歩く生ゴミが生き残れば、それ以降の手出しはするつもりはない。せいぜいネット上に奴が滑った瞬間の映像と隠れオタクの一面を、大量にばら撒いていくくらいだ。社会的に半殺しにする。

ああ、その程度で収める私はやはり慈悲深い。

しばらくして、奴が来た。毎日この時間にここを通るのは既に調査済みだ。さあ、歩く生ゴミよ、バナナの皮の前でひれ伏すがいい!!

一步、また一步と近づいてきた対象は、バナナの皮に気付いていなかった。当然だ、そのために長いこと研究していたのだから。

私を含め、その場で映像を見ていた者達は、皆固唾を吞んで見守っていた。

そして、遂に・・・!!

だが、ここで予想外のことがおきた。後ろから、青年が走ってきたのだ。青年はどうやら急いでいるようだった。当然、巧妙に仕掛けられた転生バナナの皮に気づくはずもない。

「ん？ ああ!! テメエは!!!」

「うわあ!! 誰だか知らないけどコワッ!!」

「あの時はよくも!」

「きっと人違いですううううううう!」?

何と言う運命の悪戯か。

背後から息を切らして走ってきたのは、あの時のゲロ青年。そのことに気がついた歩く生ゴミは後一步のところで振り返って、青年に殴りかかった！！青年は一瞬怯んだが、何とか避けて、そのまま走り抜けてしまった。

一步

たかが一步、されど一步。

侮ること無かれ、その一步が全てに決着をつける事だってあるのだ。勢いよく走りぬけた青年は、滑って転んだ勢いも良かった。

結果、頭を打って絶命。

微妙な沈黙と作動しているカメラの音だけが、空しく場に響いているのだった・・・

それらのことを思い出して、身震いした。正直あの時はどうかしていた。減給三ヶ月で済んだのが奇跡だ。

「ふー、笑った笑った。うむ、息子があんなに焦っていたのも珍しかったの。いやいや、これほど笑ったのも久しぶりじゃて」

あの方は全てを知らながらも、快活に笑うだけだった。

「お主がやったことは非常に不愉快ではあったが、それ以上に愉快的な出来事が起こった故の処置である。以後は気をつけよ。表向きは

お主の望みどおりに事故としておこう。まあ、実際に事故だったわけじゃが。和樹にも内緒にして置こう。その代わり、映像はわしのブログに載せさせてもらうぞ。ああ、それとだ。お主の作った機能で和樹の魂が今世界の狭間に保管されて、転生の時を待っておるじやろ。今わし暇じゃから、お主のやるはずだった役割を代わりにさせてもらえんかのう？」

と笑顔のまま、神力を解放されたあの方の申し出を断る術など持ち合わせているはずも無かった・・・。

番外3 笑う門には服来る (前書き)

番外編でございます

一応ギャグのつもりです。

番外3 笑う門には服来る

生きる上で、衣服というのは凄く大事な部分を占めている。元の世界にいた俺だからわかるが、服というのはその土地の特色を大きく反映されている。熱帯地域には、ほとんど衣服の類を着ない裸族が多い。温帯地域や薄着や温かい季節であれば、皮膚を覆う面積を小さくする。砂漠であれば、乾燥や紫外線、赤外線などから身を護るために全身を覆う服を着るときもあるそうだ。

つまり、服とは文化の象徴であり、身を護るための簡易的な鎧でもあるのだ。それ以上の意味はないし、いらない。ましてや勝手に動いて、襲い掛かるなんてことはあってはならないのだ。

さて、そろそろ現実を意識を戻すとしよ——ヒュッ

「うぬおわあ!？」

バキバキボキッ

「あ、あんなに太い木の幹を一撃粉碎だど!？」

懸命な諸君ならこのやり取りで分かるだろう。たった今、空気を切り裂いて、木をなぎ倒したソレ。何故か起き上がった瞬間俺に襲い掛かってきた動く怪奇現象。

——俺は緑色の全身タイツに襲われていた。

「カズキ、今日は、服を作りな」

始まりはこの一言だった。昼飯を食っている最中、正面に座っていた先生が何の脈絡もなく、そうのたまった。

「いきなりなんですか？」

「臭い」

「いや、臭いって・・・」

「臭いもんは臭い。お前さんその服洗っているのかい？」

「そういえばカズキさんの服って、それ一着しかありませんでしたよね」

「ん？そういえば、そうだな」

この世界に落とされて数日、その時に着ていた服を毎日来るはめになっている。元の世界では、ジーンズは約一週間、上に羽織るのは二・三日、下着やTシャツはその日、といった割合で洗っていた。しかし、当然の話だが、ここには洗濯機なんて便利な文明の利器などなく、全て手洗いである。そして、日々の修行で疲れきっている俺には、そんなことをする気力などあるわけなく、しかも、洗ったら洗ったで着る服がなくなってしまうので、泣く泣く同じ格好をし

ているのが現状である。もう、匂いにも慣れてしまつて何ともいえない。

あ、一応言っておくが身体はお湯に浸した布で毎日拭いている位はしてるから。でも、日本人としてはお湯にずっしりと浸かりたいなあ。・・・その内、作ろうかな。そういえば、レイアは湖で沐浴してるし、先生はどうやってか知らんけど清潔を保ってるよなあ。

ふと、二人を見ると、若干引いていた。

「でも改めて誰かに言われてみると臭いな。でも。これ以外に服なんてないしなあ」

「だから、自分で作りなつて言ってるんだ」

「え？手伝ってくれないんですか？」

「あたしは研究があるし、レイアにも手伝わせるつもりだ。悪いけど、自分でやっておくれ。基本的には、自分のことは自分でやるのがここのルールだ」

ああ、そういえば新しい魔法薬に完成の目処が立ってるんだっけ。つっても服なんか作ったことないしな。縫い方も良く分からないし、どうしよう。

「お前さんには錬金術があるだろが」

そういえばそうだった。

場所は自分の部屋で作ることにする。レイアに用意してもらった大量の布を適度に切っては床に広げ、手を合わせる。出来上がったのはトランクス。ふむ、試しに作ってみたら案外スラっとできたな。この調子で他のものも作っていこう。特に柄とかに拘りを持たないし、ここではそんなものは必要ないので、最低限の体裁を整えるだけでいい。そうしてサクサクと下着やシャツを作っていく。大体それぞれ二つ三つあればいいと思う。順調に進めて行き、後は普段着を作るだけとなった。寝巻きとかは特に要らないだろう。

さて、一体どんな服を作ろうか。

今回に限って言えば、錬金術の基本である『理解』『分解』の二つは出来る。材料は布、つまり天然繊維の塊。そこまで理解すれば分解も出来るはずだ。じゃあ、再構築をする際にこういった形にすればいいのか。

優先的に考えるのは外見より中身だろう。この辺りは森の中ということを除いても、少し肌寒い。ポロシャツだけで過ごしていくのは少しきついと思っていたのだ。ならば長袖だろう。修行のためにも色々欲しい。汗もかくから、そのことも考えないとな。長く使いたいから丈夫にするべきだろう。

そのことを踏まえて作るとすると・・・通気性、保温性、吸水性、吸湿性、伸縮性、速乾性などの快適な機能に加え、動きやすさを追求し、長く使える、不快感のない素晴らしい肌触りの長袖の服。

「よし」

もう一度言うが、錬金術の基本は『理解』『分解』『再構築』。

対象を理解する

理解したものを分解する

分解した物を元に新たなものを作る

俺という存在は錬成陣、つまり錬金術そのものなのだ!!

足りないところは妄想で補え!!!!!!

強い想いと共に、俺は布に手を当てた。

突如発生する錬成反応。勢い良く迸るそれは、まるで俺のイメージを忠実に再現しようとするように奮闘しているようであった。布の形が徐々に変わっていく。わくわくしながら、出来上がるその時まで待つ。

数十秒が経ったところで、ようやく錬成は終了した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何故に？」

それまでに作ってきたものはちゃんとある程度イメージどおりに作れた。三枚のトランクと二枚のTシャツ。だが、たった今錬成し

たばかりの普段着はイメージからかけ離れていた。

俺の中では、黒いチャイナ服っぽいデザインがあったのだ。それを再現しようとしたはずなのに、これは一体どういうことだろうか。どうして・・・

「どうして緑の全身タイツなんじゃあああああああああああああああ
ああ————ツ!!」

着たらダサくなること請け合いの超高性能修行服、ガ○スーツがそこにはあった。熱血青春忍者の普段着だ。いや、さっき述べた特徴に全部当てはまっているけどさ!!これダサイよ!?!何気に俺にピツタリそうなのがいやだ!!

「こ、こんな恥ずかしいもの着れん。いや、そもそもこんなものを二人に見られたらなんていわれるか————」
「あ、出来たんですか？」

お前タイミングを見計らっていただと、思わず突っ込みたくなるようなくらい、いいタイミングで部屋に入ってきたレイア。

「レレレイア!？」

「それですね。少し見せてください」

やばい!! 咄嗟に、扉の前にいる彼女から見えないようにガ○スーツ——もうガイスーツでいいや——を背中に隠す。

「じ、実はまだ未完成なんだ!! ちょっと失敗しちゃってね、今から少し作り直すところなんだよ。ところでレイアはどうしてここに？」

良く見ると、その手にはお盆を持っており、その上には様々な液体が入っているフラスコやビーカー、それと葉草などが置かれていた。

「研究に一段落着いたので、片付けてたんです。研究室にはもう置く場所が無かったので、おばあちゃんの部屋に置こうと思って。したら、叫び声が聞こえたので様子を見にきたんです」

「な、なるほどね」

俺の自業自得だったわけだな。

心の中で冷や汗ダラダラの俺の尻目に、レイアは『お婆ちゃんてば、いつもきちんと片付けないから場所がなくなるんですよ』と何かを思い出したのか、彼女にしては珍しく鼻を鳴らした。

「じゃあ、完成したら見せて・・・きやあ!!」

「うおっ!？」

部屋を出ようとしたレイア。しかし、その途中に布の切れ端で足を滑らして仰向けに転んでしまった!! こちらに飛来してくるお盆の上にあった者達。このままでは危ない!! そう思った俺はすぐさまそ

の場から離脱し、それらを華麗に避けたのだった。

「アウチッ!」

・・・そして、そのまま俺も切れ端で滑って転んでしまった。

「あうう・・・」

「あちゃあ。これまた派手にやらかしたな。大丈夫、レイア？」

「はい、ありがとうございます」

レイアに手を貸しながら、被害状況を見た。床は酷い惨状だった。でも幸いなことに、下着はギリギリ大丈夫だった。ただし、ガイスーツ、おめえはダメだ。

自分の仕出かした事を見たからか、しゅんとするレイア。

「とりあえず、片付けようか。レイアはそっちお願い。俺はこっちやるから」

「あ、私が・・・」

「いって。俺の部屋だし、これくらい手伝うよ。それに少し休憩したかったしね」

「・・・分かりました」

しよげている彼女を、さりげなく薬品の匂いを放つガイスーツから遠ざけ、密かに手を合わせ錬金術を発動する。レイアの目に入らないように、ガイスーツを元の布に戻そうとしたのだが・・・

ぷすん

気の抜けるような音が出るだけだった。

「あれ？」

「どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもないよ」

手を止めて、こちらに振り向いたレイアの死角に隠す。何で、錬金術が発動しなかったんだ？とりあえず、もう一度試してみる。しかし、今度は更に予想外の反応が起こった。

————ドカン！！！！

なんと、ガ○スーツが閃光を放ち、爆発したのだ！！爆風で後ろに思いつき吹き飛ばされた俺。壁にぶつかり、一瞬息が詰まったが、

なんとか意識を保つ。ていうか俺ここに来てから、吹き飛ばされてばかりじゃないか？

その事実 zu うんざりしつつ、爆発の中心に目を向ける。

果たして、そこに在ったのは仁王立ちのガイスーツであつた。

「え?？」

「ふええ?」

その立ち姿はなんと雄雄しきことか。隣では、レイアが驚いた目を向けている。

着ている者も無く、自らの意志で以って立ち上がるガイスーツに一種の感動を持ってしまふ俺は間違っているのか? いや、間違っていない。

呆然としている俺たちを他所に、ガイスーツは俺に近づいてきた。そして・・・

————バキアツ!!

「ウオツ!？」

いきなり、俺に蹴りを放ってきた。咄嗟に伏せて避けるも、ドアが破損してしまった。

「って、何で!？」

攻撃してきた理由が分からない。執拗に俺を狙っては、家の中を壊していくガイスーツ、いや今や害スーツ。壁、階段、床、俺を狙ってはずれたその攻撃に、手加減なの一切無い。一体どこからそんな

「ふっふっふ、俺がいつまでも逃げたばかりだと思ふなよ？」

この世界に来てから、俺だって少しは体力はついたのだ。無駄な贅肉など無い。力だって付いてきた。それに、能力だってある。魔法は、まあ簡単なやつならちらほらと。

さあ今こそ戦う時だ！！

俺は落ちていた枝を広い、能力を発動させる。枝は、何かに浸食されるように黒く染まっていく。騎士は徒手にて死せず。簡単にいえば、対象を宝具とする能力。さらに、それを武器として全ての武器ガンダールズを操る者を発動。

来るなら来い！！

こちらの意志を汲み取ったのか、害スーツは構えた。こちらも構える。

一陣の風が両者の間をすり抜ける。そして――――

「やっぱ無理！！」

「!?!」

飛び出してきた害スーツを無視して、その場に伏せた。突然の俺の行動に、勢い余った害スーツは、そのまま俺の頭上を通り過ぎてし

まった。

「!?!?!?!」

さらに、井戸に落ちてしまった。

「……結果オーライって奴か」

ばしゃばしゃと手足を必死に動かしていた。まるで、足が攣って溺れかけている人みたいになっている。その姿を見ると、少し可愛そうになってきた。服は水を吸うと重くなる。しかも、やつは吸水性にも長けているのだ。その苦しみは普通の奴の比では無いだろう。いや、他にもこういう服があるのかはともかく。

「よし!!」

結局、助けることにした。具体的には縄をたらして引き上げるだけ。いくら重いといっても所詮は布。俺の筋力で持ち上げることも不可能ではない。引き上げた瞬間襲われるかも知れないが、そのときはそのときだ。

引き上げた途端膝について、ハアハア言っている……ようだ。服でも疲れるらしい。少しして、落ち着いたのか、様子を窺っている俺に気がついたようだ。そして、奴もこちらを窺う。いつ襲い掛かってくるか、オドオドと腰が引けてしまう。だが、一向にその気配はない。一体どうしたというのか？

「大丈夫ですか、カズキさん」

二人で見詰め合っていると、レイアがやってきた。そして、この状

況に首を傾げた。

「あの方は一体どうしたんですか？」

「いや、それが井戸に落ちたのを助けたらこうなった」

俺もわからない。奴は依然としてこちらを見てくるばかりだ。

「じゃあ、本人に訊いて見ましょう」

「は？」

意味不明な発言に一瞬耳がおかしくなったかと思った。そんなこと出来るのかと、疑っていると、レイアがフンフンと頷いたり、軽く目を白黒させたり、くすくす笑い出したりと、なにやら会話が成立していた。害スーツの方は、俺を指差したり、地面に手を叩きつけたりと実に多彩なジェスチャーであった。

「分かりましたよ、カズキさん！！」

流石レイアだ。頼りになるな

「この方、実は女の人ですって！！」

「だから何だあああああああああああああああああああああ
あ—————！！」

閑話休題

話を纏めると、

『ダサイ』発言

←

ブチッ

←

『殺す』

という事件だったわけだ。これ以上無い簡潔かつ分かりやすい纏め方だ。

え？意味分らないって？

まあ、詳しく説明すると、まずガイスーツが動けたのは、レイアの持っていた液体がたくさんかかっていた所に、一度目の錬金術によって理解不能の超化学反応が起こって、自我が生まれたのだ。それで、二度目のときに動くためのエネルギーを得た。で、ガイスーツが俺を執拗に攻撃してきた理由は、『ダサイ』とか『着たくない』と言っていたのおぼろげながら覚えていて、コレに軽く殺意を覚えたのだという。服としても女としても、そんなことを言われれば攻撃の一つや二つはしてしまうとは本人の弁。でも、井戸に落ちてこのまま生涯を終えてしまうと思っていたところを助けてもらったので許してやらんでもないとのこと。

クイクイ

俺に向かって両手で手招きをするガイスーツ。着ろと？俺に着ろと？

「カズキさん……」

レイアが何かを訴えるような目をして、こちらを見る。

「い、いや「おや？出来たのかい」」

俺の言葉が遮られ、現れたのは先生だった。若干疲れているようだが、その満足げな顔から、研究が終わったことが窺える。恐らく、手に持っているフラスコの中の形容しがたい色の液体がそうなのだろう。

「どうれ、私にも——」

それは、不幸な事故であった。先生が踏み出したところに一匹の鼠が通り過ぎたのだ。研究の疲れで足元が若干おぼつかなかった先生は、鼠に足を取られてしまった。

こける先生

飛んでくるフラスコ

もう、後は分かるな？そのフラスコは、俺のほうに向かっているんだ。避けれそうにないわ、これ。あの先生がこけたことにビククリして、完全に避けるタイミング逃しちゃったもん。まあ、当たっても、どうせ濡れちゃうだけだからいいか。

「カズキさん危ない!!」

あれって叫ぶほど危ない液体なのか！？何！？どうなるのさ！！？

———ドンッ

誰かに身体を押された。直撃コースから免れた俺。一体誰に？直後、何かが割れる音がした。

「お、お前・・・どうして・・・」

なんと、俺の押したのはガイスーツだった。俺の戸惑いに、ガイスーツはただ腕を上げ、頭を撫でただけだった。

そして、ガイスーツは一瞬で燃え広がった・・・

「ガイスーッウウウウウウウウウウウウウウウウ———！！」
「あたしの葉がああああああああああ———！！」

その後、先生には家の惨状の件でこっそり絞られ、薬の件で理不尽に八つ当たりされた。どうも、あの薬は水と混ざると燃える性質があったらしい。あの時、俺も多少濡れていたから、あいつがいなかったら俺は大火傷を負っていたに違いない。

壊れた箇所を直しながら考える。

どうしてあの時ガイスーツは俺を庇ったんだろうか……。今の俺にはそのことしか頭にない。

「カズキさん、そんなに気を落とさないでください」

「レイア……」

「あの人はあなたを護れてよかったって言ってました。コレで借りは返したとも」

「借り、かぁ」

恐らくは、井戸に落ちたときのことだろう。

「でも、だからって」

「服は人間を護るための道具です。彼女はその存在意義を全うしたに過ぎません。だから、カズキさんが気にするようなことじゃないです」

でもなあレイア。俺はあいつを拒絶したんだぜ？それでもあいつは助けてくれたって言うのに、俺は……

「全く、二人してしけた面並べてんじゃないよ」

先生がやってきた。

「先生」

「あんたらがいつまでもそんなんじゃないやあ、こっちまで気が滅入っちゃうよ。ほれ」

そう言って先生は俺に何かを投げた。

「あんたの新しい服だよ。あたし自らが作ってやったんだから、文句言うんじゃないよ」

ズボンと上着の一式。広げてみると、それは中世ヨーロッパの庶民が切るような服だった。全体的に白っぽい色だったが、右袖の先端部分は緑色の布が縫われていた。

「これは？」

「あたしが復元できたのはそこまでだ。他は風で飛んでいってしまったからね」

それだけ言うと、彼女は去っていった。まさか・・・

「あはは」

大層貧相な姿になって戻ってきたが、気にしない。どんな姿でもあいつはあいつなのだから。

「さて、続きをするか」

「私も手伝います!!」

そうして、再びあいつを生み出した中途半端な錬金術を使う。緑色の袖に感謝をしながら。

番外3 笑う門には服来る (後書き)

感想お願いします

幕間4（前書き）

超短いです

これから、捏造などのオリジナル設定がコレまで以上に入れていく予定です。

そういったものが嫌な方は、戻ることをお勧めいたします。

それでも良いという方は、今後ともご贔屓お願いいたします。

「聞いておるのか？」

「うばああああああああああああああああああ
あああああ！！！」

•
•
•
•
•
•
•

L

「おがあああああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

「……千の雷ブチかますぞオイ？」

「聞いてえますともお」

一瞬で泣き止むどころか、身だしなみを整え、先ほどの無様な姿の名残を一切残さない、キリツつとした態度を取る。誰だって雷系上級呪文の餌食にはなりたくないだ。ぶっちゃけ洒落にならない。

しかし、この姿だけを見れば、百人の女性全員が彼の虜になりそうなものだが・・・まあ、外見はよくても、中身が残念な奴はどこにでもいる。彼もその一人であつたというわけだ。

「さてえ、私のプランの話でしたよねえ？別にい、永久凍結する必要はありませんよお」

「む？　しかし、神樹は既に失われたはずじゃろ？」

「確かにい、フィリスが持ち出した神樹はあ、クラウス君の超極悪広域殲滅魔法陣の餌食となつて、真っ白に燃え尽きてしまいました
 があ、皆さんお忘れじゃあないですかあ？」

?

「あれはあ、私が作った魔法具であるとはいええ、その本質はどちらかというと植物なんですよお？」

その言葉に 全員が何かに気付いた。あれは、人の手で作り出されたとはいえ、限りなく植物に近いという。そして、それを創り出したのは、目の前にいる天才と名高い男。それはつまり――

「まだ神樹はあ、この世からあ消え去っていません」

「ところでアレイスター。いつも不思議に思っておったのじゃが、
どうして毎度毎度部屋を暗くするのじゃ？」

「それがあ、秘密結社の醍醐味だからですう」

「・・・そうか」

S i d e o u t

幕間 4（後書き）

感想お願いいたします。

次からは第二章に入ります。チヨクチヨク番外をはさみつつ、ちらほらとやっていきます。

イメチェンってレベルじゃねえorZ (前書き)

今回も短いです
会話文が多いです

イメチェンってレベルじゃねえorz

「ほう、つまり、そいつをボコレと」

「うむ。うちの馬鹿弟子は、伸びは凄まじく、目を見張るものがあるのだが、いかんせん、少し有頂天になっておる」

「いや、それにしたって、アンチヨコ見ながら呪文を唱えるのはないと思うんだが・・・」

「わしもそう思っているのだが、何度言っても『大丈夫だろ』の一言で聞かんのだ。全く、才能の塊というのは扱いにくいのが難点じゃ」

「まあ、挫折を知らない天才なんてそんなものだ」

「だから、おぬしに頼んでおるのだ。おぬしは手加減のプロフェッショナルだからの。圧倒的強者でありながら、間違って殺してしまう可能性はゼロというのは、ものすごく魅力的なのじゃ」

「んー、でもそこまでする義理なんて無いしな・・・チラリ」

「・・・何が望みじゃ」

「さっすが、話が分かってるう」

「ふん、あからさま過ぎるわ。それより、さっさと望みを言うがよい」

「なに、簡単な話だ。今度、俺を手伝ってくれ。ああ、別に犯罪の片棒を担げて言ってるわけじゃない。むしろ、お前らにも利益はあるからな」

「一体何を手伝えというのじゃ。大抵のことは自分で出来るじゃろ？」

「はっはっは。その大抵以外のお話なんだよ。それにお前にも関係あることだ。いや、あったことって言うのが正しいか」

「・・・何を企んでおる？」

「今も昔も変わらんよ。目的はただ一つ。親友との約束を果たすだけさ」

S i d e 三人称

魔法世界は今、二つに分けられていた。

昔から魔法世界に住み、亜人種が多い南のヘラス帝国
新たに魔法世界に移住してきた人間種が多い、メガロメセンブリア
を盟主とする北のメセンブリーナ連合

両者は古くから様々確執を持っていた。事実、国境近くでは小競合
いが続いていた。

だから、戦争の火種などには事欠かなかったし、こうなることはい
わば当然の結果だった。

そう、長い時を経て、遂に本格的な戦争が幕を開けたのだ。たとえ、
それがある秘密結社によって引き起こされたものであろうとも・・・

後にこの戦争はこう呼ばれることになる。

ペルム・スキスマクタイム
大分烈戦争と！！

「アレが紅き翼か」

「ま、間違いないよ、親父。あああれ、紅き翼、だって、うん。この子が教えてくれた」

「はっはっは。マグ、お前が言うならそうなんだろうよ。まあ、あそこにあいつもいるしな」

崖の上に現れた二つの影。

親父と呼ばれた男は、姿からして異常であった。全身を紅い布で包み、その容姿は謎であった。分かることといえば、包帯の隙間から窺える黒い髪と血の滴るような赤い瞳だろうか。そして、左腕には過剰なまでに鎖が巻かれているのもまた異常さを引き立てていた。

もう一人は、マグと呼ばれた巨漢の男。身長は三メートルを超えているだろうか。見事なスキンヘッドのつるつる頭で、足が短く上半身の割合が多いがっしりとした体付きの厳つい人物なのに、本人からはまるでチワワと対面しているような印象しか得られず、外見と中身が一致していない存在であった。その肩に乗っている鳥が、彼から得られる印象を助長する。

「そろそろ、始めるから、そいつを帰したほうがいいぞ」

「ああありがとう」

マグは、鳥にお礼を言って、空へと放った。これからすることに巻き込まないためだ。

「さて、じゃあ手筈どおりになって、ん？」

二人は、崖の下で鍋を囲っている集団に目を向けて、何事かを企ん

でいるようであった。しかし、その企みはとある闖入者によって妨害されることとなる。

「・・・なあ、何か褐色のおっさんが剣投げて奇襲をかけたな」

「ううん」

「どっちだ。あ、何か剣士がお返しに剣を切断したな。おお、崖も綺麗に斬りやがった。中々の使い手だわ」

「そ、そそ、そうだね」

「ふむ、でもあの剣士どうやら相当ウブみたいだな。カプセルから出てきた色気たっぷりの女に抱きつかれてタジタジだもん。俺も昔はああだったなあ。やっぱり同じ日本人、大抵はああなるよな。ていうか、保険として用意されたあのロリ少女、強かだな」

「かか、可愛い」

「はっはっは、まさかこんなことで浮き出るマグの性癖。いや、お前の場合は純粹にそう思っているだけか。って、ちげえよ!! あいつら戦い始めちゃったじゃん!? 何、本来なら俺が戦うはずだったのに、これはどういうことだ! タイミングか!? タイミングが悪かったのか!? って、これ原作のシーンじゃね!!? あ、原作って言うっちゃったよ!? どうしよう!?!」

「おお親父、落ち着く」

あたふたとし始めた包帯男とそれをおろおろしながら宥めようと頑張るマグ。視線の先には、苛烈な戦いを繰り広げる二人の男。片方は頭に美のつく少年。もう片方は、綺麗に整えられた筋肉達磨。正直あの二人の戦いは環境破壊以外のなにものでもなかった。

「よし」

「どど、どうする?」

「介入する。なんていうか、あれだ。そうしないとここに来た意味ないし、フィリウスの奴に貸しを作れない。というわけで、いくぞ

「!!」

「おお、おう？」

「どうして疑問系なんだ！？そこははっきりと叫べ!!」

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「耳元で叫ぶな!!やかましい!!」

「ごご、ごめん、親父」

理不尽な言葉に凹みながらも、健気に男についていくマグ。崖から飛び降り、件の二人へと突撃し、二人にむけて叫ぶ。

「その戦い、ちょっとまぶへえあ!？」

「おお、親父い!？」

「んあ？今なんか飛び出してこなかったか？」

「そうか？まあそんなどうでもいいことより、この戦いを楽しもうぜ!!」

「はっ!!どうせ俺様が勝つ!!」

「言ってる!!」

が、最後まで言わせて貰えず、むしろ存在すら認めてもらえず、二人の戦いの前にあっけなく敗退してしまったのだった。

「何をしにきたのじゃ、おぬしは・・・」

それを目撃してしまった爺臭い言葉遣いの少年は、友人である男の無様な姿に呆れてしまったとか何とか。

S i d e o u t

「もうやだ死にたい・・・」

「おー、よしよし。おぬしにもその内いいことあるからの。何、今回が悪かっただけじゃ」

「お、おお、親父、元気出す」

なんていうか、瞬殺されました。なあにコレ。一応俺ダイオラマ球での時間を除いて、七百年以上生きてるのにさあ、めちゃくちや鍛えたはずなのにさあ、小僧共相手に瞬殺って・・・。なんていうか？アレだけ大物臭を出してたのに、実際はただの小物だったというがっかり感を見事に演出しちゃった的な？・・・え？大物臭出てなかったって？徹頭徹尾小物臭かった？ははは、そんなバナナ、間違えた、そんな馬鹿な・・・

「それにしても、未だに決着がつかぬな。まあ相手がそれだけ手練れというわけじゃが」

「あの二人、つつ強い、でで、でも親父程、つ、強くない」

「ですが、瞬殺されましたよね？」

「ああ俺はミジンコ以下の存在価値しかないゴミ屑だ。はは、なに？強くなったから、調子に乗ってたって？仕方ないじゃん。男の子だもん」

「これ、余計なことを言うでない。一度落ち込んだこやつが立ち直るには相当の労力がかかるのじゃぞ」

「面倒くさい人ですねえ」

何か胡散臭い微笑みを浮かべている奴が、更に口を吊り上げた。あ、こいつ真性だ。

「まあ、そんなことはどうでも良いのですよ。いつの間にか、さり

げなく私達の輪に入っているあなた方は一体何者なのですか？話を聞く限り、ゼクトのお知り合いのようですが」

「ふふん。当ててみな」

再び顔をただの胡散臭い笑みに戻し、瞳の奥に警戒の色を見せる、でもやっぱり何処からどう見ても胡散臭く見える男・・・なんだっけ？ああ、そうそう、クウネル・サンダース。原作は、答えを出す者を使わないと思いつけないくらいに薄れてるからなあ。あ、ちなみに今のは普通に思いつけたから、そこんところよろしく。

「アルビレオ・イマです。どっから来たんですか、その名前は」

「なん・・・だと・・・」

馬鹿な、奴の名前はクウネル・サンダースだったはずだ！？一体いつ名前を変えたと言うのだ！！

「変えたも何も最初から私の名前はアルビレオ・イマ一つしかありません。しかし、クウネル・サンダースですか。・・・いいですね」

あ、いいんだ。流石紅い翼きつての変態。

「ではなくて、あなたの正体の話ですよ。一つだけ心当たりあるのですが・・・」

そこまで言って『聞いていた話とは・・・』とか『いや、しかしそれ以外に・・・』などとブツブツ自分の世界に籠ってしまった。

「あー、なんとなく何を悩んでいるか分かるけど、とりあえず言ってみ」

「では、僭越ながら。・・・その全身に巻いた紅い布。左腕にコレ

でもかときつく巻かれている鎖。そして、布の隙間から出ている黒髪と赤目から推察できるあなたの正体は———」

どごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!

「あゝれゝ・・・って、何で俺にピンポイントで当たるんだよ!? どうせなら、もっと周囲を巻き込めよ!?」

「おおお、親父iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

「さりげなく魔力で防いだのは流石じゃが、言っていることが最悪じゃぞ、カズキよ」

「カズキ・・・では、やはり彼が・・・」

アルビレオが俺の正体を語ろうとしたその瞬間、『何か』に吹っ飛ばされた俺。

「あ、わりい」

『何か』は、後の英雄、今はただの赤毛の馬鹿ことナギ・スプリングフィールドによって放たれた、『雷の暴風』だった。

「ち、あいつの魔力の底が見えねえな。気合防御!」

「へ? ふべらばああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

そして、吹っ飛ばされた先で、気合防御に受け止められるも、アンチョコをチラ見しながら詠唱した、ナギの『千の雷』と挟み撃ちにされてしまった。

「ん? 今なんか聞こえたか?」

「あゝ、さっき誰かを吹き飛ばした気がする。でも、あれだ。まさ

か吹き飛ばされた先が俺たちの間っていうのは、流石に無いだろ」

「だははは、確かに、どんだけ運がねえのって話だな!!」

「って、油断させての『雷の斧』!!」

「バーカ!! そんなの読んでたわ!! フンッ!!」

「うお、気合だけで防ぎやがっただと!?!」

「驚くのはまだ早え!! ラカン適当にパンチ!!」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

そうして、嵐は通り過ぎ、後に残ったのは、紫電を纏い、プスプス
と煙を身体から立ち上らせている、絶賛気絶中の俺だけだった。

ちなみに、この後、マグに回収されました。

.....本当に何しにきたんだ、俺。

イメチェンってレベルじゃねえorz(後書き)

お知らせ

明日から一週間忙しくなるので、しばらく更新が出来ません
どうぞご了承ください。・・・って、いつものことか。

ええい!?!またあいつか!! (前書き)

短いです

進まないです

テンポ悪いです。

ええい！？またあいつか！！

Side 三人称

「はっはっは！！その程度か、ナギ・スプリングフィールド！！」

「は！まだまだこれからだつての！！オラァッ！！！」

「遅い！」

目の前で嘲笑を浮かべる全身赤布の男に一撃を喰らわせようと、赤毛の少年ことナギ・スプリングフィールドは瞬動を遥かに超えた縮地で間合いを詰めるも、あっけなく地面に叩きつけられた。

「はは！お前ごときが最強を名乗るのはおこがましいにも程があるなあ？ええ、何か言ったらどうだ、最強（笑）の魔法使いとやら」
「うるせえ！！！」

男の手を振り払い、ゼロ距離で無詠唱『魔法の射手…光の矢』を叩き込む！！吹き飛んだ男にすかさず杖を向け、呪文を唱える。

「来たれ、虚空の雷！！なぎ払え、『雷の斧』！！！！！」

雷が敵の身体を捕らえた！！

が――――

「んゝ、その程度じゃあ、俺には効かんなあゝ」

辺り一体を包む砂埃の中、その声は聞こえてきた。紅い布の隙間から窺える血のように紅い目は、相手を嘲るように細められ、口元は

三日月の如く吊り上げられていた。男は、心底今の状況を楽しんでいるのだ。

一方ナギも、男をあの程度でやれると思っていたのは、コレまでの攻防で分かっていた。

しかし

しかしだ。

「流石によお、布に焦げ目すらつけられないとは思わなかったぜ」

中級とはいえ、魔法を直撃させたはずなのに、男——篠下和樹が汚れ一つ無い全くの無傷で現れた事実には、ナギは相手が自分より遥かな高みにいることを改めて理解するのだった。

だが、ナギの顔には一片の絶望は浮かんでいない。

むしろ、嬉々として輝いていた。

そう、ナギは圧倒的な劣勢に陥っているという状況下で尚、笑って立っているのだ。そして、爛々と強い意志を乗せた瞳は、彼が終わっていないことを如実に語っているのだった。

「ふむ、流石というべきですか」

「まっ、当然じゃな。でなければ、頼まぬ」

「あのナギがああも容易くあしらわれるなんて・・・やはり彼は・・・」

遠く離れた場所では、紅き翼の面々がお茶を啜っており、また別の

場所では・・・

「がっはっはっはっは！！おめえも、強いじゃねえか！！」

「こ、ここ、通さない！！」

褐色筋肉ことジャック・ラカンとチワワ風味の巨漢ことマグが戦っていた。

そもそも、どうしてこうなったのか。

それを知るには少々時を遡らなければならない。

S i d e o u t

前回までのあらすじ
喧嘩に巻き込まれた
以上

流石にそんなのは俺のプライドが許さねえってんだべらんめえ！！
って、わけでリベンジに来ました！！

「今度こそ手筈どおりに行くぞ」

「うう、う、うん。俺、頑張る」

「その意気だ。いくぞ、マグ！！」

碧い海

白い雲

燦々と砂浜を照らす太陽

そこは、まさに彼らのためのプライベートビーチと化していた。

そこが、今彼らがいる場所だった。そこで奴らは、捕まえた魚や貝、狩った獣の肉、摘んできた食用草でバーベキューをしていた。前線から左遷させられた彼らは、基本的に暇なのだ。あいつらくらいの力があれば、辺境での戦いや道中襲い掛かってくる魔獣の類など相手にもならない。まさに南の島でのバカンスと同じだろう。一体、連合の上層部は何を考えてるんだろうね。

もつとも、だからこそ、こうしてちょっかいを出せるのだが。

大剣を錬成し、奴らに投げつける。あの褐色馬鹿のようにバーベキューに当てるようなことはしない。だって、食べ物もつたいないもん。

大剣が見事に連中のだ真ん中に刺さったのを確認し、名乗り出た。

「ははははは！ 前回はちょっとしたアクシデントのせいで、うやむやになったが、改めて出直してきたぞ！！」

しかし、目の前に立つ赤毛のガキ、ナギ・スプリングフィールドは頭の上のでっかいはてなマークを浮かべる。その顔は、お前一体誰だといっているかのようなだった。

「お前誰だよ」

そして、実際に言われてしまった俺はもう死ねばいいと思う。てか、まず逆手に持っている箸を置け。話はそれからだ。

「何奴！」

警戒を顕に刀を構える剣士こと詠春。

そうそう、この反応だよ！この反応が欲しかったんだ。胸中で謎の感動に浸り、しかし、それは長く続かなかった。

「おや、馬鹿二人の喧嘩に巻き込まれた拳句気絶したのが恥ずかしくって居心地が悪かったら逃げるように去っていったカズキではないですか。詠春、彼は大丈夫ですよ」

「なんじゃ、馬鹿二人の喧嘩に巻き込まれた拳句気絶したのが恥ずかしくって居心地が悪かったから逃げるように去っていったカズキか。そういえば、おぬしはその時気絶しておったのう」

「ぐふっ」

「お、親父、耐える」

詠春を手で制したアルビレオとフィリウス。前者は俺に向けて言い放たれ、後者は詠春に向けられた言葉だった。俺は顔が地面にめり込むほど落ち込んでしまった。

「フィ・・・ゼクト、わざとらしく俺の傷を抉るのはやめて。流石に俺も悪かったと思ってるから。アルビレオとやらもだ。」

危な。危うくフィリウスって呼びそうになったわ。こいつ、人前でその名前を呼ぶと切れるからなあ。普段からこいつの偽名で呼ぶことに慣れておかないと、ボロが出るかもしれないな。そのくせ二人きりの時は、フィリウスと呼ばないと拗ねるし。まったく、面倒臭

いやつだ。これが、ツンデレってやつか？

「あのいかれた格好に紅い目……。アル、あそこにいるのは、まさか……」

「ええ、あなたの想像しているとおりですよ、衛春」

「では、やはり我らの……」

「そういえば、あなたの実家は彼に……」

こちらをチラチラ見ながら、なにやら話し込む二人。どうやら、俺のことを噂しているらしい。ちらほらと、それらしい単語が聞こえてくるし。てか、いかれた格好言うな。俺が好きでこんな格好をして、人前に出ていると思ってるのか。

まあそんなことはどうでもいい。

「というわけで、その赤毛。俺と戦え」

「どういうわけだよ。ていうか、結局お前は誰なんだよ。お師匠とかアルの知り合いらしいけど」

「ふむ、俺が一体誰だとな？くくく……」

まさか、俺のことを知らないやつがいるとはなあ？仕方あるまい。なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるのが世の情けだ！！

「聞いて驚け！見て笑え！！我りゃ……」

「りゃ？」

「わ、われら無く子も黙るごによ……」

「大事なところで囁んだの」

「囁みましたね。しかも恥ずかしさに耐えかねて、語尾が消えていましたよ」

「囁んだな。しかし、あのうっかりさ一つとっても、伝承と一致し

ている」

誰一人として見逃してくれなかったという事実を前にして、俺はどう死ねばいいのだろうか？てか、衛春よ、お前らの間では一体どんな伝承が伝わってるんだよ？

ざざあん・・・

いつもなら心踊る波音も、今は虚しいだけであつた。

「ええい、仕切りなおしだ！今度は普通にやってやる。俺は篠下和樹、こっちではカズキ・シノモトか。それで、こいつはマグ・シノモト。俺の息子だ」

「む、息子お！？」

違う。そこじゃない。いやある意味驚くのは無理ないけど、驚くところはそこじゃない。

「いや、もっと俺の名前を聞いて驚くとかしないの？『えゝ、もしかしてあなたがあのカズキ・シノモトゝ？すごゝい、私初めて見たゝ。あ、記念にサインください』的な反応は無いの？」

「そんなこと言われても知らんがな」

「ば、馬鹿な・・・」

それでも、俺は有名人のはずなのに・・・。自意識過剰？・・・いやいや、現にアルビレオのやつは分かってたし。こいつが世間知らずなだけだよ、絶対、多分、きつと。

「ま、そんなことはどうでもいいだろ？お前は俺と戦いに来たってことが分かればそれでいいじゃねえか」

はお前と戦いに来たっていうことが分かればな。ああ、戦う理由が必要ならこれでどうだ？『今日は天気がいいから』」

「さっきと百八十度真逆のことを言っているが、戦いの理由は最高だな！！テメェら手出すんじゃないぞ！！」

「ははは！！せめて俺の『右腕』を使わせるくらいはしてくれよ？」

「待て馬鹿ナギ！！そのお方は・・・」

「無駄です、詠春。もう聞いてません」

「とっととここを離れるぞ、巻き添えにされたら適わん」

闘気をお互いにぶつけ合い、気を高めあう二人。

先ほど馬鹿げた会話を繰り返していた空気は跡形もなかった。

徐々に上り詰めていく緊張。

その緊張が極限にまで達した時、二人はぶつかった――！！

「あーらよつと！！」

「びやあお！！」

「ウオッ！？いきなりなんだ！」

・・・かに思われた。

突如割って入った大剣によって、二人の激突は台無しにされたのだ
った。

ええい！？またあいつか！！（後書き）

戦闘描写が難しい・・・

文才、誰か俺に文才を・・・

とまあ、お久しぶりです。

今回はこんな感じになりました。

補足説明

この作品では『ゼクト』を偽名としております。とある理由からですが、まあ

バレバレですかね。

まことに身勝手な言い分ですが、どうかご了承ください。

V S ナギ 1 ナギはワシが育てた!! (前書き)

すみません。

一度削除させてもらいました。

なんとなく、ナギのキャラクターに違和感を持ったので、改定版をば。

ただし、改善されているかは微妙。

後、ナギの視点はほとんど無くなり、主人公視点になりました。

でも内容的にそれほど変わりはありません。

ご都合主義も消えていないので、やはり、生暖かい目をお願いします。

では改めてどうぞ。

V S ナギ 1 ナギはワシが育てた!!

俺とナギの間に大剣を投擲したのは、皆ご存知ジャック・ラカンであつた。剣に乗ってやってきたラカンは俺に向かってこう言つた。

「おいおい、コイツは俺様の獲物だぜ？勝手なことをされちゃ困る」

それが、二度目の邪魔をされて、普段は温厚だが、流石に青筋を浮かべた俺に対して放たれたラカンの言い分だつた。だが、そんなことは知つたことではない。いいところで邪魔をされた不愉快さから、ラカンを睨みつけた。

「前は、出遅れたからお前に譲つたが、今回は譲らん。出直してこい」

「ムッ、早い者勝ちってわけか。だが、そうになると俺のワクワクドキドキを一体どうすりゃいい？折角コイツにリベンジしに来たのによお、肩透かしなんて俺はごめんだぜ？」

知るか、って返したいところだが、また邪魔をされても困る。こいつの性格から言つて、そんなことは方が一も無いと思うけど、可能性はゼロではないのだ。ついやっちまった、なんて事が普通に起こりそうな気がする。

だが、丁度良くもあるか。そのために連れてきたんだし。

「だったら、こういうのはどうだ？」

いぶかしげに眉を潜めたラカンから視線を移し、俺は背後で色んな貝殻を集めていたマグに向かって、告げた。

「マグ、出番だ」

「え？で、でも・・・」

「遠慮はいらん。軽く捻ってこいよ」

「あん？こいつ、強えのか？」

「それは自分で確かめてくれ」

一方的に告げて、宙に目にも留まらぬ速さで様々な文字を書いていく。文字とはいっても、恐らく俺以外では理解できないであろう、奇妙で奇怪な形の文字である。最後まで書ききった時、文字は二人を囲った。そして、凜猛に口を歪めるラカンと、何か言いたそうにウルウル瞳を潤ませたマグの姿が、掻き消えてしまった。

そして役目を果たした文字も薄れていった。

「何だ今の？」

「特殊な文字を使った転移だ。それで、二人を数キロ離れた場所に移動させた」

ナギが疑問をぶつけてきたので、答えた。別に隠すようなことでもないしな。

あの文字は、俺が昔、魔法世界にあるとある遺跡で見つけたものだ。念威魔法と同じく廃れてしまったものを俺が復活させた。漢字みたいに、その文字の一つ一つに意味があり、力が宿っている。簡単にいえば、魔法の文字である。今の俺の鍛え抜かれた念威魔法程、大きな効果は得られないが、念威魔法と違って特に副作用とかはなく、小回りが利く上に、使い勝手もいいので、多用している。

「へえ、面白いなあ。あんなん、初めて見たぜ。けど、何で普通

の魔法使わなかったんだ？」

これまた、随分と目を輝かせているなあ。色々グダグダだけど、一応立場上は敵同士なんだがなあ……。

「使わないじゃなくて、使えないんだ」

ナギのいう転移は精霊の助けが必要だ。転移も精霊魔法の一種だからな。こいつらの魔法は文字通り精霊ありきの魔法なのだ。

だからこそ俺は使えない。

「はあ？ ついさつき魔法使ったじゃねえか」

「問答はこのくらいでいいだろ？ ここからは、拳で聞いてきな」

意味分からんって顔をしてるが、これ以上の問答を絶った。話が進まないからな。

「だったら、最後にコレだけ答えろ。マグって奴は大丈夫なのか？ ラカンの奴は強いぜ？」

「はっ、何を言うかと思えば……」

鼻で嗤った。これ以上無い愚問である。正直、いらんお世話だ。それにしても、強さの基準が『自分』とは、なんていうか、随分若いなあ。

「確かに、マグは馬鹿、愚鈍、要領が悪い、の三点セットの塊だし、武術、魔法の才能なんてほとんど皆無。もし馬鹿でかい図体を取り除いた時、後に残るのは、優しさだけのウドの大木になっちまうな」

その時、俺を除き、その場にいた全員が同じことを思ったという。

そこまで言ってやるなよ、と

「だが、だからこそ、あの子は自分に出来ることを大切にしてきた。自分に出来ることだけを、毎日毎日全力で必死に諦めることなく愚直に狂ったように滑稽なくらい続けてきたんだ。だから、お前が気にする必要は、全く無い」

あの子のことは俺が、俺たち家族が一番知っている。部外者が口を挟むことではない。

「へっ、別に心配なんざしてねえよ。ただ、『気になったから』てのを負けた後の言い訳にすんなよって言いたかっただけでえ!!」
「そうか、まあ、そんな話は置いておいてだ。今度こそ、仕切りなおしというか」

そして、祈るように手を合わせ、まるで坊さんのように己の心を極限にまで静める。これこそ、俺が長い年月を掛けて確立した戦いの構えだ。

再び、場に緊張が舞い戻ってきた。

「先手必勝!!」

最初に仕掛けたのはナギだった。魔力を纏って肉体を強化し、瞬動で俺の懷に潜り込む。そして、拳と共に魔法の射手を大量にらせて叩き込んできた。俺は一步右に動いてかわした。直後、背後で爆音が鳴り響く。

「おお、怖い怖い」

「嘘付け!!!」

嘘じゃないのに。

嘘と断じられ、肩を落とすも、アッパー、そのまま流れるように回し蹴りを喰らうわけにはいかないので、後ろに一步下がってかわす。魔力のたっぷり込められた杖は、しゃがんで避ける。

ふっ

ふふふ

ふはははははははははは!!

無駄無駄あ!!

俺には答えを出す者があるから、お前の攻撃がどうきで、どうすれば、それを避けれるのかという答えが分かるのだよ!!そこに俺の身体能力が合わされば、鬼に金棒。全部紙一重で避けれますとも。
逆に言えば、今の俺は答えを出す者を使わないとこいつの攻撃が避けれないということでもあるのだけど。

「その年齢でその域に達してるなんて、末恐ろしいわ」

「おらあ!!!」

「あ、それ、ひょいっとな♪」

おっと、危ない。抜け目無く分身まで繰り出してきやがった。背後からの奇襲をひょいっとなをさげることかわす。

それにしても、こいつ楽しそうに戦うなあ。そういや、ファイリウス

によれば、ナギは殺し合いは嫌いだが、強い奴と力を競うのは好きだといってたな。

強者ってのは、孤独だ。なまじ、この年で、同世代どころか、大人とさえも力が隔絶しているから、寂しいのかもしれない。だから、心の底では強い奴の存在を求めているのだろう。ラカンとかがいい例だ。前回引き分けた後に、嬉しそうにしてたのを遠目で見たからな。

別にナギほど強くなくても、まともにやりあえるだけの实力があるなら、それだけで救われるのかもしれない。もしかしたら、喧嘩は彼なりの友情の示し方なのかもしれない。

ま、全部ただの妄想だけどね。

その時、前髪が数本ぱらぱらと落ちていった。ナギの攻撃がかすったのだ。

（うーん、切れも動きもどんどん良くなっていくな……。まさか、戦いの中で成長しているのか？ だったら、早めに決着を……。つと出来たか）

ふと感じた寒気を脇に置いて、早速発動させることにする。いい加減当たらないことに、イライラしてるみたいだし。そろそろ反撃しようかね。

まずは、こいつを招き寄せてと。

「ところでいいのか？」

「あん、何がだよ？」

向かってくる拳を右手でつかみ取り――

「足元がおろそかだぞ」

バシユウウウッ!!

バチッバチッ!!

計二回、錬金術を発動させる!!

一つはコイツに張り巡らされている魔法障壁。その構成をアンサー・トーカーで理解し、『分解』した。そうしないと、物理的な攻撃があまり効かないからな。これで、もう一度張りなおさない限り障壁は無効化された。

そして、もう一つはというと――

「ぐあ!!」

足元から、俺とナギの間に割って入った。そして、そのままナギの顎に強烈な一撃を叩き込んだ。

ゴールデン☆ハンマー!!!

・・・もとい

それは、拳が硬く、硬く握られた巨大な金色の腕であった! その素材は勿論黄金である。下には、魔法陣と似て非なる円形の錬成陣が敷かれているのであった。この錬成陣、実は攻撃を避けながら足で地道に描いたものだ。

まあ、長く生きていると錬金術の一つや二つ、研究したりもしますとも。それに、時代が時代だったから、格好の暇つぶしになったし。何はともあれ、下から壮絶なアッパーを受けて、宙に浮いたナギ。容易く、魔法障壁が無効化されたことに驚いているようだが

「考えている暇があると思っているのか？」

すかさず俺はエルボーを叩きつける。それも、急所である鳩尾に。

今のこいつの防御力は普通人レベルに毛が生えた程度のはず。緩和すらされずに受けた一撃は、相当痛いはずだ。普段障壁を張っていたのなら尚更だ。

と思ったら、そうでもなかった。脳を揺さぶられて、若干ふらついているが、痛みには気が取られることなかった。それどころか

「治癒」
クーラ

大きく間合いを取って、回復魔法を掛けた。どうもそういった魔法は得意でないようだが、それでも痛みが和らいだのだろう、脂汗が一気に引いた。うーん、中々手ごわいな。

「へっ、あの程度で俺がやられるかよ！」

「威勢がいいことで」

そして、奴は再び殴りかかってきた。今度はアンチヨコも傍に侍らせて。

そして、前回の冒頭へ戻る、と。

それにしてもと思う。

こいつの年齢でここまで魔法を扱えるのも、凄い話だ。呪文も必要最低限のものだし、術式も丁寧。魔力の扱いについては少々雑なところもあるが、許容範囲内だろう。体術との合わせ技も見事なものだった。まるで、百戦錬磨の達人のような手腕だった。

これで、使える呪文が五、六個っていうのは切ない話だが、考えてみればたくさん覚えていても使わなければ意味がない。コイツの場合、気に入ったのだけを取り込んでいってるのだろう。それはそれで賢いやり方だと思う。

ただ――――

「アンチヨコ見ないと魔法使えないってのはないと思うぞ」

「けっ、問題ねえよ!!」

今にも直撃しそうだった『雷の斧』を魔力操作の応用で受け流して、無傷の生還を果たした後、戦いを心底楽しんでるナギに突きつけ

てやった。今もまた空中で呪文を確認している。

「千重百重と重なりて・・・」

でもさ、戦闘中にチラチラ見るってことはさ。

「こうして、敵に付け入る隙を与えることになっちゃうんだな」
「な!？」

距離を開けていたのに、どうしてって顔だな? 簡単な話だ。

「さっき見せただろ? 文字を使った転移だ」

「う・・・うおおおおおおおおおおお!!!」

こういう使い方もできるのだ。何の前触れも無く、幽霊の如く静かに現れることがね。

悪いけど、接近戦では俺の方に分があるのはこれまでの戦いで理解してるだろ。俺の前で隙を見せたのが、お前の敗因だ。俺相手じゃ命知らずなマネだ。

「ちなみに、俺は空中戦も得意だ」

その言葉と共に、ナギを更に上空へと蹴り上げる。

だがまだ終わらない。空へと吹き飛ぶナギに追いつき、更に上へと飛ばす。そうして、徐々に上へと上っていくナギ。攻撃の全てをただ上へ上へと行くように調節していた。こいつが防ごうが関係ない、この攻撃は全てただ上へと送るためだけの攻撃!!

やがて、雲の上へと乗り上げた。そこは、太陽が近い、水平線も地平線も見える、まさしく空の上だった。若干空気が薄くなっている。そして、大地はいまや何よりも遠い存在となっていた。

さて、仕上げといくか。ナギの持っている杖と呪文の記されたメモ帳を取り上げる

「て、てめえまさか」

「想像通りだ。何、お前さんなら死にはしないさ」

流石に身体は動かなくなるだろうけどね。つまり、俺の勝ちだ。

今の状態で出せるありったけの魔力を右拳一点に収束させ、ナギへと振り下ろした。

凄まじい勢いで、ナギは落ちていったのだった。

さて、この高さから叩きつけられたら流石に終わるだろう。結局、特に大技を使うことなく終わったな……。あいつの障壁を分解しなかったし、あいつがギリギリ耐えられるくらいの威力で叩き落としたから、死なないはずだ。ギリギリだから、身体が動かなくなるだろうけど。

空をふわふわ漂いながら、そんな取り止めのないことを考えている

と、不意に奪った杖が手から勢いよく離れて言った。

「お?」

どうやら、ナギが呼び寄せたらしい。まだ、諦めていないのだ。杖でブレーキをかけるのかとも思ったが、あの高さだったらそんなこととしても意味がないな。だったら、呼び寄せたのは別の理由になる。

「大方、魔法を撃った反動で緩和するつもりなんだろうが」

あの位置からだ、あいつがアンチヨコ見なくても使える程度の魔法、いわゆる下級魔法だったら、軽減すら出来ない。せめて『雷の暴風』くらいの威力がないと軽減できないし、完璧に相殺するには『千の雷』を打つしかない。

そうすると、アンチヨコを見るしかないのだが・・・

「ここにあるんだよね」

と手元でメモ帳をいじくる。

だから、杖を呼び出しても出来ることはないはずだ。無駄な足掻きをご苦労さん。やっぱり、俺の勝ちだ。

確信したその時、精霊達が騒ぎ出した。

「何だ?」

主に騒いでいるのは風と雷の精霊か? 光の精霊もちらほらというな。いや、ただ無作為に騒いでいるのではなく、どこか歓喜に打ち震え

ているようだ。ていうか、これは……

「ははは、何コイツ。冗談抜きに底が見えねえ」

俺も大概反則だが、赤毛の馬鹿の方がよっぽど反則だと思うのは、俺だけだろうか？

そう思う俺の前では、何筋もの雷が解き放たれていた。

Side ナギ

「うああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

頭から落ちていく。視界から入る情報がめまぐるしく変化する。肝が冷えるほどの速さで、地面が迫ってきているのだ。

あいつは死なないとか言っていたが、正直この高さは普通死ぬだろ！？よしんば、死ななくても重症は避けられない！！

杖に乗ってブレーキを……ダメだ。あいつに奪われてる。だってら、虚空瞬動で……クソッ、風圧で体勢を入れ替えられねえから使えない。

やべえ！！万事休すか！？

・・・馬鹿野郎、落ち着け！！今は焦ったり諦めたりする場面じゃねえ！！そんなの俺のキャラじゃねえだろうが！！思い出してみろ！いつだって俺はこんな逆境を乗り越えてきただろ！！俺はこんなところで、リタイアするわけにはいかねんだ！！

脳裏に、先日あった人形みたいに感情の欠落したお姫様の姿がよぎる。

そうだ、こんなところで無様な姿を晒すんなぞ、死んでもごめんだぜ！！！！

やれることは全部やってから泣き言を吐け、ナギ・スプリングフィールド！！！！

「杖よ（メア・ウィルガ）！！」

「お？」

よし、運がいいぜ！！杖が手元に戻ってきた。だが、この位置だと恐らく、杖に乗ってブレーキ掛けても止まらない。じゃあ、どうすればいいのか。

簡単だ！！攻撃系の魔法を放って、その反動を利用すれば！！

そんじよそこの奴じゃ意味がない。アンチヨコは・・・。

「アンチヨコがない！？」

しまった！！あれも取り上げられてたんだった！！

やばっ、今度こそ万事休すか！？

焦りで思考が濁ったその時。

.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
.	.	.
!	!	!
!	!	!
!	!	!
!	!	!

どこからか、声が聞こえる。

それは声と捉えるにはあまりにも異質
 だけど、とても暖かかった

初めて聞くというのに、いつも聞いているような気もする

違う

気がするんじゃない

いつも聞こえていたのだ

ただ俺が気付いていなかっただけで

それを明確に悟った時、俺の視界は一変した。訳の分からない突然の変化。世界になにやら異物が混じったのだ。ゆらゆらと形が曖昧な存在がそこらかしこにはっきりと見えるようになったのだ。それは緑だったり、紫だったり、白だった。なんとなく他にも様々な色が見えるような気がするが、緑、紫、白に比べるとあまりにも不鮮明で見えづらい。

今まで見たこともなかったのに、俺はそいつらが何か瞬時に理解した。

「・・・はは」

もうすぐ、大地に叩きつけられようとしているのに、俺は嬉しくなった。それに呼応して、こいつらも嬉しそうに踊る。

永遠に時が止まったような感覚。

だが、それは一瞬に過ぎなかったと思う。

その時には俺は何をどうするべきか分かっていた。

ああ、今なら出来る。

いや、もっと正確にいうなら、こいつらが俺に応えてくれる。

「千の雷!!」

杖から、幾千もの雷が束ねられた、まるで龍のごとき雷が宙を走る!!

その威力、今までの比ではない!!

反動で相殺するどころか、逆に少しだけ空へ押し返された。そして、地面に降り立つとき、風が優しく受け止めてくれた。

勝負は始まったばかりだぜ、カズキ!!

俺は、未だに宙を漂っているあいつに向かって、中指を突き立て、不敵な笑みを浮かべるのだった。

S i d e o u t

……ないわー。マジでない。これはない。一体どこの物語の主人公だ。自分の危機に際して新たな力に目覚めるなんて展開、ありきたりすぎるだろう。

「うーむ、どうしたものか……」

ぶっちゃけていうと、今回の目的はナギに世界の広さを知らしめることだ。つまり、己が井の中の蛙だということを自覚させて、フィリウスの修行を真面目に受けさせるようというわけだったのだ。

そのための手筈は、目の前でこいつの仲間を殺すように見せかけ、激昂したところをフルボッコにし、無力感を感じてもらおうというだけ。もし、戦いの最中に横槍を入れようとする奴がいたらマグに相手させるっていう感じ。

そしたら、今回もラカンの乱入のせいで、うやむやになったから、とりあえず、フルボッコにして自信を叩き折ろうとしたのだが・・・

もう、なんていうかね、この戦いの中でどんだけ成長するのかと。

とりあえず、文字を使った転移で、再度ナギの前に立ちはだかる。ナギの顔はキラキラと輝いていた。うん、調子付いているね。

「へっ、今なら負ける気がしないぜ！こいつらが力を貸してくれるからな！！」

「ほほう」

今の言葉から、ついさっき認識したばかりの精霊をただの道具と想っていないことが窺えた。これは凄く大切なことである。なぜならば、精霊が凄く協力的になってくれるからだ。下位の精霊には明確な自我はないが、意志も感情もあるのだ。だからこそ、気に入った奴にはわらわらと寄って集って力^{たか}を貸す。そして、力を貸されるということは、精霊の力を存分に使えるということだ。様々な恩恵を受けられるようになるだろう。無詠唱『千の雷』もその一つだ。

自身の存在をきちんと認識してくれた上に、相棒として見てくれる存在を無碍に出来ないということだ。ていうか、精霊の存在を認識できないくせに、その力だけを強引に借りようとする現代の魔法使いをどうして好きになれるのかって話だ。

（まあ、どうしたって精霊の力を借りれない俺には関係ないか）

俺も精霊達が見えるし、道具としてみてないが、とある理由からこいつらの力を借りることは出来ない。だからこそ、特殊文字による魔法や念威魔法を精霊魔法の代用品として使っている。

まあ、そんなことは置いておいてだ。

コイツの成長は予想外ではあったが、やるべきことは変わらない。

「第二ラウンド、開始だ」

その宣言と共に、戦いは開始した。

さっきは冗談で『右腕』云々言ったけど、展開次第ではそれも考えないとな。

V S ナギ 1 ナギはワシが育てた!!
(後書き)

V S ナギ 2 決着!! (前書き)

戦いに決着つきます

マグ V S ラカン は番外編ですことにしました。

・・・相変わらずテンポの悪い自分の文章に絶望した!!

ちなみに、今回は詰め込みすぎた感が否めないです

vsナギ 2 決着!!

この世界で『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』となって、長い時を生きてきた。何せヒトが存在する限り、この呪いの効力は続くのだから、死にたくても死ねないのだ。まあ、そんなわけで、世界に漂う悪意とか邪念とかそんな“良くないもの”を吸収しながら、悠々自適に生きてきたわけだ。そうすると、時間が有り余るという事態が発生する。俺がこの世界に來た時代は、原作の七百年と数十年前だったので、娯樂というものが少ないこと少ないこと。だから、暇つぶしがてら、世界を回って色々やってきた。それはもう色々。

その中に、精霊魔法の研究も含まれている。俺は、精霊魔法を調べていくうちに一つの可能性を見出したのだ。

魔法使いは下級魔法を、無詠唱で放つことができる。だが、上位の魔法ともなると呪文を唱えるほか無い。だが、原作を思い出してみると、ナギやフェイトといった高位の魔法使いは呪文？なにそれ食えるの？といわんばかりにバカスカ撃っていた。クラウドの爺さんも雷の暴風を無詠唱で使っていたし。

では、上位と下位でどこにコレほどまでに差が出ているのか。この際、威力や効果範囲といった他の要素には目をつぶり、無詠唱で発動できるか否かのみに着目する。

精霊魔法はコレまで何度も述べてきたとおり、精霊の存在があって初めて発動する。魔法使いは精霊に魔力を与え、呪文と術式で、受け取った魔力に応じてこんな現象をおこして欲しいと伝えるのだ。もっと簡単に言うと

魔法使いは依頼人

精霊は傭兵

魔力はお金

術式は依頼書

呪文は依頼の補足説明

そして、無詠唱とは術式だけを見せて精霊たちをお願いする技術に他ならない。呪文という補佐なしに、どれだけ精霊たちを動かせる術式を組み立てられるかが、術者の技量を示しているのだ。そう、術式こそが最も魔法使いの技量を示すものなのだ！！なんとすれば、高位の術者と下位の術者の差はそこにあらわれている。高位の術者の術式は、字が達筆かつ、要点だけを簡潔に述べた素晴らしい依頼書なのだ。

だが、いかに高位の術者でも無詠唱で唱えられない領域というものがある。『千の雷』などの最大呪文だ。いかに術式が丁寧であろうとも、単純な思考しかもっていない下位の精霊たちにとっては、複雑過ぎて難しすぎるのだ。せめて、必要最低限の呪文が無ければ理解してくれない。どうしても呪文を唱える必要が出来てしまうのだ！！

さて、長くなったが、ここでようやく本題がくる。

実は、これには例外がある。無詠唱の先があったのだ。それが、ここで出てくるのが先ほど述べた一つの可能性。既にこの世界で失われてしまった技法。

すなわち――――

「すげえ、どんどん力が湧いてくるぜ」

「この戦いで一体どれだけ成長するんだ、お前は」

精霊との同調

呪文どころか、術式すら必要とせず、精霊魔法を放てる状態。

ナギ・スプリングフィールドはその領域に至ったのだった。

精霊との同調

精霊たちからは同胞として見なされ、精霊からのバックアップを万全に受けられる魔法使いの奥義。この状態では、精霊と意識を共有するために、お互いの間では言葉など不要、やってほしいことは思い浮かべるだけでいいという便利機能。

また、念威魔法と同じように、より強い意志で精霊に働きかけることでより大きな力を発揮でき、使いこなせば、単なる物理現象を超えた事象をも引き起こすことが出来る。

ただし、欠点もあり、同調するということは精霊から送られる大量の情報を処理しなければならぬということでもある。もっとも、それを処理できるだけの能力があれば、別段苦にもならないが・・・

「少しだけ、気持悪くなってきたな・・・」

悪くすれば、意識が精霊側に引っ張られて廃人になる可能性もある

というのに、その程度で済んでいるのには驚いた。

「じゃあ、早速いくぜ!!」

ナギの姿がぶれた。

「うお!？」

と思ったら、拳がいつの間にか眼前に迫っていた!!慌てて逸らす。

「おらおらあ、まだまだいくぜえ!!!」

「ちょ、待った!!」

最初の時とは、立場と入れ替わっていた。風、雷、そして光の精霊を味方につけてから、動きがガラリと変わったのだ。今のナギがどういう状態なのかということこんな感じ。

雷の精霊の力で雷を纏っていた。

風の精霊の力で風を纏っていた。

光の精霊の力で光を纏っていた。

それだけ聞いたら、全部纏ってんのかよ!!と突っ込みたくなるだろうが、最後まで聞いてくれ。纏っていると言っても、それぞれに役割があるのだ。しかも洒落にならないレベルで。

極微弱な雷、というか電気は、常に神経に作用し肉体の限界を超えた速さをもたらし、風を纏うことで上も下も縦横無尽に駆ける事が可能となり、光が遠中近オールマイティに放てる銃弾の役割を果たすのだ。

何が言いたいのかというと・・・

「へっ、ようやく余裕ぶったにやけ顔がなくなったな!!」

「グッ・・・!?!」

避けられなくなったのだ!! 今までも速かったけど、俺からしたら捌く必要も無く、あくびをしながら避けれるぐらいでしかなかった。でも、今は違う。ギリギリでしか知覚できない程速い! しかも、一撃が重い! この小さな身体のどこにこんな力が!?

更に厄介なことに、雷を纏っている副次効果で身体が若干痺れるし、拳に乗せた大量の光の矢も襲ってくる。仮に距離をとったとしても、やっぱり光の矢が俺を貫きにかかる。まるで、人間要塞。

一体どれだけこいつは鬼畜なのかと。アンサートーカー 答えを出す者の能力をフル活用し、攻撃を予測してようやく捌けるレベルだ。魔法は魔法球を含めて数千年鍛えに鍛えている魔力操作の応用で逸らし、打撃は全力で逸らしまくった。

今は何とか無傷で捌けているが、いつまでも持たない。一撃を防ぐたびに魔力を消費していくからだ。いや、別に無傷で勝つ必要はないんだけどさ、ほらなんていうか年長者としては何か嫌なんよ。

だから、ここで流れを止める必要がある。

息を吐き、手を合わせ、心を落ち着かせる。達人は空気の震えで相手の動きを読むというが、風の精霊のせいで全く読めない。だから、俺が読むのはナギの魔力の動きだ。

「・・・そこだ!!」

俺を攻撃しようとする魔力の動きに合わせ、腕を前に出す。よっしや、タイミング完璧。手ごたえを感じたので、そのまま一本背負いで地面に叩き付けた!!

「^{デコイ}叩!?!」

叩き付けた瞬間、ナギの姿が花びらのように解けていった。中級精霊を使った複製。そうか!直前で入れ替わりやがったな!!こんな初歩的な術に……!!

「詠春直伝、変わり身の術だ」

背後で莫大な魔力が集まっていくのを感じ取った。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」
「…………ツ!!?!?!?!」

背中にダンプカーにでも跳ねられたかのような衝撃が与えられた。魔力が籠った一撃と光の矢のあわせ技。攻撃は止まらない!!ここぞとばかりにラッシュを決めてきた!!一発、二発、三発、四発五発六発七八九……………息をする猶予もない終わらない連撃!!一撃一撃が並みの術者であれば、必殺となる威力!!!!

だが、その攻撃にも終わりがやってきた。

ナギが、さっきのお返しとばかりに、俺を上空へと蹴り上げたのだ!ついでとばかりで戒めの矢で動きを縛りやがった。

「俺の勝ちだ!!!」

勝利宣言と共に、奴の腕に今までとは比べるべくも無い魔力が杖に収束されていく。紫電を帯び、空間が歪むほどの高エネルギーはまるで……

（やばい、避けられない！！魔力で逸らして・・・無理！！あんな出鱈目な規模は逸らせない！！）

[illegible]

全てを蹂躪する金色の竜が吼えた！！

(・・・ツ!!!?間に合うか!?)

龍の顎に飲み込まれてしまった俺は――・・・・・

Side
ナギ

辺り一面、蒸発した海の水によつて視界が塞がれてしまった。沸騰した海水は熱いが、今は氣にもならない。

「ぜえ
・
・
・
・
・
ぜえ
・
・
・
・
・
」

決まった。これ以上ないタイミングと申し分ない威力。少しやりすぎたかなとは思うが、あいつなら、死にはしないだろうと思う。奇妙な信頼と共に全力で放った。流石に、これ以上はもう何か出来る気がしない。全てを出し尽くしちまった。

「あ・・・！」

身体が悲鳴を上げ、思わずその場に座りこんでしまった。

いくら、魔力で肉体を強化してあったといっても、それを超える勢いで精霊の力を借りたのだから、無理もないか。うあ、明日からしばらく、筋肉痛にうなされそうだな。たく、今は戦争中で休む暇なんて無いのにな。アルに魔法球を借りてそこで身体を休めれば問題ないが。

それにしても・・・

「へへ・・・」

笑う気力も余りねえけど、それでもあいつに勝てたということが嬉しかった。今まで戦った中で一番強かった。俺よりも強かった。だけど、油断しすぎだぜ。けけけ、あんまりにも余裕ぶってるから足元をすくってやったぜ。

「ざまあ、みやが・・・」

ゾワリッ・・・

全てを言い切る前に、全身があわだった。

俺が万全な状態である時を遥かに超える巨大な魔力を感じ取ったのだ。確かにそれは脅威的ではあるが、それだけならこんなにも鳥肌が立ちほしくない。なんだ、この薄気味の悪い魔力は！！魔族の魔力と似ているが、あいつらにコレほどの邪悪さはない！！こんな世界の闇がドロドロ煮詰められているかのような感じは無い！！こんなのは魔力というより、瘴気に近いんじゃないか……

「いやはや、正直見くびってたわ、うん。お前『最強』を名乗る資格あるね」

何事かと混乱している中、聞こえてきた声に、俺は耳を疑った。だって、その声はたった今俺が倒したばかりの……蒸気の向こう側を凝視する。そこには、人影があった。

「反省反省。すまんね。ここんところ、無双ばっかしてたから、どうも人を見る目が曇ってたみたい。だから、こんな無様な姿を晒す嵌めになっちゃったわけだし。これは帰ったらみんなに笑われちゃうな」

カズキの声だったのだから！！！！

S i d e o u t

いやあ危なかった。死ぬかと思った。走馬灯が見えたときはどうしようかと。

「てめえ、なんで・・・」

蒸気の向こう側で、ナギが掠れた声で問いかけてきた。どうやって今のを凌いだのか疑問に思っているのだろう。気になるのも分かる。実際あのままだったら、俺でもやばかったかもしれない。ま、Ifの話に成り下がったけどな。

あれほどの『千の雷』、そうそう見ない。その威力、目の前の惨状が物語っている。海岸に端が見えないくらい大きなクレーターが出来ているのだ。内側は溶けてるし。全く、殺す気かっての。

そんなわけで、『右腕』を振るい、俺たちを隔てている邪魔な蒸気を払う。

「まあ、簡単にいうとだ、お前は俺に『右腕』以上のモノを使わせたのさ」

今の俺からは身体に纏っていた紅い布は見当たらない。残ったものといえば、左腕の鎖のみ。後は服も含めて、はずした時に全て燃やされてしまったのだ。だから、今俺は素顔を顕にしている。顔だけじゃない。全身をさらけ出していた。

「変態だああああああああああああああ!!!」

「人の服を吹き飛ばしておいてなんていう言い草だ!!! ていうか突っ込むところはそこかよ!？」

そこで、奴ははっと目を見開いた。気付いたのだろう。俺の身体を取り囲むものに。

俺の身体に刻まれた古めかしい刺青が紅く輝いており、そこから黒

い魔力が緩やかに噴き出ていた。ちなみに、この刺青、時代の節目と共に変化していくため、初めて刻んだ時とは全く別物となっている。その時代の『悪』を表す絵にね。

そして、噴き出した魔力は俺の背後であるものを形成していった。

「な、なんだよ、それ・・・」

それは黒く、暗く、澱んだ存在。

「俺が精霊魔法を使えない理由であり、今こうして無傷でたっている理由さ。」

そいつは有体に言えば巨大で真っ黒な骸骨であつた。

ただの骸骨ではない。いや、真っ黒である点からしてそうなのだが、その外見もまた異常であるのだ。

一つのしゃれこうべに十一の面が浮かび、腕が四十二本あるのだ。その全てのしゃれこうべの虚ろな眼窩には赤い光が明滅しており、また、四十二本の腕のうち二本は合唱していた。

すなわち、十一面四十二臂の骸骨

それはあまりにも禍々しく、そこに現れたのだった。

「俺が普段魔力を押さえ込んでいるのは、まあフリーザーさまみた
く、『後二回変身が残されている、この意味が分かるな』的なこと
をやりたいってのもあるが、一番の理由は俺の魔力はそこにあるだ
けで全てを穢してしまうんだ」

これまで、世界中を駆け巡り、世界に漂う邪念、悪意を取り込んできた。そして、その取り込んだ『よくないモノ』は、マナから魔力へと加工する段階で溶け込むのだ。その結果が黒い魔力。およそ人間のものとは思えない邪悪でおぞましい力。この黒い魔力には普通の魔力にはないある特徴がある。それが、さっきも言った「穢れ」。

この穢れは空気中に漂うマナに影響を与える。

マナは万物の根源。マナが穢れてしまえば、あらゆるものに悪影響が出てしまう。例えば生物であれば、病気になったり、凶暴化したり、狂気に捕らわれたり、最悪死んでしまう。植物ならば、枯れてしまうか、毒性を持ってしまう。精霊であれば、暴走して最後には死んでしまう。穢れたマナは精霊たちにとっては大きな毒であるために。そして、精霊が死ねば世界にも大きな影響が出てしまう。

百害あって一理なし。何のメリットも無いのだ。

だからこそ、俺は紅い布で己の魔力を穢れごと押さえ込む。『この世全ての悪』に相応しい力とも言えるが、自分で制御しきれない力など害悪でしかない。魔力そのものは操れても、穢れという性質は操れない。

「この『百式』は俺の魔力を具現化させたもの。俺の思い通りに動く、最強の鎧であり、矛だ」

だが、もしかしたら、何らかの事情で紅い布をはずすことがあるかもしれない。そんなの時少しでも被害を抑えるために、作ったのがこの百式。元ネタは勿論某会長の念能力。こうやって、穢れの一つに纏めることで、被害を最小限に抑えるのだ。というかこれ以上は

俺の力をもつてしても押さえ込めないから、紅い布で更に押さえ込んでいるのだけだ。

「さあて・・・第三ラウンド、やるか？」

とはいっても視れば分かる。ナギはもう限界だ。無理も無い。あれだけ魔力も身体も酷使したんだ。これでどこにもガタが来なかったら、それはもう人間じゃない、化け物だ。

「へっ・・・当然・・・!!」

それでも尚、戦う意欲を失わず、震えながらも立ち上がろうとするその姿に、少しだけ眩しく見えた。あの時の俺には無かった姿だったから。俺の嫌味なほど強大な魔力を嫌でも肌を感じ取っているだろうに・・・。そんな彼に呼応して精霊も集まってきた。

「そうか。ああ、安心しろ。コレは使わない。代わりに面白いものを見せてやる」

胸をよぎった思いを他所に、俺は手を合わせる。俺の百式は元ネタと違い、触れただけで相手を呪う。それがどんな呪いかは俺にも分からんし、洒落にならない事態はごめんだしな。この手を合わせる動作、本来なら、百式と鍊金術のどちらが来るか分からなくしているのだが、今回は鍊金術を使う。

右手を地面に当てた。現れたのは、地面に突き刺さる無数の黒い武器群!! 歴史上、使われてきたありとあらゆる武器があった。見当たらないのは唯一つ、弓や銃、大砲などの飛び道具のみ。そして、恐ろしいことに、その一つ一つに魔力が大量に込められていた!!

スーさんに貰った能力、騎士は徒手にて死せずと錬金術が合わさった能力『刀幻郷』とうげんきょう。これが能力を掌握したあの日感じた違和感の正体だ。能力の合成。俺は全ての能力を合成し発現することが可能になったのだ！！その一つが、『刀幻郷』だ。

唐突に変化した戦場に戦慄するナギ。そんな彼を気にも留めず、近くにあったトンファアを拾い、構える。ガンダールヴを発動するまでも無い。

「ああ、一つ言い忘れていたが、あの紅い布は俺の身体能力も押さえ込んでいたから、今の俺はさっきまでの俺とは違うと思ったほうがいい」

そう宣言し、トンファアを回転させながら、襲い掛かる。先手は俺が貰った。

「ハアああああああああああああああああああ！！！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

これが最後の攻防になる。お互い、それを理解していた。そして、どちらが勝つかも明白である。だが、ナギの顔は勝ちを狙う者のそれであった。未だに諦めていないのだ！！

大きくトンファアを振りかぶり、ナギの頭上に振り落とす。

ナギはそれを防がんと、杖を持ち上げた。そして――――

「トンファァーキイイイイイイイイイイイイイイイイック!!!!」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

いい角度で俺の蹴りが直撃した。それはモロにわき腹に突き刺さっていた。決まった、と妙な達成感を得た。

「.....」

「.....」

同時に、微妙な空気が辛かった。

「次は・・・ぜってー・・・勝つ・・・」

最後にそう宣言して、ナギは気絶したのだった。

「お前の翼なら俺のいる頂どころか、遥かなる空へといけるとも。『最強』」

ここに二人の戦いに決着がついたのであった！！

「全く、無茶しやがって」

そう呟きながら、空中に転移とはまた別の文字を書いていく。亜空間に接続し、紅い布の予備と服を取り出すためだ。それにしても、この戦い、俺にも収穫があったな。いそいそと服を着替える。それによって、解放された身体能力と穢れた魔力が押さえ込まれていくのを感じる。

「成長するのはガキの特権だけど、ボロボロじゃねえか」

ぶつくさ文句を垂れながら、手を動かして、ナギに治癒を掛ける。この文字を使った魔法のいいところは、直接大気中に含まれたマナに書き込むから、俺の魔力を消費しないところだな。めっちゃリーズナブル。

ん、焼ききれた神経もズタズタに断裂した筋肉も元通りだな。まあ、筋肉痛は免れないけど。

にししと笑いながら、ナギの身体を背負う。軽っ!？って、考えてみれば、こいつまだ子供なんだよなあ。この年齢であの域にまで達するなんてなあ……。そういえば、後々生まれてくるネギも成長のスピードが凄かったような。

「お疲れ様です。最下層の帝王殿」
ワースト・ワン

「アル、失礼だろ。申し訳ございません、和樹様。こいつには後で言い聞かせておくので……」

「まあまあ詠春。彼はそんな細かいことを気にするような性格には見えないですよ」

そのとき、彼の仲間がやってきた。アルにナギを引き渡す。あれ、フィリウスがいないぞ？

「ああ、別に構わんよ。それと和樹でいい」

「そうはいきません。あなた様は次期に私達の組織の頂点に立つお方。そんなお方を呼び捨てにするのは、桜花様が許しはしないでしょう」

「桜花の奴、まだ諦めてなかったのか!？」

「勿論ですとも。ええ、あのクソババ……。ごほん、あのお方には大変お世話になっております。ええ、毎日毎日忙しいってのに、呼び止められては延々と聞きたくも無い惚気話を聞かされましたとも、ええ」

「……。なんか、すまん」

「……。いえ、こちらこそ」

目の色が反転して怖かった。それにしても、桜花のやつ、いつになつたら諦めるんだか・・・

・・・ぶるっ。

だめだ、あいつを思い出すだけで背筋が震える。

「ところで、フィ・・・ゼクトは？」

「ゼクトならもう一つの戦いを見えていますよ。なんでも、あなた達の戦いの勝敗など火を見るより明らかで詰まらんとかなんとか」

「自分の弟子の戦いくらい見てやれよ・・・ん？」

どうやら向こうの戦いも終わったみたいだ。何故分かったのかという、何かが空から海へと落ちてきたからだ。

その何かは目を回してるラカンだった。

「おお、もしかしてマグが勝ったのか？」

「いんや、両者相打ちじゃ」

答えたのは、マグを両手で持ち上げているフィリウスだった。

「こっちは、やはりお主の勝利で終わったみたいじゃの」

「勿論だとも。ナギの奴も強かったし、俺は俺で楽しめたぞ。息子にしたいくらいだ。あ、マグ引き取るぞ」

目を回しているマグを引き取る。こっちはこっちでボコボコにされてるな。まあ、殴り合いの結果か。

「さて、用も済んだし、帰るわ。そうだ、フィ・・・ゼクト、報酬

の件、忘れんなよ」

「分かっておる」

「まあ、何か困ったことがあったら、また何でも相談しな。じゃ」

ああ、久々に充実した戦いだった

清々しい想いと共に、その場を去る俺だった。

処刑台を上るかの如く、山を登ろう。俺は転移するけど（前書き）

相変わらず話が進まない

説明回です

そして、コレが俺の限界だ・・・orz

後これから忙しくなるので、中々更新が出来ないかも。

処刑台を上るかの如く、山に登ろう。俺は転移するけど

俺たちが現在居を構えている所は、樹海に囲まれた山である。

名をクルルーマウンテン。

どこの暗殺一家が住処にしている山の名前みたいだが、まあ気にしないでくれ。

この辺りは豊富なマナに貴重な薬草や鉱物、人生で一度見れるか見れないかの希少価値の高い生物が多く生息していて、魔法使い垂涎の土地である反面、凶悪な生物も極悪な魔法植物も多彩であるため、ベテランの冒険者であろうとも入ることをためらう秘境の地である。俺たちにとっては庭みたいなものだが、他の奴らにとっては悪夢が具現化したようでイカれているらしい。どいつもこいつも可愛い奴らだというのに。見た目は怖いけど。

だからこそ、ここに住んでいるんだけどな。この天然要塞、毎日のように賞金稼ぎやら正義感（笑）に満ち溢れた魔法使いやら神の使徒（嘲）といった侵入者を蹴散らしてくれるので、安心して平穩な毎日を過ごせるのだ。

それに山全体には、特定の存在以外に対する絶対不可侵結界が何重にも張り巡らしてあるし、例えそれを何とかしても迷路のように幾度も分かれたれている山道の一つも間違えることもなく通らなければならぬので、そんじょそこらどころか、高位の魔法使いでさえ家にたどり着くのは厳しいはずだ。俺と家族は特殊な転移道具をもっているんで、一気に門の前にたどり着くけど。

その試練を乗り越えれば、待っているのは、およそお金では買えない大切な宝物となる景色だ。言葉では表せない、秘境の地というも

のが持つ圧倒的な魅力を諸に味わえるのだ。ここから眺める朝日は俺でも素晴らしい。あらゆる大自然を一望できる、思わず自慢したくなるような土地である。来るまでに九割方死ぬけど。

ナギとの戦いを経て、マグを片手で持ち上げながら（体格差で背負えないし担げないので）我が家の前まで跳んできた。

眼前では屋敷への道を塞ぐかのように、大きな門があった。いや、門というには語弊があった。何故なら、それは壁だったからだ。不思議な模様の描かれた壁が、アーチ上の枠に収まっていたのだ。

だが、これは門である。ちょっとした仕掛けの門だ。

壁の模様の中心に手をつける。すると、壁の模様がスミレ色に輝きだした。

そして

「お帰りなさい、カズキ。マグは・・・随分とボロボロですね」

「ああ、頑張ってくれたから休ませたいんだ。身体は治したけど、気や体力まで戻るわけじゃないからね」

手乗りサイズの黒髪黒目の美女が現れた。彼女こそクールビューティーの体現者とも言わんばかりの伶俐な美貌だ。プロポーションもよく、眼鏡がキラリと光る有能な秘書といった感じだ。ただ、サイズもそうだが、彼女には人間と違って、牛の角と耳が生えていた。彼女はこの屋敷の精霊みたいなものだ。屋敷のことなら彼女にお任せというキャッチフレーズの下、彼女は屋敷の管理全般を勤め

ている。というか、屋敷が彼女と言っているかもしれない。

そして、何を隠そう、彼女は昔、親衛隊隊長チューダムの補佐だった、モーターテイルなのだ！！

まあ、色々あったんだよ……。本当にもういろいろとさあ……

……
……クケケ。

ハッ。俺は何を？

それはそうと、彼女のこの姿は、詳しくは思い出したくないので簡潔に言うと、昔遊び半分で人工精霊を作ろうとしたんだけど、その過程で生み出した素体に取り付いてしまった結果である。材料は何かって？そりゃあ勿論、砂糖、スパイス、それと素敵なものをいっぱいさ。

でその光景を俺の中から見た他の親衛隊まで、我も我もと群がってきたんだ。根負けしてしまって、結局皆のために新たな素体をつくってしまった。現在の彼らは、それぞれの役割を果たしながら、外の世界を満喫している。

ふふふ、あの時のことはもう事件とっていいレベルだったと思うんだ……。嫌に疲れたし。わりを喰ったの俺だけだし。

久しぶりに昔のことで遠い目になっていると、彼女から爆弾を投げられた。

「何があったかは想像つきませんが、あまり無理させてはいけませんよ。それと、レイアからO☆H A☆N A☆S H Iがあるそうです」

「なぜ!？」

いつそんなフラグがたった!? マグか? マグがボロボロだからか? でもあらかじそうなるかもしれないことは伝えたよな?

「『完封魔殺』」

「さて、逃げるか」

その一言で全てを理解した。

『完封魔殺』とは俺が外に出る時に来ているこの紅い布のことである。だったらレイアが怒っている理由が一目瞭然。

マグをその辺に横たえて、戦闘時の数倍の速さで文字を書き、転移を発動――

「逃げたら、どういうわけか、あなたとフィリウスさんの掛け算が世界中にばらまかれてしまうそうですよ」

――しようとした瞬間、そんなこと言われてしまえば俺にはなす術も無い……。そんなものをばらまかれるくらいなら、迷わずレイアのO☆H A☆N A☆S H Iを選ぶとも。

「それに、私も含め皆が心配しました」

少し、こちらを咎めるような視線を送ってきた。・・・そうだろうな。真面目な話、アレもまだ何とかできる目処はたっていないのに、外で完封魔殺が外れる事態になったんだ。相当驚いただろう。この年になっても心配されていることに照れるが、それでも嬉しく思う。

「カズキは明日の日の目を見れるのかなって・・・」

「心配した内容そっち!? てかどんだけレイア怒ってんの!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何か言って！？余計に不安になるじゃん！！」

ツイッと目をそらされた挙句、無言になってしまった。

「さて少し長く話してしまいましたね。開錠術式を起動。『汝、我が問いに答えよ』」

彼女の声に呼応して、光の輪が俺を囲うように現れた。

こいつ、逃げやがった。

しかし、開錠術式は発動してしまった。これでは追求ができない。

開錠術式とは要は合言葉である。あらかじめ身内で決められた合言葉がこの門の先に行くための鍵となっているのだ。

屋敷へは、この門を通らなければ、どうやっても入れないのだ。天然の要塞、山の迷宮、そしてこの門。自分の家に行くだけなのに、何故ここまで嚴重にしているのかといえ、まあ長年の経験だ。人間の執念というのはあなどれないとだけ言っておこう。

もし、ここを通らず、転移やなにかで中に入ろうとした者は、問答無用でどこかに強制転移させられる。それこそ、地中深くに飛ばされたり、宇宙空間に飛ばされたりと、およそ人が生存できそうにならない場所もある。事故か何かで偶然来てしまったのならその限りではないが、基本的に侵入者には優しくないのだ。

だが、今回その嚴重さが裏目に出た。今合言葉以外の言葉を言えば、間違いだと判定され、同様に跳ばされてしまう。無理矢理中に入ろうとした者ほどではないが、遠くに飛ばされることは間違いない。

「『立てば』」

「爆弾」

「『座れば?』」

「ドカン」

「『歩く姿は?』」

「地雷原」

突っ込みはなしだ。だって、既存の言葉そのまま使ったら知っている人なら誰でも入れちゃうじゃん。少しは変更しないとね。

無事開門が終わると、壁は薄れていった。モーターテイルもこれ幸いとばかりに、姿を消したのだった。

一抹の不安を残したまま、しかし、そこにいつまでも佇んでいるわけにもいかないので、マグを持ち上げて屋敷に向かって歩を進めた。背後で、再び壁が静かに現れた気配を感じた。俺の家なのに、何故か閉じ込められたと思うこの気持ちに杞憂であって欲しいと思う、今日この頃だった。

S i d e アルビレオ

「う・・・・・・・・ぐあ・・・・・・・・」

青い空

白い雲

どこまでも広がっている緑の草原
そこにポツンと立っている真っ白な館

ここは、数あるアジトの一つに設置された魔法球の中です。館の一室では、ベッドで横たわっているナギの苦しそうなうめき声だけが響いています。

「馬鹿な、この痛みが、これが筋肉痛だというのか・・・」

「その程度で済んでいるのは、治療をしてくれた和樹のおかげですよ」

今のナギを見て分るとおり、精霊と同調することは危険な行為ではないのです。

何故なら人間と精霊は、根本から違う存在です。

精霊は自然から生まれしモノ。そして、自然そのものでもあります。いわば、精霊とは自然の化身です。

であるならば、たとえ下位の精霊であろうと持っている力はそれなりに大きいはず。

しかも、魔力の質も異なっているのに、ワラワラと集まって人一人に対して力を惜しむことなく注ぎ込めば、どうなるかは一目瞭然でしょう。

その上、意識の共有による自我の崩壊だってありえますしね。制御するのにも一苦労しそうです。

この技法が失われたのは、為るべくして為ったことなのでしょう。正直、人の原形を保っていることが驚きです。普通ならミンチくらいにはなってそうなのですが、はてさて。

「そうだ、その和樹だ。あいつは一体何者なんだよ？何か、自分のことは知ってて当たり前な空気を出してたんだが、って筋繊維の一

一つが裂かれたように痛え!!?」

「おやおや、しゃべっただけでそうなるんですか。ふむ、カズキのことですが、確かに彼の事をこの世界で知らない者はいないでしょうね」

「へえ、あいつ有名なのか」

フフ、なるべく痛くならないように努力してしゃべる姿が健気ですね。これはカズキに貰った超小型魔導式カメラで保存しておくべきでしょう。勿論ばれないように。このような姿は本当にレアなので、後々いじる時にでも・・・。

おっと、危うく思考がそれるところでした。

カズキのことでしたね。

ふむ。もし、彼がこの先戦争に介入するような事態が発生するようなことがあれば・・・いえ、今年は確か前回のあの事件から丁度百年。ということは、今彼らは何らかの意図を持って表舞台に現れたはず。その意図がこの戦争の中にあるのだとしたら、ナギが彼のことを知らないのは後々困りますかね。彼がゼクトに催促していた報酬の話も気になりますし。

少しカズキと彼が率いる組織について講釈しましょう。

「まずはカズキについて話しましょうか」

「ああ、頼む。ったく、暇過ぎて死ぬる自信があるぜって神経が直接電気を流されたようにイテェ!!?」

そんな彼はスルーして、話します。ああ、勿論エビぞりになってピクピクしている彼の写真は取りましたよ。

カズキⅡシノモト

懸賞金一億ドルで、生死問わずの賞金首。

犯罪組織『和を為す樹』^{ファミリア}の首領。

『竜の盟友』、『闇の賢者』、『紅い闇』^{ヒューマノイド・タイフーン}、『人間災害』^{ワー}、『最下層の帝王』^{スト・ワン}、『何あの紅い布マジ変態みたいなんですけど』、『しっ、あれは彼なりのファッションよ』など様々な二つ名を持つ生きる伝説で、その名を聞けば、震え上がらない者はいないとまで称された恐怖の権化です。

「一億ドル！？何したら、そんな懸賞金が・・・てか、最後の二つ会話じゃね？」

「それはまた、後ほど話します。後そこは突っ込んではいけません」
「今話せよ」

「話の順序というのがあるんですよ」

年齢は不明。

容姿も赤い目と黒い髪というだけが知られているだけで、後は一切不明。なので、あの紅い布の下はどんな姿をしているのか、噂だけが先行している状態でした。

曰く、全身に重度の火傷を追っているからああやって姿を隠している曰く、彼には後二回変身が残っている。あの紅い布はその封印のためのもの

曰く、実は彼は超の付くほど恥かしがりやで、素顔を晒すとショック死する

曰く、きつと素敵な顔がああ紅い布にあるといいなあ

曰く、どうせ各パーツを極限にまでそぎ落とした顔があるのが現実さなどなど。

「でした？」

「先日、紅い布の下から冴えない男が出てきましたよね」

「ああ、そうだったな」

紅い布の下は、まあ、いろんな意味で期待を裏切られました。あれだけ、姿を隠しているから、相当のナルシストだと思っていたのに、実際は刺青だらけの冴えない青年。がっかりです。いえ、別に顔立ちが悪くなかったのですよ？ただ、残念なだけです。

それにしても鎖の隙間や、肩と左腕の継ぎ目に見えたあの黒い『何か』が気になります。あれは一体なんだったんでしょうか。義手にしては酷く・・・いえ、考えても分りませんね。話を戻しましょう。

何十年前かの目撃情報によれば、いつもはその傍らには常に想像を絶する美女を二人、侍らしていたそうです。こちらは、カズキとは別の意味で有名な方々なのですが、ここでは省略しますね。

「・・・二人の美女？」

「今回は違いましたね」

むしろ、むさくるしいオドオドした巨漢でした。これもまた裏切られましたね。まあ、私は美女に興味など抱きません。例えば世界で一番の美貌を持つ女性でも、純心無垢な天使の如き幼女には敵いませんとも。異論は認めません。語りだせば、少々長くなってしまいうのでここでは断念しますが。

「そうしろ」

「おや、残念ですね」

強さに関しては、説明不要ですね。まあ、私の見たところ、あれで本気ではなかったという印象を受けました。実際魔法をほとんど使っていませんでしたし、最後にチラッと力の片鱗を見せただけです。ね。最初から真面目にやれば、あの紅い布を纏っている状態でも、ナギ如き瞬殺もいいところだったでしょう。

「おや、如きは余計でしたか」

「身体が動いたら殴ってたぜ、イテテテッ！？」

それは怖い。あなたのようなバグキャラが私みたいなもやしを殴ったらスプラッタですよ？

さて、次は、如何にカズキが世界最悪の賞金首になったかを話しましょう。

それには、『和を為す樹』^{ファミリア}について説明しなければなりません。

犯罪組織『和を為す樹』^{ファミリア}

構成員は犯罪者の烙印を押された者、忌み子、戦災孤児、捨て子、悪の組織の犠牲者たちからなるようです。そのほとんどが世界に悪と断じられ、排斥されてきた者達なので、世間からはならず者の集団として認知されていますね。ちなみに、ここから彼の『最下層の帝王』^{ワースト}の名が来ています。

しかし、ファミリアという名が示すように、彼らは一つの家族だといえます。それだけに、彼らの間の絆は何よりも強く、他の誰を裏切っても家族だけは裏切らないと豪語していると聞いたことがあります。

そんな彼らの目的は一切謎に包まれており、ある種の不気味さを漂わせています。分っていることは、数人のメンバー、彼らがこれまでと変わらず不遇な子を拾い、育てていること、そして、組織の行動指針がかつてとは全く異なっていること。

「かつてって、昔は違ったのか？」

「ええ、昔はもっとはっきりしていたのです」

今でこそ犯罪組織と呼ばれていますが、設立当初は、現実世界と魔法世界、両方を回っては数え切れない程の困っている人々を救ってきました。それは、飢餓に苦しんでいた人々であったり、病気に苦しんでいたひとびとであったりと、まさに『偉大なる魔法使い』とまで称されるほど数々の業績を残したそうです。彼らに憧れて、『偉大なる魔法使い』を目指した人が増えたと聞きます。

彼らは虐げられてきたというのに、それでも誰かを救ってきたのです。

「そんなのがどうして、犯罪組織に成り下がったんだ？ ストレスか？」

「それには彼らの起こす『百年に一度舞い降りる悪夢』が関わっています」

「？」

まず、『百年に一度舞い降りる悪夢』とは、まんまそのとおりの意味です。

始まりは今から七百年前に起こった『レーベンスシュルトの血飛沫事件』、今は亡きレーベンスシュルトの民が一夜にして、血の海に沈んだ大事件からです。

「な？！ 何の罪もない奴らを皆殺しにしたのか！？？」

「いえ、何でも、『一時間だけ鼻血が止まらなくなる呪い』を掛けたそうです」

「は？」

「ですから、『一時間だけ鼻血が止まらなくなる呪い』を掛けたのです。レーベンスシュルト全体に、しかも洒落にならないくらい勢いよく噴き出すように。そのせいで、街はどこかしこもスプラッタなことになったそうです」

「……ああ、成程、確かに辺りは血の海になるな」

なにやらしらけているナギはほっといて、続けましょう。

流石にそんなことをした組織を放っておくのは、当時の各政府間でも問題になりますし、国に混乱を招いたので、犯罪組織として追われるようになったそうです。このときから、カズキを含めた主要メンバーには賞金が掛けられました。今と比べて微々たるものでし、追跡も形式的なものでした。それというのも、彼らの功績がそれだけ大きかったからです。

ちなみにそのときカズキから出た言葉は『むしろくしゃしてやった。反省も後悔もしない』とのことです。

「いや、それってどうよ」

「いえいえ、世の中は得てしてそんなものですよ」

このときはそれで終わったんですが、この話はまだ続いてまして、『レーベンスシュルトの血飛沫事件』から百年おきに、今から二百年前まで、そんな大事件の後に（笑）とつくような事件を起こしているんですよ。

どれもこれも共通しているのは、犠牲になった町は子供の悪戯を極悪レベルに引き上げたようなくだらない呪いに掛かったそうです。周りからすれば笑い話ですが、しかし当事者からすればどうも冗談ではすまなかったようで、中には毎夜悪夢にうなされてしまう人も少なくなかったようです。

そのたびに彼らの懸賞金は上がっていったのですが、巷では一種のお祭り騒ぎとして広く知られていったのです。そのときまで、彼らは困った人たちではありますが、愉快的騒ぎを起こしてくれる人気者でもあったのです。

それが高じて、三回目からは彼らのこの騒動が一種の行事になりまして、次はどの街が被害をこうむるか等の賭けが開かれたり、彼らが街に来た時のための備えが始まったりもしました。

その行事の名が『百年に一度舞い降りる悪夢』

そう、彼らは人助けをしながら、時々大きなイベントを引き起こすだけの組織でしかなかったはずなのです。

「超参加してえ」

「あなたならそう言うと思いましたよ。ですが、本題はここからです」

それが変わったのが百年前、組織が、いやカズキが本当に起こした大事件。

「当時、最高にして最強とまで称えられた、文明発祥の地ウエスペルタティア王国の国王を殺害したのです」

「なっ!？」

そこから、組織は人気者から一転、反逆者の烙印を押されてしまったのです。当然ですね。彼らの首領が一国の王を暗殺したのだから。

逃げる彼らに追っ手が送られました。

国王の弟が軍を率いて討伐に向かったのです。

その軍勢2万。

それに立ち向かったのはただ一人。

カズキIIシノモト。

誰もが圧倒的戦力差から王国側の勝利を信じて疑いませんでした。相手はたった一人。我々が国王を殺した男。

誰もが王の弔いのために立ち上がっていました。故王は民に、兵に、臣下に慕われていた分、その憎しみは大きくなりました。

しかし、結果はその全ての予想を覆しました。

彼はただの一人も殺さず、コレを撃退せしめたのです！！

あろうことか、血を流すことなく、ただ相手を全員気絶させただけ。今後の生活に支障をきたさない程度に痛みつけて、終わったのです！！

自身はかすり傷一つ負うことなく、国の精鋭を叩きのめしたのですよ！！

それは世界を震撼させました。誰もが耳を疑いました。誰もが頭を疑いました。

しかし、現実は無情にもそれが真実であると告げました。

当然、そんな醜態を世間に広げるわけには行かなかったので、王国側は情報統制に打って出ました。それでも、国は混乱し、国民を抑える必要も出てきました。

そして、彼らはその隙を突いて姿をくらませることに成功したのです。

「こうして、彼は一億ドルの賞金首となり、『王殺し』の二つ名を得たのです」

「無傷で、しかも気絶させただけ・・・だと・・・？」

ナギは戦慄していました。その気持は分かります。この話を初めて聞いた時、私も同じ気持ちになりましたから。当時は誰も彼の秘めた力を知らなかった。せいぜい腕の良い魔法使い程度の認識だったそうです。それが、バグキャラどこの話ではない、人知の及ばない力を見せ付けたのです。世界が彼の力を脅威として認識するのも、当然の結末でしょう。

「ところで、何でこんなに詳しいんだ？」

「秘密です」

今、ナギに教えたのは、カズキと深い関わりを持つというある吸血鬼の少女から聞いた話。公式の記録は彼女から聞いた話とは全く異なっています。

ファミリア
和を為す樹は徹頭徹尾、犯罪者の集団であつた

要約すれば全てその一文に収束できるのです。明らかな思考誘導ですね。『百年に一度舞い降りる悪夢』での事件は全て極悪事件として改竄されてから教科書に載ってますし、カズキも苦勞しているのですねえ。兵を撃退した時なんか、皆殺しにしたとかかれていますし。

「しかし、キティの話と実際会ったカズキのギャップといったら・・・」

思わず、口元を押さえてしまう。優雅に笑うのです、私。下品な笑みは私に似合いませんよ。

「さて、そのカズキは今何をやっているのでしょうか」

私的には何か面白いことになっているような気がします。

処刑台を上るかの如く、山を登ろう。俺は転移するけど（後書き）

感想お願いします

改善点があればもっと受け付けます

俺が最強を名乗らない理由？そんな分りきったことを聞くな！！（前書き）

ようやく更新ができました
難産でした。

しかも、話に進展がないという体たらく。
申し訳ないです。

俺が最強を名乗らない理由？そんな分りきったことを聞くな！！

諸君らのご存知のとおり、俺には答えを出す者アンサートーカーという能力がある。文字通り、あらゆる事象に答えを出すことの出来るようになる能力だ。

しかし、この能力、実は何らかの不思議現象が働いているわけではない。

魔力や気といったモノを使って脳を強化しているわけでも、アカシックレコードと呼ばれる森羅万象の事象が記されている場所から情報を読み取っているわけでもないのである。

例えば、『1足す1は？』という問に対して、諸君らは迷わず『2』と答えるだろう。

このように、アンサートーカーを使っている身としては、理不尽に答えを出しているのではなく、当たり前の問題に当然の如く『答え』を出しているのに過ぎないのである。

勿論、頭の中ではきちんと、脳に保存されている膨大な情報を元に、刹那の間に様々な過程が思い浮かんでは消えを繰り返している。感覚ではなく、理詰めで『答え』を得ているというわけだ。

それらの情報を総合するとこの能力は『脳のリミッターが云々』の話のように、思考力、記憶力、洞察力、観察力、考察力、発想力その他諸々、殊考えることにおいて脳を100%使えるようになる力のことを言うのである。

あらゆる事象に対して瞬時に『答え』を出すこの力が、素晴らしいということに議論の余地はない。

戦闘になれば、敵の動き、攻撃の性質、あるいはその避け方、逸ら

し方などを理解できるし、魔法世界に散らばる遺跡に張り巡らされた罫の解除方法、未知の文字の解読、隠し扉の発見などに便利だし、学問にだって役に立つ。日常の些細な出来事にも応用が効く快適な力である。ともすれば、他の能力が霞んで見えるくらいだ。そんな能力を楽に手に入れてしまった身としてはと、流石に申し訳なくなってくる。

サーセン。

だがしかし。

だが、しかしだ。

確かにこの力は素晴らしい。それは間違いない。何があっても変わることはない、絶対不変の事実である。

「とりあえず、何かいい訳があるのなら言って下さいな。O☆H A
☆N A ☆S H Iはそれからです」

でも、愛妻からどうやって逃げるか、その答えを『無い、諦めろ』と出すこの能力に一体何の意味があるのだろうか。

場所は屋敷の一室。レイアの部屋。入って早々、相対したのは、レイアの後姿であった。

広くも狭くも無い至って普通の部屋。置いてあるのは全て俺が作った最高級の調度品。

机の向こうで椅子に座り、こちらに背を向け静かに腕を組んでいるレイア。畏れ多く神聖な姿である。それだけにこちらに向けられるプレッシャーが半端ない。おお、彼女から漏れ出る覇気のなんと強大なことよ。

嫌な沈黙だけが場を支配していた。もうこれだけで、気が狂いそうだ。

何秒経っただろうか、絶妙なタイミングでレイアは口を開いた。視線は相変わらず窓に向いている。

「つまり、不可抗力でしたと？」

「あ、ああ」

「ふん」

彼女が怒っているのは、海岸での出来事についてである。ここまで、解放された闇の波動が届いたのだという。正確に言えば、精霊を通して感じ取ったらしい。だが、そんなことはどっちでもいい。重要なのは、レイアにばれたことである。

今俺に許されているのはガタブルと震え、断罪を待つことだけだ。

「あれほど念を押したにも関わらず、『大丈夫だ、問題ない』などと大層自信満々に家を出て行ったのにですか？」

そこで、彼女がゆっくりと振り返った。ぶわっと、彼女の体から更に圧倒的な覇気が吹き出る。

「で、でも、それはナギが精霊と同調した上に、つたないながらも使いこなしたからで・・・」

「それは責任転嫁です。あなたが真面目にやっていたなら、そうなる前にいくらでも対処できたでしょう」

グウの音も出ません。

「問題は屋敷の外で完封魔殺をはずしたことにあるのです。その意味をあなたが一番理解しているはず」

「・・・・・・・・」

分っている。嫌でも理解しているさ。

完封魔殺の役割は、ナギに説明したような、黒いマナが世界に及ぼす影響を抑えるだけではない。そのことを今一度思い出す。

黙りこくってしまい俺に対して、レイアは軽いため息を付く。そして

「分ったなら、服を脱いでください」

唐突にそんな催促をした。普通であれば戸惑うかもしれないが、理由を知っているので、言われたとおりに、服と紅い布をはずし、裸体を晒す。もう長いこと生きているうえに、相手はレイアだ。裸体を恥かしがることなんてしない。もっと恥かしいことをしている仲だしな。

完封魔殺をはずしているのかと思う人もいるかもしれないが、クルーマウンテンなら問題ない。山全域には、俺の穢れをもともしない強力な浄化作用を持つ、循環型魔力増幅魔法具『神樹』の力が及んでいるからだ。増幅された清らかなマナが魔力に溶けた穢れを祓ってくれる。しかし、左腕の鎖だけははずさない。はずせない。

レイアは俺に近づいて左腕の付け根に触れる。

「一分足らずでここまで侵食されてしまつて・・・」

「・・・すまん」

「許しません」

彼女が触れたその場所は、闇色に染められており、その部分だけは、刺青が赤黒く、不気味に光を放っていた。

染めているものの正体は、鎖の下にある左腕、それを形成する泥だ。世界を呪い、理不尽を恨み、幸せを憎む、あらゆる負が込められた呪詛。黒い魔力の比でない、神樹では浄化することなど不可能な純粹な穢れそのもの。『縛る』という概念を極限にまで引き伸ばした鎖で封印しているものの、世界を漂う『よくないモノ』に反応してはこうして俺の肉体を侵食していく。そして、全身を侵食されてしまえば俺は・・・。

そこまで考えて、嫌な想像を振り払う。

だからこそ『完封魔殺』。この紅い布の役割は、魔力に溶け込んだ穢れを抑えることもそうだが、必要以上に世界に蔓延する闇を取りこまないように、遮断するという理由もある。内と外、両方に対する処置。

たった数分晒しただけで、ここまで左腕を形成していた闇色の泥が広がってしまった。戦った場所が、辺境だったとはいえ、狂気が大量発生している戦争の真っ只中だったからだろう。これだから、戦争は嫌いなんだ。

「でも、これならまだ私の力で何とかできます」

それは、胸を覆っている闇を浄化するということ。神樹には出来な

いことでも、『真なる聖女』となった彼女だからこそ出来る芸当だ。存在が俺とは真逆である彼女だけの業だ。並みの人間であるならば、触れただけで爛れてしまうこの闇の泥を、彼女はそうならないどころか、逆に清めてしまう。実際にさっき少し触れただけで、その部分は軽く退いた。

じゃあ、O☆H A☆N A☆S H Iはなしになるのか？

そんな淡い期待をへし折るかのように、彼女は言葉を続けた。

「誰よりもこのような事態を避けるべきであつたあなたが、遊んだ時点で情状酌量の余地はありません」

結局、弁解の甲斐なくO☆H A☆N A☆S H Iが敢行されることになった。

だが、彼女の言ったとおりだ。今回のことは明らかに彼らで遊んだ俺が悪い。甘んじて受けよう。決意を固め、さながら裁きを待つだけの罪人のような気持ちで彼女の断罪を待つ。

しかし、ここで思わぬ方向に話が進んでしまうことになる。

「でも、いつもみたいに隕石の絨毯攻撃でボコボコにしたり、精霊さん総攻撃で吹き飛ばしたりするのは芸がないんですね。だから、アレをやります」

「アレ？」

「ええ、アレです。昔のカズキさんが可愛かったので、もう一度見たいのです」

昔？可愛かった？もう一度見たい？

そのフリーズだけで、何か嫌な予感がする。見ろ、彼女の目は先ほどと違って、なにやら怪しい光を宿らしているぞ？あの目、前にも

見たことがあるはずだ。そうだ。アレは確か・・・

全身を悪寒が駆け抜ける

(まさか、・・・アレか?)

彼女が何をしようとしているのか、理解できてしまった。否、思い出してしまった。

初めは偶然でしかなかった事件だったが、どうやら味をしめていたらしい。再度、あんなものを実行しようと考え付くレイアが聖女ではなく、悪魔に思えた。

(冗談じゃない!! 下手すればO☆H A☆N A☆S H Iよりもやばいじゃないか!!)

即座に土下座を敢行する。

「お願いします!! アレだけは、アレだけはやめてください!!!」
「それじゃあ罰にならないじゃないですか。何度言い聞かせても話を聞かないあなたのために、身体に刻み付けて差し上げます」

そう言って、平時なら見惚れてしまう可憐な笑顔を浮かべるが、言っている内容は見た目にそぐわない。寧ろ今は薄ら寒くさえ感じる。それをやられたら、やばいことになる!! 冗談抜きでやばい!!!!

「お願い!! せめて、いつもの、いつものO☆H A☆N A☆S H Iにしてください!!!」

「あらあら、あなたはいつからそんなマゾヒストになったのですか? 普段は真逆ですのに。この前の夜なんかは私とムーさん二人を同時に攻めて・・・」

「それは口を大にして言うことじゃないよね!? って、そんなのはどうでもいいから、アレだけはやめて————!!」

「だが断ります。このレイア・シノモトの最も好きなことの一つは愛する夫のお願いに『NO』と申し立てることです」

元の世界のオタク文化を披露しすぎてしまった結果がこれだよ!! この数百年でレイアは掛け算が大好きな貴腐人となってしまっているのを忘れていた。それこそ、この部屋で自分で執筆するくらいに。

何を言っても覆ることのないことを把握した俺は逃走を決意する。四肢に力を入れ、魔力で補強。瞬時に最善の逃走経路をシュミレート。

彼女の前では魔法を使っても意味がない。魔法に関しては、『真なる聖女』たる彼女が、全てにおいて上回っているのだ。

身体能力はこちらが圧倒的に勝っている。賭けるなら、これしかない!

魅せてやる、俺の華麗なる逃走劇を!!

一方で、アンサートーカーによって活性化している脳が『無駄なことを』と断じているが、そんなことはない。俺はいつだって不可能を可能にしてきた男。可能性がないのなら作ればいい。

「!? 馬鹿な!? いつの間に……」

しかし、この部屋には結界が張られていた。古龍さえも閉じ込める強力な結界だ。だが、この部屋に入る前は張られていなかったし、レイアが発動した気配もなかった。ならば、考えられるのは共犯の可能性。レイアの威圧に押されていたとはいえ、なんという迂闊!! いや、強引に突破することも、できるにはできる。しかし、突破す

ることで生じるタイムラグはレイアほどの実力者相手には大きすぎる隙。

「結界はエヴァちゃんに張ってもらいました。あなたの目の前で張ればいらぬ警戒を招いてしまいますからね」

エヴァ！あの幼女！！

いや待て、それが意味することはつまり、俺が逃げ出そうとするのは想定範囲内だったというのか？

詰んだ・・・！！否・・・ここに來た時点で既に・・・！！

絶望・・・圧倒的絶望・・・！！・・・まるで手の平で踊らされた孫悟空のような絶望・・・！！支配される・・・絶望に・・・！！

「さて、では早速」

カズキに戦慄が走る・・・！！

おたおたしている間にレイアは宙に指を走らせ、一つの魔法陣を描いていく。思い描くだけで発動できるはずなのに、この余裕。俺に對する嫌がらせにしか思えない。

円の中に大きな一つ目、それを起点に口と猫耳。それは、あまりにも簡潔で、間抜けな魔法陣であつた。

だが、俺は知っている。俺にとっては、何よりも恐ろしい魔法である。

魔法陣が光り、一つの存在が形成されていく。

円錐のようなボディと後ろに生えた尻尾。

限りなく円に近い間抜けな顔とでっかい猫耳。

頭に乗っかる王冠。

一番近い動物を言えば、それは虎猫だ。

奴は雄雄しくかつ妙な迫力でそこに現れた!!

ああ、ついに呼ばれてしまった!!

それでも一か八かで結界を突破するも、想定していた通り、タイムラグが発生。一秒にも満たないそれは、しかし、奴にとっては十分であった。

そいつは口を大きく開いた。

(オワタ・・・)

「にゃあああああああああゝゝゝゝゝゝ」

「はらほろひれはれゝゝゝ・・・」

なんと言うことでしょう。その気の抜ける無駄に長い声を聞いた瞬間、筋肉という筋肉から力が抜けていき、解放された魔力が霧散していったのです。

『長い声のネコ』

周辺の魔力と戦闘の緊張感を無効化する鳴き声を放つ魔法。

普通の人間にはあまり効かないが、悪しき者、闇の存在には絶大な効果を発揮する。つまり、俺の天敵。

何気に俺の穢れさえも中和することの出来る凄い魔法なのだが、そんなことはもうどうでも良かった。

ドクンツと身体が跳ねる。

「ぐっ……があ……」

俺の身体に変化が起きた。身体が熱くなり、荒い息を吐く。汗をびっしりとかき、意識が朦朧としていく。気のせいかな、身体が少し青白く光っているような……。徐々に起こっていく変化を、ニコニコと笑いながら眺めるレイアの姿がそこはかとなき恐怖を抱かせる。

やがて、苦しみに終わりが訪れた。ポンツという音と共に、俺の身体が煙に包まれたのだ。

数秒の後、煙の中から出てきたのは、床に手を突いて落ち込んでいる俺であった。

「ふ、ふふ、またこんな姿に……」

「くす、可愛いですよ、あなた♪」

「もうやだ、死にたい」

「ダメですよ。これからたくさん楽しむんですから」

劇的ビフォーアフター。

俺の姿はなんと、幼少時まで遡っていた。長い声のネコを喰らうと、何故かこうなってしまうのだ。大体、十歳くらいだろうか。自慢じゃないが、この時代の俺は可愛いと評判の男の子であった。所詮は過去の栄光だけだね。

背丈が縮んでしまったために、服がだぼだぼになってしまった。いや、こんなのは大した問題じゃないんだ。錬金術でパツと調整できるからさ。

「さあ、あなた。コッチニオイデ……?」

「レイア、目が、目が怖いよ?それとその手に持っているのは何か

な？」

そうだ、あくまで問題は彼女である。何故か極度の興奮状態に陥ったレイアから後ずさりする。しかし、その途中で何か柔らかいものにぶつかった。

「分らないなんてお父様らしくないな。あれはカメラとゴスロリというんだ」

「エヴァ、いつの間に！？いや、その手にあるモノはまさか・・・」

背後にいたのは、大人版エヴァだった。一昔冗談で作った魔法薬で一時的に大人になっているようだ。立場が逆転してしまった。頭の後ろでムニヨンとなにか柔らかいものが歪む心地のいい感触を直に感じ取るが状況が状況だけに興奮なんて出来ない。いや、娘に発情するほど俺は飢えていないけどな。

「フッフ、見てのとおりメイド服だ。何、今のお父様なら、きっと似合うはずだ」

「待て、考え直すんだ。こんな姿になろうが、俺は男だ。それは女性に着るものだろう？」

「あら、いつも固定観念は吹き飛ばすものといっっては、研究室を爆発させているあなたらしくないですよ？」

「そうだとも。さあ、コッチヘキテモラオウカ・・・」

「大丈夫です、スグキモチヨクナリマスヨ・・・」

二人は目に怪しい光を灯し、さりげない動作で間接を極めてきた。エヴァの場合、真祖なので子供であっても身体能力は完封魔殺を巻いている俺程度には優れている。それでもわざわざ大人になったのは、子供になって弱っている俺を絶対に逃がさないために違いない。エヴァ、恐ろしい子！！

ダメだ。これはどう足掻いても抜け出せそうにない。諦めて・・・。
嫌だ！！また着せ替え人形になった挙句・・・あ、ああ、あああ
ああああああああああああああああああ！！？嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ————ッ！！あんなのは二度とごめんだ！！

あの時の悪夢が蘇る・・・。しかし、救世主は現れた！！

「てめえら、そこまでだ！！」

「ムーちゃん！！」

「ムーちゃんって呼ぶんじゃねえ！！」

「あら、ムーさん」

「なんだ、ムー母様も混ざりたいのか？」

白銀の髪を棚引かせて颯爽と駆けつけてきた麗しい美女。俺の臣竜として成長したバハムートことムーちゃんだ。

「ば、馬鹿言ってるじゃねえよ！まっまま混ざりたいとか一言も言っていないだろうが！」

「あれ、おかしいな。何故か顔を赤らめてもじもじしているムーちゃんの幻覚が見えるんだけど」

「ふふ、相変わらず素直じゃないですね。そこが可愛いのですけど」
ボソッとレイアが何かを呟いた。ムーちゃんにも聞こえなかったようだ。

「おい、レイア。O☆H A☆N A☆S H Iするだけなら黙認するつもりだったが、主を辱めるような行為は無視できねえ。そのカメラと服をこっちに渡しな」

ああ、やっぱりムーちゃんは頼りに為る。流石だ。

「あらあら、そんなこと言って良いのですか、ムーさん？」

「あん？何がだよ」

「今のカズキさんをよく見てください。こんなカズキさんは滅多に見れませんよ？」

抱き上げられる俺。足がプラプラとして、落ち着かない。

こちらをじっと見つめるムーちゃん。何を考えているのか、顔がだらしく緩む。

「……………ムーちゃん？」

「…………ハッ！？違うんだ、カズキ！俺をそんな目で見ないでくれ！？」

そして、唐突に自己嫌悪に陥ってしまった。いや、そんな目ってどんな目よ？

「何だかんだいっても、それがあなたの本心ですよ。丁度良いではありませんか。こんな機会またありませんよ？なんでしたら、後で写真だって渡しますし、いっそのこと一緒に楽しみませんか？今なら、二人でゴニョゴニョだって出来ますよ」

「やめろ！？俺にそんな悪魔の囁きをするな！！！！」

レイアに何事かを耳打ちされ、ムーちゃんは錯乱してしまった。

「さあ、あっちで楽しいことしましょうね」

「ムーちゃん！お願い、助けて！！」

「ハッ、そうだ。俺はカズキを助けに来たんだ。お前らの甘言に乗らないぜ！！待ってろ、カズキ、今お前を…………」

「じゃあ、写真も動画もいらないんですね」

「すまねえ・・・俺は無力だ・・・」

「ちょ、おま!？」

ムーちゃんが陥落した!？

「今度こそあっちの部屋で楽しみましょう」

「いやあああああああ!! ムーちゃん、ムーちゃあああああああああああん!!!!」

「クッククク。腕になるな。今よりもっと可愛くしてやる」

蜘蛛に捕らえられた獲物の気分だった。助けを求める俺だが、ムーちゃんはやるせない表情で顔を逸らす。無情にも、目の前で扉が閉ざされた。

その後のことは、思い出したくない。

ただ、俺の人生に新たな歴史が刻まれたとだけ言っておこう。頭に黒と着く歴史がな・・・。

Side 三人称

「今の波動は・・・」

世界最古の都オスティア、その最奥部の『墓守り人の宮殿』の一角に一つの影があった。

その人影は、ある方角に目を向けていた。ただ、なんとなく目を向けているのではない。その視線をずっとずっと辿っていくと、巨大なクレーターのある海岸へとたどり着くだろう。

そう、和樹とナギの戦った場所である。

「戦力が整い、術式の調整も終わり、計画が最終段階へと移ったこの時期に、貴様はまたしても我の邪魔をするのか。百年前のあの時のように」

顔を隠すフードの下で、心底忌々しげに言葉を紡いでいく。

「私の語る永遠こそが全ての魂を救う唯一の次善解であるというのに……」

全身を漆黒のローブで包んだ、その容姿、性別の全てが謎の人物。

「よかろう、ならば貴様には今一度、我自ら絶望の帳を降ろしてやろう、カズキⅡシノモト」

いつの間にいたのか、その背後にはローブを纏った者達
それらを当然のように従えるその人物の正体。

それはカズキが遠い昔、恩師の記憶の中で見た――――

——ライフ・メイカー——
造物主、始まりの魔法使いに他ならなかった。

「完璧ですう!! やはりい、ラスボスはあ、こうでないとお!!」
「……言われたとおりをやってみたが、このような演出に一体何の意味があるのだ?」

「秘密結社にはあ、遊び心もお、必要なですよ！大丈夫ですう。あなた様の威厳はあ前面に出ていますからあ。むふふ、これでP Vを作ってえ……」

「・・・そうか、まあ好きにしろ。ただし我の姿を公表するようなことはするなよ?」

「なん
・
・
・
・
だ
と
・
・
・」

「デユナミス、彼は何当たり前のことに驚いているんだい？」

「放っておけ、アーウェルンクス。あいつはただの馬鹿だからな」
「そう。それにしても、よくあのお方がこんなくだらないことに付き合ったね」

「息抜きだそうだ。もつとも、あの台詞なんかは割とマジな部分と
かありそうだな」

組織の始動（前書き）

なんというか、色んな意味でだめだ。

キヤラを生かしきれていない自分に絶望した・・・。

というわけで、難産の末に最新話です・・・。

組織の始動

Side 三人称

その場所からは世界を一望できた。

360度吹き抜けになった塔の天辺。展望台というのが一番近い表現だろうか。

はつきりといえないのは、床に刻まれた大きな魔法陣と指示を出しながら、慌しく動くフード姿の男達というのが、ごくありふれた展望台には似つかわしくないからだ。

そんな場所に、魔法陣の中心に、少女はいた。

髪をツインテールにし、左右の瞳の色が違う、おそらく十人が十人とも可愛いと評価するであろう容姿。しかし、両腕を床から伸びた鎖に束縛され、感情が抜け落ちたような、不気味なほど虚ろな表情が彼女の年相応の可愛らしさを奪っていた。

まるで人形のように脱力をして膝を付く少女は、赤焼けた空をぼんやりと眺めていた。

何故自分がここに連れて来られたのかも理解しながら、ただ、夕焼けを見ていた。

少女は夕焼けが好きだった。彼女は夕焼けを見ると、自然と浮かんでくる記憶があるからだ。

『お前の髪の色綺麗だな！』

記憶の中には知らない男がいた。顔は曖昧で分らないが、それでもその男は、とても優しい笑顔を浮かべていることだけは分かる。いつのことかも、その人が誰かも分からない。思い出すのはたった

のそれだけ。でも、この記憶が浮かぶたびに、少女は自分が人形じゃないように思えるのだ。この記憶を思い出すと、決まって胸がぽかぽかするのだ。

それはまるで自身が人形ではないと主張するかのように。

同時に、少女は彼とつか会えるような気がしてならない。なぜそう感じるのかは少女自身把握していないが……でも、何故か妙な確信がある。

（ニンギョウガ……ソナコトカンジルノハ……オカシイト
オモウケド……）

無意識に胸のペンダントを握り締める。白と黒が絡み合って一つの樹を模している変なペンダント。そういえば、これもいつからあるのか分らない物だ。気が付けば、持っていた代物。今では、つけてないと不安になってしまう。

一度取り上げられたことがあったが、あの時はどうやって取り返したんだっけ？

これまた思い出せない。アレ？と少女は思うが、どうでもいいことと切り捨てた。

思えば、少女は兵器として利用されている関係上、戦時中ぐらいしか考えることが出来ない。用が済めば、時を止められて幽閉されるからだ。少女は唯一無二の“兵器”であり、魔法使いたちにとっては、忌むべき対象であると同時に、出来るだけ長く、そして大切に扱わなければならない代物。そのための処置。

だが、たとえ幽閉されていようとなかろうと、夕焼けの見える時間以外は、ただ暗い闇の中に閉じこもるだけだった。少女が―――傍

からは変わらないように見えるが——心を開くのは夕方のみであった。それゆえに、少女は基本何も考えていない時が多いし、どうでもいいことはさっさと切り捨てる。

逆にいえば、少女にとってはこの時間が、考えこむほど大切なのだ。思考も淡々としたものだが、それでも少女にとっては、何ものにも代えがたい時間なのである。何もないはずの自分には覚えのない記憶があり、何者でもないはずの自分が何かになれたかのように思えるから。

だが、そんな些細な幸せも、空間から滲み出るように出現した敵によってかき消されてしまった。夕日が大地へと沈みゆく頃、ソレらは現れたのだった。陽炎のように揺らぐソレらは、まさに黄昏時、いや逢魔ヶ時に相応しい形相であった。

鬼の如き姿でありながら、神の如き威圧感を以って、立ちふさがる敵を殲滅せんとする存在。

———鬼神兵

ゆったりと歩調を合わせて、大地を揺らす巨体を前にして、魔法使いの男たちの間に緊張が走る。空には無数の巨大戦艦。それは味方のものではなく、敵の戦力。戦いが始まるのだ。

「来たぞ!!」

「なんという数だ・・・」

「ええい、連合は一体何をしておる!!援軍はまだか!!」

「急ぎ結界を張れッ!!」

飛び交う男たちの怒号を他所に、少女の心に浮かんだのは別のことだった。

(ユウヒ・・・シズンジャッタナ・・・)

辺りが既に夜の闇に支配されているのに気付き、少女は再び心を閉ざすのであった。あたかも、闇に溶け込むかのように・・・ペンダントが、少女の行く末を見守らんとしているように、きらりと反射した。

S i d e o u t

「・・・・・・・・うじうじ」

「んー、流石にやりすぎましたかね？虚ろな目で、危ない笑みを浮かべてますけど」

「いつものことだ。大した問題じゃないだろう。ムー母様も気に病む必要はない」

「すまねえ、俺がふがいないばかりに・・・」

「そんなことをいいながら、どうしてその手にある写真から目を離さないんだい、我が妻にして臣童よ？」

「・・・・・・・・！？ち、違うんだ！！こ、これはその・・・」

皆が薄情な件について。

・・・それは置いておこうか。そこをつつけば、さっきの黒歴史が否が応でも蘇る。

メイドとか巫女とかナースとか和服とかゴスロリとか。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・それ以上はいけない。

「エヴァ姉!!」

鬱モードに入りかけるのをひっくり返すように、ドアを蹴破り、青い髪の少女勢いよく入ってきた。

「つて、あれれ？お父さん何してんのさ？」

「あら、ミィちゃん。カズキさんはいつもの病気ですよ」

「あ、そうなの。そんなことより、エヴァ姉!!今日の課題終わったよ!!」

「ほう、もう終わったのか。流石だな、ミィナ」

「えへへ、もっと褒めてよ、エヴァ姉」

「あ、馬鹿、体格差を考えんか！」

ミィナと呼ばれた少女は、幼女に戻っていたエヴァに抱きつく。エヴァよりも大きいそのミィナがエヴァに勢いよく抱きつけば、結果は押して知るべし。ミィナを叱るエヴァだが、その顔は緩んでいた。その気持ちはよく分かる。彼女の笑顔に癒された俺は、ミィナに質問した。

「今日は何をやったんだ、ミィナ」

「えっとね、魔力でお皿を百枚洗って、拭いて、棚に仕舞ったんだよ！」

「・・・そ、それは偉いな!!うん、魔力コントロールもすっかり板についてきたじゃないか!!」

「えへへ」

ミイナを撫でながら、思う。

（確か今日の食器洗いの当番はエヴァだったはず）

「ん？どうしたお父様」

当の本人を見ると、グダグダとくつろいで、せんべいをかじりながら、本を読んでいた。・・・何も突っ込むまい。

「まあいい。そろそろ真剣な話に移ろうか。モーターテイル」

冗談はここまで。ここからはギャグが一つも見当たらないスーパーシリアスタ임である。

こちらの雰囲気が変わったのを感じ取って、向こうも姿勢を改めた。ほどなくして、モーターテイルが現れた。

「呼びましたか？」

「ああ、幹部を会議室に集め『ぐううううううううううううううううううう』・・・る前に飯にするか」

が、胃が大きくないなないたことにより、何とも締まらない結果となっていた。

夜になり、魔獣などの夜行性の生物たちが活発になり始めた頃、館のとある一室。

俺を含めた十人の男女がテーブルを囲っていた。俺の両脇にムーちゃんとレイアが陣取り、レイア側には三人の娘。

蜂蜜のように透きとおった綺麗な金髪をもつ、人形のように可愛い少女。

洗練された魔法と柔術で相手を圧倒する。

『長女』エヴァンジェリン・A・K・シノモト。

燃え盛る炎のような赤い髪と目の眉目秀麗な女性。

彼女の通った後には灰すら残らない。

『次女』フレイア・I・シノモト。

ぽや〜んという言葉が似合う緑髪茶目の女性。

彼女に掛かれば身も心もあつという間に癒される。

『三女』シルフィード・シノモト

彼女たちこそ、我が家で『歩く信号』と名高い三人娘だ。髪色と性格的に。

そして、ムーちゃん側の三人の息子。

髪がある以外はマグとよく似ている筋骨隆々の男。

圧倒的な破壊力で何もかも壊していく暴れんB O Y。

しかして、見た目にそぐわぬ深い思慮もする。

『長男』ラグ・シノモト

目を閉じ、金色の長髪を三つ編みにしている美丈夫。

盲目だろうが、その強さには関係ない。

『次男』ペル・シノモト

特徴がないのが特徴。

平々凡々な容姿に共感を覚える、他人のサポートならこいつに任せ

ろ。

『三男』ダグラス・シノモト

彼らこそ、我が家で『大・中・小兄弟』と呼ばれている息子たちだ。文字通り、凸凹兄弟だ。

そして、最後に、俺の対極にいる、全身灰色のダンディズム溢れる男。

だが大きなネズミミが台無しにしている残念な洪さ

『統括』チューダム。

彼らは、それぞれ役割を持った部隊の隊長である。

エヴァは魔導。

フレイアは白兵。

シルフィードは医療。

ラグは特攻。

ペルは防衛。

ダグラスは援助。

チューダムは、その全てを従える。

部隊は重要な時以外結成されないし、平時は皆好きやっている。

だから、今回の百年に一度の祭りに際して、結成されたのだ。

彼らはその代表である。

「さて、今日集まってもらったのには重大な報告があるからだ」

早速話を切り出す。周りの空気が張り詰め、俺の話を聞く体勢になった。

「このまま行けば、後一週間で『枷』を壊せる」

「! ! ぞ、それじゃあ」

「ああ、ようやく俺達は動き出すことができる」

その言葉を聴いて、皆の顔に笑顔が浮かんだ。

皆その言葉が何を意味しているのか、理解しているからだ。

その心の内は恐らく皆一緒のはずだ。

『ああ、ようやくあの子に会えるのか』と。

俺だって、そうだ。

今回の祭りは全てあの子と親友のためにやるのだから。

「百年だ」

俺の言葉が皆の耳朶をうったのか、冷水を浴びせられたかのように、静かになった。

———百年

この意味するところは大きい。

「イーグルハークからの情報だと、あの子は今回の戦争にも利用されているようだな、チューダム」

「ああ。先のオスティア戦線で、彼女の存在が確認された。精霊砲を無効化したのも彼女だ」

似たような報告は何度も聞いてきた。

俺が馬鹿をやったせいで、あの子を助けたくても、助けられない状況を生んでしまった。

俺たちに出来たことは、歯を食いしばり、耐えることだけだった。

「だが、それもこれまでだ」

背後に掲げられた黒と白の樹の紋章の元に。

「雌伏のときは終わった！これより我らは『世界』に喧嘩を売る！
！あの子を・・・アスナを迎えにいくぞッ！！」

状況を開始する！！

「「「「はっ「「「「」

この日、フアミリア和を為す樹が表舞台に現れた。

組織の始動（後書き）

短いですが、誰か感想をください・・・。

幸せの残滓（前書き）

少し、詰め込みすぎた気がしないでもない。
小説って、描くの難しいorz・・・

文才が欲しい。

皆、オラに文才を分けてくれ！！
というわけで、どうぞ。

幸せの残滓

夢を見ている。

百年前の夢だ。

『がはは、俺の娘を助けてくれたことに感謝する！！おい、野郎共！！連中に生まれてきたことを後悔させてやれ！！』

親友がいたんだ。豪快で豪胆で破天荒な奴だった。覇気も腕っ節もあった。剣の腕だけなら、全力の俺と同じくらいだ。魔法はてんでダメダメだったがな。

夢を見ている。

百年前の夢だ。

『おやじ』

親友には娘がいたんだ。一人娘だ。親友に似て、とても元気で明るい子だった。見た目は全然似てなかったけどな。よく俺の後ろを、ちよこちよこと着いて来たもんだ。親友には会う度に嫉妬光線向けられた。俺の嫁になるなんて宣言された時は、奴の手で城が半壊したのは、いい思い出だ。

夢を見ている。

百年前の夢だ。

本当に懐かしくて、楽しくて、長い生の中、最も充実した時だった。でも、それはすでに去りし思い出。

分かっている、こんなのは所詮過去の残滓。

それでも、この空しくも暖かい記憶の波に身を任せていいと思うんだ……。

お前なら、過去に捕らわれている俺を軟弱者って言うんだろう？
なあ、親友……

目を開けると、日に真っ赤に焼かれた空が視界に入った。王宮の庭園の芝生の心地よさが俺は夢の世界に導かれていたらしい。さつきまで嫌味なまでに清々しい青空が広がっていたというのに。

「何だ、ようやく起きたのか」
「うげっ」

とりあえず、身体に疲れが溜まっていたので、その場で身体を伸ばしていたら、声を掛けられた。そこには立派な髭を蓄えたガタイのいい男が口を吊り上げて俺を見下ろしていた。

あまりにも不快な事象に、おもわず最悪な気分を極限にまで込めた悲鳴を漏らしてしまった。

「うげって、お前なあ」

「いやいや、正常な反応だとも。目が覚めたら濃い髭の生えたおっさん。これで『うほっ、いい男』なんて反応されて嬉しいか？」

「そんな反応したら、貴様を真っ二つに叩っ斬るな」

「だろ？だから、俺的にはお前じゃなくてレイアかムーちゃんを最初に視界に入れたかったわけだ」

「ああ、確かに二人は美人だな。ま、俺の嫁には適わないがな!!」
「言ってる」

惚気て、豪快に笑い出す金髪の男。いや俺の嫁さんたちのほうが最高だ、と反論してもいいだが、この議論はいつも平行線になるので黙っておく。どちらかが大人にならなければならないのだ。そして、俺はこいつより遥かに長生きしている大人だ。

とりあえず、この体勢だと話にくいので身体を起こすことにする。だが、それは男によって止められた。

「おっと、身体は起こすのは少し待ってくれ。うちの姫さんが落ちちまうからな」

「ん?」

男がこちらに指をさしたので、顔を動かして確認する。見ると、四歳くらいの赤毛の少女が、俺のお腹を枕にして寝ていた。うん、軽すぎて気付かなかったわ。

「あらら。これじゃあ、動けないな」

「けっ、随分となつかれてらっしゃいますね。その子の父親としては随分と羨ましい話ですわ」

「はっはっは。拗ねるな拗ねるな。まあ、お前より俺の父性が勝っているということだな」

「ああ!? 俺の何処がお前に劣っているってんだよ!!!?」

「ははは、仕事が忙しくて娘に構ってやれない父親が何を言いますか。俺だったらどんなに忙しくても子供たちをおろそかにしないもんね!!!」

そういわれて、敗者のポーズを取る男。しかし、今度はこちらが反撃されてしまった。

「変態風情にそんなこと言われるとは・・・」

「誰が変態じゃあ!!!?」

地面に手をつく男から聞き捨てならない単語が聞こえてきた。

「はっ、どの口がそんなこと言うんだか。なあ、『何あの紅い布マジ変態みたいなんですけど』殿?」

「それはテメエが流した二つ名だろうが!!!それまでは何の問題もなく街に溶け込めてたのに!!!」

それを思い出したら、腹のそこからふつふつと怒りが沸きあがってきた。そう、こいつが俺みたいな格好をする奴は変態みたいなことを、部下を駆使して率先して流しやがったから、俺は街で肩身狭い思いをする羽目につ・・・!!

「大体テメエこそロリコンの癖に、なにそんな『ああ、変態怖い怖い』みたいな顔してるんだ!?!」

「ロリコンじゃねえし!」

「嫁さんとかお前、見た目十二歳くらいじゃねえか!!!」

「ああ見えて俺より年上だ!!!仮に年下でも俺みたいな高貴な身分だと年の差結婚なんてザラだ!!!そんなおかしなことじゃないね!」

「どっちにしても合法ロリということですね、分かります」

「人聞きの悪いことってんじゃねえよ!?!やんのか!!!」

「はっ、受けてやるよ。テメエが俺に勝てるはずがないけどな!!!」

剣呑な雰囲気 が漂いだした。しかし――――

「うゝ・・・うるちゃい」

舌足らず声が割り込んで、それを止めたのだった。それは、寝ていた少女であった。目をこすりながら、半眼で俺たちを睨んだあと、再び寝息を立てた。今度は俺の上で小さな体軀を丸めながら。そんな小動物のような仕草を見たら、癒されたし、毒気も抜けた。

「・・・あゝ、————。やっぱ喧嘩はお預けだ」
「・・・」

娘を溺愛しているこいつなら、一も二もなく即答するとおもったが、予想に反して返事はなかった。
どうしたのかと思って、顔を向けると。

「・・・ぐふうっ・・・こ、この、この俺様がこんな所で・・・」

鼻血を垂らしながら、悶えていた。

「・・・変態」

「鼻から出ているこの赤い液体は父性だ。俺くらいの王様になると、父性は鼻から出る」

「いや、どういいつくろっても変態にしか見えねえから」

「やかましい!!」

そういつて襲い掛かってくる親友。

それを楽しそうに、受け立つ俺。

結局起きて、馬鹿二人に怒りをぶつける少女。

でも、俺は分かっている。

これは幸せな夢じゃない。

ただの——

そこで気付いた。

俺はまだ目が覚めちゃいなかった。

紅い闇で覆われている世界

気持悪くなる黒い波動を放ち続ける太陽

全てを飲み込むかのように蠢く泥

それら全ての中心に位置する寂れた公園

元の世界の残骸は既になく、公園を中心に泥が海の如く広がっているだけだった。

汚染された心象風景。

「ああ、何だ、いつものことか」

一度落ち着けば、後は大丈夫だ。

——親友は死んだ・・・

——その娘も不幸になった・・・

黙れ

——でも、それはあいつのせいだったか？

うるせえよ。

——違うだろう。お前も分かっているはずだ。

黙れって言うてんだろが！！

——彼らに厄災を運んだのは他ならぬ・・・

ダマレエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！

——おまえ自身だと

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・んなの、言われなくても分かってるよ・・・・・・・・」

弱々しく呟くことしかできなかった・・・。

しばらくして、ようやく、気分が落ち着いた俺は公園のベンチに座っていた。

何故か光っている木が優しくベンチを照らす。

この光が届いている範囲だけ、瘴気がなく、澄んでいた。

この場にいるから、俺は狂わずに済む。

悪意の量が、親衛隊の手に余った時もこのおかげで助かった。

この公園は、元の世界にあった場所、スーさんが生息していた公園である。

泥が海のように波打っているのは、結構シニールである。

この心象世界に来るときは、いつも傷を抉られる。

見たくない、思い出したくないものを強制的に思い出させられるから。

あの日から毎日見る光景。

飽きることなく見せ付けられる悪夢の後に来る世界。

この数百年見慣れた世界。

公園のベンチに座りながら、じつくりと世界を見る。

ただ、何の変化もなかったかと聞かれれば、首を横に振ることになる。

空を見上げると、紅い闇の中、異彩放つ青白い魔法陣が浮かんでいた。

それは、この世界の隅々まで照らしていた。

空を埋め尽くす程広大に展開され、様々な意味をなす文字の羅列はしかし、ただ一つの役割を果たすだけのものであった。

———呪い

そう、これは呪いだ。

俺にあることを禁ずるための呪い。

本来であれば如何なる呪いも『この世全ての悪』に勝ることなどありえず、逆に取り込まれるはずであった。

だが、現実として、これは心底忌々しく、俺の行動をしぼる。とある存在によってもたらされた枷。

様々な思いが胸をよぎるが、これに感謝していないわけでもない。

これがあったから、俺は頭を冷やす時間を得ることが出来た。

俺の罪と向き合うことが出来たのだ。

同時に、憎悪もまた積もり積もっていった。

これを刻んでいった相手にではない。

途方もない、悔やんでも悔やみきれないことを引き起こしてしまった、俺自身に。

これを見ると、自身の罪に向き合わされてきた。

自身の罪を忘れることを許されなかった。

だが、それも今日までだ。

「侵食しろ」

その一言と共に、大地に満遍なく広がっていた泥は脈動し、空を埋め尽くす術式に襲い掛かった。

この泥は当然ながらただの泥ではない。

良く見ると、苦悶の表情が浮かんでいる。

この泥は、あの日から俺が溜めに溜めた悪意の念、世界に漂っていた邪念そのものだ。

術式にたどり着いた泥は、瞬時に侵食していった。

光が侵されていく。

光が穢されていく。

世界が暗闇に染められていく

世界が元に戻っていく。

まるで触手のように伸びて、魔法陣に張り付いていく黒い泥。

徐々に黒く染み、腐敗し、朽ちていく魔法陣。

そしてついに、端から崩壊した。

まるで、蚊取り線香の灰のように、ボロボロと・・・

————まるで濁りきった雪のようであった。

「・・・・・・これでようやく、あの子を迎えにいける」

脳裏によぎったのは、オッドアイを煌かせ、いつも天使のような笑顔を浮かべていたツインテールの女の子。

あれから百年も経っているのだ。その間ずっとあの子を待たせている。いや、あの子はそれどころじゃなかっただろう。ずっと酷いことをされ続けていた。ずっと生き地獄を味わってきた。

だから、あの子には幸せになる権利がある！！

「さあ、始めよう。祭りの時間だ」

闇の世界に紅く浮き上がる悪魔の刻印。

宣言した言葉は、むなく闇に消えて、白く輝く木だけが、それを受け止めた。

Side 三人称

「馬鹿てめっ、やめろ！！」

「がははは！！やなこった。ふむ、ここはやはり伝統的に“肉”の字で攻めるべきか、いやいや、髭も捨て難い。・・・間を取って両方書くか」

「ラカン！！お前俺が動けるようになったら覚えてろよ！！」

「もう忘れた」

「フフフ、二人とも元気があってよろしいですね」

館の中から悲痛な声と楽しげな声が聞こえてきた。戦争の真っ只中だというのに、随分と緊張感のないことだ。

和樹達との激闘から二週間が過ぎ、筋肉痛の脅威から脱出したものの、ナギを待っていたのは強烈な虚脱感であった。

全身に力を込めようにも、まるで力の入れ方を忘れてしまったかのように、ピクリとも動かせない。つまり、ベッドで寝たきりの状態が続いている。

幸いここは魔法球の中なので、外ではまだ一日も経過していない。だからじっくり休憩を取る時間もある上に、何かあれば、外で見張りをしているゼクトと詠春からの合図がくる。

特に焦る必要は何処にもないので、のんびりとしたものだが、今、ナギは絶体絶命の状況に陥っている。

というのも、彼のいるベッドの傍らにはなんと、ミイラのように全身に包帯を大量に巻いたラカンの姿があり、その彼の手には、マジックがあった。

身動きの取れないナギ
マジックを持つラカン

後はもう分かるな？

そう、ラカンはナギが動けないことをいいことに、嫌がらせの限りを尽くそうというのだ！！

最初は額に肉を書き、口元に泥棒髭を書いただけだったが、動けない獲物をいたぶるのにはまってしまったのか、ラカンの悪ノリは次第にエスカレートしていった。

その脇でアルは、デジタルカメラならぬマジカルカメラをこっそりと構えていた。後でナギをいじるのに用いるのだらう。彼は彼でいい性格をしている。

ラカンが手を止めた時には、美少年の面影はなく、間抜けな顔に化粧された変わり果てた姿があった。否、むしろナギの容姿が整って

いる分、それがより滑稽さを生み出す事態を引き起こしている。

「それにしても、何だったんだろうな」

「あん？何がだよ？」

満足したラカンが笑い転げている中、身体を動かせないため、代わりにアルビレオに顔を拭いてもらっているナギが、そんなことを言い出した。

「今更なんだけどよく、ちょっと前に会った姫子ちゃんに面と向って『違う』って言われたんだよ。違うってなんだろうな？」

動けない身としては、暇で仕方ないんだろう。本当に今更といった感じでそんなことを二人に問いかけた。暇つぶしとして、話のネタにしたいんだろう。

「ああ、あの時のことですか」

アルビレオも思い出したようだ。

「姫子ちゃんてのは、黄昏の姫御子のことか？」

聞きなれない単語に聞き返すラカン。

「ああ、あだ名だ。本名は長かったからな。いいだろ？」

「まんま過ぎて微妙」

ナギがえっへんと胸を張るが、ラカンに一刀両断された。これで動ければ文句の一つでも言って、そこから乱闘騒ぎに繋がるのだろうが、今のナギは文字通り手も足も出ない。よって、ぐっと堪えるし

かないナギ。

「だったら、もし姫子ちゃんに会っても姫子ちゃんって呼ぶなよ！」

「はいはい」

子供みたいなことを言うナギに、どうでもいいといった様子で返事を返すラカン。

「ふむ・・・恐らく、助けに来たのがナギだったのがショックだったのではないのでしょうか？」

「・・・どういう意味だよ？」

アルビレオが軌道修正をしたかと思えば、話は頓珍漢な方向へ向いそうな雰囲気であった。

流石にピキッと青筋を浮かべるナギ。誰だって、けなされて嬉しいはずがない。

「黄昏の姫御子と呼ばれてはいても、その容姿は恐ろしく少女そのもの。如何に年齢不詳であっても、精神はある程度肉体に引っ張られます。そして、あの年頃の少女は等しく、白馬の王子様が迎えに来てくれると夢見る乙女のはず。しかし、現実に見れたのはナギのようなボロ絹纏った子供。あなたは少女の夢を無残にも引き裂いた上に、少女の心に傷を刻みつけたんです！！最低です、ナギ！！」

「いや、そんな事言われても・・・その、困る」

私怒ってますといった感じでナギを指差すアルビレオに、当人はどんな反応すればいいのか。ナギとアルビレオの距離が遠のいた。勿論心の距離的な意味で。

「まあアルの戯言は置いといてだ、ラカンはどう思う？」

「おや、酷いですね。ちょっとした冗談でしたのに」

「……置いといて」

「うむ、まああれじゃね？純粹にお前が待ち人とは違ったんだろ」

「お前までそんなこというのか……」

「ちよつと待て、変態^{それ}と一緒にするんじゃないええ!!」

「おやおや、こちらもちらでまた……。私はそんなものではないです。仮に変態だとしても、変態という名の紳士です」

「で、どう違うんだ？」

「俺のは一応根拠があんだよ。噂程度でしかないがな」

ナギとラカンは完全にアルの存在をスルーすることにした。そんな二人をアルビレオはおやおや、といった感じで傍観する。

「創造主の血を引くといわれるオスティアの王族には度々、不思議な力を持って生まれる子供がいるのは知ってんだろ？」

「ああ、姫子ちゃんもその一人だ。だから、戦争に担ぎ出されたわけだし」

ナギは不機嫌そうに言った。

ナギは先のオスティアを護る戦いで、黄昏の姫御子——アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアと顔を合わせていた。

そして、それが気に食わなかった。

オスティアは歴史と伝統しかない小国である。

そんなことはナギだって、頭では理解している。

だが、心では理解できない。

アルビレオみたいに、外見と年齢が一致していないかもしれない。それでも年端も行かない少女を戦場に出し、拳句の果てに生贄にす

るような戦い方は絶対に間違っている。

それゆえに、ナギは少女に、アスナに負担を掛けぬよう、破竹の勢いで敵を殲滅した。

まあ、その時ちよつとしたいざこざがあつて、今のように辺境に左遷させられたわけだが。

「そう、姫さんには力がある。それだけに大切にされているわけだ」
「大切にされているだど!? ふざけたことを抜かしてるんじゃないやねえよ!! お前はあの光景を見ていないから・・・」

「お前の言わんとしていることは分かるが、事実だ。最も、それは道具のような扱いだろうがな。連中にとって、姫さんは兵器でしかなく、姫さんの世話は道具の手入れと同意義でしかない。誰から見ても、酷い扱いだ。まあ、理由は分かるだろ? 彼女は忌み嫌われているが、持っている力は手放すには惜しいから、今も生かされているって訳だ。そんな環境にいれば、誰だって気が滅入るだろうし、姫さんも例外じゃないはずだ。噂でも、黄昏の姫御子は感情が抜け落ちた人形のようなだって言われているくれえだし」
「そうしたのは、周りの屑どもじゃねえか!!!」

もう一度いうが、ナギは彼女と会っている。

そして、実際会ったときの印象はまさに噂の通りだった。

彼女はまるで人形のように無表情で、無感情であつた。名前を本人の口から聞けただけでも奇跡だと思つたくらいだ。

「落ち着けつて、まだ本題に入つてねえだろ? 今のはただの前置きだ」

そこで、話が戻る。

「噂には続きがある。そんな姫さんにも、笑う時があるんだよ。口元が綻ぶ程度らしいが。それが、夕方」

「夕方？」

「何でも、その時間帯になると誰が見ても、姫さんの雰囲気やわらいでるのが分かるらしい。それで、いつも夕日を眺めているんだ。ことの真偽は不明だが、火のない所に煙はたたないっていうし、案外本当のことかも知れねえ」

「それと、お前のいう根拠に何の関係があるんだよ？」

「夕方に姫さんが感情を出す理由さ。これは数あるうちの一説だが、最も有力な説だといわれている。・・・男さ」

「・・・やっぱお前って」

「だから最後まで聞かんか！！」

あらぬ疑いを掛けられそうになって、怒鳴るラカン。
彼自身も自分がある種の変態と自覚しているが、アルへんたいと同一視されることだけは許しがたいのだろう。

「姫さんペンダントしてなかったか？」

「ペンダント？」

ナギはアルビレオを見るが、彼は顔を横に振っていた。
アルビレオは知らないようだ。

では自分は、と記憶を探る。

ペンダント、ペンダント、ペンダント・・・..
ピーン！！

「してた！！白黒の樹のペンダント！！」

「恐らくそれだな」

姫さんがいつもしているペンダントは、いつからあるのかも分から

ない代物らしい。

ただ、気が付いたらそこにあっただらしく、とんでもない魔力を持っているって話だ。

で、それを詳しく調べようとした奴がいて、それを取りあげてしまったらしい。

そしたら、姫子ちゃんが怒ってそいつを消してしまったのだという。その後、そいつを見た奴はいないという。

しかも、その胸にはペンダントが戻っていた・・・。

「コワッ!!」

「まあ、実際噂だから事の真偽は不明だ。一種の怪談話だな」

「それ、私も知っていますよ。何でも消えてしまったのは本当らしいです」

「マジか」

「ええ、その他にも、『これは私のだからとっちゃダメエ!! プンブン』などと怒りながら、グルグルパンチをしていたとか、『それはもう一人の私を押さえ込む封印!! うう、ひ、左腕が・・・皆私から離れて!!』などと叫んで、近くの人を消してしまったという逸話も残っていますよ。また、あれは魔法少女になるための王族の道具で、古くからのしきたりで、王女が、日夜人々の平穩のために、世界を支配せんとする悪と戦っているなどという話も聞きます」

「妄想乙」

「厨二病乙」

「いいえ、私はロリコンです。二人とも失礼ですね」

いや、お前が変態的に変態なのがいけないんだって。そう思った二人はきつと悪くない。

「・・・話を戻すぞ?」

「おお」

「姫さんは夕方になると感情が外に出るっていうのはさっき言った
だろ？そのときに、そのペンダントを手でぶら下げて眺めている時
があるらしいんだ。それで、顔がにニヤニヤするんだそうだ」

「・・・ニヤニヤ？」

「ああ、ニヤニヤだ。壮絶なまでにニヤニヤするそうだ。で、姫さ
んは少女といっても女、そして、女が物を見てそういう顔をする
きは大抵」

「男・・・ってわけか？つまり、そのペンダントは男から貰って、
姫子ちゃんはそのくれた人を待っている・・・と？」

「そういうことだ」

「でもよ、姫子ちゃんがどうして、ペンダントを持っているのか分
かってないんだろ。色々矛盾してね？」

「まあな。だから、こんなのは所詮噂にしかすぎねえんだよ。いい
暇つぶしになっただろ？」

随分と真剣に討論（一部を除く）していたが、当初の目的はただの
暇つぶしだったのを、ナギは思い出した。

まあ、噂なんてそんなものかと結論を出す。

結局、『違う』の意味は分からなかったが、分かったこともある。

「だけど、姫子ちゃんに感情がないわけではないんだろ？だったら、
いつか連れ出して、いっぱい楽しいところに連れて行って、姫子ち
ゃんを笑わせようぜ！！」

「それは、とてもいいですね。幼女は愛でるもの。私も賛成です。
そうするには、色々問題は山積みですけどね」

「がはは、だったら、俺も一枚かませろよ。頭脳労働はやらないが、
暴れることは出来るぜ！それに、面白そうだしな！！」

そして、三人は笑いあう。

その裏で、アルビレオは一人考え込んでいた。

（白と黒の樹は、和^{ファミリア}を為す樹のシンボル。それが、黄昏の姫御子の手にあるのは、一体どういうことなのでしょう？やはり、何かあるのでしょうか・・・）

背中では、アルが何事かをつぶやいていた。

幸せの残滓（後書き）

こんな感じ。

感想を求む。

矛盾、批判、大歓迎

でも、作者はガラスのハートなので、オブラートに包んで欲しいかも・・・

準備を疎かにしてはいけない。(前書き)

短い

低クオリティ

話進まない

自分のダメダメさに絶望した

ではどうぞ・・・

準備を疎かにしてはいけない。

Side ???

『知ってるか？この時間帯のことを黄昏時って言うんだぜ？これは
『誰そ彼』……つまり人の顔が見えないくらい薄暗い夕方に『お
前誰？』って言ったのが語源だな』

『そうなの？』

『そうなの』

記憶の海……

『ちなみに、この時間帯は、逢魔ヶ時、あるいは大禍時とも言って、俺みたいな悪くい奴らと遭遇しやすくなる時間帯なんだ。だから、良い子は家に帰る時間だぜい。後者は何か凄く不吉って意味だ。まあ……何か不吉なんだろうな』

『おやじはわるいひとじゃないよ！』

『ははは、嬉しいことってくれるじゃないの。ほれ、頭を撫でてやる！！』

『きゃはは、おやじ、くすぐりたい！』

大きな手のぬくもり……

『でもな、俺はこの黄昏時が好きなんだ。だって、一瞬とはいえ光と闇が交わるからな。え？朝はって？あれはダメだ。朝早く起きなきゃ見れんから却下』

『あさはだめかー』

『朝はダメだー』

優しい笑顔・・・

『で、この時の空って、アスナの髪と同じ色だろ？』

『うん』

『つまり、アスナは光と闇を繋ぐ存在なんだよ!!』

『な、なんだってー!!』

『ふはは、驚いたかぁ!!だが、まだ驚くのは早い、早すぎるう！

！実はこの布の色は————』

『な、なんだってえー!!』

『いや、まだ何も言っていないし』

『えへへ』

『ま、いっか!』

『うん、ま、いいんだよ!』

『Greenだよお!!』

『え?』

『え?』

『なにそれ怖い』

『そのはんのうがこわいよ』

馬鹿みたい・・・

だけど・・・なんか暖かいな・・・

S i d e o u t

『枷』が外れてから数日が経過した。

精神世界では『さあ祭りの時間だ』などと格好つけてみたものの、何事にも準備期間というものが必要なわけで。

つまりは、本番だけが祭りではない、準備もひっくるめて祭りなのであると俺は言いたいのだ。

そんなわけで、今俺達はその準備に追われて、てんてこ舞いなのである。

で、俺はというと

「故レーベンスシュルトとタリンバンサリンでの作業は完了。残りの四箇所はまだではあるが、経過は順調。うーん、さすがはエヴァとラグか。長女と長男の力を見せ付けたな」

優雅にコーヒーを飲みながら、報告書を読んでいた。

だって、準備は子供たちで十分足りてるし、俺がしゃばってもねえ。

べ、別に暇ってわけじゃないんだからね！

・・・・・・いい年したおっさんがツンデレの真似をするべきではなかったな。吐き気が止まらない。

それとはともかくとして、本当に暇というわけではない。俺には、最も大切な必要不可欠な仕事があるのだ。

それに、報告書を読むのも仕事である。

とりあえず今のところ『完全なる世界』には感づかれていないだろう。

恐らく『枷』が外れたことは向こうに伝わっているだろう。

だが、動いたことは分かっても、俺達がどこで何をしているのか分らないはずだ。

いや、でもあいっら妙なところで鋭いしなあ。
調子にのって大々的に人を動かしまくったし。

そう考えると、不安が湧き上がってくる。何だかお腹も痛くなってきたし……。

こういう不安は考え出すとキリが無いのは分かっているのだが、それでもこういうのはどんなに長生きしていても慣れるものではない。場所は辺境だし、今は戦争でそんな場所を警戒する余裕なんて無いと信じたい。

念のために色々と偽装工作を施しているから、大丈夫だとは思っているけど……。

……胃薬って一種の麻薬なのかも知れん。依存性の代わりに胃痛で手放せないって笑えないけど。

まあ考えても仕方がないか。
そろそろ仕事を再開しよう。

だが――

「親父、のびるアーム君35式はどこにあるんだ？」

「すまん、さっきチビ共に持って行かした」

「入れ違いだったか。あんがと、仕事に戻るわ」

「おゝ頑張れよ。さて、やるか」

「おやっさん、あれって何処にある？」

「あれじゃあ分からん」

「あれだよ、あれ」

「……アレアレ詐欺か？」

「違うよ！ってか何、アレアレ詐欺って！？ってそんなことはどうでもよくて、あれはあれだって。ほら、何かでかくて、先が尖って

て、回転する、でかい乗り物だって」

「ガリガリ君のことか？」

「そう、それ！その44式が欲しいんだけど」

「それだったら、倉庫5にあるから探してみな」

「おっけ。じゃあ、やったるでえ！！」

「行ったか、さて、じゃあ仕事を・・・」

「お父さん（ry」

以下エンドレス。

無限ループってこわくね？少し違うか。

ていうか、何故一気に人が来たし。何故俺が仕事をしようとしたときに限って来客が多くなる。

つーかこういうのはモータテイルに聞くべき質問だろう。何故俺に来る。

これは俺に仕事をさせたくないという神様の啓示か何か？でもまあ何事にも終わりはくるものだ。

しばらくして、来訪者はいなくなった。

若干凝り固まった身体をストレッチでほぐす。

「よし、仕事し「カズキ、入りますよ」」

・・・ふっ、時間差攻撃とはやるな。

扉をノックされたことで、それはふいになってしまったのだった。

声からしてイーグルハークだ。

というか、この屋敷で扉をノックなんてする稀有な存在は彼女くらいしかない。

他は大抵勝手に入ってきたり、蹴破ったりと扉の存在意義をなくしている。

「どうぞー」

入ってきたのは、やはりイーグルハークだった。猛禽類に似た鳥だった頃の、他者を威圧する鋭い金色の目いまだ健在。

背中に羽がついているせいで、身体が大きく見える。そのせいで威圧感は更に増していた。

目を見張るような美人ではあるが、初対面であれば怖いイメージが先行してしまうであろう。

彼女自身は自然体であり、温厚な性格であるのに、第一印象が怖い人なので、見ていて可哀想だったりする。

本人は全く気にしてないけど。

「新しい報告書です。といってもこちらは戦場のものですけど」

「ありがとう」

そんな彼女の仕事は能力を活かした情報収集。

彼女の持つ固有能力は千里眼と順風耳である。

千里眼は言うに及ばず、順風耳はいわゆる地獄耳である。遙か先のことで、拾えるのである。

その二つの力を使い、あらゆる場所を駆け巡って得た膨大な情報を、分別し、簡潔にまとめてこうして報告してくれるのである。大助かりである。

最近まで行動が制限されていたが、今はどこでも駆け巡ることが出来るので、この戦争の経過も集めてもらっている。

今回の祭りは戦争とタイミングが重なっている。

であるならば、必然、情報というのは大事である。

情報があれば、万事問題なく対処できるからだ。

渡された報告書をペラペラとめくる。

「お、ナギ達は前線に戻ったのか」

「はい。前線復帰後、連合は連戦連勝の毎日だそうです」

前線に戻ったナギ達紅き翼は八面六臂の大活躍をしているらしい。特にナギは『連合の赤毛の悪魔』として帝国側に恐れられているようだ。

あいつの髪が赤い理由は敵の返り血で真っ赤に染まったからなんて噂もあるくらいだし。

更に面白いことに、ジャック・ラカンの姿も見られているらしい。昨日の敵は今日の友とかそんなノリだろうか。

「あいつら見所あったし。特にナギなんかまだまだ成長するだろうね、もしかしたら俺より強くなるかも」

「随分と気に入ったようですね。でも人間があなたを超えられるとは到底思えませんけど」

「それは違うな、イーグルハーク」

報告書から目を離し、顔を上げる。

「人間だから可能なんだよ」

「・・・あなたはたまによく分からないことをいいますね」

「まあ、それが俺だからな。報告ありがとう。ゆっくり休んでから、また情報収集に移ってくれ」

「分かりました。では失礼します」

律儀に一礼して、部屋を出て行ったのを確認して、再び報告書に目を落とす。

ペラペラとめくっていると、何とも気になる情報が眼に入った。

（大規模転移魔法による軍の派遣？）

どうやら、帝国側の次の作戦のようだ。

さすがイーグルハーク。こういった極秘情報をいとも容易くゲットしてくるとは。

作戦内容は簡単に言えば、転移魔法で軍を送り、グレートブリッジを落とす。

それだけだ。ふむふむと思う。発想は悪くはない。

大要塞グレートブリッジを陥落出来れば、拠点を得ることができる上に、地理的な条件でも有利に立てる。

連合の盟主の喉下に刃物を突きつけたも同然な位置にあるからだ。

いわば王手。チェックメイト

また、聖地オスティアと連合を分断できる。そうなれば、容易に聖地奪還を果たせるだろう。

グレートブリッジはそれだけ重要な意味を持つ場所なのだ。

ただし、それを実行する足る魔法を作れたのであれば、の話だが。転移魔法というのは実は言うほど簡単な魔法ではない。

いや、高位の魔法使いにとってはそうでもないのだけど、それは自分一人や少ない質量に対して使う場合に限った話である。

転移させる質量が多くなればなるほど、当然必要魔力は増えていき、魔法の制御も難しくなる。

つまり質量と成功率は反比例しているのだ。

ましてや今回は帝国軍である。その困難さが自ずと見えてくるであろう。

その術式が次のページに乗っていたのだが、思わず呻いてしまった。

だが、その余りにも酷いそれを見てしまったのだから、仕方がないことだと思う。

まず、術式の中に無駄なものがたくさん入っていて、効率が悪くなっている。

そのせいで、発動させるのに必要な魔力量に無駄が生じてしまっていた。

しかも、明らかに失敗する可能性の方が高く、下手すれば暴走ではすまない大災害が生じるはずだ。

それ他にも目も当てられないような背筋も凍る可能性を秘めた術式だった。

これはもう試作だとかそんなちやちなレベルじゃない。

こんなの使うくらいなら、もう少し時間かけてでも改善しろと言いたい。

「これはいよいよ帝国も引き下がれなくなってきたか」

毎日のようにもたらされる帝国の連敗。

今、流れは確実に連合側に向いている。

帝国側としては、その流れを断ち切りたいというわけだ。

だけど、よくこんな博打要素の高い作戦を帝国上層部が許可したものだ。まさか、そんな危険な代物だと考えていないなんてことはないだろう。

下手すれば帝国が滅亡する諸刃の剣だというのに、思い切ったことをするなあ。

とはいえ、勝手にやってくれというのが正直な感想である。

大要塞があるあたりには全く持って用がないので、俺達が巻き込まれる心配など皆無なのだ。若干帝国近辺には用があるけど、うちの子供達だったら何の問題も無く対処するだろう。

つと、もうこんな時間か。

「そろそろ俺の仕事をしないとな。いつまでも情報にかまけている場合じゃない」「カズキ」・・・いきなり現れないでくれ、モーターテイル。寿命が縮むだろ。ていうか何なの？俺に仕事させたくないの？いくら報告書を読みふけていたからって、これは酷い」

「そんな事は置いておいて、ラジャーさんが来られました」

「・・・何もこんな忙しい時に来ないでも。もしかして、竜の国で何かあったのか？」

「さあ。でも恐らくは」

「・・・・・・何もこんな忙しい時に来なくても」

「大事なことなので二回言いましたか？」

「まあそんなところだ。とはいえ、会わんわけにもいかんだろう」

何かうまくいきすぎているとは思ってたよ？嫌な予感もしていたとも。

深くため息をつき、そのまま仕事に没頭して現実逃避をする欲求に駆られる。

それをぐっと抑え、客人を待たせている応接間へと向う。

「まだ、厄介ごとの種とは決まってないし、話を聞いてからでも遅くない。レイアとムーちゃんを呼んできてくれ、それともしもの時の仕事の引継ぎはエヴァに、補佐は・・・ノーブルホースにやらせればいいのか。必要なら、俺の研究室にある資料は自由にしていいいから」

「分かりました」

「じゃ、逝ってくる」

準備を疎かにしてはいけない。(後書き)

批判、矛盾指摘、評価、感想、大歓迎。

ただし、出来るならばオブラートは三枚ほど包んでください。

作者の黒鉛並の強度を誇る心がブロークンしてしまいますので。

幕間5 前編 信号姉妹（前書き）

長くなったんで前後に分けました
キャラが安定しないなあと思う今日この頃。
てなわけでどうぞ！

＊順番入れ替えました。

幕間5 前編 信号姉妹

Side エヴァンジェリン

用事を終え、部隊を引き連れて帰ると、モーターテイルから、新たな仕事を託された。

最初は面倒くさいと思ったが、詳しい話を聞いた後、私は二つ返事で承した。

「お父様は確かに資料を自由に使っていたと言ったんだな？」

「ええ、言っていました」

「ククク・・・そうか、ならよし。私の名において引き受けよう」

「ありがとうございます」

なるほど、私は仕事という名目の下、自由に使っていたわけだ。くくく・・・これはつまりそういうことか。念をおしたことで確信した。

「なあ御主人、何もない所で笑うのは正直気持ち悪いぜ」

「黙れ、茶々ゼロ。貴様は隅っこで刃物でも砥いでいろ」

「そりゃねーぜ、御主人。人が折角注意してやったのによ」

「フンッ」

私の隣を歩く口を尖らせている人形は茶々ゼロ、私の従者だ。刃物で敵を切り刻むのが好きなキリングドールである。今でこそこんな流暢な言葉を話し、感情を表現できるようになったが、お父様に会う前までは随分と人形らしさが残っていた。お父様が『アクア・ウィタエ生命の水』という霊薬を注入したら、人間味が現れたのだ。

「で、何で笑ってたんだよ」

「秘密だ」

そりゃねーぜと呟く従者をから意識を逸らし、資料に思いを馳せる。

お父様の資料は、神秘の宝庫である。膨大なまでの情報がそこに記されている。

当然だ。お父様が初めて行なった実験のものから残っているのだから。

お父様の手は、西洋魔術だけに限らず多方面に及んでいた。錬金術、占星術、陰陽術、魔法薬学、ロストマジック、刻印術、その他諸々、いわば資料はお父様の知恵の結晶なのだ。

そして、その一つ一つを暇という理由だけで極められるお父様は正直化け物だ。

私ですら、この六百年近い生の中でも極めることが出来ているのは魔法と柔術、後は人形使いとしての技能といったところか。そのほかは、お父様の足元にも及ばない。

本人は与えられた力をフル活用した結果に過ぎないと謙遜していたがな。

そんな資料は当然、私たち魔法使いにとっては垂涎ものである。昔一度だけその一部を見せてもらったことがあるが、その時は鳥肌が立った。あの叡智の一部でもいいから手に入れたと思うほどに。

だが、勘違いするなよ。

私はそんな事はしない。何故ならそれでは意味がないからだ。私には夢がある。

そして、そのためにはせこい真似をするのは言語道断。たとえお父

様のものでも、他人の成果など奪ったところで私の誇りにはなりえないのだ。自分の力でつかみ取ってこそ、私に相応しいのである。

今のままずっと親と娘の関係ではいけない。だから、知らしめなければならぬ。私はいつまでも護られるだけの存在ではないのだと。あなたの隣こそが相応しいのだと！

そう私の夢は、あ、あの人のお・・・お・・・お嫁さんになることだ！！

今はお母様たちが先に立っているが、私もいずれはあの中に・・・えへへ・・・

「御主人、だから気持悪いって」

「やかましい、貴様は砥いだ刃物でトマトでも刻んでろ」

「そりゃねーぜ」

少しトリップしていたようだ。私らしくない笑みを浮かべてしまった。いや、私も恋する乙女の一人というわけか。・・・ふっ、悪くないな。

そういうわけで、今回必要なもの以外は見るつもりなどない。

たとえ私をして

『お父様はあれを遊び半分で作ったといっていたが、嫌がらせか！？真剣なのに作れない私へ対しての嫌味なのか！？』

と言わしめた『大人になる秘薬』の情報であっても、私はぐっと堪えるさ。

つまり、これはお父様から与えられた試練だ。誘惑に打ち勝てない奴は俺の嫁になる価値なしと考えているに違いない。逆に考えるん

だ、資料を自由に使えるからこそ、自重すれば、夢により大きく近づくのだと。フッフ、読めていたぞ。

・・・だが、もし仮に、か、仮定の話だぞ？見るつもりがなくても、たまたま手元に『大人になる秘薬』の資料がきてしまってもカウントしないからな！！更に戻す過程でちらりと文字が見えてもそれは仕方のない話なんだからな！！

「御主人・・・」

「な、何だその目はっ！！」

「いや、もう好きにしてくれて構わないぜ、俺は」

呆れられるようなことをした覚えはないぞ！これでは私が馬鹿みたいではないか！

「うおっほん」

「急にどうしたんだ？」

「いや、少しのどの調子がな」

吸血鬼はその膨大な魔力ゆえに健康状態は維持されているがな。そう心の中で呟き、先ほどモーターテイルから頼まれた仕事について頭を切り替える。

お父様は私に仕事を引き継いでくれと頼んだそうだが、あれの本質的なところに私は触れられない。あれはお父様しか出来ないというより、お父様がやらなければならぬ仕事なのだ。私に出来ることは、せいぜい楽に作業できるように場を整えるくらいだ。

しかし、お父様が私を信じて頼ってくれたのだ、ここで答えなければ女ではない。

フハハハ、これを足がかりにしてお父様の中の私の立ち位置を上げてやる！

恋する乙女は日々邁進あるのみなのだ！！

「ケケケ、いつも同じようなこと言って失敗してるくせに」

「うるさい、貴様はトマト汁の海で泳いでろ」

「そりゃねーぜ御主人」

Side out

Side フレイア

「フレイア殿、そちらへ一体向いましたぞ！」

「言われんでも見れば分かる」

ものすごい勢いで飛び掛ってきた全長十メートルはある死霊に向って、炎を纏わせた剣を振りぬいた。死霊はそのまま燃え上がり、灰となった。

「相変わらず見事な腕ですな。アレを一太刀ですか」

「ふん、このくらい当然だ。私の炎は全てを清める。てか、いい加減飽き飽きしてきたな。大体なんで私が出張らなければならない？この程度、お前たちで何とかなるレベルだろ」

「いえ、作業ポイントに狙い済ましたかのように、拙僧達だけでは手に負えない相手がありますので、あなたの手が必要なのです」

「全く、世話が焼ける話だ。まあいい、そいつは私が相手をするとして、その後のアレの設置までにとどれくらい掛かる？」

「そうですね、場の整頓、術式の構築、偽装工作その他諸々の細かい作業の進行具合から愚考すれば、約一週間ぐらいですか」

「そんなにかかるのか。姉貴と兄貴はもう終わったって聞いたぞ？」

姉貴と兄貴というのは、勿論エヴァ姉貴とラグ兄貴ことだ。というか、私より上なのはその二人しかない。年齢的にも、実力的にも人間と炎の上位精霊の娘である私も一応はそれなりに年は食ってるけどな。普通女性の年齢に関する話題はNGじゃないのかって？私が気にしてないなら別にいいだろう？

「そこはやはりエヴァ殿は世界最高レベルの魔法使いでありますし、ラグ殿に至ってはねえ？」

「いや、分かった。皆まで言わなくていい」

そういえば兄貴って面倒くさがりだったわ。

面倒くさがりだからさっさと終わらせたんだろうな。考えても普通は実行しないような非常識な手段を用いて。兄貴の基本的思考は『楽できればそれでいい』だからな。それでいて、思慮深い面もあるから不思議だ。いや、思慮深いから迷わず実行できるのか？

私は戦闘専門なので、こういった作業は苦手だ。だから全部隣を歩くこいつに投げ出した。その方が確実にスムーズに進むからな。

「とはいっても、そんなに掛かったら流石に連中にバレやしないか？」

「『完全なる世界』にですか？ふむ、その可能性も無きにしも非ずでしょうが、拙僧的にはその心配はいらないと思いますぞ」

「何でだ？」

「連中は今こちらに構っている暇など無いはずですから」

もともとこの戦は奴らが裏で操って始めたもの。逆に言えば連中はとつくに動いていることになる。そして、奴らの注目はこのような辺境ではなく中央、いわゆるオスティアだとかそのあたりに向いている。てか、連中の目的がオスティアにあるといっても過言ではないか。

「成程な。まあ油断は出来ないが、といったところか」

「そうなりますな、っと見えてきましたぞ！」

「……へえ、あれがそうか。随分と燃やし甲斐がありそうじゃないか」

そこにはただ黒い靄があった。その黒い靄は何か大きな建造物を丸ごと一つ覆っていた。恐らく城かそれに順ずる何かだろう。だが、そんなのはどうでもいい。

問題なのはあの黒い靄なのだから。

自分でも分かるくらい獰猛な笑みを浮かべた。その氣に当てられたのか、隣で冷や汗を大量にかいている弟を他所に、私は剣に炎を纏わせ突撃した。

それに呼応するかのごとく、黒い靄が蠢きついで大量の死霊が解き放たれた！！

ここは死者の国ハウリング。魔法世界において第一級危険区域に指定されている文字通り死霊が哭く国だ。

私はこいつらを殲滅するために全てを清め祓う浄化の炎を身に纏う。

さあ、ファミリア和を為す樹が次女、『鳳凰炎姫』が舞って魅せよう！！

S i d e o u t

S i d e シルフィード

あらあら、なにやら皆さん予定より早く任務が終わっているようですね。流石はお姉さんたちです。私も頑張らないといけませんね。

私たちが派遣された街には『天岩』という町一つを潰せるくらい巨大な岩、むしろ山？が崖の上に乗っかっています。幸い結界のおかげで、街に落ちてくることはないのです、今では一種の名物となつて観光スポットとして有名になっています。今にも堕ちてきそうな岩は、圧巻です。もし、結界が破れたら大惨事なんですけどね。

この街は他の方たちが送られた場所と違って、人がたくさんいます。なので、好き勝手やるには大義名分が必要だったりします。今回、私達は天岩に張られた結界を確認するために国から正式に派遣された魔法師団として来ています。勿論本当ですよ。

王様と王妃様とは知り合いなので、王様と会って、お願いしたのですよ。笑顔で頷いてくれた優しい王様ですよ。その後奥さんに締められていましたけど。

そんなわけで、私は大義名分とはいえ、結界の確認という仕事をやらないといけないですよ。

「では、私が結界の様子を見るので、皆さんは本来の仕事を願います」

「「「「「へい」「」「」」」」

返事をした次の瞬間にはもう姿が消えていました。皆さんいつもながら頼りになります。

「では、私はあの大きな岩に向かいましょうかね」

ここで私が仕事を怠ったら天岩が落ちてくると思うと、責任重大ですね。でも、あの結界はエヴァ姉さんが自ら組んだもので、大丈夫だと思うのです。何でも、昔この国の人に世話になったとか何とか。その恩返しです。流石エヴァ姉さんです、恩義に報いる女って何かっこいいと思いませんか？

あらあら？なにやら前方に大きな影がノシノシ歩いています。近づいてみましょう。

どうやら、カメさんみたいです。大きいです。凄いです。もしかしたら、ガイアタートルだったりしませんかね。あの『生きる島』伝説の。

面白そうなので、話しかけてみましょう。

カメさんこんにち。随分と大きいですね。何してるんですか？そうですか？ウサギさんと競争ですか。まるで御伽噺みたいですね。頑張ってくださいね。ゴールは天岩ですか。奇遇ですね、実は私も天岩に用事があるのです。一緒にしませんか？あら？乗せてってくれるんですか。じゃあお願いします。でも、クルクル回転しながら跳ぶのは、勘弁な。

そんな感じで和気藹々としながら一緒に歩いていると、いつの間にか天岩が目前まで近づいていました。やっぱり近くで見ても山みたいなのですよ。

「あらあら残念ですね」

「シギヤア」

カメさんと同じくらい大きなウサギさんが天岩の上で寝そべっていました。

現実には御伽噺みたいには行かないんですね。

それにしてもウサギさんもウサギさんでもしかしてツキウサギだったりしますか。

あの『餅月』伝説の。

「カメさん、ここまで運んでくださってありがとうございます」

「シギヤア」

「私は今から結界の確認をしないといけないのですよ」

「シギヤギヤ」

「大丈夫ですよ、あの結界は私の姉さんの編んだものなので」

「グルア？」

「あらあら、ウサギさんが起きてしまいましたね。初めましてウサギさん、私はシルフィードⅡシノモトと申します。まだ結婚はしていませんよ」

「グルル？」

「あら、お母さん達を知っているんですか」

「シギヤ」「グルア」

どうやら、カメさんも知っているようです。そういえばまだ自己紹介していませんでした。

それにしても、相変わらず変なところで交友関係が広いですね。まああのお父さんと一緒にいたら、嫌でもそうなるのかもしれないね。それに、あの二人もなんだかねで有名です。二つ名

もかっこいいんですよ。『白聖妃』と『竜姫士』ですよ。どっちかどっちかは分かりますよね？私？私は秘密ですよ、恥ずかしいので。

何でもお二方は若い頃から、よく喧嘩していて、色んな人達に迷惑をかけていたんですよ。それを見兼ねたお母さん達に説得されたんですよ。流石の彼らも真なる聖女と神竜の娘の言葉を無私したら、大変なことになると分かっていたので、喧嘩をやめざるを得なかったんですよ。

で、今のように何かを競い合うという形に落ち着いたそうです。実は例の御伽噺もこの方たちをモデルにしたそうで、実話だそうです。カメさんが笑いながら教えてくれる傍らで、ウサギさんが恥かしそうに悶えていました。あまりの可愛さにもふもふしたくなります。

っと、いつまでも天岩の上で会話に花咲かせるわけにいけないので、ちゃっちゃと頼まれた仕事しましょう。実は私、治癒だけじゃなくて結界魔法も得意なんですよ。

では早速……。あら？なにかにヒビが入ったような音が……。

幕間5 前編 信号姉妹（後書き）

批評感想大歓迎！

幕間5 後編 凸凹兄弟（前書き）

ようやく、更新できた。

とても難産でした。

アイデアが遭ってもそれを調理する技量がない。
そんな感じでした。

ではどうぞ。

幕間5 後編 凸凹兄弟

Side ラグ

めんどくせえ・・・。

それが、俺の感想であった。

（なんだって俺がこいつらの世話をしなきゃならねえんだ・・・）

俺の視界の端で遊んでいるチビ共を見ながら深くため息をつく。

（あいつら、こっちの気も知らないで気楽なもんだ）

任務から帰ってきて早々、モーターテイルに頼まれたのはチビ共の面倒だった。俺は他の連中に押し付けようとしたのだが、逆に押し付けられてしまった。くそ、下手こいたな。

俺達が世界中で拾ってきた、俺達と同じワケありの子供たち。戦災孤児、犯罪者の子、異端児、捨て子、虐待の被害者・・・。数え上げればキリがないが、そんな質面倒くさい事情を抱え持つ子供たちはそんなことを微塵も感じさせない笑顔で遊んでいた。

（てか、何で俺なんだよ？他にもっと適任がいるだろうに）

マグとかマグとかマグとか。

あいつは、俺と血を分けた弟で、外見とか体格がほとんど似ているわりに、子供たちにめっちゃ懐かれる。違うところは俺の鬣たてがみのような毛だろうか。それに、子供だけじゃなく、動物にも魔獣にも懐かれる。あれは一種の才能だ。臆病者だけだな。

正直、俺は子供が苦手だ。小さい手、小さい足、小さい身体。

たくさんの小さいで構成されているこいつらは俺みたいな三メートルはある巨体が触れたら簡単に壊れてしまうに違いない。俺からしたらこいつらは小人である。はつきり言っているか壊してしまいうで、気が気でない。

それにこいつらは疲れ知らずだ。ていうか限度を知らない。だから勝手にギャーギャー騒いで、いきなり倒れるようなことを平気でするから困る。更に言うなら、こいつらの遠慮の無さは俺すら疲れさせる。一気にこられたら、捌ききれない自信があるな。

チビ共に気付かれないようこっそりとため息をつく。

（まったく、あいつらニヤニヤしながら俺を放り出しやがって。あとで覚えてろよ）

胸中でこんな目に遭わせてくれやがった弟共に対する報復を何通りか考えていた時だった。

「らぐにいちゃん」

「あん？」

チビの一人が、俺に話しかけてきた。いや、気が付けば、チビ共の何人かが遠巻きでこちらの様子を窺うように見ていた。そして、あいつらの代表として話しかけてきたチビがもじもじとしながら、言った。

「その・・・かたぐるましてほしいな？」

「あゝ・・・」

どうしようか。

別に承諾してもなんら問題ないのだが、やはり、こっちとしては少し怖いものがある。

こいつらからすれば、よくマグにねだっていたようなことなのかもしれない。だけど、俺は少し困ってしまった。

万が一力の配分を間違えてこのチビを潰してしまう可能性もなきにしもあらずだ。

たとえ、うまく肩車が出来ても、チビが落ちてしまったらちよつとした怪我ではすまないだろう。仮に下半身不随になるような大怪我を折っても治せるのだが、それでも怪我なんてしないに越したことはない。

それに、一度引き受けたら面倒くさいことに為りそうな気がする、俺の勘が告げている。

だが俺は失念していた。こいつらチビ共は多感であることを。それは世間でよく言われることである。ただ、こいつらと世間一般のガキでは大きな違いがある。世間一般のガキは、やってくれるまでねだり続けるだろう。しかし、こいつらはワケありなチビだ。

つまり・・・

「あう・・・い、いやならしいや・・・」

「うっ!？」

こいつらはこの年齢にして人の顔色を窺うことに長けてしまっているのだ。すなわち、俺の困った雰囲気を感じ取り、気落ちしてしまったのだ。こいつらは性格こそ年相応ではあるが、どこか人に遠慮してしまう子供らしくない所もある。そして、その雰囲気は

その場にいたチビ共全員に伝わってしまった。

場の空気が重い……。

これには流石の俺も参った。『千獣候』の二つ名で知られる勇猛果敢な俺でも、こいつらの目に浮かぶ涙なんて見てしまったら、罪悪感が、罪悪感がああああああ！！！！

『見てよあの顔！！ラグにいのやつ困ってるよ』

『あはははは！！ダメだ、あのラグの旦那もうちのチビ共の前では形無しってか！？』

『ぷくく……そう笑ってやるなよ。くくっ……いや、確かに面白けどさ？』

『珍しいものを見たな』

『親父とかお袋が見たら大爆笑もんだろこれ』

『ヒャッハー！』

『ゲラゲラゲラ』

『ラグ兄貴は俺の嫁』

『残念、既に僕の嫁だよ』

『いや、私の嫁だ』

『ラグさんモテモテですねえ』

『俺っ娘、僕っ娘、何でもござれってか？けけけ、ラグも罪作りな男だねえ』

『テラウラヤマシス』

『まあ私たち血が繋がってないから近親相姦にはならないしね』

少しあいた扉からたくさんの目が並んでいた。あいつら、この俺が気付かれないとでも思っているのか？

……後で祭りに招待してやる！血祭り言う名の祭りをなあ！！だが、今は目の前の問題をどう処理するかに集中しなければ！

「い、いや別に嫌ってわけじゃないんだ！お、お兄さん少しビツクリただけだからな！！」

「……ほんと？」

「ほ、ほんとだとも！証拠に肩の一つや二ついくらでも貸してやる！！」

「やったー！」

「じゃ、じゃあぼくも」

「わたしも！！」

「ずるい、わたしだってのぼりたかったんだからね！！」

そういつて群がってくるチビ共。あれ、選択間違えたか？い、いや、こいつら程度何人乗ろうが俺にとっては羽みたいなものだ……。だが、何故だ、どうして百戦錬磨で恐れるものがないはずの俺が戦場でもないのにこうも気圧されているんだ！！

「……………！！だ、だめっ……。こ、呼吸が……………！！」

「……………ッ！死ぬ……。笑い死ぬ……………！！」

「くぷぷっ……。お兄さんって……。お兄さんって……。キャラじゃねえっ……………！！」

「珍しいところの話ではなかったか」

「映像撮っておいてよかったな」

「ヒャッハー」

『ゲラゲラゲラゲラゲラ』

「……これがギャップ萌えか」

「……ふっ、この僕ともあろうものがね」

「……わが人生に一片の悔いなし」

『三人が鼻血を噴出して倒れた！！！！』

『衛生兵え！衛生兵え！！』

『ギガワロスwwwwww』

『姉さんたち興奮しすぎ。もうっ、後片付け大変じゃん』

押し寄せてくるチビ共を捌いているのを尻目に、向こうは向こうで混沌とした光景が繰り広げられているようだった。そんな中殺意だけで人が殺せたらと思う今日この頃だが、チビ共の相手をしてもらそんなことどうでも良くなってしまうほど、精神が磨耗してしまつたのだつた……。

やっぱり、子供は苦手だ。

Side out

Side
ペ
ル

「それはそこにおいて」

「うーっす」

「それはあつちに持つていつて」

「あいあいさー」

「あ、それが終わったら休憩だから頑張ってね」

[illegible]「
・
・
・
現金な奴ら」

ふう、指示を出すのって以外に難しいな。こういうのはあまり僕には向いていない仕事だと思うんだけどね。戦いの指揮ならともかく、こんな土木作業は何か違う。

とはいっても、この中で一番の年長者は僕だし、僕がしっかりしないといけない。

損な立場だよ、全く。

「しかしあれだね。途中まで作業が終わっていたから随分と楽に事が運べるのはいいことだと思わないか？」

「そうっすね。こういうところが俺達の組織が持つ強さの一つっすよね」

相槌を打つ弟のいうことは最もだと思う。実は今回の祭りの準備を、『枷』に捕らわれていた僕達に代わって、昔助けた人達の子孫がこの百年少しずつ進めてくれていたのだ。そこに僕達の技術力チートをフルに使えば、恐らく後半日で終わるはずだ。しかし、それまでやってくれていた分があったからこそその結果だ。こういうのを見ると、人の縁っていうのは不思議なものだと思う。

ファミリア

和を為す樹は、存在が『悪』として嫌悪され、排斥されてきた者達が大半を占めている。犠牲者とも言え換えられる。だから、普通は誰かを助けようなんて思わないのが当たり前だと思う。誰だって憎いあんちきしょうのために力を貸したいなんて思うわけない。損な奴、間違えた、そんな奴は聖人君子か、あるいは変態だと思う。

まあ結論から言えば、損な奴がいたんだけどね。それが我らが父さんだ。あの人の場合、聖人君子よりは変態っていうのが当てはまりそう。言わないけど。

『見殺しとか、助けられるのに助けないのはいけないと親父は思います、っていうのが建前で本音は意趣返し』
それが父さんの主張だ。

母さん達はどうか知らないが、少なくとも父さんは彼らを助けたいという純粋な気持ちで人助けをしたことなど一度もないそうだ。
その根本には誰もが投げ出すような危機を、世界のゴミと呼ばれた

僕らが解決したらスカツとするという理由が先にあったんだって。実際、救った時の奴らの顔といったらなかったね。

しかも、その後、決まって僕らの自慢をするのだ。

『どうだ、こいつらの才能は凄いだろう！』ってね。それもくどいまでに。

当時は照れていただけで、意味が分からなかったけど、今なら分かる。あの時の父さんの狙いはたぶん、言葉は悪いけど僕達異端の有用性を示すことだったんだ。

異端はそれだけで排除される。正義の名の下に、神の名の下に。建前なんていくらでも作れる。一人ひとりの力が強力でも、数の前には無力である。そんなのは実際に経験してきた僕達が一番分かっている。

だからこそ、父さんはそれを防ごうとした。あの人は知っていたのだ。もし、一時の激情で動いたりしたら、取り返しに付かないことになるのを。

だからあの人は動いていた。

他ならぬ自身が異端であったが故に、そして顔も知らない同胞のために、何より救われない存在を迎えに行くための時間を稼ぐために。殺されてたり、壊されてたりしたら困るからね。

そうやって人を救っては家族を拾い、家族を拾っては人を救い、そんなことを幾度となく繰り返していたら、いつの間にか大きな輪が出来上がっていたんだ。僕たちを認め、恩を感じる者達があらわれた。中には傲慢極まりない奴もいたけど、それが今度はこうして僕達を助けてくれた。

これは父さんだからこそその結果なんだろう。

和を為す樹。
ファミリア

父さんの名前をもじった組織の名前。

和は輪に通じる。父さんという樹の周りに異端も何も関係なく人が集まり、手と手を繋いで大きな輪を作っていく。輪が大きくなれば樹も大きくなって、樹が大きくなれば輪が大きくなって。そうやって父さんは輪を作って、和を為してきたのだ。

僕は、いや僕達はあの人に救われた。あの人に出会わなければ何もかも憎んだままだったかもしれない。

全てを奪われたあの日から解き放ってくれた。

全てを失って手に入れた、この忌まわしい力を『才能』と呼んできた。

何より、僕たちみたいな化け物を愛してくれた。

だから、今度は僕達があの人を救う番だ。

まだ百年前のあの日に捕らわれているあの人、自分を許せないあの人、僕たちにくれたように……。

「よし、そろそろ休憩は終わりだ、各自作業に戻ってくれ！」

「えー……」

「だりい」

「まだ祭りまで時間あるしいいじゃん」

「ゆっくりしていこうぜ」

……まずはこの人達を動かすところから始めないと。

Side ダグラス

俺の名前はダグラス。一応組織の幹部として一部隊を率いている立場だ。仲間達からはダグ、子供たちからはダギーの愛称で親しまれている。

さて、一応と言うとおり、俺は三男ではあるがそんなのは年功序列で付いているにすぎない。特殊なのはとある体質だけで、おれ自身の実力はそれほど高くない。下手すれば子供たちよりも弱いかもしれないな。

「ダグさん、あつしら第一班の作業終わりやした」

「第二班もでさあ」

「そうか、ならまだ終わってない第三班の手伝いに向ってくれ。どうも無駄に大きい岩が邪魔してて作業が進まないらしい」

「うっす、任せてくませえ！ テメェら、聞いたとおりだ！！ さっさと行くぞ！！」

「「「へい」「」「」」

土木関係者とその監督みたいなやりとりをしながら、俺は辺りに視線を彷徨わせる。

俺達が派遣された場所はヘラス帝国の辺境だ。

そこはかつて、俺達の祭りの犠牲となった街だ。まあそれを言うなら他の連中が派遣された場所もそうなのだが。今は誰も住んでいない朽ち果てた町だから、俺達の声はむなしくもよく響く。

昔は活気があっていい街だったんだけどな・・・。

「百年か・・・」

今の組織にいる仲間達のほとんどはあの百年前の事件の後から拾われて来た者達だ。それ故に実際に百年前のことを知る奴らは少ない。人づてに聞いた話くらいしか理解していない。ただ、大恩ある親父のために協力しているに過ぎないのだ。それ以前に、バカ騒ぎが大

好きだしなあいつら。

事情を知っている仲間のほとんどは俺達を残して生を全うした。俺たちに親父のことを頼んで。それを思い出し、少しだけ、切なくなつた。

あれから随分と世界は変遷してきた。組織にしろ、この街にしろ。つい百年前まではあれほどの活気を誇っていたのに、今は残っている跡地が儚さを感じさせる。こういうのを諸行無常っていうんかねえ。あるいはつわものどもが夢の跡って奴か。置いてかれる身としては、膨れ上がる感情を処理するのに苦勞するよ、まったく。慣れるしかないんかねえ。

「旦那、全班作業が終了しやした!!」

「確認は？」

「大丈夫でさあ」

「偽装工作は？魔力痕跡一つ残していないな？」

「完璧でさあ！たとえアーウェルンクスであろうと欺ける自信がありますぜ！」

「十分だ。じゃあ急いで撤収するぞ!!」

「」「」「へい」「」「」

ここは辺境とはいえヘラス帝国だ。連中の仲間が入り込んでいることを考えれば、連中のお膝元にいると言える。他の場所とは違っていつまでもここにいれば、感づかれる可能性というのは大きい。

幸い家に帰るには転移道具『キメェルアの翼』を発動すればいい。

「忘れ物はないな」

「強いて言うなら、貴様の命くらいだな」

突如背後に膨れ上がる膨大な魔力。

油断はしていなかった。

だが。

あまりにも自然に。あまりにもさりげなく。あまりにも唐突に。視界を埋め尽くす黒い短刀襲われた。

「グッ」

「旦那あ！」

あ、危なかった！！咄嗟に腕を交差して急所にくるものだけを防いだ。問答無用で突き刺さるのを歯を食いしばりひたすら耐えた。いくらか魔力障壁が凌いだが、大半は無視するように突き抜けてきた。くそ！俺程度の魔力障壁なんざあってもなくても同じってか！？

「ふむ、急所だけを避けたか。だが、その傷では自由に動けまい」

声の主は、建物の影から現れた。黒衣に身を包んだ魔術師。フードと仮面のせいでその容姿は不明だが、なんとなくイケメン臭がするのは俺だけだろうか？もしそうだったら、俺と親父の敵だ。

「息災そうで何よりだ、『戦操』」

「お前さんのおかげでたった今絶不調になったわ。いつの間に紛れ込んでいた？」

ここに来てすぐに結界を設置した。並大抵の輩は入れさせない結界をだ。並大抵ではないこいつだから、侵入されても不思議ではないが、それでも侵入されたらすぐに分かるはずだった。だが、結界は何の反応も見せなかった。

いや、問題はコイツの侵入を許したこともそうだが、それだけじゃない。もっと大きな問題がある。

こいつにどこまで知られたかだ。

表だけならいい。だが裏を見られたのなら、最悪だ。

それだけでこいつの対応は変わってくる。逃げるか仕留めるか。

無論後者の方が圧倒的に難易度が高い。

「ふむ、実はここに来たのはついさっきの話だな。とある馬鹿の実験に無理矢理付き合わされた結果とでも言おうか」

「なるほど、つまり偶然か」

・・・本当だろうか？馬鹿が誰か知らないが見る限り本当に忌々しそうにしている。

だが、こいつは頭が相当切れる。敵相手に馬鹿正直に答える相手ではない。判断するにはまだ早い。

「そういうことだ。碌なことをしないあいつにしては中々の偶然だよ。それとも私と貴様の宿命だろうか」

「俺たちにとっては嫌な偶然だな。あとライバル宣言はいらん、願下げだ」

「つれないことを言うな、『戦操』」

それにしても、厄介な奴に目を付けられた。こいつは、一流と呼んでも差し支えない程の使い手だ。俺がどれだけ足掻いても勝てない相手だ。ここにいる他の面子でも無理だろう。こりゃあちよつと不味いな。

「そんな大層な二つ名を付けられるようなことをした覚えは無いだがね。何だよ、戦いを操る者って」

「フフ、そう謙遜するな。百年前の戦いでは貴様にしてやられたか

らな」

「ありゃあ、お前が自滅しただけだろうが、脱ぎ魔め」

「脱ぎ魔呼ぶな」

「じゃあ変態か？」

返事は影の刀剣だった。敵の前で全裸になるような奴を脱ぎ魔と呼ぶなんて呼ぶのか。

「クソッ、あの馬鹿の『変身中はあ裸になるのが鉄則です』なんて言葉を魔に受けなければッ」

いや馬鹿って、お前も人のこと言えないだろう。

しかし、俺達を囲むように展開された触手を見て、改めて思う。

やっぱり変態じゃん。

「まあいい。知っているかもしれないが、一応悪の秘密結社としてのお約束だ。我が名はデュナミス。それでも完全なる世界では幹部をコズモ・エンテレケイアさせてもらっている。さあ、貴様らがここで何をしていたのか吐いてもらおうぞ！」

！？

今見ていなかった宣言した！だったら、いくら調べられても問題ない！ここをいくら調べても手がかりなんざ見つからないからな！！
つまり、変態の相手にする必要なんざ皆無じゃああああああ！！

「逃げるぞ！！」

「で、ですが、旦那のキメエルの翼は破壊されていやすぜ！？」

「え！？」

指された場所を見ると、なんとそこにはキメエルの翼がへし折れた姿でご臨終為されていた。

「先に逃げ場をなくすのは戦場では常識だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・マジか。

「・・・・テイル、先に帰って、俺の分を持ってきてくれ」

「へ、へい!!」

「悪いが残り俺と一緒に――」

「問答している暇はないぞ！」

影をまるで津波のように操り、仲間を飲み込んでいった。影に閉じ込めるつもりか！だが、無駄だ。あれには危機的状況下における強制帰還の術式が組み込まれている。案の条、取り込まれた仲間達は、光となった。ここで数人がリタイアしたか。何人のこっ――

「これで残るは貴様一人か」

「おいおい、冗談じゃねえぞ！？てか、へぼ過ぎっ！！一瞬で全滅ってコントか!？」

気が付けば、サポートする間もなく仲間がいなくなっていたことに愕然としながらも、敵と向かい合うという状況に、まじ勘弁。

こいつは変態ではあるが、その力は侮れない。

闇の魔素を編み、影の魔物を生み出す。短刀などの武器を作り出す影の牢で相手を閉じ込めたりもする。部分転移で影を飛ばしたりだっている。近接格闘もその気になればやってくる。いわばこいつ一人で、軍隊であり戦争そのものだ。

そんな奴に俺一人で戦えって？無理だろ、常識的に考えて。こっちはサポート専門だったのに。しかし、奴はそう思っていないようだった。圧倒的有利な状況にあるにも関わらず、その顔は警戒一色に染まっていた。

「フム・・・この構図はあの時と同じだな？しかし、かつてと同じミスはしないと知れ」

「御託はいいから、俺と踊ろうぜ？」

「フツ、残念だが男と踊る趣味は無い。ムウン！！」

だから何故裸になるし。

「更に言うならば、貴様に時間を与えるとこちらが不利になる。悪いが早々に貴様には退場してもらうぞ？喜べ、行き先は楽園だ」

「俺みたいな雑魚に何熱くなってるんだよ。もちっとゆるーりしよるぜ」

「抜かせ。これでも足りないと思うくらいには貴様を評価しているぞ」

そして、戦闘形態になる敵さん。ムキムキ具合が半端ない。

肩から新たに生えた腕と身体が一回り大きくなったのが特徴か。微妙に仮面の形も顔半分を隠すものから、顔全体を隠すものへと変化していた。

まったく何がこいつをそんなに警戒させるのか。もっと俺を侮っていた方がまだ楽なのにな。

周囲を囲むは、恐らくある程度の自律意志を持つ影で編まれた魔物。敵対するは、俺よりも数段上に行く魔術師。しかも至近距離型に変身済み。

対してこちらは、逃げるための道具は壊され、残ったのはサポート専門の、一人だとハツタリと小細工しかできないの大した力もないおっさん。手持ちは釣り糸と閃光弾に手榴弾が数発分に数メートルが限界の転移符、後は魔法薬各種が少々。これほど最悪な状況も久しぶりだ。

だが、条件は悪くない。よって絶望的ではない。

まあぼちぼち切り抜けていきますか。

あいつらが戻ってくるまで数十分、ただそれだけを耐えればいいんだからな。

「秒間二千撃、貴様に捌き切れるかな？」

「あれ、俺詰んだ？」

幕間6 完全なる世界編（前書き）

スランプ気味

更新遅れました。

よく分からないことになっていますが
また時間があれば手直しするつもりです。
ではどうぞ

幕間6 完全なる世界編

Side 三人称

墓守り人の宮殿のとある明かりのついていない一室。そこに褐色の男が不気味に発光する液体の中にその身を浮かべていた。男の名はデュナミス。コスモ・エンテレケイア完全なる世界の幹部を務める男である。長髪の見た目は三十台前半で、渋い貫禄を漂わせている彼には両腕と両足が見当たらなかった。ダグラスとの戦いにて失ったのだ。

この液体はアレイスターIIクロウリーが作った特製のものであり、再生核を活発化させ、再生に要する時間を平時よりも縮める効果がある。いつもは馬鹿げた行動ばかりするアレイスターだが、同時にこういった成果も上げている辺りは『知』の名に恥じない。

「無様だね、デュナミス」

「……アーウェルンクスか」

そんなデュナミスの元を訪れたのは、アーウェルンクスシリーズ、その『イニティウム一番目』を冠する男であった。アーウェルンクスシリーズは現在彼一人なので、わざわざ番号で呼ぶことはないが。制服を身に纏い、相変わらぬ無表情で液槽に近づいていく。

「僕のことにはフェイトと呼んで欲しいかな。自分で付けた名前だけど、これでも気に入ってるんだ」

「ふむ、変なところにこだわるようになったな。以前の貴様からは考えられん。あの馬鹿か、それとも敵に毒されたか？」

「冗談は変身だけにしたほうがいいよ。君と違って僕は正常だ」

「ま、待て、それではまるで私が変態みたいではないか！影を纏う

には肉体に直接及ぼさないと様々な恩恵が失われるから仕方なく衣服を破り捨てているのであって別に裸になりたいわけでは・・・」

「言い訳を並べなくても大丈夫。君が変態であっても僕らの同士だし、一流の魔術師なのは変わらないから。ただ近くによって欲しくないだけで」

「・・・・で、一体何の用だ？」

どういうわけか、生温い視線に身を晒されたデュナミスは、心の中で『アレキスターいつか殺す』と殺意に身を焦がし、表面上は至って冷静に本題を促した。

「和を為す樹と会ったんだよね？」
フアミリア

「この場合は遭ったが正しいな。結果は見ての通りだ」

そういつて、今の自分の状態に対して自嘲する。あれほどの劣勢でありながら、あれほど追い詰められてながら、最後の最後でひっくり返すあの手腕。まさしく『戦操』の二つ名通りだった。やはり、奴ら『六兄弟』より上はどこかタガが外れている。今後そんな奴らがいる組織を相手する機会が増えることを考えると、ため息がでるのも仕方がない話だ。

「最初の攻撃で全て終わらせるつもりだったのだがな、閃光弾で視界をふさがれ、かわされたところか、影の魔物へ攻撃を誘導させられてしまったよ。そこからはあいつの独壇場だったな。糸と手榴弾や閃光弾を用いた即席の罠を張られたり、計算された言葉でこっちを陥れたりで散々だった。徐々に時間を稼がれていく中で何とか重傷を負わせたんだが、それすらも奴の計算で――」

「いや、君の惨敗記録を聞きにきたんじゃないんだけど」

ぱっさりと、それはもう清々しいまでにぱっさりと切り捨てた。彼

の目は冷たい視線に、まるで養豚場の豚を見るかの如く冷めた視線になっていた!!

「フツ、貴様、それでは友達の一人も出来ないぞ?」

「君のような偉大な魔法使いマギステル・マギから対極にある解放された魔法使いヌギステル・マギに言われたくないよ。それに僕には友達なんて必要ない」

「・・・毒に磨きがかかってきたな」

「それで、どうして和を為す樹の構成員はあんなところにいたんだい?」

若干涙目になっているデュナミスが無視して、本題に入る。だが、問われたデュナミスは遠くへ目をやった。

「なあアーウエルンクスよ、己が矮小な存在であると考えたことはあるか?」

「デュナミス?」

「私の場合は先の戦いのときにこれでもかと感じた。あれほど優位に立っていながら事実上完敗。私には油断など無かったが、それでも突き崩されたことを鑑みるに力が足りなかったのだろう。いや相手に対して警戒しすぎたのが仇だったのかもしれない。結局は最初から最後まで相手の手の平の上だったのだよ。そう私は慢心していたのだ。相手が誰であるかを理解していながら使徒としての誇りが」「つまり戦いに熱くなりすぎて調べるのを忘れたんだね」

嫌な沈黙が場を支配する。無駄に長ったらしい話をして話題を逸らそうという試みがばれてしまった。じとつとした視線にしばらく耐えるも、根負けした彼は冷えていく空気を一転させるべく口を開いた。

「じよ、冗談だ。ちゃんと調べた、というか調べている。いくらな

んでも目の前にある手がかりを逃すようなまねをするはずがないだろう」

「本当？」

「勿論だ。主の邪魔をする者は誰であろうと排除する。それが我ら使徒の役割だろう？」

「・・・そうだね。ごめん。君が冗談を言っているように聞こえなかったから疑ってしまったよ。それで」

「ああ、とはいっても先に言ったとおり私はこのように慢心創痕だ。だから、影に調べさせているのだが、どうもおかしい」

「おかしい？」

「口で説明するよりは見たほうが早いだろう。共有させるぞ」

百聞は一見に如かず呟き、五感をリンクさせる。人間と同じ構造をしているとはいえ、二人は同じ盟主に作られた人形、こうやって情報を共有させることも出来る。そうして、影、すなわち影と魔素を編んで生み出された使い魔から現在進行形で送られる情報を目にした。

「これの何がおかしいんだい？」

送られてくる映像にはただ荒れた廃墟が映っていた。どこを見ても、ただ廃墟が広がっているだけ。他の影から送られてくる映像も同じだ。何の変哲も無いただのゴーストタウン。別に何か変なところがあるとは思えない。

しかしデュナミスは首を横に振る。

「すぐにはわからないだろうが、しばらく視てみる」

促されて集中する。何一つ見落とさないように五感全てをフル活動

させ、第六感を研ぎ澄ます。そして、十分後によく違和感を感じ取った。

「これは・・・マナが集まっているのか？」

「そうだ、本当に微々たるものだがな」

「いや、でもこれは・・・」

「貴様の言いたいことも分かるが、私が気付いてからずっと集まり続けている。絶え間なくな。そして減少の傾向は見られない。恐らく、この街のいたるところで見つけた魔法陣の影響だとは思うのだが・・・」

大氣中に満ちているマナが街に集中してきている。それは、彼ら完全なる世界が引き起こそうとしている現象と酷似しているといってもいい。小規模であるし、単にマナが集まっているだけで魔導障壁を張る気配もないが。

0・0001から0・00011へ。

数に表せば、たったそれだけの違い。普通であれば気付かない、ていうか気付くはずない。いうなれば池に水滴が落ちたときの変化に気付くようなものである。そんなわずかな変化を彼らが見つけることが出来たのは、彼らが超一流の実力者であるからではない。ひとえにデュナミスの執念に起因する。

先日のダグラスとの戦い、あれだけ優位に立っていたというのに結果は笑いすら起きないほどの惨敗。こんな屈辱的な結果を残してしまった彼は、せめてどういった理由から敵があの場合にいたかを見落とさないように徹底的に隅から隅を、それこそあたりに落ちている石の一つ一つまで調べていった。胸中には連中に一泡ふかすという一念だけがあった

そして、気付いた。周囲のマナ濃度が塵ほどの微弱さではあるが上がっていることに。それはもう姑が窓に溜まった埃に指を走らせて嫁を虐めるようなねちっこさで、彼は見つけだした。

そんな彼と五感を共有すれば自ずとフェイトにも分かるのは当然のことだ。否、不幸なことに分かってしまった。もう研ぎ澄まされた感覚とかそんなちやちなもんじやない。お前は恋する戦士^{ストーリー}なのかとドン引きしてしまうほどであった。

鳥肌が立つのを自覚しながらも、フェイトは気合でその場に踏み止まった。当然、二人の間に距離が開いていしまっているのはいうまでもない。心の距離が。そのことに気付いていないデュナミスは誇らしげな顔をしているのであった。

何はともあれ、今はこの情報を分析するべきだろう。

「既にアレイスターのばk「呼ばれてえ飛び出てえじゃじゃじゃーん！！皆大好きアレイスターですよ。デュナミス君に頼まれていた解析が終わったのでえ、私自身が報告に来たのですう」・・・丁度良いタイミングだと言っておこう」

「それはそうですよお、外でスタンバっていましたがねえ」

「・・・お前は どうして そう・・・いや、時間の無駄だな。アレイスター、分かったことを教えてくれ」

銀髪銀目の白衣を着た男、アレイスターⅡクロウリー。天才と名高いこの男がテンションに身を任せて回りながら乱入した。彼の役割は、戦うことではなく、研究すること。つまり、デュナミスは現場に残った情報をそのまま彼に送ることで敵組織の目的を調べてもらったのだ。組織の中で最も知識を有するのはこの男だからだ。餅は

餅屋という諺そのままに任せたのである。

「ええ、とっても面白いことが分かったのですよ。まずはこれを見てください」

アレイスターは懷から拳大の石を取り出した。彼が現地で拾ってきた石だ。別におかしいところなどないただの石、二人の目にはそう見えた。

「？ただの石ではないのか？」

「ところがどっこい、違うのですよ。確かに一見しただけではそう見えてしまうのも無理は無いのですがあ」

アレイスターは石にもう片方の手で持ったハンマーを振り下ろした。すると石には簡単にヒビが入った。ヒビは徐々に広がっていき、弾けるように砕けると、中からは水晶のようなものが現れた。ぼんやりと薄い光を放つ不思議な水晶、その表面には和樹がナギとの戦いで用いた特殊な文字が刻まれていた。

「それは、精霊石か！いや、それにしては・・・それにその文字は神語か？」

「少し違います。神語を下地にして生み出した新たな魔法文字、といったところですかねえ。旧世界の東の果てにある島国の字みたいなものですよ。神語をひらがなとするならば、これは漢字みたいなあ感じいです。名付けるなら神字かんじですかねえ。なんちってえ」

空気が凍てついた。しかし、アレイスターは気にせずにつき話を話す。

「デュナミス君の疑問の通りい、これは単なる精霊石じゃないですよ。精霊石とは言ってしまうえば精霊の塊であり、元となった精霊

の属性を受け継ぐ鉱物ですよねえ。しかし、これには属性なんて見当たらずう、しかしただの無属性とは違って強い浄化の力を含んでいますう。名付けるなら聖属性といったところですかあ。これほどものを生み出せるのは恐らくあの子しかないでしょうう」

「『白聖妃』か」

「イエスう、マイスウィートドーターですう!!」

その場で奇怪な動きをする変態にため息をつく二人。このままこの男がトリップしていたら、話が脱線して如何に己の娘が素晴らしいかを語りだすことになる。それだけは勘弁とフェイトはアレイスターの頭を叩いて、続きを促す。

「失礼しましたあ。で、話は跳んでマナが集中する理由ですがあ」

思ったより強かったのか、頭を抑えて涙目になっていた。

「そんな難しい話じゃないですう。そういう術式が仕掛けられていたからですう。デュナミス君が送ってくれたあの怪しい術式も関係していますよお」

「やはりか」

指を鳴らし、街の地図を空中に出す。地図には、何かの印か、赤い丸がいくつかついていていた。そこには、デュナミスが違和感を感じた部分を徹底的に調べて見つけた魔法陣が刻まれている。過剰なまでに隠蔽されていたので、逆に違和感が強すぎたのだ。例えるのなら、そこだけぽっかりと穴が開いているような。

「これはマナ集中術式の根本ですう。それらが『連結』することで更に大きな効果を生み出すのですう。しかも、術式の相互干渉によって魔法陣は互いに護られますう。壊すには雷の暴風レベルの魔

法による同時一斉破壊しかない状態でしたあ。発動してないので意味ないですけどお」

「? ということだ? それでは言っていることが矛盾しているぞ? これが発動しているからマナは集まっているのだろう?」

「まあ話は最後まで聞いてください。そもそも、これが発動していればあこんなにゆっくりとお集まりません。なので、恐らくこれこそがフェイクになるはずだったんでしょねえ」

「・・・そうか。これが発動していれば、当然僕達はそれに気付く。そして魔法陣を壊すだろうね。多少てこずっても壊せないレベルじゃない。そして、壊したと安心してしまふ、それが罠なんだ」

「一度調べたところをもう一度調べるようなまねはしない。その心理をついた大掛かりな罠ってわけか。異変に気付いた時には時既に遅し、本命が襲い掛かると。なるほど、考えてみればまるで見つけてくださいといっているようなものだったな」

彼らは知らないが、和を為す樹が作業終了後に見張りの一人もたてなかつたのは、仲間が見つかることで手がかりを与えるのを避けたかつたのと、何より九割九分ばれないと確信していたからだ。だが、残り一分の可能性、すなわちデュナミスの予期せぬ乱入によってそれと思わぬ手がかりを与えてしまったのは誤算だった。これで、この場所へとうかつに寄ることが出来なくなったと自宅で歯噛みしている和を為す樹ファミリアだった。

「それで、その精霊石はどう関わってくるんだ?」

「この精霊石が現状の核なのです。奴らはあ大量の精霊石を的確に配置することであ、もう一つの隠れた巨大な魔法陣を作り出したのです。それが今の状態を生み出しているのです」

「なるほど、先に大きな印象を植え付けた上で微細な効果にすることで更に気付かれにくくするつもりだったのか。よほどマナを集めることが重要だと見える」

「ちなみにい、他の場所でも同じ処置がされますう。タリンバンサリンやレーベンスシュルトを筆頭に五箇所をねえ。そのどれもが、『百年に一度舞い降りる悪夢』の被害を受けた場所ですう」

「連中に縁のある土地ばかりだと？ 一体何を企んでいるんだ？」

考えても分からない。そう結論付けたデュナミスは使い魔に命じる。

「何はともあれ、要は術式の基盤になっている精霊石と多重連結魔法陣を壊していけばいいのだろう。そうすれば連中が何を企んでいるかとそれで目的は費える。悪いがイニティウムよ。彼の地に赴き、壊してくれ。高度に偽装されているとはいえ、『地』のアーウェルンクスたる貴様なら精霊石との相性も悪くないはず」

「いええ、出来れば回収してください。何かに使えるような気がするのでえ」

「やれやれ、面倒な仕事を頼むね。僕だってそんなに暇じゃないんだけどな。それとフェイトって呼んでくれないか」

「くく、まあ私はこんな様だからな、任せたぞ。フェイト」

「分かったよ。影たちも借りていくよ」

「好きに使い」

一つ頷き、フェイトはその場から消えた。水を使った転移だ。

残ったのは、重傷の男と明後日の方向に突き進む男。

「ところでデュナミス君。ドリルを付けてみる気はありませんかあ？」

「ないっ！」

そんな会話があったとかなかったとか。

竜の国の王（前書き）

短い。

亀更新のくせして、こんな短くてすみません。

しかも、低クオリティ

でも、投下しちゃうの。

次からはどんどん展開が進むよ。きつと。

次がいつかは分からないけどね！！

竜の国の王

ドラグーン
竜の国

魔法世界の北の最果てにまるで隠れるように結界に囲まれる国。

竜の国と銘打っているように、その住人は基本的に竜、すなわちドラゴンであった。

しかし、その姿は羽や牙、爪あるいは鱗といった、多少異なる部分はあるものの基本的に人の姿をとっている。

これは、文化的な生活を送るには欠かせない要素であるという理由もあるが、古より伝わる伝承もある。

それは神と竜と人の物語。

この物語は世界を創造した一柱の神、神に恋した一匹の竜、同じく神に恋した一人の人間の三人の関係を主軸に置いた、涙あり笑いあり修羅場ありの冒険譚である。

この物語にある一文『竜は神を愛するあまりその姿を模した』というのが、その理由にあたる。

これ以上は長くなるので、大まかにはこれを覚えていれば問題ない。

「来たか婿殿」

「あなたが呼んだんでしよう。それで、一体何の用ですか、ラグナス殿」

「まあそう急くな、はげるぞ？」

「そうになったら、原因は間違いなくあなただ」

「クッ、違うない」

玉座で俺を迎え入れたのは、この国の頂点神竜ラグナス。俺が敬語なのは後にも先にもこの人（竜）だけだ。

悠に三千年以上の年月を生きていながら、未だこの『竜の国』の王

として君臨する世界最強の竜。

今は人の姿を模してはいるが、纏う覇気は本物だった。

黄金の髪に金色の目。その顔に浮かべるは不敵な笑み。

ただ座っているだけでありながら、常人であれば対峙するだけでひれ伏してしまいそうな存在感!!

——王者

彼ほどその言葉の似合う者はそうはいまい。

「それで、もう一度聞きますが用件は何です？こっちは冗談抜きで忙しいのですが」

「ほう、それは『枷』がはずれたことに関係があるのか？」

「……流石に気付きますか」

「伊達に長生きしていないよ。まあそんなことはどうでもいい。今はこっちの用件を優先してくれ」

「相変わらず自分勝手な……。どうせ、断っても拒否権は無いのでしょうか？」

「当然!!それに、一応貴様にも関係があることだからな」

「それは、かつてあなたの『主だった者』の組織のことですか？」

「そして、今は貴様の敵だな」

俺の敵、すなわち『完全なる世界』。まさしく、俺に関係のあることらしい。

遠まわしにいったのは、確認のためだ。もしかしたら、それとはまた別に関係しているものだったら、まだ断ることができた。

しかし、帰ってきたのは肯定の言葉。

これでは断れない。

何故、ここでラグナス殿が『完全なる世界』に関わってくるのか。

その理由は、伝承にある。実はアレ、本当の話なのである。ある程度大衆向けにいじられてはいるが、大まかな流れはほとんど変わらない。

そして、その主要な登場人物となっている竜とは目の前のラグナス殿であり、かの物語に語られる神とは『完全なる世界』の創設者に相違ない。

かつてラグナス殿の口から直接聞いた、何の脚色もされていない御伽噺の原型。

それを知っている身であれば、今彼の言葉に込められている想いは、想像以上に重いものを感じるだろう。

場の空気がしんみりになったのを敏感に感じ取ったのか、彼は先を続けた。

「主の組織の者が我が秘宝を奪っていった。婿殿にはそれを奪還してもらいたい。報酬は望むものを与えよう」

「あなたが動けないのは仕方がないとして、どうして私に頼むのです？」

「それは・・・言えぬ」

「?? 別に派遣できない理由くらいは・・・」

「言えぬ事情があるのだ!!」

焦った様子でこちらを恫喝するラグナス殿。その表情はいつになく真剣で、だからこそ俺はそれ以上聞くのを憚られた。

「では、一体何を奪われたのですか」

「それもいえぬ。だが、アレが世に出れば間違いなく全てが終わる」

内容はまたしても重かった。

その目はどこまでも真剣であるが故に、言葉には真実味が増す。

「・・・冗談、というわけではなさそうですね」
「流石に冗談で嬭殿を呼ぶようなまねはせぬよ。ことは一刻を争うのだ」

そして、ラグナス殿は有無を言わず口を開く。

「我らの盟友よ。我らに代わり、奪われた物を取り戻すのだ。・・・頼む、今はそなただけが頼りなのだ」

「・・・ふう、あなたに頭まで下げさせたら断りようが無いですね」
連中が関わっている時点で断るつもりなど無かったが、流石にここまでされて応えなかったらは、男じゃない。

「不肖カズキ||シノモト、確かに承りました」

「おおっ、やってくれるか」

「はい。それで、早速ですが、あなたの方で掴んでいる情報を全て提示していただきたい」

「うむ、ラジャール」

「はっ」

音も無く現れたラジャールさんに手渡された資料。

そこに記載されている情報を目にして、俺は天を仰いだ。

ああ、厄介なことになるな。

「ケッ、何でまた前線から離されたんだよ」

「前線で暴れすぎたせいですね。手柄を立てるのはいいのですが、その全ての戦地をボロボロにされては、迷惑極まりないでしょう。そんなことより何ですか、あの竜は。詠唱は千の雷なのに、別の魔法になってるじゃないですか」

アルが言ってるのは、千の雷を唱える度に出てくる『バオオオオ』って鳴く雷を纏った竜のことか？

かっこいいから、いいじゃねえかよ。細かいこと気にしてるとはげるぞ？

文句があるなら精霊に言いやがれっての。

「カズキと戦ってからこっち、ますます非常識ぶりに磨きがかかってきましたね。あなたは、どこに向ってるんでしょうか？」

「決まっておろう。あさっての方向じゃ」

「だあもう！！アルもお師匠もうるせえよ！！そんなことはどうでもいいだろうが。そんなことより、詠春は何してるんだ？」

「見張りだ。前線を外されたとはいえ、警戒は怠れないからな」

「相変わらず真面目な奴だな」

「お前らが不真面目なんだよ！！」

俺達がいる場所は、グレートブリッジだ。前線からかなり離れた場所にある。

というのも、俺たちの活躍で最前線はもはや帝国の首元までその刃を突きつけている状態だからだ。だから、ぶっちゃけ、暇である。

「ふわぁ、全く。こんなところにいても、なんも楽しいことはないぜ」

「それはどうかな？」

「!？」

なんとなしに呟いた言葉に、予想外にも返事が返ってきた。
この場にいる誰の声でもない声。
それは、ちよつと前に聞いた、あいつの声だった。

S
i
d
e

o
u
t

竜の国の王（後書き）

感想批判大歓迎。

こんな低クオリティなものを読ませてしまうなんて、本当に申し訳ない。

転送祭り（前書き）

こんな感じです。

クオリティ（r y

転送祭り

「先手必勝っ！！」

「そおい」

「うおあっ」

いきなり襲い掛かってきたので、適当に投げた。
すると、ナギは空中でクルクルと体勢を整えて、着地した。

「いきなり何しやる！」

「あれ、それって俺の言葉だね？ 何で俺が怒られてるの？」

「てめえだからだ！」

正当防衛で投げたと言うのに、なにこの理不尽。理由も理由で酷い。
そんなに嫌われることしたっけか、俺って？

「あれ、ラカンは？」

よく見ると、あの褐色筋肉達磨の姿が見当らなかった。

「何であいつの名前が出てくるんだよ？」

「あれ？ お前ら一緒につるんでたんじゃなかったのか？」

「たまに、戦場でぶつかりあったりはしますが、つるんではいませよ」

俺の疑問にアルビレオが答えてくれた。

ああ、イーグルハークの報告書ってそういう意味か。てっきり仲間入りしているのかと思ってたけど、まだだったみたいだ。早とちり早とちり。

ちなみに、ラカンとナギが戦うときは、両陣営とも被害が尋常じゃないらしい。

もはや災害レベルだな。

「それでカズキよ、先の言葉はどういう意味じゃ？」

「ん？」

「それはどうかなのくだりじゃ」

「ああっ、そうそう、それぞれ。大したことじゃないんだがな」

そう前置きすると、フィリウスの奴は何故か面倒くさそうな顔になって、貴様がそうだった時には大抵ろくなことにはならないとほざいた。失礼な奴だ。まあ、今回に限ってはそうかもしれないが、日本人は謙虚なのだ、大目にみてほしい。

「実はな・・・っと、来たか」

「ああ？何がだよ？」

「三秒後に分かる」

俺は帝国側の動きを余すことなく伝えようと思ったが、その時、周辺の魔力の動きを感じて口を閉ざす。さっぱり妖精がナギの周辺を乱舞しだした時、グレートブリッジが揺れだした。

「何だっ、地震か!？」

「・・・・・・この様子だと、成功したらしいな。それに、どうやら随分と改良されてるみたいだ」

俺の言葉に応えるように、目の前の空間が歪み、突如帝国の甲冑を着た男たちが次々と現れた。例の大規模転移魔法だろうが、それにしては魔力の流れが、俺の知っているものと比べて、かなり整ったものだ。俺が情報を知った日から短期間で、ここまで整うのは不可

能。誰かが俺レベルで魔法に精通していたら、話は別だが。

転移してきた帝国兵は、俺達を認識した途端襲ってきた。

ある者は呪文を唱え。

ある者は剣を振りかざして。

俺は、とりあえず、すれ違い様に全員そおいしといた。

「何だ、こいつら？いきなり現れやがったな」

「この甲冑は帝国のもの。彼らは帝国の兵ということになりますが、転移でしょうか？」

「ふむ、これは少々まずいかもしれぬな」

「お前たちも、少しは対応しろよっ！神鳴流、雷鳴剣！！」

ナギ達はというと、全て詠春に任せていた。

厄介ごとを全部押し付け、高みの見物とばかりにのんびりする仲間を見た詠春は、狂ったように、何でも雷鳴剣を連発する。百烈桜華斬で一気に叩きのめせばいいのに、わざわざ一人ずつ倒していくなんて、ストレスでも溜まっているのかな？苦勞人っぽいもんなあ。

そういえば、桜花の名前を言った時も苦勞してそうだったな。・・・
・・・苦勞人だわ。

「な、何故貴様がここにいるっ、紅の闇いっ！！」

「んうあ？」

今さら、俺のことに気が付いたのか。

気が付かなかったのは、飛ばされる前に、敵を見たら構わず攻撃しろとも言われていたからだろう。しかし、少し落ち着きが戻って、敵を見る余裕が出来たから俺に気が付いた。そんなところだろう。

声を聞いて、周辺の敵が一斉にこちらへ向く。

嫌いじゃないぜ、この空気。

まるで、自分が世界の中心にでもなったかのような快感。
テンションが上がった俺は、少し気取った感じで言葉を紡いだ。

「何だ、俺がいたらここにいたら悪いのか？」

少し視線に力を入れただけで、相手は怖気づいた。

帝国兵がざわざわしだした。

ふつ、有名人は辛いね。きっと、恐怖に身を震わせているんだろう。そう思って、魔力を耳に集めて、るるるん気分で声を拾う。

「やべえよ、聞いてないよ。何であの変態がいるんだよ」

「お、俺母ちゃんから聞いたんだ。あいつ、人を見かけたら見境なくあの紅い布を巻きつけるんだって・・・い、いやだ！変態の仲間入りなんかしたくない！！」

「お、おおお、おち、おちつつ、おちXひC.jだいおえ.jか」

「『何あの紅い布まじ変態みたいなんだけど』

『しっあれは彼なりのファッションよ』

『ねえかあちゃん、なんであの人は紅い布を巻いているの？馬鹿なの、死ぬの』

『見てはいけません、変態が移ります』

『うええええええええええ——ん』の異名を持つ男がいるだとお！？・・・・・・もう終わりだあ・・・・俺達はここで変態になつちまうんだあ・・・・・・」

「ちくしょう!! この世界には神も仏もないのか!!」

「落ちて着けよ、皆！に、にせものに決まってる！クルルーマウンテンに閉じこもっているあいつが、ここにいないだろうがっ！」

「他にあんな格好する奴がいるっていうのかよ！ 紅い布を全身に巻いて左腕に鎖を巻きつけている、あんな変態の格好をするような変態がよお！」

「い、いない。」

「ってことは、本物……？」

「ふ、
ふはは、
ふはー
っはっ
はっは
はっは
はっは
はっは
はっは
はっは
はっは！
はっは！」

「あいつ現実に耐えかねて、狂いやがった。くそ、俺もそれが出来たら・・・っ！」

「俺、この戦いが終われば、あの子に告白するんだ……」

「はっ、そこは、プロポーズにしておきな、新入り」

ざわざわ・・・ざわざわ・・・

……一度、この世界における俺の認識というものを調べたほうがいいのかもしいれないとか、一体どれだけこいつらの中で俺は変態であるのかとか、二つ名の中に会話になっているのがあるのを知っていたけど、三つほど増えてない？とか色々言いたいことがあるけど、何よりも真っ先に言いたいことがあるんだ。

俺、泣いていい？

チラッと横目でナギ達の様子を窺うと。

「流石カズキじゃの。己の姿だけで相手の戦意を折るとは」

「フフッ、やはり彼は面白い」

「う、うゝむ。なんというか、その……………むう……………」

フィリウスは、感心したように何度も頷いていた。

アルビレオは、興味深そうに笑っていた。

詠春は、何ともいえないというか、何を言えいいのか分からないといった風情だった。

そして、ナギはといえば。

「ギャハハハハハハハハハハ————ッ！」

腹を抱えて爆笑していた。訂正、大爆笑していた。呼吸はできず、腹筋が崩壊していた。

俺、泣いてもいいよね？

カオスが広がる中、他の兵よりも質のよさそうな甲冑に身を包んだ男が叫んだ。

「ええい！相手がどれほどの変態であろうと！！ここで引いては帝国に仕える兵士が廃る！！見せてやろうぞ！！我らの、帝国魂って奴をよおおおおおおおおおお————っ！！」

「うるせえよ！？」

「ぎゃああああああああああ————っ！！」

「隊長——ッ!!」

イラッ☆としたので、思わずはったおしてしまったが、隊長だったらしい。

隊長が瞬殺されたのを間近で見せ付けられて、さらに怖気付いたのか、ガタガタと震え出す帝国兵達。顔が真っ青になって、『変態は嫌だ変態は嫌だ変態は嫌だ』などと壊れたブリキ人形みたいに呟く始末。

色々とやるせなくなったため、当初の目的を果たすことにして、後のことは全部彼らに丸投げすることにした。

「じゃあ悪いけど、後は任せたわ」

「ひい、もう、無理。も、もう笑えねえ……ぶふう」

「……足元掬われて、落とされないようにな」

なんだろう、この空虚な気持ちは。

地の底に沈んだモチベーションで、空間に文字を描き、その場から消える。

大人だって泣いたっていいじゃない、だって人間だもの。

「結局あいつは何しに来たんだろうな？」

笑い転げながら、片手間に帝国兵をのした後、誰とはなしに呟いた。いきなり、現れたこいつらのことを何か知っていた様子だったしな。

「ふむ、それも気になりますが、まずは他の場所の救援に向いましょう。どうも、襲われているのはここだけではなかったようです」

そういつてさしたのは、橋の中央に位置する、難攻不落と謳われる大要塞。

しかし、今は突然の事態に混乱が巻き起こっているらしい。次々と味方の兵士がやられていく姿が遠目から見えた。

「ちょっとした騒ぎになっているみたいじゃな」

「ああ、さっさと助けに行くとするか！！」

「悪いけど、それは勘弁してもらおうよ」

「誰だ！」

その場の誰でもない声に反応して、振り返った瞬間。

「うおおっ」

大量の六角形の壁が迫っていた。

慌ててその場から飛びのき、体勢を立て直す。

俺が立っていた所には、いくつもの馬鹿でかい柱が突き刺さった。間一髪ってやつだな。仲間達も無事みたいだ。ま、当然だけどな！

しかし、息をつく暇もなく、背後から攻撃の気配を感じた。

咄嗟に、腕を背中に回し、魔力で強化した杖で相手の攻撃を受け止

めた。

衝撃が身体全体を襲うが、気合で堪える。ちよつと痺れた。

「・・・一人くらいは減らせると思ってたけど、やっぱそう甘くないみたいだ」

「はん。残念でした。俺はそう簡単にはやられねーよ」

俺は軽く跳躍し、相手から距離を取った。

そこで、初めて襲撃者と対面する。

そいつは、帝国の鎧を着ていなかった。

白い制服のようなものを着た、白髪のすかした男。

うっすらと笑みを浮かべているものの、そこに人間味がないのが、俺の印象だった。

その白髪野郎は、笑みを深くし、宣言した。

「でも、君たちはこれでリタイアだ」

「は？」

何言ってやがる、こいつは。

俺はこの通りピンピンしているが？

「しまった!!」

アルが珍しく焦った表情を浮かべているのを、横目で捉えた瞬間。地面が輝きだした。トラップだと、いつの間に!?

「馬鹿者、杖じゃ!」

師匠の叫び声を聞いて、すぐさま杖に目を落とす。

そこには、札が一枚貼られていた。

すぐに剥がそうと札に手を伸ばした。

だが。

「無駄だよ。それは変態的な天才が作った転移符だ。一度発動したら、問答無用で飛ばすんだ」

「デメェ！」

「最初の奇襲で倒せたら手間が省けたんだけどね。今回は他に優先すべきことがあるし、君たちとは遊んでられないんだ。じゃあね」

その言葉を合図に、俺達は光に包み込まれた。

そして、次に目を開けたとき、俺の眼前には何もない荒野が広がっていた。

転送祭り（後書き）

感想書いてもいいのよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1187/>

滑った男の行く先は

2011年9月14日12時07分発行